
We love you

伊吹ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

We love you

【Nコード】

N6125P

【作者名】

伊吹ノア

【あらすじ】

さみず・しゅん 三水潤は、もみじだい 紅葉台町にある、紅葉台学園に通う少女だ。この春から高等部へと進学する、ごく普通の少女……ではない事は、当の本人が誰よりも理解している。いつからか世に蔓延るようになった『魔物』を滅する為の、特別な力……『曲法』をその身に秘める『生徒』と呼ばれる存在であることを。最も遠い所にいるアイドル。または英雄。そう揶揄されるのには大きな理由がある。一度生徒としての力が目覚めた者には、他の力を持たない者達に拒絶されるといふ副作用があるからだ。しかも、それは年頃の少女ばかりに罹る、

難儀なものだった。彼女たちは、魔物達を打ち滅ぼす駒としてこの紅葉台に集められた一方で、社会でまともに生きられなくなった者達の集まりでもある。そして何より無慈悲なのは。その魔物を生み出す根本である、増えすぎた人間達を滅ぼさんとする災厄の一つ、『デリシ阿斯・ウェイ』が、生徒の中の一人の身に、潜んでいたことだろう。だが、その最中に潤には希望があつた。幼き頃、英雄になると約束し、離れ離れになっていた少年、紅恩寺吟也くおんじ・ぎんやが帰つて来る、という希望が……。ノノ引き続き、『雨上がり』シリーズから。長らくお待たせしてしまった人もいるかもしれない、『銀色クリアデイズ』の別視点のお話です。一応お互いを読まなくても分かるようになってはいますが、描写されていなかった部分の補足をしたいです。また、現代学園ファンタジーの、いつものポップなご都合主義話になるかと思えますのでそのところをご承知おきください。ノノ

1、プロローグ（前書き）

伊吹ノアです。間髪置かず第9作品目、『We love you』をお送りします！。

自分自身が大好物の別視点モノのお話ですよ。

そこそこ長くなると思いますが、しばらくはペースをあげていきたいです。

1、プロローグ

それは、新しい春を迎えるある朝のこと。

寮の二人部屋にしては贅沢すぎるほどに広く静かな部屋に、私のお気に入りのメロディが流れ出す。

それは、タイトルだけなら清々しい朝にふさわしい曲。
ただ、その中身は私の好きな、ちょっぴり涙を誘う曲だ。

同室のキクちゃんはそれがお気に召さないらしく、
いつつもジト目で「暗いのは雰囲気だけにしてください」って文句を言われたりする。

確かにこの曲は、詩の内容がドラマに合わないからって無理矢理変えさせられて、

タイトルまで変えられてしまったかわいそうな曲だけどさ。

でも歌ってる本人は、本当は嫌だったはずなのに、

そんな無茶な要求にもちゃんと応えてくれる器の大きい人なんだ

よ……

なんて曲の素晴らしさを小一時間ほど説いてあげたかったんだけど。

そんなキクちゃんの言う通り、私、三水潤さみず・じゅんは周りから、

無愛想が服着て歩いている、ってタイプに見られているらしい。

本当はそんなことなく、むしろうるさいくらいテンションの高
いやつなだけどね。

だけど、そんな内々の自分は、きつかけがないとなかなか出てこない。

大抵の場合は、そんなキクちゃんの小粋な皮肉にも、いつもごめんね、

なんて当たり障りのない言葉しか出てこない自分が、ちょっと悲しかったりする。

登校にはまだ早い、所謂自由な時間帯。

外の天気もいよいよで、お散歩にでも出ているのかキクちゃんの姿はなく。

曲を堪能してる場合じゃなかったと思い立ち、私は電話に出た。

着信音で分かっていたけど、電話の相手はお母さんだった。

近所の寮なんだし、それとは別に仕事用の連絡機があったりするから、

別にいいよって言ったんだけど、それでも持たせてくれた携帯。

ああ、そっか。モーニングコールをしてくれるためだったのかなって、ちょっと思ったけれど。

「おはよう。潤ちゃん。起きてる?」

「うん。起きてるよ」

案の定なお母さんの言葉。

対して、口からついてでたのはつつけんどんなそんな言葉だった。でも、お母さんは内と外のギャップがある私に当然気付いていたから。

特に気にした風もなく、さらに言葉を続けてくれる。

そう、話には続きがあったんだ。

「ニュースよ、ビックニュース！」

なんだか随分と、もったいぶった言い回しをするお母さん。

朝から、自分が言うのもなんだけど、やけにテンションが高い。

お母さんがこんなにも嬉しそうなニュースって一体なんだろうって、そう思ってた。

「今ね、吟也ちゃんに会ったのよ。しかも【付属】の制服着てたの！」

今日から付属に通うんですって！」

「え……？」

吟也？ 付属？ 耳元から聞こえるお母さんの言葉に、私の理解はすぐに及ぶことはなかった。

何故ならそれは、そうなんだって簡単に受け止めきれものじゃなかったからだ。

私の頭の中にある記憶領域の、その大部分を占める最重要事項だったからだ。

「ほ、本当に……？」

信じられない。嬉しすぎて寮中を踊り回りたい。
そんな衝動に駆られる。
生まれてきてよかったーって、心が叫んでいる。

吟也が帰ってきた。

それは、私にそう思わせるには十分なほどにビックなニュースであることに間違いなくて。

「わざわざこんな嘘つかないわよ。私だってびっくりしたんだから。」

朝ね、来客があつてどこのアイドルが迷い込んだのかと思ったら吟也ちゃんだったの。

またお隣に戻ってきたんですって」

勢い込んで話すお母さんに、うんうんと相槌を打ち、私も同じ気持ちになって先を促す。

「今日は挨拶に来てくれたみたい。大人になったわねえ。

いつつも泣いてるようなイメージしかなかったのに。見違えたわ。潤ちゃん惚れ直すわよ、あれは間違いなく」

「ど、どうしよう……」

後の方は、もうほとんど聞き流すような状態。

上の空でお母さんの言葉に答えて。

電話が終わっても、私は落ち着きを取り戻すことはできなかった。

うだうだ、ごろごろとベッドの上を転げ回るばかりで……。

（第2話につづく）

2、吟也と私の馴れ初めは一方的？

くおんじ・ぎんや
紅恩寺吟也。

お隣さん。

いわゆる幼馴染の男の子だ。

身体が弱くて泣き虫で、それなのに喧嘩っ早くてプライドが高くて。

子供ながらに異性を惹き付ける魅力があつて。

本人もそれが満更じゃないどころか、率先して女の子達の輪に加わる……

年頃の少年らしくない性格の持ち主。

そんな性格と目立つ容姿のせいで、吟也はよくいじめられていた。

今は自分自身では落ち着いたと思いたいけど。

やんちゃで、ガキ大将、なんて呼ばれていた頃の私は、

お隣さんの縁もあり、見るに見かねてそんな吟也を助けていた。

それが彼の自尊心を傷つけ、嫌がっていたのにも気付けずに。

今思えば、その頃からもう好きだったんだと思う。

男の子が好きな女の子をいじめるといふのと同じかもしれない。

吟也は私を守るって、一方的な独占欲を、体のいい言葉で誤魔化してたんだと思う。

吟也を傷つけていたのだと知ったのは。

私にとっては人生を変える、特別な進学……中学に上がる少し前の事だった。

いつものようにいじめられて、勝てないのに立ち向かって。

そんな吟也がかっこいいって思って。

いつものように彼を助ける。

得意げな私は、「どうせ勝てないんだから、いじめられそうになったら私に言いなさいっ」

なんて暴言を吐く。

それが暴言だと気付かずに。

吟也が私に向かって本気の怒りをぶつけてきたのは、その時が初めてだった。

それは、心根の優しい、吟也らしい怒り方だった。

だったら私を守れるくらいに強くなると。

そのための修行に行くのだと。

二人で憧れていたヒーロー。

紅葉台の【生徒】になるために強くなるのだと。

そう、力強く宣言してくれたことが、どうにも眩しくて。

私はその時、何も知らなかった。

吟也が遠くへ引っ越してしまうことを、ずっと切り出せずにいたことを。

だから……その時は「そんなの無理に決まってるでしょう」「、な

んて事を口にしてしまつて。

そんな私の態度が、余計に吟也を怒らせたのかもしれない。
ううん。自分のことしか考えてなかった私に、もっと怒ってくれ
ても、

本音を言ってくれてもよかつたんじゃないかな、とすら思えたけ
れど。

必ず帰ってくる。そんな約束のしるしに、吟也は私に宝物をくれ
た。

「人質だ」って、泣き笑いの表情で。

吟也が私のそばからいなくなつてしまふ。

それを思い知らされたのは、まさにその瞬間だった。

そしてもう、手遅れだった。

吟也は、ひどいことを言ってしまったことへの謝罪もさせてくれ
ないうちに、

家の都合で引越してしまつたのだ。

子供の足では簡単にはいけない、そんな遠いところへと。

無愛想で感情が表に出なくなつたのは、それが原因じゃないのか
なつて思えるくらい、私は泣いた。

好きの気持ちに明確に気付かされたのは皮肉にも吟也がいなくな
つてからで。

それから、三年あまり。

その気持ちはしほむことなく私の中でずっと育っていた。約束とそのしるしがあったから。その気持ちは褪せない。むしろ大きくなりすぎて、どうにかなりそうだった。

吟也が帰ってきた。その事を知っただけで喜びが止まらない。

そりゃ世界もばら色に染まるというもので……。

(第3話につづく)

3、キクちゃんと私と世界の経緯

「何か悪いものでも食べたんですか？」

「……っ」

と。あまり人様には見せられないにやけ顔をしていたかもしれない私に向かって。

呆れ返ったような……それでも氷砂糖のような冷たく甘い声がかかる。

はっとなって顔をごしごしとこすり、居住まいを正して声の主の方へと視線を向けると、

そこにはキクちゃんの姿があった。

相部屋にして仕事の相棒でもあるキクちゃん。

フルネームで、栗佐喜久ちゃん。

うどの大木な私と違って、女の子らしい、小さくてか弱い雰囲気
を漂わせる、

可愛らしいお人形さんのような、という表現の実に似合う女の子
だ。

生来病弱（結構頻繁に貧血とかで倒れるのだ）な割に、ほどよく
焼けた小麦色の肌と、

愛玩犬を思わせるサイドアップに纏められた黒髪が私的にツボだ
ったりするわけだけだ。

そんな見た目に即しているのか反しているのか。

キクちゃんは言葉遣いが丁寧な割に口が悪い。
気付けばきつめの毒を吐いたりする。
特に相部屋の私には。

まあ、そこらへんもキクちゃんの魅力って言っちゃえばそれまで
なんだけど。

そんなんだから愛想なしの怖いコンビ、なんて言われちゃうんだ
よねって、
思ったりしなくもない。

「あ、ううん。そうじゃないよ。だって吟也が帰ってくるから…

…」

「ああ、例の懸想してる幼馴染の」

キクちゃんが、呆れた、というかうんざりとした様子なのは変わ
らない。

何故ならば、吟也とのあれこれを、耳にたこができるくらい聞か
され続けていたからだ。

自分で言うのもなんだけど。

「……約束、守ってくれたんだよ」

嬉しい、楽しい、大好き。

テンションがおかしくなりすぎて、我に返ったかと思いきや再び
トリップしかける始末。

そんな私を見て……キクちゃんはふうと一つ大きなため息をつい
て。

「よかったじゃないですか。まあ、大変なのはこれからでしょうけどね」

「それは……そうだけど」

余計な一言とともに、だけど笑顔を見せてくれるから、相変わらずらしいなあってちょっと思う。

キクちゃんとは、中学からの付き合いだ。

今までの私の姿というか、本性すらも側で見えてきてくれているぶん、

その言葉には切実なものがこもっていた。

私の内側から滲み出るハイテンションに圧されたのが、最近はずよっと明るくなってきたけど。

この町、この場所に来てからのキクちゃんは、貧血で倒れるか塞ぎ込んで膝を抱えるかのどちらかだった。

でも、それはキクちゃんに限ったことじゃない。

今、私たちのいる、【本校】の寮に暮らす子たち。

そのほとんどが、望んでここにやってきたわけじゃなかった。

本当ならごく普通の中学、あるいは高校に通うはずだったのに……望まずして選ばれてここにやってきたのだ。

まともに社会では生きていけない、というレッテルを貼られていることを自覚しながら。

そんな私たちが集められ、暮らし、唯一与えられた役目をこなす場所。

通称【本校】、正式名称【紅葉台学園】（中高一貫）のことを話すには、

まず変わってしまった世界のことを話さなきゃいけないだろう。人間が増えすぎたからなのか、環境破壊の度が過ぎたからなのか。古今東西、未曾有で不可思議な天災が人々を襲ったのは、私が生まれるよりもずっと前のことだった。

それは、怒れる地球そのものが人間を滅ぼすためだけのもの、とも言われていて。

そのうちの一つに、【デリシアス・ウェイ】と呼ばれるものがあった。

それは、簡単に言えば、空想の中にしかいなかったはずの幻想の生き物たちを、

【虹泉】^{トラベルゲート}と呼ばれるものを介して際限なく生み出す、というもので。

幻想の彼らは【魔物】^{ビレメント}と呼ばれ、人々を苦しめ、蹂躪した。魔物に抗う術を知らない、多くの人々が亡くなって。

このままじゃ、人間は本当に絶滅してしまう。誰もがそう思った時。

その運命に逆らうようにして、人々は新たな進化の道を辿った。魔物と同じ、幻想の力を秘めた子供たちが生まれるようになったのだ。

さながら人を滅ぼさんとするその魔物たちと、戦う使命を負ったかのよう。

だけど、事はそう簡単にはうまくはいかなかった。

魔物と同じ力を持って生まれた子供は、そのほとんどは女の子で、その力を持って生まれてきた子は、力を持たない人間にとって、無意識下で拒絶すべきもの……あるいは、命を奪いかねない毒そのものだったんだ。

理由は分からないけれど。

とりわけ男性に強い影響が見られて。

その子の親でさえ力を持ったその子を拒絶するようになる。

親にとってみれば、呪われた子、だったのかも知れない。

だが、人間が生きるためには必要な力だった。

それを酸素のようなものと言ったのが、紅葉台学園の創始者……らしい。

なくても死んでしまう。あってもいずれば死が訪れる。

ならば、それ相応に付き合わねばならないだろうと。

それにより、世界はようやく前に進み始める。

幻想の力……【曲法】^{カーヴ}持ちし生まれた子を。

人間を魔物たちから守るものとして育てるために。

いるだけで周りのものに迷惑をかけるその子たちを、まとめて面倒を見るための、

専門の機関が作られたのだ。

それこそが、紅葉台学園で。

特に魔物の発生率が高かった紅葉台の町を巻き込んで、それは建てられた。

紅葉台を、魔物と戦う基地とするために。

そんな紅葉台ができて三十年あまり。

私が中学への進学を考えるようになった頃。

何の前触れもなく、魔物と同じように、周りの人を傷つける力に
覚醒してしまった私は。

紅葉台の町中にある実家を離れ、こうして学園内で寮生活をする
ようになった。

魔物を倒す【生徒】^{ユルデイス}の一人として……。

(第4話につづく)

4、キクちゃんと私の小粋？ なトーク

私が紅葉台学園に入学してから。

もう、寮生活四年目。

高校一年生、と呼ばれる年代になった私は、きっと幸せな方なんだろう。

元々紅葉台町出身で、紅葉台学園に通う生徒たち、平和を守るヒーローに憧れていたし。

例え体が拒否反応を示していても、お父さんもお母さんも、変わらず私を愛してくれた。

同じ町……近くにいて、私を見守ってくれているのが実感できるんだから。

大抵の子は、拒絶と迫害の果てに、ここへ送られてくる。

キクちゃんもそうだった。

魔物呼ばわりされて、失意の果てにこの場所に来た子の一人だった。

でも、だからこそ私はこの学園を、集まったみんなを幸せにしたかった。

誰も彼も拒絶される人間なんて悲しすぎる。

そんなみんなの支えにちょっとでもなれるようにって、強く思うようになったんだ……。

とはいえ。

そんな私も、愛に飢えた、わがままな一人の女の子なわけでした。

「吟也ね、今日から付属に通うんだって」

キクちゃんの、都合の悪い言葉を半ば聞こえなかったことにして、ウキウキでそんな事を言う私。

「本校に入るって約束したんじゃないですか？」

付属は、紅葉台における、普通の人が通う学校のことです。私たちが通う本校に対してそう呼ばれている。

その校舎も隣同士で、くっつくようにして紅葉台の町の真ん中、紅葉台山の中腹に立っている。

お隣さんとはいえ、その間にある壁は厚い。

私たちから身を守るためには仕方ないんだろう。でも、だったら隣になんか建てなければいいじゃない、なんて初めは思っていたけど。

人々の暮らしを守るためには戦うものだけじゃなく、たくさんの人々の力が必要だから、今は納得している。

学園の言い分としては、いずれは私たちが発する拒絶に慣れ、克服するものが現れるようにと建てられたものらしいけど……。

むしろ、吟也が付属に通うことを知った今は、お隣に建ててくれ

てありがとっつて感じた。

「いいの。帰ってきてくれたんだから……」

確かに、そう約束した。

今度帰ってきた時は、本校に入って私を守ってくれるって。

でも、それが子供の頃の約束で、物事の道理を知らなかったから
ってことは、

ちゃんと分かっている。

吟也が本校に通うことが、無理だっつてことくらいは。

過去を紐解けば、ごく稀に男の人でも生徒になった人がいるには
いるんだけど。

それを期待するのは酷というものだろう。

たとえ入れたとしたって、本校の空気は常人に耐えられるものじ
やなかった。

私たちが毒なら、その暮らす世界は、酸素ボンベなしで海の中に
放り込まれるようなものなのだから。

「それで？ 結局借りたものは返すんですか？」

「あ……」

忘れていたわけじゃないけど。確かにそうだった。

私は、先に述べたように、絶対に帰ってくるって約束のしるしに宝物をもらった。

吟也は人質だと言ってたけど、言い得て妙だと思う。

だってその宝物は、人の形をしていたからだ。

「カチユ。吟也帰ってくるって」

「……ぐう」

落ち着きがないまま、私はマイまくらの上にあるバスケットに手を伸ばす。

そこにはポケットに収まりそうな小さな女の子が眠っている。

纏うのは、魔女が着るようなまっくろのロングスカート。

胸元には、お決まりの白いぼんぼん。

卵くらいの、小さくすべらかな顔。

薄黄色の、立てば床にくっついちゃうんじゃないかなってくらい長い髪を、

みのむしのようにぐるぐるに巻きつけて、ぐうぐうと眠りこけている。

ただの人形ではなく、確かに生きていて……。

5、カチユと私のつながるカンケイ

「たとえるなら、安全ピンを抜いた手榴弾を投げ返すような仕打ちですね」

突然名を呼んで、話しかける私に。

背中からかかるは、生暖かいものを含んだそんなキクちゃんの言葉。

それは、彼女……カチユの姿が私にしか見えないせいもあるんだろう。

「ずっと寝てるだけだし、そんなことないと思うけど……」

一応吟也の名誉のために言っておくけど。

吟也からの宝物が、最初から生ける人形、魔物の一種だろう……だったわけじゃない。

動くんじゃないかなってくらい精巧なお人形さんではあったけれど。

彼女を受け取った時、吟也らしいと思ったのは事実だった。

吟也は、手先が物凄く器用で。

かつ彼の家が、ロボットやらからくり人形やらを昔から作っている家だったからだ。

吟也は、そのうちの一体を人質として私に預けた。

それが比喩でなくなってしまうってなんて、一体誰が思うだろう？

すべては、私の身体に巣食う、曲法と呼ばれる力のせいだ。

私の身体からは、普通の人が拒絶する理由でもある【異世^{アジール}】と呼ばれる気のようなもの……いわゆるプライベートスペースが常に広がっている。

それは、【生徒】としての自分の力を最大限に引き出し、果てには自分のための世界を作りあげる。魔物と戦う時には、それを最大限に利用して戦うことになっている。

ある程度は調節できるし、人によっては全く閉じることができない人もいるけど、

私はどちらかと言えば調節が苦手なほうで。

カチュは、ずっと私の傍ににいるうちに、その力の影響を受けてしまったのだろう。

明確な原因は分からないけれど。

事実、曲法持って生まれた子たちの中には、人形に魂を宿らせ共に戦う、

なんて曲法を持つ子がいたから、それと同じなんだろうなって私は思っていた。

当の本人……カチュは、初めてその名を聞いたときに、そんな私の考えを否定していた。

カチュは、吟也によって生み出されたもの、【つくもん】だと言
い張る。

私のせいじゃないよって、言ってくれるんだ。

それは、彼女の優しさだったんだろう。
作った本人に似てよくできた子だ。

……普段はナマケモノよろしく寝まくっていて、
会話ができるのは一週間に一度あればいい方だったけど。

魔物になってしまった彼女をこのまま返すのはまずいだろう。
普通の人にとって、魔物は危険なものなのだ。
現に、魔物に殺された人たちは多い。

その認識だけでも十分に。
たとえ、カチュが何もしていなくても。

「返せない理由、考えないと」
「にやむ……」

バスケットから手のひらへとそっと移すと、むずがるような寝言
が聞こえてくる。

ふわふわでちっちゃくて、ほんのりあったかくてかわいい。
どう見たって人を害するような悪い魔物には見えない。

何だかんだ言って愛着もあった。

返せない、返したくない理由は、実はそれが一番の理由な気もし
なくはないけれど。

私はそんな事を考えつつ、携帯用、カチュ専用の寝袋（巾着袋と
も言う）に彼女を移動させ、
生徒御用達の真っ赤な制服の胸ポケットの中に押し込む。

これなら、上から覗き込まれない限り、気付かれることもないだ

ろう。

もつとも、私以外の人には力チユのその姿は見えない、というか、全くもって意外な別のもの……

何故かホツチキスに見えているらしいから、あまり気にすることもないんだけど。

ようは、はたから見た私はホツチキスに話しかける痛い女、なわけ。

すぐ後ろにいるキクちゃんの生暖かい視線が、それ以上に痛かったりするわけ……。。

(第6話につづく)

6、キクちゃんと私の世迷言なおねがい

「……私ちよつと行ってくる」

カチユを返したくないってことも含めて話して……話すことができればベストなんだけど。

とにもかくにも会いたい。

朝の点呼までにはまだ少し時間がある。

それまでに帰ってくれば問題はないだろう。

「まさか、その吟也って人に会いに？」

「だめ……かな？」

「やめておいたほうがいいと思います。好きな人なら尚更。それで傷つくのは潤自身なんですから」 「それは……分かってるわ」 「……」

重苦しい沈黙。

でも、うん。それは分かってる。

普通に考えれば、吟也はきっと私を拒絶するだろう。他の男の人たちのように。

「せめて防護服を着ていったほうが」

防護服。自分自身ではなく、私たちに相對する人たちを守るための外出用の服だ。

とにかく目立つ、赤黒いフードつきのコート。季節なんてお構いなしの、暑苦しいことこの上ないシロモノだ。

半ば強制的に集められたと言っても、私たちは建前上、籠の鳥じゃない。

本校の【科学班】が作成した、曲法を内へと留めることのできるそのコートさえ着ていれば、

とりあえずは町に出ることを許されている。

だけどそのコートは、紅葉台の【生徒】であることの証だ。普通の人ではないという、看板のようなもの。

仕事を除けば、当然のように好んで外出するような子はいなかった。いるだけで他の人に迷惑をかける私たち。

本来なら、キクちゃんの言う通りなんだけど。

その一方で、私は淡い期待してもいたんだ。

人々の……特に男の人の全員が、私たちを拒絶するわけじゃない。今は付属で教鞭をふるっている志島徹威（しじま・とおい）先生は、男だけでなく毎日ように本校にやってくる。なんでも、若い頃一流の【生徒】だったから、らしいけど。

誰だったか、そんなトイ先生に訊いたことがあった。

「どうして先生は平気なの」って。

そうしたら先生は笑って、「人を本当に愛する力が、何よりも強

いからじゃ」なんて言ってたっけ。

何故、曲法の力を持つ子たちが、特に男の人に拒絶されるのか。紅葉台学園は、魔物から人々を守ることだけでなく、そういったことを研究する場でもある。

トイ先生のその言葉は、その研究により分かった事実在即しているらしい。

拒絶には、好意と欲望が深く関係している。

曲法の力を持って生まれてくる子は、見目麗しい、可愛い子が多い。

テレビの向こうなら異世も届かないから、アイドルとして持て囃されたりもする。

目の前にいるキクちゃんだって、かなりのものだ。

自分のモノにしたい。私にさえ分かるそんな気持ち。

誰もが持つてるそんな欲が強ければ強いほど、邪であればあるほど、拒絶反応が強いらしい。

逆に言えば、トイ先生の言う本当の愛だけが私たちを受け入れてくれることなんだろう。

己のための愛ではなく、無償の……真実の愛。

たとえそれが、現実にはありえないことかもしれない、世迷言かもしれないも。

なんて素敵なお言葉だろうって、そう思う。

それを大好きな人に期待するのって間違ってるかな？

まあ、それ以前にこの想いは一方的なものであつて。

傍若無人なガキ大将だった私はむしろ嫌われている可能性のほうが高いから、

そう言う対象にはならないんじゃないかなって思ってたわけだけど。

「大丈夫。とりあえずは遠くから見ただけだから……」

話すことは、最終段階の最高の結果だ。

実際のところは行ってみないと分かんないけど、べつに校外に出るわけじゃないし、

むしろ付属の入学式ということで近付いてくるのは吟也のほうなわけだし。

さらに付け加えれば、防護服のダサいことダサいこと。

赤は好きな色なのに、濁りきった静脈の中の血みたいなお色合いは、目立ちことすれマイナスにしかならないような気がした。

せつかくの再会なんだから、少しはまともな格好でいたい。

逆に、制服のスカートの赤はいい。

瑞々しいトマトのような赤だ。

キクちゃんのような女の子らしい女の子の可愛さをより引き立てている。

似合わないと言われる私が着ても、防護服よりはマシだと自信を

与えてくれる気がして。

「そこまで好きなんですネ。ちょっと感心します」

キクちゃんは、私のたった一言の中に詰まった、様々な訴えを読み取ったみたいにそんな事を言っ

「わかりました。周りに気をつけて」

「うん。行ってきます……」

引き止めても無駄だって分かったんだろう。

自分ではなく、周りに気をつける。

そんな外出の時のお決まりのやり取りをして、私は部屋を出たのだった……。

(第7話につづく)

7、カチユと私の独り言めいたやりとり（前書き）

ちよつと強引に切ったかも。

7、カチユと私の独り言めいたやりとり

自室を出ると、そこは横長の廊下。

ふかふかの赤じゅうたんは足音すら生まず、常夜灯のお洒落な力
ンテラだけが、

一定の間隔で足下をオレンジ色に照らしている。

どこの高級ホテルかというロケーション。

今のところ人の気配はない。

代わりにあるのは、薄闇に溶けた異世だ。^{アジール}

みんなの異世が少しずつ溶けて作られた世界。

有事の際、魔物とすぐに戦えるように、この寮を含めた本校のす
べてが、それに覆われている。

私たちにとってみれば、少し空気に存在感がある、といった程度
の、無害なものだけだ。

曲法の力を持たない人にとっては、それこそ深海の底のような世
界、

といってもいいのかもしれない。

おかげで泥棒やら何やらの類は一度たりともやってきたことはな
いらしい。

私は、そんな事を考えつつも、人っ子一人いない廊下を抜け階段
を降り、

玄関ホールを素通りし、外靴を履いて外に出る。

「……いい天気」

そろそろ、町では桜の開花がピークになる頃だろう。

僅かに靄のかかった日差しに、心地よい空気のぬくもり。

それに混じって桜の花の香りすら届いてきそう。

私は深呼吸し、歩き出す。

すると、すぐ目前を覆うのは本校の校舎。

実のところ、校舎と寮は直接繋がっているので、

この玄関から外に出ることってほとんどなかったりする。

寮に住むほとんどの子たちが校舎と寮を行き来するだけの半引きこもりだから、

仕方ないと言えば仕方ないんだけど。

「お花見とか、みんなで行ければいいのにね、カチユ」
「……」

寝るのがアイデンティティだとばかりに、私の胸ポケットでこんこんと眠り続けるカチユ。

さらさらの髪を、軽く指で撫でた後、私はぬくい陽光の下へ飛び出した。

そして、校舎に沿って左手に折れる。

右手をうず高い校舎の壁につけながら歩く。

目指すは校門前だ。

「付属の入学式、一日遅くてラッキー……」

新しき高校一年の春。

私たち本校の生徒は一日早く入学式を終えていた。

とは言っても本校は、中学からのエスカレーターなので、私にとっては入学と言うより進学の意味合いが強かった。部屋も相方も中学の時から変わってないし。通う教室も一つ上に上がっただけ。

【委員会】の仕事は学年に関係なく去年からやらされてるしね。

なんてことを一人ごちつつ歩みを進めていると、右手にあった校舎がなくなり、一気に道が広がる。外へと続く、カラフルなインターロッキングの道が現れる。

ここに来ると、毎度テンションが下がるんだよね。何がそうさせるかって言えば、校舎の代わりに本校と付属を隔てる鋼鉄の壁だ。

その高さ、五メートルはあるだろうか。

表面はつるつるで、足をかけることもできない。

それは、間違っって本校の生徒が付属の敷地に入っこないようにする配慮だった。

付属は、バランスをとるためなのか所属するその殆んどが男の子だ。

そんなものがなくても、本校の子だっってみだりに足を踏み入れて

はならない場所だつてことくらい百も承知なわけだけど。

たぶん、視覚的な意味合いもあるんだろう。

テレビの向こうで見るのはよくても、中には私たちを直接目にすることに嫌悪する人だっているからだ。

逆に本校の子たちにとってみれば檻の中にいる自分を自覚させる。基本的に本校の生徒は本校内において自由だからこそ余計に。

そんな、鋼鉄の壁は。

しかし校門に近づくとつれてだんだんとその背丈を低くしてゆく。鉄壁はコンクリートになり、植樹帯になり、最終的には付属の校舎へと続く道が見えるようになる。

理由は単純。

こんなところまで歩いてくる本校の生徒などまずいないからだ。通るとすれば、本校へと連れてこられたその時か、仕事……出勤命令が出たときくらいだろうか。

私の視線は、自然と付属のほうへと向けられた。

出勤命令が出ない限り基本的にはのんびりとしている本校とは違って、

もう既にちらほらと登校してくる緑の服を着た付属の生徒たちの姿が見える。

吟也と同じ新生か、はたまた在校生か。

人の気配に気付いたんだろう。

そのうちの二人組の視線が、私に向けられて……。

(第8話につづく)

8、お父さんと私がここで頑張る理由

吟也と同じ新入生か、はたまた在校生か。
人の気配に気付いたんだろう。
そのうちの二人組の視線が、私を射抜こうとする。

「……っ」

反射的に、私はしゃがみこんだ。
その視線が私を捕える前に。
植樹帯で、私の姿を覆い隠すように。

「なあ、今本校の生徒そこにいなかったか？」

「バカ。こええこというなよっ」

「だってほら、その、垣根のそこ、やな気配が……」

間近に聞こえる会話。

とっさに異世を抑えたけど、私は不器用だから完全にそれを消すことはできなかった。

このままじゃ、彼らにとっての毒は、確実に彼らを蝕むのだろう。
いったん戻ったほうがいいのかもしれない。
やっぱり防護服を着てくればよかったって、後悔して。

「まじかよ。ちょっと確認してみようぜ」

「これでほんとに隠れてたらウケルんですけど」

植樹帯の反対側、そんなやり取りが聞こえる。

確認するって？ まさか本校の敷地に入ってくるつもりなのかな。なんて思っているうちに、がさがさと植樹帯を掻き分ける気配。

それで分かった。

彼らは新入生だ。ここのルールをまだ知らないんだろう。教えてあげなくちゃいけないと思った。

本校の敷地に入るのが、どうということなのかを。

「……」

私は無言で立ち上がる。

もちろん、異世は抑えたままだったけど。

「ひいつ！？」

「うわぁっ、で、でたぁーっ！！」

効果はばつぐんだった。

今度は私が視線を向けるより早く、一目散にその場から逃げ出す
付属の生徒たち。

「……危険を察知する能力があるだけまし、だよな」

分かってはいた事だけど。やっぱりまだ慣れない。

自分が問答無用で拒絶されることが。

でも、私が魔物と同じくらい危険なのだと気付くことができただけ、彼らは優秀なんだろう。

中には、死地に入ったことに気付かないまま意識を失ったり、命の危機に晒される人もいる。

だけど、それならまだいいくらいだ。

一番厄介なのは、やせ我慢をされることだ。
うちのお父さんみたいに。

お父さんは私が寮に入るその直前まで、それを渋っていた。自分は平気だからって。別々に暮らす必要はないって。蝕まれた身体に涙しながらお父さんは倒れた。私の力を浴び続けたことによる、呼吸困難で。

初めて見たお父さんの悔し涙。今でも忘れられない。その原因を作った自分が許せなかった。それでも受け入れようと努力してくれる姿に涙が出た。

それが幸せなことだと気付いた今は。

お父さんのために、みんなのためにこの力を使おうって、そう思えるようになっていて。

「こそこそするの、やめよ」

私は開き直って、大きなストライドで歩き出した。

それは下手に隠れるとさっきみたいに驚かせてしまうかもしれないというのもあったけど。

何よりガラじゃないって思ったからだ。

怖がり、拒絶するならすればいい。

私は気にしないことにする。

わがままに、私らしく生きる。

紅葉台のガキ大将。

女だてらに、そんな風に呼ばれて恐れられていた頃のように。

そんな私に、くつついて張り合って怖がらなかったのは、吟也だ
けだった。

よわつちいくせに、そんな強気が大好きだった。

だからこそその予感だ。

吟也は私を拒絶しない。

それは、一番の望み、と言い換えてもいいのかもしれないけれど
……。

9、付属のみんなと私の距離感

堂々と本校に向かって歩き出したのが功を奏したのか。付属の生徒たちの反応が、少し変わった。

「おい、あの人。風紀委員長の……」

「俺、テレビで見たことある！」

逃げるように離れるのは相変わらずだったけれど。

その畏怖には、別のものも含まれている。

自分で言うのもなんだけど、私は生徒としてそこそこ顔を知られていた。

最近では減ってきたけど、有事の際……魔物が出現したときにはなるべく率先して出勤するようにしていたからだ。

そして、魔物が出れば、それは余程のことでない限りニュースになる。

私が、テレビ画面の向こうに映し出されるのは少なくなかった。

『最も遠くにいるアイドル』として、番組にも呼ばれたことがある。

その性質はどうあれ、世界を守るものであることには代わりはないから、らしいけれど。

「すげえ、生でアイドル見られるなんて！」

「ここに来た甲斐があったぜ……」

「……っ」

かといって、そう呼ばれるのは恐れ多いというか恥ずかしくすぎた。正義のヒロインとかアイドルとか、それこそガラじゃない。思わずにらみつけると、付属の生徒たちは蜘蛛の子散らすみたい
に逃げ出してゆく。

まあ、ただ拒絶されるよりは幾分マシなんだろう。

転がるように逃げていく付属の男の子たちは、どこか滑稽で笑える。

たまにはこうやって冷やかしてくるのもストレス発散になってあ
りかも、なんて思うくらいには。

「吟也もテレビ、見てくれてたのかな……」

吟也が付属に入ることを決めてくれたその理由。約束。

その後押しになったのなら、いやいやだったけどテレビに出た甲
斐もあつたかもって、

前向きに考えていた私だったけれど。

そんなことを考えているうちに、私は校門……町と学園を隔てる
守衛室が見える場所まで来てしまった。

付属と本校を隔てる、境界の始まり。

ここから先は防護服なしではまずいだらう。

許可も取ってないし、違反ものだ。

とつさに連絡機に備え付けられた時計を見る。

寮の点呼の時間まで後十分。

付属の入学式が始まるまであと一時間程度。

登校の生徒たちもそろそろ増え始める頃だろう。

あんまり長居はできない。

一目だけでも吟也を見ることができれば。なんて思っていると。

「何だよ、これは……」

「……っ！」

その声が自分に触れた瞬間、心が震えた。

三年という月日が経って、その声色は格段に低くなっていただけ。

ずっと、ずっと待ち続けていた声だったからだ。

ただ、なんだか怒っているみたいで。それが身に覚えのないこと
で。

同時に身体もすくみ上がる。

それでも、鉄のように固まってしまった首を、ぎりぎりと軋ませ
て声のほうへと視線を向ける。

吟也はそこにいた。

本校と付属の分岐のところで立ち止まり、なにやら難しい顔をし
ている。

「……っわめ」

驚愕。ぴしゃりと雷を打ち込まれたみたいに、私はそこに立ちつくすことしかできない。

泣き虫で身体も腕っ節も弱いくせに、生意気とっていいくらい気が強い。

私は、子供の頃のままに、変わらないんだろうなって思っていたけど。

そのまんま大きくなってるイメージしかなかったけど。

そんなイメージなんか一瞬で壊されてしまった。

その声と、僅かな幼少の面影がなかったら、きっと私は恥ずかしくて、

一目散に逃げ出していたかもしれない。

それほどまでに、半端のない美人さんがそこにいたんだ……。

(第10話につづく)

10、吟也と私のキセキな邂逅

大抵の女の子が妄想するんじゃないかなって思うほどの、同じ空気を吸っていいんだろっかって思えるほどの理想の具現。

たぶん、吟也が徒歩でなく白馬に乗っていたとしても、全く違和感はなかっただろう。

むしろ、御者をつけずに一人で歩いてくることのほうの違和感を覚えてしまうほどで。

アイドルとかなんとかわわれて恥ずかしがっていた自分を埋めなくなるくらい、オーラが違う。

というより、凄すぎてうまく言葉に表せない。

竜宮城を見た浦島太郎の気持ちがよく分かってしまった。

あまりに小さい頃のイメージとかかけ離れすぎていて、一瞬人違いなのかも、も思ったけれど。

それでも目の前の人物が吟也であると私に思わせたのにはもう一つの理由があった。

まるで女の子のように長い髪。

後ろで一つにして細かに編みこんで、緑の制服に垂らしている。

昔、なんでそんな女の子みたいな髪型してるの、なんて訊いたことがあった。

そしたら、三つ編みは男が最初にやったんだって、とんちんかんな怒り方をしてきたから良く憶えている。

そして、何よりも。

彼が私の幼馴染みの吟也であると印象付けたのは、その髪の色だった。

白……うっん、桜の花びらみたいな薄いピンクの混じる、不思議な色合いの髪。

本人は、おじいさんみたいだっていつつも気にしてたけど、私はそのやさしい色が大好きだった。

ちよっかいをかけてたたくふりをして、しょっちゅう触っていた記憶がある。

相変わらず手触りがよさそうだよ……なんてよこしまなことを夢想していたからいけなかったのか。

小さく息を吐いた吟也は、誰かと話してるみたいに俯いたままで私の前を素通りしようとしているではないか。

私が足を踏み入れてはならない、付属の敷地へと。

「……吟也っ」

だから私は、気付いたら駆け足になっでいて。

気付いたら彼の名前を呼んでいた。

はっとなって吟也が顔を上げる。

赤みがかった、大きな瞳が私を射抜く。

その、どこまでも澄んだ光が、私を照射する。

私を認識する。

しまった！ そう思ったのはその瞬間だ。

恐怖。それは今までで一番の恐怖だった。

後悔。今更ながらキクちゃんの言うことをきいておけばよかったと。

拒絶。吟也に拒絶されてしまう。

そんなのはいやだった。

さっきまでの根拠のない自信が、それこそ嘘みたいで。

今すぐここから逃げ出したい。

そう思ったけれど。

「……潤ちゃん？」

奇跡が起きたと、私はそう思った。

吟也は私を覚えていてくれた。

それだけじゃない。

まるでそれが当たり前だと言わんばかりに、まっすぐ私を見つめてくれたんだ。

それこそ、一ミリも逸らすことはなく。

真剣な瞳。自然と吸い込まれて、そこにあるものを少し悟る。

吟也はどこか緊張していた。何かを恐れていた。

それが何を意味するのか、私の導き出した答えはひとつ。

きつと、吟也の、人としての防衛本能が働いたんだろう。
私が、普通の人が近づいてはいけないものにならなくなってしまったこと、気付いたんだ。

だからこそ、嬉しくて申し訳なかった。
吟也はおそらく、やせ我慢をしている。

そこにいるのもつらいはずなのに。
お得意の強がりをしているのだ。
お父さんの二の舞。
それは、涙が出るほどの優しさだ。

異世は極力、今までで一番、振り絞るように抑えていたけど。
ずつとはいられないだろう。
それは悲しいことだったけど。

私の心を満たすのは悲しみではなく充足感だった。
吟也は私を拒絶しなかった。
もう、それだけで十分だから。

故に私は、踵を返して立ち去って、吟也を辛さから開放させてあげべきだったんだけど。

声をかけたのは私のほうが先だったから。
声をかけたからには当然何か用があるはずで。

このまま立ち去るのはもったいない……じゃなく、悪い印象を与えかねなかったから。

何かを言わなきゃって、私はわがまま甚だしい自己完結をしてい
て……。

(第11話にじづく)

11、吟也と私のこれからの立ち位置

「……………」

だけど。

肝心な時になっても、私の口は気の利いた言葉一つも紡いではくれなかった。

よって焦る。話したいことなんていくらでもあるはずなのにとって、慌てふためく。

「……………えっ？」

「ど、どうしたの、私、何かへんかな？」

と。突然、何かに驚いたような……………気付いたような吟也の態度。もしかして、私が人を害するものであることに今更になって気付いたのかな？　なんて思ったけど。

「い、いや。ははは、ごめん。何か緊張してるのかも、僕」

返ってきたのは、それを誤魔化すような吟也の言葉だった。

その、嘘をつきたくてもつけない感じに、凄く申し訳ない気持ちになって。

とにかくもっとまじな言葉を口にしなきゃって思ってた。

ふと目に入ったのは、吟也のその髪に映えるサングラスだった。しかも、フレームのところからアンテナやらイヤホンやらが伸びている。

プロアスリートとかが持っている音楽視聴機能つきのものなんだろう。

あまり詳しくはないけど、安くはないことは間違いないはずで。

私は吟也と見つめ合いながらもそんな事を考えるに至り、はっとなる。

曲法という人外の力を持ち、魔物と戦うために集められた本校と違って、

付属は規則やら校則やらがとても厳しいらしい、というのを思い出したのだ。

直接体験してるわけじゃなくて、人づてに聞いたものだけだ。

それは、基本自由にさせてもらってる私たちに対しての反動らしい、とも。

まあ、そう言う機械めいたものが好きな吟也には必需品なのだろうし、よく似合ってるけど。

私がよくても、本校がよくても、付属では駄目かもしれない。

その瞬間、私の頭に浮かんだのは、仕置き棒を持った古きよき時代の鬼教官に、

吟也が罰を受ける……そんな光景で。

少なくとも没収される可能性は高いだろうって、そう思っていて。それ以前に吟也の髪型にすらいちやもんつけられるんじゃないかなって気さえして。

髪の色は地毛だから仕方ないとしたって、あんまり目立つことはしない方がいいよって。

せめてサングラスは鞆かなにかにしまったほうがいいよって。

私は先輩ぶって忠告するつもりだったのに。

(……え?)

私は一瞬、目を疑った。サングラスなはずのそれが、何故かカチユと同じくらいの大きさの、

赤髪の女の子に見えた気がしたからだ。

気がしたから、なのは。

目をしばたかせた次の瞬間には、そこにはサングラスがあるだけだったからで。

気付けば私の手は、勝手に動いていた。

そのサングラスに向かって。

こういうのも、手が早いつていうのだろうか。

その時私は、自分自身の行動にただただ啞然となっていて……。

ぱしっ。

その瞬間だ。

そんな私の思考も手も何もかも止めるみたいに、吟也が私の手首

を掴んだのは。

「あ……え？」

私は、何が起きたのかも分からず、こと切れる寸前みたいな掠れた息を吐く。

より近くなる吟也との距離。

吟也はやっぱり一ミリも視線を逸らすことなく、私のことを見つめていた。

真剣な瞳。そこから滲み出るものを、私はうまく口じゃ説明できない。

敵意や怒りとも違う。だけど心から縮み上がる何か。

私はその時、完全に吟也にとらわれていた。

蛇に睨まれたカエルは、正義のヒーローに倒される寸前の怪人の気持ちは、

こんな感じなのだろうかとちょっと思う。

それが吟也だからなのかは分からなかったけど。
反抗する気は全く起きなかった。

吟也がヒーローで私が悪役で。

倒されるのが運命ならば、それは仕方のないことなのかもしれない

い、
なんてことを考えてしまつくらいには……。

（第12話につづく）

12、吟也と私の約束、膨らむ齟齬

「……」
「……」

先程と同じようできて、ちょっと違う沈黙が辺りを支配する。

けれど……その静寂は、一瞬だった。

重苦しすぎるその場に、私自身耐えられなくなってしまったからだ。

「……そんな怖い顔しなくてもいいじゃない。別にとって食おうってわけじゃないんだから」

強がり。この期に及んで、昔と変わらない優位に立とうとしている。

変わったのは自分とばかり思っていたけど。

この数年で吟也だって変わってしまったのかもしれない。

そう思うのが嫌で、私はさらに言葉を続けた。

「付属は本校と違って校則も厳しいって聞いてたから、没収される前って思っただけよ。」

いきなり手を出したのは悪かったと思うけど。吟也ぜんぜん変わ

ってないから、
昔の世話焼き癖が、自然と出ちゃったみたいね」

思ったままのことを矢継ぎ早に。

私にしてはかなり饒舌な方だったろう。

言葉と心がごっちゃになるくらい混乱してたって事なのかもしれないけれど。

「あ、い、ごめんっ。わざわざ、ありがとう」

すると吟也は、はっと我に返ったみたいに目をしばたかせて。

真摯な様子で私の手を離し、慌ててサングラスを頭上からブレザーのポケットにしまう。

なんだかひどくうろたえていて。

吟也には悪いけど、それだけで、私は救われてしまった。

そこにいたのは、やっぱり私の知ってる吟也だったからだ。

「ふふ、別に謝ることじゃないでしょう。」

……ずいぶんと久しぶりのはずなのになんだかあまりそんな気がしないわ」

思わずうれしい笑顔も出ようと言っものだろう。

馴染んだやりとり。ようやく、私は落ち着きを取り戻して。

「そうそう、さつきね、お母さんから吟也が帰ってきたって連絡があったから飛んできたのよ……って、まずは挨拶しなきゃ、順序があべこべじゃない……おかえり、吟也」

まずしなきゃって思ったのは、ここに来た理由、再会の挨拶。当たり前のことだった。

「う、うん、ただいま、潤ちゃん」

極上のスマイル。

今この瞬間のために私は生きてきたなんて、きっと吟也は知らないんだろう。

事実、私の期待を裏切るみたいに、吟也はその表情を曇らせる。

「あ、でも、ただいまって言うても、約束守れたわけじゃないから……」

帰ってきただけ、って感じもするけどね」

「約束……そっか」

今度会うときは、紅葉台学園の【生徒】になるって吟也と私の約束。

吟也が紅葉台の本校には入れなかったのはブレザーで一目瞭然だった。

本校の生徒を表す赤い制服ではなく、付属の生徒を表す緑色の制服を着てる時点で。

「吟也は……まだ紅葉台に入ること、諦めてないの？」

その約束。何も知らないままにヒーローに憧れていた、小さな頃のままなら素直に応援もできたんだろうけど。

今は無理なことくらいよく分かっていた。

紅葉台の【生徒】には、男の人はなれない。

よしんば奇跡的になれたとしても。

海底の底で死ぬまで暮らすような苦行を強いられる羽目になるのだ。

それは、吟也にだって分かっているはずで。

分かかって言っているはずなのだとしたら笑えないよって思っちやって。

気づけば少し、私はトゲのある言い方をしちゃってた。

一瞬だけむっとなる吟也。

だけどその感情は表に出ることはない。

たぶんきつと。

私の言う事なんて分かりきってるからなんだろう。

「もちろん、だって夏に編入試験があるって、そう聞いたし」

編入試験。付属から本校へと、編入する意志があるものを対象に毎年行われている試験だ。

付属の生徒であるならば、誰もがその試験を受けることができる。魔物達と戦うための知識と技術。

それらよりも、私達【生徒】と、魔物たちが戦うための異世にどれだけ長くいられるかが合否の条件になる。

ちなみに、過去その試験で受かった人は一人だけだ。

先ほど名のあがった、今は付属の先生をしている、トイ先生。本校と付属を自由に行き来できると言われる希少人物の一人で、私たちの間では仙人、なんて呼ばれ方をしている。昔は私たちの先輩方と前線で戦っていたこともあったらしい。

だけど、やっぱりどこか無理があったんだろう。

数年足らずで引退し、今は、付属の教師をやる傍ら、私達の為に様々な物資や得物を作成、

搬入する仕事に就いている。

男は何もできず、女性に守られる時代になった。

仙人と呼ばれた先生でさえ、そう言って嘆いていたのが印象的で……。

(第13話につづく)

13、吟也と私の我が儘の応酬

「吟也には不可能だって、私が……言っても？」

【生徒】になること。

それが、吟也にできる、できないよりも。

私は単に、吟也が【生徒】になって苦しむ姿を見たくなかっただけなんだと思う。

だから私は、そう言ったんだけど。

それは、見た目に反して意固地なところのある吟也に火をつけてしまったらしい。

「もちろん！ 僕はまだ、約束を破るつもりはないから」

強い瞳。その色合いのせい、そこに炎宿るみたいだった。

それはきつと、吟也の誇りそのもので。

やっぱり吟也って変わってないなあなんて思う。

でも、その吟也の言葉は。

紅葉台学園へ入ってからの大変さと苦労とかを身を持って体験してないからこそその言葉なんだろう。

勝てもしないのに突っかかっていって怪我をする。

本人はプライドを守れていいのかもしれないけど。

見てる方としてはたまったものじゃなかった。

だからそんな結果になるより早く、私は割って入ってたんだけど。

吟也は、そんな私に対して、昔から天邪鬼なところがあった。

私の言う通り不可能なのだとしても、不可能だと分かっても挑戦したい男の子の意地みたいなものがそこにはあって。

昔はそれでよく吟也と喧嘩したものだけど……。

(あれ……?)

そんなやり取りの中、何においても気にしなくちゃいけなかったことに、私は気付かされる。

見た目ともかく中身があまりに記憶通りで、過去の私と同じように接してくるから。

私自身、何憂うことなく過ごしていた小さな頃に帰っていたのかもしれない。

ついさっきまで吟也が私に触れていた。

曲法の力を持たない一般の人……特に男の人にとって、曲法の力を持つ私たちは毒の塊にも等しいはずなのに。

理解に及ぶとたちまち陥る、混乱の極み。

それは、我慢なんてレベルじゃないってことくらい、触れずとも同じ部屋にいただけで苦しんでいたお父さんの姿で身に染みている。

もしかしたら。

生徒になることを口にするだけあって、吟也には生徒としての才

能があるのかもしれない。

例えばトイ先生のように、曲法の力の影響を受けにくい人なのかもしれない。

まあ、それでも異世の中に入れるかどうかは別問題だし、たとえそれが可能あっても吟也が本校に通うことは、吟也にとって不幸にしかならないだろうことは目に見えている。

頭の中の冷静な部分では、確かにそう思っていたのに。

「そう。……吟也がそう思うのなら仕方ないわね。約束、守ってくれること、私も祈ってるわ」

気づけば私は、そんな事を口にしてしまっていた。もしかしたらずっと側にいて一緒に戦えるかもって期待している自分がいたんだ。

それは、どうしようもない私のわがまま。

結局私は自分が可愛いんだろう。

辛くても側にいてほしいと、自分勝手も甚だしい感情を抱いている。

【生徒】 になることが辛く不幸な理由。

一番に考えなきゃいけないことを、考えようもしないままで。

と……。

思ったより話し込んでる時間が長かったのか。

予鈴の鐘とともに、吟也と同じビリジアンカラーの制服を着込んだ人たちが、ちらほら見え始める。

さすがにこれ以上は限界だろう。

異世の中じゃないとはいえ、私がいることで吟也のこれからの学校生活に支障をきたす、

なんてのはごめんだった。

私の側にいて平気……あるいはそのふりをしている吟也を見ると尚更に。

「ごめんなさい、吟也。寮の点呼の時間なの。もう行くけど、入学式頑張つて。試験、期待してるわ」

だからそう言つて手を振り、返事を待つより早く、私はきびす返してその場から離れた。

もう、ほとんど全力のダッシュだ。

吟也が呼び止めるような声が聞こえた気がしてたけど。

私は振り向かなかつた。

外出届けもなしに点呼に遅刻すると怒られるって理由もないこともなかつたけれど。

ここで未練がましく振り返っちゃったりなんかしたら、

視線を外せなっちゃうかもって、半ば本気で思っていたからだ…

…。

(第14話にじづく)

14、カチユと私の似ているところ（前書き）

とにかく短いです。これ以上短くはならないと思うけど……

14、カチユと私の似ているところ

「でも、よかった……」

ちゃんとお話できたかどうかはちょっと疑問だったけれど。

キクちゃんの心配をよそに、拒絶されることはなかった。昔のままだった。

昔のままだけどすごくかっこよくなってる。

人でないものになっちゃった。そう揶揄される自分。

だけど私は吟也を好きでいられた。

むしろその勢いは加速し、とどまるところを知らないって感じ。

会ったらどんなことになるかなって。

良いほうにも悪いほうにも長年かけて想像し続けてきた私だったけど。

結果は極上だったっていつでもいいだろう。

怖いくらいにいい方向に向かっている。

あまりにもうまくいきすぎて、今更ながら夢なんじゃないかなって思ってしまうくらいには。

「潤ちゃんはボスのこと好きなんすねえ……」

「え……?」

その、浮かれきった私に水を差すってわけじゃないんだろうけど。突然胸元から、そんな声が聴こえてくる。

それは、カチユの声だった。

吟也からの大切な預かりものが、私の力の影響を受けてカチユになつて。

眠そうにそう名乗ってから殆んど目を覚ますことのなかった彼女の、久しぶりの言葉だ。

「ぼす？ ぼすって吟也のこと……？」

そりゃ好きだけど……じゃなくて。

『ぼす』ってなんだろう？ B O S Sでボスってことかな？ カチユってもともと吟也のつくったお人形さんだから、作成者を敬う意味でそんな風と呼んでいるのだろうか。

少し……いや、かなり苦しいけど。

「……で、ねむいつす〜」

その問いに答えてくれたのかそうでないのか。聞き取りづらいそんな事を呟いたカチユは、それ以上話を聞いてくれることはなかった。

深窓の令嬢のミニチュアな見た目にそぐわない、下っ端っぽい口調で首をがくがくさせている。

さつき、カチュに似た子を見たような気がしたんだけどって聞いた
うと思ったのに。

これじゃあ、何を聞いても駄目だろう。

その時の私は、さつきのはもしかしたら舞い上がっていた中で
気のせいかもしれない、

なんて思い始めていて。

そんなカチュは、いつも眠たげだった。

というか、寝てばかりだった。

もし何かの病気ならば、何とかしてあげたいんだけど。

魔物と似たり寄ったりだろう彼女を見てくれる人なんかいないだ
ろうし、

ご飯は毎日三食しっかり食べてる（寝ながらだけど）わけだから、
とりあえずは仕方なしに現状維持って感じなんだけど。

そんな私をよそに、気付けばカチュは胸ポケットの中、
巾着袋のその奥で、丸まるようにして熟睡モードに入ってしまった
ている。

「……もう。自分勝手なんだから」

そんなところ私に似なくても、などと思いつつも。

私は考えるのを止め、来た道を引き返していったのだった……。

15、寮のみんなと私のかししい朝

来る時は無人だったはずの自室前の廊下。

薄暗かったその通りには、既に明かりが灯っていて、雰囲気は全く違う。

一般的な同世代の女の子たちに比べれば程遠いとはいえ、三人以上集めればなんとやら。

それ相応のざわめきがその場を包んでいる。

毎日毎朝の点呼。

ずらりと生徒たちが自室の前で立ち並ぶ様は壮観だけど。

先に述べた通り、本校の規律はとにかくゆるい。

故あって自身の意思とは別のところで集められた子たちだとはいえ、

年中沈み込んでられるほど繊細でもなく。

その場合は、日々の恒例となった雑談の場と化している。

自分の階に戻ってきてても、部屋ではなく外からやってきた私に気を留める人は……

「なにそんなところで突っ立ってんの？ あたしの代わりに点呼してくれるの？」

いた。

いつの間に背後を取られていたのか。

本校の議長（生徒会長が不在なので実質トップ）でもある、名神^{ながみ}真希^{まき}先輩が、

一癖も二癖もありそんな笑みを浮かべている。

「いえ。すみません。戻りますっ」

「なんだかテンション高くない？ 何かイイコトあった？ 風紀委員長さん」

それは、外出許可も得ずに（まあ、学園内からは出てないけど）外から帰ってきた、

私のことをわかった上での皮肉めいた言葉なんだろう。

実際、風紀委員長なんて肩書きあつてないようなものだけど。

一応本校内ではそう呼ばれる仕事を与えられているのは確かで。

「べ、べつに何も？ ちよつと散歩を……」

「ふん？」

まったくもって私の言葉を信じてない、そんな真希先輩の眩き。

私は曖昧に言葉を濁し、その場から逃げるようにして、

かしましさの中でひとり居心地悪そうにしているキクちゃんの隣へとやってくる。

「……」

軽く目配せ。どうだった？ って聞かれたような気がしたから。

バツチリだったよって意味を込めて、ひたすらウインクを繰り返す。

「……っ」

それにあからさまにひいている感じのキクちゃん。
ちよつとばかし過剰だったらしい。ぷいと視線を逸らされる。

まあ、それもしょうがないよね。

たった今ゲットしてきた幸せの感情は、
目だけで伝えるなんて不可能くらい大きなものなんだから。

「それじゃ、点呼するよ」

そんな事を考えていると。たぶんきつと一番やる気のないだろう
真希先輩の声が辺りに響く。

それにより周りの喧騒がとりあえず収まった。

何度も言うけど。この寮と、学園内において私たちは自由を与え
られている。

それが箱庭の中のかりそめのものだったとしても。
全く縛りがないというのもかえってだらけてしまうことにもなり
かねない。

そんなわけで、朝と夜の点呼だけはちゃんとしよう、ということ
になった。

もちろん、身に降りかかった力に耐えられず伏せっている子達を
除いて、だけど。

それは、人としての些細なプライドのようなものだ。

寝坊して遅刻してくる子もいないことはないけど、ほとんどの子
がそれをしっかり守っている。

自分の意思とは別のところで集められたにしてはまともあるほうだよな。

単純に真希先輩を怒らせたら怖い、っていうのもあるだろうけど。まあ、早起きは三文の得っていうし（今日ばかりは億万長者になった気分だけ）、

もの凄く早い時間にあるわけじゃないし、

特に否定するような理由もないっていうのが一番の理由なのかもしれない。

そうして、軍隊のよう、とはいかずとも体育会系なノリで滞りなく点呼が終わって。

いつもならそこで、最近は随分とご無沙汰になってしまった魔物退治における出勤を待ちつつ、

授業の準備などをしたりするわけなんだけど。

「あ、そうそう。各委員長、副委員長はこの後、本校校舎十階の大会議室に集合ね。

午前中使って会議するから。……まあ、年度の初めってことで」

真希先輩が、解散しかけた一同を見渡し、そんな事を言う。

そつえばうつかりしてた、みたいな感じで。

「随分急だなあ」

委員長同士の話し合いなら、放課後の部活の代わりに、毎日のようにしているところのこと。

「……何かがあった。あるいは何か分かった？」

そんな事を考えていたら、キクちゃんの独り言のような呟きが届いてくる。

その声は、私が思っている以上に沈んで聞こえた。

私もそれに感化される形で、少しいやな予感を覚える。

突然集まって話さなくちゃいけないこと。

それこそ、新学期が始まったばかりの授業時間を潰してまでのものは、

一体なんなんだろうって。

(第16話につづく)

16、キクちゃんと私の心配事って

突然集まって話さなくちゃいけないこと。

それこそ、新学期が始まったばかりの授業時間を潰してまで。

真っ先に浮かぶことは一つだった。

それは、先に述べた通り、私たちがこの紅葉台学園に集められた
本当の理由だ。

世界に蔓延するようになった魔物たち。

彼らは一体どこから現れ、何から生まれてくるのか。

それは、虹泉と呼ばれる世界の歪みから現れ、
湧き出してくるといのが一般的だ。

つまり私たち生徒に与えられた仕事は、虹泉の出現場所に出動し、
基本的にはそれを破壊、あふれ出た魔物たちを撃退することにあ
る。

だから一昔前までは世界中にこのような場所があったんだけど。
今は違う。

私たちのことや魔物たちのことを日々研究している科学班の人た
ちが、

魔物ではなく虹泉がどこに出現するのかを突き止めたからだ。

虹泉はいかにして現れるか。

話の流れで、その答えは容易に導き出されるだろう。

虹泉は、曲法の力を持つ私たちの近くに現れる。

それにより、私たち力持ちしものの誰かが虹泉を生み出し、魔物を操っているのだと考えられるようになるのに、それほど時間がかからなかっただろう。

だからこそ、確たる証拠もないままに、私たちはここへ集められた。

曲法をその身に持つものを一まとめにして困ってしまえば、万事解決するとも言わんばかりに。

それこそが、私たちがここに集められた一番の理由だ。

事実皮肉なことに、私がここに来てから虹泉が現れたのは、その全てが紅葉台周辺だった。

おかげで、私たちは人を守るものと害するもの、両方のレッテルを貼られてしまったわけだ。

キクちゃんの言う通り、この不毛な戦いに進展があつたとするならば。

それは決していい知らせじゃないだろう。

今まで一緒に過ごし、戦ってきた仲間たちの中に戦う原因になった人物がいるだなんて思いたくなかった。

あるいは、お前が犯人だと言われる羽目になることは恐ろしかった。

曲法は、分からないことがとにかく多い。

仮に虹泉が曲法の力によって生まれたものだとして。

それを意識してやっているのかどうかも分からないだ。

自分の意思など関係なしにって可能性だって十分にありえたから。

「……考えすぎだつて。言葉通りの、ただの年度始めの集まりだよ」

私は、胸ポケットの中にある小さく暖かなもう一つの鼓動を感じながら、

自分に言い聞かせるみたいにそんな事を言う。

「だといいんですけどね……」

そんなわけないって感じに。ちょっと呆れた、それでいて疲れたため息をもらすキクちゃん。

それは、私以上にキクちゃんには心配事があったからなんだろう。

遠いところ（確か四国だったっけ）からここに連れてこられたキクちゃんには、同郷の友人がいた。

くいせけ・なつめ
杭瀬下棗ちゃん。

生徒会副会長の一人を務めるほどの実力の持ち主でありながらも、ある時急に彼女は倒れた。

倒れたまま眠り続け、目を覚まさなくなってしまった。

そんな彼女を見守るようにたくさんのぬいぐるみたち……曲法によつて生み出されたものに囲まれながら。

その数は日増しに増え、今やその数三桁を越える勢이었다。

主である棗ちゃんを守ることを第一としているからなのか。

元ぬいぐるみだった彼らは、魔物のように率先して人を襲うようなことがない代わりに、

倒れた際に棗ちゃんが創り出したという広い異世の中を占拠して

いる。

まるで何かから彼女を守る理由があるかのように、目を光らせている。

そのことがあるからこそ、棗ちゃんは疑われていた。

人を滅ぼさんとする魔物たちを生み出す……その虹泉を操るものかもしれないと。

その異世のどこかに、それを隠しているのではないかと。

今までは、そのことに対する証拠も根拠もほとんどなかった。

それが、ここにきての突然の集会。

同郷の親友が疑われているのだから、キクちゃんも気が気じゃないのは当たり前のこと……。……。

(第17話につづく)

17、命（メイ）ちゃんと私のちゃんやり相乗効果

どこか不安げで気もそぞろなままのキクちゃんを連れて集まったのは。

紅葉台本校最上階にある、生徒会大会議室だった。

最上階の約三分の一を占めるその場所には、数十を超えるそれぞれの委員の委員長副委員長が集まっていた。広い部屋の真ん中を占める、規格外の大きさのサーキットテーブルを囲むようにして、それぞれに宛がわれた席へとついている。

「……っ」

「うにゃーん……」

風紀委員長の席は、限りなく上座に近い。

それが結構面倒なんだよねって、テンションが上がらないままキクちゃんと席に着くと。

それに拍車をかけるみたいに重いため息と脱力するような鳴き声？ が聞こえてきた。

（暗い、暗いよ）

何しろ急な集まりなわけで、落ち着いて和気藹々、というわけにはいかないことくらい分かってはいたことだけだ。

特に私の周りには、どんよりと重い雰囲気は漂っていた。

ここで、明るく前向きに行こうよ、って感じのことをうまく口にできればいいのだけど、

思うばかりで実際はそうはいかない。

どんより空気の発生源たちが、キクちゃんを含めて私にとって親しい子たちだからこそ余計に。

「……………」

私は何も言えないままに左手を見る。

上座……実質本校の生徒たちの長である真希先輩の隣の席。

将棋で言うならば王を守る金の位置。

二人であるべき金は、一つ欠けてしまっている。

思いため息を吐いた主こそ、取り残されたもう一人だ。

塩生命しおぶ・めいちゃん。

副会長という肩書きよろしく、実質ナンバー2の女の子。

キクちゃんと同じく、中学が上がったとき、【生徒】として私が紅葉台に入学してからの付き合いで、ウマの合う友達の人だ。

ベリイショートベリイショートの銀髪に、鋭角な輝きを常に振りまくグレイの瞳ちゃん付けしたり、女の子扱いできるのはお前だけだと褒められるくらい凛々しく決まっている。

まさに男装の麗人という表現がぴったりとはまるし、実際男装をしている。

それは、女の子しかねないという【生徒】のイメージを、払拭

するために行っているらしい。

だけど今は、その前向きな凛々しさも、三割減って感じだろうか。無意識のままにため息なんてついちゃうあたり、気もそぞろなのが手に取るように分かってしまう。

言わずもがな、原因は同じ副会長にしてルームメイトでパートナーでもある棗ちゃんがその場にいないことだろう。

命ちゃんもキクちゃんに負けないくらい棗ちゃんのことを心配しているのだ。

傍から見ていると想われてて羨ましい、なんて思っちゃう時点で私の駄目さ加減が伺えて。

何だかいたたまれなくなり、私は視線を命ちゃんから外す。

というより、キクちゃんを挟んだ隣にいるもう一人、憂いの湖に沈む人物のことを伺ってみる。

「……あれ？」

思わず声に出た。同時に何故どんよりとした空気が漂っているのかを理解してしまった。

キクちゃんを挟んだ隣の席で、落ち着きなく尻尾をぱたつかせているのは、

保健委員長の松代美音先輩だ。

私が今こうして風紀委員長に就任するまで、私は美音先輩の相手だった。

その縁で、仲良くさせてもらっていて、せわしく揺れるチャトラの尻尾や、

透き通る赤髪に映えるというか、とにかく目立つ猫耳が、

身に秘める曲法の影響で獣化してしまった結果、ということも知ってるわけだけど。

私が思わず言葉を発したことで、キクちゃんと美音先輩が共に顔を上げる。

すると当然、私は発した言葉の続きを紡ぐ義務があるわけで……。

(第18話につづく)

18、美音先輩と私が相棒であったが故に

私が思わず言葉を発したことで、キクちゃんと美音先輩が共に顔を上げる。

ならば当然、私は発した言葉の続きを紡ぐ義務があるわけで。

「あの……その、由宇ちゃんは？」

わかほ・ゆづ
若穂由宇。

私と同学年で、今春から美音先輩のパートナーとなった女の子だ。

本校の生徒の中では、数少ない、望んで紅葉台へやってきた子で、まじめと実直をかわいい女の子に擬人化したらこうなるだろうな
って感じの子だ。

いつものんびりフリーダムな美音先輩に、いつだって何やかやお小言を言っているのが、

ここ最近の見慣れた光景だったんだけど。

私が問うと、くたりと美音先輩の尻尾が止まった。

見るほうも元気がなくなりそうな、そんな光景。

「由宇は今日から……付属に通うんだって」

発せられた美音先輩の言葉には、余裕がない。

見た目が猫だからって、あえて語尾に「にゃー」をつけるのを忘

れてしまってるくらいには。

「…………え？」

驚きのリアクションは、私よりも早く間にいるキクちゃんがしてくれた。

「由宇はいつもの任務だって行ってたけど」

そして、続くその言葉で、私はだいたいの経緯を理解する。

由宇ちゃんの持つ曲法の力は、とにかく異質で特別で希少なものであった。

ある意味、【生徒】のみんながあこがれ羨む能力、って言うてもいいかもしれない。

由宇ちゃんの能力は、【隠行発止】と呼ばれるもので。

曲法の力を持たない一般の人たちの中にいても、

ほとんど影響を与えることなく暮らせることができるらしい。

おそらく、由宇ちゃん自身が望まなかったらここに通うこともなく、

曲法をその身に秘めし【生徒】であることすら気付かれなかったんじゃないかと思う。

そのために、年度の途中に本校に入りたかって希望した人たちを、試験と銘打って募集してるわけだけど。

そんな由宇ちゃんも、棗ちゃんとはまた違って意味で、

紅葉台学園に監視され縛られているといってもいいかもしれない。

私たちのような人間にも害を及ぼす力が安全に使えるようになるための研究にはもってこいだと。

私から見れば研究材料にされてるみたいで嫌だったけど。

彼女自身はみんなのためになるならばとそれを悪くは受け取っていないから、

こっちからじゃばってどうこう言うわけにもいかないんだけど。

「任務で付属ですか……何か心配なことでも？」

新しい人たちがやってくるこの季節。

幸いなことに【卒業】する人もいない代わりに、入学者も数人ですんだ本校はともかく。

お隣さんの付属は、例年通りに三百人強もの新入生がやってきているらしい。

そのほとんど、あるいは全員？ が男の子で。

表向きは世界のために魔物と戦っている私たちを補佐するために入学してくるらしいけど。

先に述べた通り、本当は違う。

普通の人は【生徒】たちを拒絶する。

それをそのままでもいいなんて思ってる【生徒】はいないから、どうすれば拒絶されずにすむのか模索しているのだ。

嫌な言い方をすれば、付属の生徒たちはそのための犠牲者、いけにえとも言える。

由宇ちゃんの役割は付属の生徒になりすまし、

それらを客観的に見ることによって原因を探ることだった。

先の見えない、辛いだろう任務だっことは分かってる。

でも分かっているからこそ、今回に限って特に憂鬱そうな美音先輩のことが気にかかった。

言葉足らずの私の問いかけ。

でも、そこはかつてのパートナー！。

私の知りたいことを理解してくれた上で、先輩は言葉を返してくれた……。

19、美音先輩と私のどこかで聞いた台詞（前書き）

だんだんペースダウンしていくかもです。

19、美音先輩と私のどこかで聞いた台詞

言葉足らずの私の問いかけ。

でも、そこはかつてのパートナー。私の知りたいことを理解してくれた上で、

美音先輩は言葉を返してくれた。

「由宇、今回男装してるのにや。男子寮に潜入するからって、そんなの無理だよって由宇には似合わないって言ったら髪を……」
「……っ」

キクちゃんが重い嘆息をつくのがわかる。

その、まるで自分のせいだと責めるような美音先輩の口ぶりに。

……どうやら私はちよつと勘違いをしていたらしい。

先輩が沈んでいた理由。

任務どうこうではなく、単純に由宇ちゃんに負い目を感じているらしかった。

由宇ちゃん髪は、まさしく亜麻色の髪の乙女という言葉が似合うきれいな色をしていた。

もともと長いほうでもなかったけど、男装というからにはよほど短くしてしまったのだろう。

それがどんなに覚悟のいることが、私にだって分からないわけじゃないかった。

きつと、売り言葉に買い言葉だったんだろう。
臆さずなんでもズケズケと言いついて心を通わせる。
二人はそんな理想的なパートナーだったから。

「踏ん切りが欲しかったんですよ。先輩に言われたからでもいいから、理由が欲しかったんだと……」

「責任を押し付けたわけですね。今頃してやったりってほくそえんでるかもしれませんよ。」

由宇さんもなかなか、あくどい人です」

私の言葉をさえぎるみたいに。

鼻を鳴らして、場を和ます？ ための毒を吐くキクちゃん。

「ええっ、そうなの？」

「きつとそうです。今頃思っているはず。『自分のせいだとか言っておちこんでやがるぜウケる』……と」

「にゃ、にゃんだと。人が心配してるのにっ！」

間違っても由宇ちゃんがそんな言葉遣いをするわけがないという
か、

キクちゃん自身もまったくもってミスマッチな言葉だったけれど。

それを真に受けたのかそうでないのか、あからさまな怒りを露わ
にしてみせる美音先輩。

もう、いつもの先輩だ。

うまい具合にいいとこだけキクちゃんに持ってかれちゃった感じ。

「……………」

「ふふっ」

私が言葉奪われ呻くことしかできないでいると。

いつの間にかやらこちらに注目していたのか、ほんの僅かばかり楽しげな笑みを浮かべる命ちゃん。

辛いことやしんどいことばかり考えて生きてなどいけない。

ここ最近沈みがちな命ちゃんの気分を多少なりとも上げられたのならば、

会議前のこのおしゃべりも無駄じゃなかったんだらう、なんてちよっと思つて。

「ごくろーごくろー。みんな集まつてるわね」

そうして。

まさかタイミングを見計らつてたんじゃないよなつて思つちゃうくらい、絶妙なタイミングで、

われらが大将、真希先輩の大きすぎる声が部屋に木霊する。

いつの間にかいなくなつて、また現れたかと思つたら、どうやら科学班に用事があったらしい。

白衣を着た小さな小さな少女を一人従えていた。

勞せずして、静まり返るその場。

それは、あまりそういう言い方をしたくはないけど、その少女が異質に見えたからだらう。

紅葉台の校章を背中に掲げる白衣は、【院生】の証だ。

一般の学校……中学生に当たる年から九年間魔物と直接相対し、

それでもなお【卒業】せずにすんだものたちが進む道。

真希先輩のような現場至上主義の人を除く、【生徒会放送室】にて作戦の指揮を取る人が三分の一。彼女のように、生徒たちが曲法の謎を解明し研究し続ける科学班が残り、といった具合だろうか。

紅葉台学園ができたのは三十年ほど前だけだ。

今のような中学から大学までの一貫教育のような形になったのが十年前くらいだから、

白衣を着ているということは、これすなわち最上級も最上級な大先輩になるのだろうけど。

ポニーテールがかわいい彼女の見た目の印象としては、

未だ小中学生に間違われることがよくあるキクちゃんとも引けをとらない幼さを感じる、

といったところだろうか。

実際問題、私はちょっと勘違いしていて。

彼女は見た目の通りの人物だったんだけど……。

(第20話につづく)

20、詩奈ちゃんと私の被害妄想

【院生】の白衣を着た小さな女の子が現れて。
周りのみんなが思わず口をつぐんだのは、ワケがある。

そのワケとは、彼女を前にすれば、キクちゃんの毒々しさもかわいものなのかもしれないって思えるくらい、白衣の少女には、まったくこれっぽっちも表情がなかったことだ。

「……」

少女を見て、私も含めて心内で思ったことは一つだけだ。だろう。

……卒業生。

生徒から、院生になれなかった大多数の人物。

曲法の力は、人の記憶に深くかかわっているらしい。
だったら、その記憶さえ奪ってしまえば、生徒の宿命を負いながら容疑者扱いされることもない。

私にしてみればそんなこともっての外だけど、
記憶を失ってまで普通の女の子に戻りたいって思う人たちはたくさんいた。

でも、彼女たちのすべてが都合よく曲法だけを消して日常に戻れたわけじゃなかった。

記憶を失った反動で、物言わぬ人形のようになってしまった人が、

数多くいた。

不憫に思う気持ちと、一握りの羨望。

それらをまったく気にした風もなく、少女は真希先輩とともに私たちの側までやってくる。

まあ、彼女が卒業生であるというのかこちらの勝手な考えで。

結局のところ彼女はそうじゃなかったわけだから、当たり前といえば当たり前だったんだらうけど。

「命、棗の席ちょっとばかり借りてもいいかしら？」

「……ああ」

命ちゃんは一瞬だけ苦みばしった表情を浮かべたが、あえて拒絶することもないと思ったのだらう。気を取り直し、一つうなずく。

「……」

「……ええと」

もともと見た目がキクちゃんとはまた趣の異なるお人形さんめいてるせいもあるのだらうけど。

赤い宝石のようなきれいな瞳にじっとみつめられて、思わず怯む私。

とりあえず初対面なわけだし、とにかく何かを言わなくちゃって

口を開きかけた私だったけど。

「……強い魔物の匂いがするの」

舌足らずというよりは古風な物言い。

その小さな小さな咳きは、目の前にいる私に聞こえるか聞こえないかといったところで。

慌てて胸ポケットを、カチユを隠そうとする自分を、やっぱり慌てて止める。

彼女のその言い方には、敵意があるような気がした。
私を……カチユを疑っているのだろうか。

あるいは、虹泉を作り出した張本人だと思われるのかも
ない。

「強いだなんて……」

買いかぶりだよ。だったらどうするつもり？

私もカチユもやましいことなんかない。

少なくとも、心の内ではそんな強い気持ちがあった。

厳密に言えば私は違うけど、魔物たちをお供にして仲間にして戦う子たちもいるし、

そもそもカチユは寝てばかりで、害意の字もないのだ。

相手があまり先輩に見えないって言う視覚的理由もあったら
らうけど。

私は変に強気だった。

無害だからってキクちゃん以外にはカチユの事を知らせてなかったという後ろめたさも忘れていた。

「……っ」

その強気が功を奏したのかそうでないのか。

無表情で人形めいていた彼女は、その見た目の印象を早くも崩すがごとく大きなリアクションをした。

なんて言えはいんだろう。

自分としては注視していたわけでもないのにいきなり横合いから何見てんのよってあらぬ因縁をふっかけられて、どう対応していいか分からない、といった顔をしている。

「……あれ？」

「……っ」

もしかしなくても私のしょうもない被害妄想だったんだろうか？
目の前の先輩かどうかも怪しくなってきた少女は第一印象なぞもはや見る影もなく怯えていた。

その場にさっきまでの緊張が嘘だったような、別種の気まずい雰
囲気が漂って……。

(第21話につづく)

21、真希先輩と私の何かたくらんでること

気づけば。

目の前の先輩かどうかも怪しくなってきた少女は第一印象なぞもはや見る影もなく怯えていた。

その場にさつきまでの緊張が嘘だったような、別種の気まずい雰囲気は漂って。

「ちよつとちよつと、潤ちゃんってばウチに入っただばかりのかわい子ちゃんを泣かす気？」

「え？ いえ、そんなつもりじゃ……」

「つもりがないなら睨むのやめなさいって。何、潤ちゃんなりの自己紹介のつもり？」

我、一騎当千のものゝ、鬼の風紀委員長なり！ みたいなの？」
「……」

一騎当千で鬼のような強さなのはあなたでしようとも言えず。そう言われていることに見た目以上にダメージを受けた私は、一気にテンションが落ちになって口をつぐんだ。

それで私がおとなしくなったと判断したのか、真希先輩は改めて部屋をぐるりと見渡し、

横に並んだ白衣の少女の肩を豪快に叩きながら声を張る。

「そうそう、自己紹介しとかなくちゃね。この子は土島詩奈ちゃんっていうの」「よ、よろしくお願ひします……」

表情が固まっていたのは、どうやら極度の緊張のためだったらしい。それがよく分かるくらいに彼女はたどたどしく頭を下げる。

私は自分の勘違いに辟易しつつも、なんだかどこかで聞いたことのある名前だな、なんてことを思っていた。

「ほんとはまだ初等部にいるべき子なんだけどね、いわゆる飛び級ってやつ？」

この子すつごく頭がいいみたいだから、とりあえず生徒になれる年齢に達するまでつてことで、科学班にスカウトしたのよ。……ま、そんなわけで形式的にはみんなの先輩になっちゃうけど、

まだまだ新人さんで、緊張してるから優しくしてあげてね。特に風紀委員長さん、期待してるから」

しっかりはつきり何かをたくらんでます、っていうのが丸分かりの真希先輩の笑顔。

私に、大事な何かを半ば強制的に押し付ける時の先輩の顔だ。

この笑顔を見せられたときは、ろくなことがない……という風にはならないのが、

これまた性質悪いよねって感じた。

最近だと、それこそ美音先輩の元を離れて、風紀委員長に抜擢さ

れたことだろうか。

おかげでこれまで以上にキクちゃんと仲良くなれたことを考える
と。

今度はどんな大事を頼まれるのやらって、期待と不安が程よくせ
めぎあっているのが自分でもよく分かって。

「それで、っと。詩奈ちゃんの紹介も終わったとこでさっそく本題
ね」

そんな事を考えていた私を脇に、真希先輩はいよいよそう口にし
た。

本題、それは授業をそつちのけにしてまで開かれたこの集まりの
意義だ。

その中には、詩奈ちゃんがここにいる理由も含まれているんだろ
う。

「喜ばしい知らせとは言えないかもしれないけど……詩奈ちゃん
たち科学班のお手柄もあって、

現在絶賛稼働中の虹泉を確保することに成功したわ」

発せられた真希先輩の言葉が理解として皆に広がるのとはほぼ同時
どよめき……黄色というほどよさげな話題でもないけど、
とにかくかなりの質量を持ったそれが、部屋を支配する。

勿論私たちもご多分に漏れずだ。

とりわけ顕著だったっていうべきかもしれない。

美音先輩はその大きな猫目石をいっぱい大きくしてたし、命ちゃんやキクちゃんは明らかに顔色が悪かった。

虹泉の確保。しかも活動中。

それは前代未聞のことだ。

私自身、虹泉の創造主が強制的に卒業させられて力を失ったものか、

壊され機能を失ったものしか見たことがなかった。

何故なら、虹泉は発見次第破壊しなければ、人に害をなす魔物たちが際限なく増えてしまうからだ。

「いつたい、どうやって……？」

みんなの気持ちを代弁する形で私は問いかける。

すると真希先輩は、タッチでもするみたいに詩奈ちゃんの小さな肩を今度は軽く叩いた。

続きはお願い、ということらしい。

そこで私と目が合って、僅かに身体を震わせている詩奈ちゃん。

どうやらいきなり嫌われてしまったみたい。

その事実になすすべなくへこんでいると。

しかし詩奈ちゃんは何とか気を取り直したのか。

ここへ来たばかりの静止した雰囲気……緊張、あるいは集中した面持ちで語り始めるのだった……。

(第22話にじゅうく)

22、詩奈ちゃんと私の地固めの黒い紐

詩奈ちゃんは気を取り直したのか。

ここへ来たばかりの静止した雰囲気……緊張、あるいは集中した面持ちで語り始める。

「議長どのは確保したとおっしゃったが、正確ではない。われら科学班は、偶然それを見つけたにすぎぬ。

場所は紅葉台山の頂上。本校の敷地に当たる演習場の中心、内界の境界線にもれなく囲まれた、造られた外界にそれはあつたのじゃ」

淡々と、起伏なく一気に。

だけどそれを聞いた私たちは、穏やかとはいかなかった。

再び広がる、どよめきの波紋。

そんな中、私は詩奈ちゃんの発した言葉を心の中で反芻してみる。比較的冷静でいられた自分に、不思議な感覚に陥りながら。

私が本校の生徒の一員として魔物との戦闘に赴いたのは、約三年で両手に収まるくらいだったけれど。

虹泉は魔物を生み出すのが役目のようなものだったから、それを見つけるまでにはかなりの数の魔物の戦う羽目になってい

た。

そんな虹泉は、壊しても壊しても主を変え、またどこかに発生する。

まるで流行性感冒のように次から次へと。

そうになると、いくら紅葉台学園にその原因をひとまとめにしても埒があかない。

そんなわけで造られたのが【境界線】だった。

私たちの暮らす【内界】と、魔物蔓延る【外界】を隔てる、薄いドーム状の幕。

昔の生徒……院生の人たちが、自らの力で作り出し、今は科学班が維持するもの。

それは、魔物が通過すると……いや、人を襲う気満々のやつが通ると分かるようになってる。

私たちが出勤するのはその時だった。

住み分けをしている、といえは聞こえはいいが、実際は仕方なくそうしているにすぎない。

幸か不幸か、紅葉台の町には紅葉台山を中心に、広い裾野を広げる国有地があったことで、

紅葉台の町は魔物たちに支配されている、なんて状況にならずにすんだわけだけど。

今、詩奈ちゃんが口にしたことは、境界線があるから大丈夫という私たちの認識を根本から覆すものだった。

紅葉台山のてっぺん。

紅葉台の町を一円見渡せる、言わば町の中心部。

そこにはぐるりと一周、境界線に囲まれた外界がある。

いつあるかも分からない出勤のために、実践訓練のできる演習場がある。

私も、生徒になってから幾度となくそこへと足を運んでいた。

演習場では、科学班が作り出した魔物たちと模擬戦闘などをするわけだが。

その造られた箱庭に現れたという虹泉。

その意図することは何か？

私には答えを出せそうになかった。

ただ、広い外界の中で、最も見つかりやすいだろう場所にいることは確かだ。

(まるで、壊してくださいって言ってるみたい……)

なんととはなしに、私はそんな事を考えていたけれど。

その思考は、演出という意味合いのほうが強いだろう、真希先輩の机を叩く音でかき消される。

「これは私たちに対しての挑発……挑戦状ってところかしらね。あるいは、罠かもしれない。」

壊せるものなら壊してみなさいって、そう言っているようにも見えるわ」

言葉の割に、切羽詰った感じはあまりない。

それは、虹泉があるのに出勤がかかっていないあたりにも理由があるのだろう。

そう思っていると、真希先輩の隣にいた詩奈ちゃんが立ち上がり、その小さな手を必死に天井に伸ばしているのが見えた。

その先には、会議のために使うワイドスクリーンの黒い紐。

条件反射で私がそれを引っ張り降ろすと、どこか私に警戒しっぱなしだった詩奈ちゃんは、

はっとなった後、軽く頭を下げた。

そんなちよつとした動作は、見た目相応で可愛い。

真希先輩が傍に置きたがるわけだよねって、

あらぬ方向に思考が展開していることなど知る由もなく。

詩奈ちゃんは手馴れた様子で席の後ろにあった機器を操作していた。

すると、無駄に広いサーキットテーブルの真ん中にあつたスポットライトに光が点つて。

もれなくワイドスクリーンに映し出されたのは、演習場を撮っているらしい映像、だった……。

(第23話につづく)

23、カチユと私のホツチキス一人芝居

ワイドスクリーンに映し出されたのは、演習場を撮っているらしい映像だった。

そこに広がるのは、静かでのどかな山の広場の光景。

その中心に、とにかく目立つ、威容たっぷりなものがある。

「これが、此度見つけた虹泉じゃ。だが、今のところ魔物が現れる気配はない。

みだりに破壊しようとするところが何かの罠に繋がる可能性を考えると、手出しができないのが現状じゃな」

「おつきいじゃあ……」

事務的に出勤のかからない理由を述べる詩奈ちゃんに対し、どこか感心するような声をあげたのは美音先輩だった。

それは、目の前に映し出されるものを端的に現す言葉。

確かにそれは、私が今まで見た中でも段ちで大きかった。

まるで祭壇……ステージとでも表現すべきだろうか。

見た目は、屋根のない四阿、といった感じ。

広さは土俵ほどあるかどうかで、土俵のあるべき場所には七色に輝く水が張られている。

そこに行くまでの備え付けの階段も、四本の柱も、白亜と呼ぶに

ふさわしい光を放っていて。

芸術品めいた建造物。

だけど不思議と自然に溶け込んでいる。

その場所に何度も訪れていなかったら、最初からそこにあったものだと勘違いしてもおかしくなさそうな、そんな印象を受けるくらいには。

詩奈ちゃんは、何があるか分からないから壊さないって言うだけだ。

きつと恐れ多さみたいなものもあったんだろう。

「べる……こうせい……にゅむ」

「えっ？」

なんて、考えていた時だった。

突然胸元から聞こえてくる、カチユの寝言。

驚いて様子を見ると、更に驚く羽目になってしまった。

寝言じゃない。

焦点が合ってるかどうかは定かじゃなかったけど、確かにカチユは起きていた。

起きていて……スクリーンの向こうに映るものを見ているような気がした。

まるで、その虹泉のことを知っているみたいに。

「どうかしたの、潤？ 何か気付いたことでも？」
「……っ」

カチユの発した言葉には、一体どんな意味があるのか。それについて何とか答えを出そうと、考え込もうとして。訝しさと期待のこもった声をかけてきたのは真希先輩だった。

そこでようやく、我に返る私。

カチユの発したその言葉は、私以外には聞こえない。

カチユの可愛らしい姿は、みんなには別のものに見えている。

それはついつい失念しがちのことで。

私は誤魔化すように苦笑を浮かべ、言葉を返した。

「あ、ええと。気付いたことというか、今まで見てきた虹泉とは随分違うなって」

それは見れば分かる、あまり誤魔化しにもなっていない、そんな言葉。
葉。

だけど真希先輩は、その言葉を待っていたとばかりに、頷いて。

「そう。これは今までのものとは違うわ。少なくとも今回は破壊することなく、

この虹泉が何者によって創られたのかを、調べることができたんだから」

低く、しかし会議室にもれなく届くように、そう言った。

当然、ざわめきだす会議室。

それが収拾つかなくなるくらい大きくなるうとしたその時。

真希先輩よりも一層意識した低い声で喧騒を止めたのは命ちゃんだった。

「それで、今回の虹泉の主が、誰なのか分かったのですか？」

その声は、聞き慣れた人じゃなきゃ分からないくらい、僅かに震えている。

それはきつと、答え如何で相棒の棗ちゃん濡れ衣が晴れるか、あるいは真逆の結果になるか。

複雑な気持ちで思っているからなんだろうけど……。

(第24話につづく)

24、命ちゃんと私の安堵の後の焦燥感

命ちゃんのその言葉は、聞き慣れた人じゃなきゃ分からないくらい、僅かに震えていた。

それはきつと、答え如何で相棒の棗ちゃんの濡れ衣が晴れるかもしれないと、

複雑な気持ちで思っているからなんだろうけど。

「それはわたしが説明しよう。

まず、私たち科学班は、この虹泉から洩れ出る異世の採取に成功した。

そして、この紅葉台に暮らすすべての【生徒】たちのデータを照合してみたのじゃ」

異世は、私たち【生徒】が必ず持つものだ。

その大きさ、強さによって曲法の威力も変わってくるし、

魔物と相対する時は、天然の盾として重宝していた。

意識してその範囲を広げること、その人にある程度都合のいい世界を作り出すこともできる。

事実、本校にはいつでも戦いに赴けるように、常にそれが広がっているのは前にも述べた通りだが。それは、眠ったまま起きない棗ちゃんのいる部屋も同じで。

命ちゃんだけでなくキクちゃんや美音先輩までもが息をのむ中。

私は、そう言う詩奈ちゃん言葉に首をかしげていた。

今までの虹泉は、自分の身を守るといった意思めいたものを持っていた。

調べられて創造主が分かっってしまったえば、その生徒は卒業させられて虹泉も消えてしまうわけだから……必死に抵抗するはずなのだ。それこそ、大量に魔物を生み出してでも。

それが、真希先輩や詩奈ちゃんの言い分を判断するに、特に抵抗する素振りもなかったんだろう。

抵抗していたのならば、とっくに出動命令が下されていたはずなのだから。

そのことが、不思議でならない。

わざわざあんな目立つところにいて、魔物を生み出す気配もない。随分変わった虹泉だなあと、改めて思う私がそこにいて。

「……結果は、該当者なし、じゃった。世界各地に散らばる、未だ見つかっていない【生徒】たちの可能性もゼロではないが、虹泉の創造主は、それほど虹泉本体から離れられないのは実証済みじゃ」

だからこそ、私たちはこの紅葉台学園へと集められた。

紅葉台学園ができてから、その他の場所で魔物が、虹泉が出現したことがないのは事実であって。

今、紅葉台学園に通う【生徒】たちに、該当者はいない。

それに深く深く……複雑そうなため息をついたのは、やはり命ち

やんだった。

棗ちゃんの疑惑が晴れたという安堵の一方で、それでも誰だか分からないという不安が、そこから感じられる。

「【生徒】の中にはいない……となると、誰がこの虹泉さんのぬしになるのじゃ？」

そして、当然気になるのはそのこと。

美音先輩のもっともな言葉に、まず頷いたのは真希先輩だった。

「少なくとも、現段階でこの紅葉台の町にいることは間違いないと思うわ。」

町の外から来た誰かかもしれないし、付属の誰かかもしれない。そんなわけで、念のために由宇に付属の監視をお願いしてるんだけどね」

だから由宇ちゃんがもう既にこの場にいなかったのかと、ちょっと納得する私。

納得半分、美音先輩がそわそわしだしているのが、揺れる尻尾のおかげでよく分かる。

いくら由宇ちゃんの能力的に、あまり周りへと影響を与えないとはいえ。

付属には私たちが嫌悪の存在として見ている男の子ばかりなのだ。

いつもの任務とは違い、より近づかなければいけないから大変さは増すだろう。

ばれるようなことがあったら、なんて考えるとガクブルものだ。

それでも吟也がそばにいてくれるのならば。
由宇ちゃんも安心だろうな、なんて考えちゃっつ時点で、
どれだけ私は吟也にはまってるのだろうかと思わずにはいられな
かったけれど。

ズキッ。

(……っ)

その瞬間、全身……胸も頭も構わず激しい痛みが私を襲ったよう
な気がした。

思わず、悲鳴を上げそうになるくらい痛かった。
それはすぐに収まったから、よかつたんだけど。

そんな私に残されたのは、気持ち悪くなるくらいの恐怖だった。

私は、そんな恐怖から、必死に目を逸らし見ないようにしている。

思い出し、考えをまとめないようにしている。

それは、初めての感情。

叫びたいのを、無理して我慢して、俯く私。

そんな私を、じっと見つめている人がいたことなど、気付くこと
もなく……。

(第25話につづく)

25、詩奈ちゃんと私のゆきちがいのめんち

「これは私の持論なんじゃが……」

それから、美音先輩の問いに答えたのは詩奈ちゃんだった。再び何やら操作して、スクリーンに別の資料を映し出す。

それは、絵本。子供向けの、やわらかく読みやすい文字たち。それより先に目に飛び込んできたのは。迫力のある毛筆で書かれたらしい挿絵だった。

「今回の件は、かつて紅葉台の地に人に紛れて棲息していたといわれる【妖の人】の仕業ではないかと、睨んでおる」

角や牙があつて。全身は真っ赤。
お決まりの虎地のパンツに金棒。
誰が見ても赤鬼だと、答えられそうなそれ。

唯一、一般的なイメージと違うように思えるのは、その髪だろうか。
血のように赤いざんばらの長髪は、テンプレなパンチパーマの鬼
というよりも、

なまはげに近いもののようにも見える。

そう言う詩奈ちゃんは真剣極まりない感じだった。
そんな彼女を傷つけない程度には、その場に弛緩した空気が広が

る。

いきなり荒唐無稽な、紅葉台の町に伝わるといふ御伽噺の話題になつたのだ。

なんだからしくて微笑ましくて。

そういう可愛いのに弱い私は、多分顔が緩んでいただろう。

でも、どうやらそれがまずかつたらしい。

見た目より老成している雰囲気のある詩奈ちゃんは、周りの空気を敏感に読み取つたらしい。

不可抗力でによして私を見上げ、泣きそうになっている。それはいけない。私は全力で言い訳するみたいに、言葉を返した。

「でも、この格好じゃあ人に紛れるのは無理だと思つけど……」

詩奈ちゃんの持論を戯言だと断じるわけじゃなく。

その考えを許容して上での、考えなくてはならない矛盾点。

詩奈ちゃんの言葉をしっかり受け止めて答えたが故に、

それはかえって威圧的なものになつてしまったよう。

「これは妖の人の本性じゃつ。普段は人に化けて生活しとるから人間は気付かないのじゃつ」

ついさっきまでの静止している感覚はどこへやら。

ムキになつてそう訴えてくる詩奈ちゃん。

妖の人が虹泉の創造主であること。

そう考えるに至つた理由を聞いたかっただけなのに、どうしてこうなるんだらうと思わずにはいられない。

そのまま睨み合うような形になってしまっ……
といっても私のほうはおろおろしていただけだったけど。

「まあまあ。そんな頭ごなしに否定しなくてもいいじゃない」
「否定はしてません」

してない、そんなのしてないって！

フォローに入ってくれたのだろうが、真希先輩の言葉は火に油だった。

自分でもびっくりするくらい低い声が出て。

こっちの方が泣きたい気分になっていると。

そもそもそんな表裏が180度違う私のことをよく知っている真希先輩は、

からかってごめんって感じで私の肩を叩き、今度という今度はフオローの言葉を口にしてくれた。

「いきなりで面食らったかもしれないけど、ちゃんとした彼女の研究に基づいたものなのよ。」

『そもそも【生徒】は如何にして生まれたか』っていうね」

再びおお、とどよめく会議室。

【生徒】になることは、ほとんど女性限定の病気みたいなものなんだって認識していたところがあって、その原因は何かだなんて、考えたことがなかったのは事実だ。

それが、真希先輩の口ぶりでは、詩奈ちゃんが何かしらの答えを出した、ということなのだろう。

素直にすごいと思った。

尊敬の眼差しで詩奈ちゃんを見つめていると、今度は引かれてしまっ

ぷいっと視線を逸らす仕草が、キクちゃんのつれない感じとかぶって。

ショックな心より、そんな仕草も可愛いなあって地が出てしまう私がそこにおいて……。

(第26話につづく)

26、詩奈ちゃんと私の知る紅葉台のおとぎばなし

不可抗力でによいよを続けていると。

何だか痺れを切らしたって表現が似合いそうな様子で、詩奈ちゃんも口を開いた。

「妖の人は、俗に妖怪などと呼ばれる一族で、はるか昔からこの地に棲まい、人に混じり栄華を誇っていたそうじゃ」

そう詩奈ちゃんが言うように、この紅葉台の町には、

【妖の人】に関しての多くの伝承が残っている。

図書館にある地元の歴史を紐解けば、比較的すぐに見つけることができるだろう。

ただし、その伝承……御伽噺の真偽はまったくもって定かではない、

という部分は空気を読んでももちろん口にはしなかつたけれど。

「そんな一族の一つに、赤鬼の一族がある。その伝承を記したのがこの本じゃな」

スクリーンのおどろおどろしい鬼を指差し、のってきたのかなんだか誇らしげな詩奈ちゃん。

他のみんなはどうだか分からないけど、紅葉台が地元である私は、その御伽噺を、よく憶えていた。

それは、『わらう赤おに』というタイトルがついている。
今思えば、わらうという単語にどんな感じをあてるのか興味に尽きないところだけだ。

それは、ぶつちやけて言ってしまえば、似たようなタイトルで全国区に広まっている、
有名な御伽噺のオマージュというか二番煎じというか、
明らかに参考にしてるって感じのお話だ。

人に混じって、その正体を明かさなままにのんびりと過ごしていた赤鬼。

特に悪さをするでもなく、一見すると仲良く人間と暮らしていたように見えたが。

そこに、悪い青鬼がやってきて赤鬼の正体をばらしてしまう。
鬼であると知られた赤鬼は、初めは秘密をばらした青鬼を怒ることもなく、

人間たちに対しても危害を加える意思がないことを訴えた。

そして、少なからず仲のいい人間がいた赤鬼は、
これ以上迷惑をかけるまいと青鬼とともに自らの故郷を去ろうとしたのだが。

青鬼は、そんな赤鬼が気に入らなかった。

人間に媚を売ろうとする赤鬼に、鬼失格だと激昂し、何も知らな

い赤鬼を罾に仕掛けて殺そうとする。

落とし穴の深くにある剣山。

しかし、運のいい赤鬼は命からがらそれから免れて。

青鬼を捜し求めたどり着いたのは、人と過ごしたあの故郷。

だが、故郷は赤鬼の知る面影がないくらいひどい有様になっていた。

仲のよかった人間も。同族だった青鬼も。

お互いが憎みあうように、無惨な死を晒していたのだ。

そこに、仇とばかりに襲い掛かってくる生き残った人間たち。

そこで初めて、赤鬼は気付いたのだ。

その敵を見る、死に物狂いの目。

向けられているのは、自分なのだ。

自分は何もしていないのに、誰もが自分を殺そうとする。

その時生まれたのは、赤鬼にとって生涯初めての感情。

赤鬼は、何かを諦めるように、笑みを一つこぼして。

その感情と共に溢れ出た鬼の力が、故郷一帯を血のような赤の滲んだ、闇色に染められてゆく。

それは、赤鬼の呪い。

それを身に受けたものたちは、三日三晩苦しんだ。

そして、命こそ奪われなかったものの……呪いを受けたものたちは、

他の人間たちに拒絶されるようになった。

避けられ、嫌われ、逃げられるようになってしまった。

人と人は触れ合えなければ生きていけない。

それを証明し、見届けるように。

赤鬼は、目の届かない場所からずっと笑って眺めていたという…。

「私はこの赤鬼の呪いとやらに、【生徒】の身に秘める力との類似性を見たのじゃ」

私が頭の中で、スクリーンに映し出される絵本の内容を思い出している。

ちようど詩奈ちゃんも、絵本の説明を終えたらしい。

そんな風話を纏めて、どうだと言わんばかりに私のことを見上げてくる。

ええと、つまり？ 【生徒】を赤鬼によって呪われてしまった人たちに見立ててるってことなんだよね？

となると、逆に考えて、私たちの力はその呪い、赤鬼さんによって植え付けられたって言いたいのかな。

考えてみると確かに。言いたいことは分かるような気がする。魔物を討つ代わりに、周りに拒絶される私たち。

その力の出所がそもそも分からないのだから、詩菜ちゃんの言い分を否定することは決してできない。

妖の人からすれば、さながら私たちは魔物たちと無益な争いを続ける、

復讐の対象なのかもしれない。

まあ、あくまでもこの世界に、魔物だけでも手一杯だというのに妖の人なるものが本当に存在している、その前提においてだが。

「……妖の人が今紅葉台に来てるってことなんでしょう？ その居場所とか特徴とかは？」

いない証拠だってないんだから。探してみるのにはありだと思った。何しろ魔物が出てこない限り、放課後とか休日とか基本的に暇なわけ。

どうせ明日の付属を迎えるための会だって参加するなって言われるのは分かってたから、

何かできることがあれば、なんて思っていたんだけど。

「居場所が掴めておいたらこんなところで会議などしておらん。特徴はの、その名の通り赤い髪じゃ。なんでも、その髪だけは変装しても変えることはできないらしい」

なるほど。それなら何とか探せるかもしれない。

曲法の影響で身体的特徴……髪の色が変容している子は結構いる

から、赤い髪なんてザラだけど。

一般生徒ならば染めでもしない限りほとんどいないはず。
案外簡単に見つかっちゃうかもしれない。

その時私は、そんな風に楽天的に考えていた。

そして、見つけることができれば、濡れ衣を着せられて疎まれて
いる私たちの環境も、

きっと大きく変わるんじゃないか……なんて思っていたんだ……。

(第27話につづく)

27、本校のみんなと私が夢見ている歓迎会

紅葉台学園の敷地内に虹泉が出たということに、

これから忙しくなりそうかも、なんて思っていた私。

ただ、その創造主は【生徒】たちの中にいない、というのは大きかった

。疑いが晴れたとはいえ未だ眠りから醒めない棗ちゃんのこととか、

わざと目立つところにいる虹泉のことも気になるところだけど。

今のところ、妖の人を捜す、と言うこと以外にできることはない。そんなわけで、いつの間にもやら会議の話題は、明日行われる新生の歓迎会へとシフトしていた。

歓迎会とは、文字通り新しい本校や付属の新生を、歓迎する会だ。

今年は本校へ入学してくる子はいなかったから、対象は付属の生徒のみになる。

やることは単純。

本校の校舎の最上階にある、生徒会室に新生を招き、

たくさんのごちそうとともに出会いを祝おう、というものだ。

だが、お気づきだろうけど、この歓迎会には大きな問題がある。

私たち【生徒】の本拠地である本校には、私たちの異世が広がっている。

一見するとただの校舎だけど、【生徒】でない人がそこに乗り込むというのは、

いつ酸素がなくなるか分からない海底を歩くようなものなのだ。

つまりは、曲法による拒絶が、呼吸をも奪ってしまうということ
で。

ただ、何ごとにも例外はつきもので。

それを強靱な身体と精神で耐えられる人が、私の知る限りでは一人だけいた。

歴代の生徒達でもごくごく少数である、男性の【生徒】だったト
ーイ先生。

歓迎会とは、そんなトーイ先生の案によって生まれたものだった。
自分のような、荒波をもともしない強い男が現れるように。

そんな理念の元毎年開催されている歓迎会は、実の所参加人数は
付属の生徒の約三分の二を占める。参加する勇気があれば、新入
生でなくとも参加が許されるという、

既に新入生歓迎会もなにもないが。

こそつて参加しようとする一番の理由は、基本的に付属の新入生
が、

本校や生徒の実情を知らないからこそだと言える。

なんでも、制限時間内に生徒会室に辿り着ければ、無条件で【生
徒】になれるらしい。

そりゃ、生徒会室までたどり着ければ【生徒】の資格十分なわけ
だが。

ほとんどの参加者が、その命すら奪われかねない危険を事前に知らされていないのだと言う。

実際に会えば嫌悪感が先立つとはいえ、例えばテレビ画面の向こうの【生徒】たちは、

アイドルのごとき扱いをされているのだ。

実情を知らない付属の新生たちが、美女美少女たちとの日々を、苦楽を共にしてやるぞ！

といった実に男らしい理由でひしめいているらしい。

確かにニュースで見た、【生徒】のみんなの頑張っている姿にぐっとくるものがあることは大いに認めるわけだけでも。

そう言うのって詐欺じゃないのかなあって、思わずにはいられない。

当然のように私は、それを聞いて本校に行くといつてきかなかつた吟也のことを思い浮かべちゃったりなんかして、いろんな意味で不安に駆られていたけれど……。

(第28話につづく)

28、キクちゃんたちと私の目の前に広がるやいのやいの

「で、いつもの通り委員長副委員長、副会長のみんなは歓迎会の時は校舎内から出ていてちょうだいね。まあ、一人か二人くらいはいいかもしれないけど、少しでもあるかもしれない可能性の芽が潰されちゃっても困るしね」

にべもなくそんな事を言い放つ真希先輩に、悲喜交々な反応をする副委員長以上ばかりの面子。

能力に目覚めてから、男性恐怖症になった子や、嫌いになってしまった子たちには、

面倒ごとをせずにすんだという安堵感が。

それでも女として出会いを求めたい派や、私のように目当ての子がいる人……

はいるかどうか分からないけど、ぶーぶー不満をもらす。

「いつつも真希ばかり、ずるいじゃあ」

実質トップである真希先輩と対等で、出会いを求めたい派なのだらう美音先輩のぼやき。

それに真希先輩は、やれやれとばかりに肩をすくめて。

「何言ってるの。あんななんか歓迎会に参加したら死人が出るわよ。」

どうしても出たかったら、あんたの優秀な相方みたいに、

その無駄に垂れ流してる異世を抑える努力をしなさい」

わがまま言ったって駄目なんだからね、なんて釘を刺すみたいに同じく出会いを求めたい派だったのだろう、命ちゃんや私のほうを見て、

本気で脅しにかかる真希先輩。

「そんなのやれって言われても無理にやあ」

それにいじけて尻尾を丸め、縮こまる美音先輩。

確かに、今名前を挙げた面子は、有り余る力をどうにも抑えられない傾向にあった。

それが、真希先輩やキクちゃんにはある程度できるのだ。

力が強いということはすなわち、【生徒】の資格ないものたちをより拒絶し、

圧迫するということだ。

さすがに死人と言うのは大げさだとは思っけど……自分がいることで吟也が苦しむのは、

確かに見たくなかった。

と言うより、一言もそんな事を聞いてないのに、

既に吟也が歓迎会に参加するんだって認識しちゃってる時点で前提がおかしかったりするわけなんだけど。

それでも私は、もしものことを考えて素直に頷いた。

どうせ、最初から出られないんだって諦めていた部分もあったんだけど。

対する命ちゃんは、何だか珍しく不服そうだった。

「男装すれば……ばれないんじゃないか」

「あのねえ。そんなわけ」

「ないって言い切れるか？ 試したことないだろう」

それは、さっきのいない証明ができないのに無碍に妖の人をいなしとは言い切れないって言うのと同じ理論だった。

よく考えなくても、ただの屁理屈のような気もしなくもないけれど。

「駄目ったら駄目。あんまりわがまま言つと、寮のベッドに縛り付けるわよ」

「それは困る」

実際にこれで一揉めあったのなら、会議室がなくなる勢いなんだろうけど。

参加はできなくとも見学はできると言うことを思い出したのだから。

あつさり承諾して折れる命ちゃんを、真希先輩は、何かたくらんでるんじゃないでしょうね、

とばかりに訝しがっていたけれど。

「そうね。どうしても参加したいっていうなら、喜久と詩奈は許
可できるわよね？」

「わたしは遠慮しておこう。あの虹泉を監視し続けなくてはならぬゆえ」

「私も遠慮しておきます。それより棗を看てあげないと」

どこか期待のこもった真希先輩の問いかけ。

しかし、帰ってきた二人の返事は、そっけなかった。

まあ、キクちゃんはどうちかというとなりの男子が苦手っぽいしね。

嫌なのを、無理にというわけにはいかないんだらう。

キクちゃんには、目下一番の心配事があるわけだし。

「む。待て。これ以上私の役目を奪わせはせんぞ」

「別に奪ったつもりはありません。確かに二人で看られるというのは、邪魔だと思われるかもしれませんが」

「邪魔者はそっちでいいんだよな？」

「冗談」

うーむ。そんなやり取りを見るに、命ちゃんって一見波風立たないクールな感じだけど、

意外と熱しやすいのかもしれない。

まあ、敢えて挑発的な言葉をぶつけてくるキクちゃんにも原因の一端はあるんだらうけど。

「ちょっとちょっと、出ないからって仕事がないとか思っていないでしょうねえ。

みんな得手伝ってもらうからね、生徒会室の飾りつけとか、食べ物
の準備とか」

「どうせ無駄になるに決まっています」

「ああ？ 何か言ったかしらあ？」

「べ、べつに」

一触即発の気配。真希先輩の凄みの効いたメンチで吹き飛んでいく。
それでも、強気な言葉を返せるキクちゃんは、ある意味凄いだろっけど。

結局私たちは、突然空いた暇を持て余すがごとく、歓迎会の準備を手伝ったのだった。

言いだしっぺの真希先輩が一番やる気がなくて。

歓迎される側が怒り出すんじゃないのかなってくらいお粗末なものになってしまったのは、
なんとも申し訳ない気持ちになったけれど……。

(第29話につづく)

29、美音先輩と私の泣きたいふつうのこと

そんなこんなで、その日の放課後。

歓迎会の料理は、私が中心になって準備することになっていたから。

私は外出許可を取って、外出用の熱すぎるフードをかぶって、町に出ようと考えていた。

たとえ付属の人が来られなくても、料理の方は新学期のお祝いとして私たち自身がいただくことになっている。

吟也って何が好きなのかなあって、子供の頃と変わってない（ちなみに、ハンバーグとシーチキン）のかなあ、なんて夢想しつつ階段を降ってゆく。

「にやあぁーっ!」

と。そんな、悲鳴のような、葛藤の果ての感情の吐露のような叫び声が聞こえてきたのは。

本校の二階、付属へ続く渡り廊下が目に入った時だった。

付属の生徒のことを考えれば、封鎖しなくてはいけないはずの渡り廊下。

しかし、それに反対したのはトイ先生だった。

道を塞いでしまったら、僕はどこを通ればいいんだ、なんて優しいお怒りつきで。

そんな、私たちの心情を考えて、敢えて塞がずにいる渡り廊下。その半ばで、膝について尻尾を振り回している美音先輩の姿がある。

何事かと近付いてみれば、なんと美音先輩が泣いているではないか。

「……先輩？　どうかしたんですか？」

胸の奥にある何かが、かっと熱く燃え盛る感覚。考えうるは、付属の生徒に心無い言葉をぶつけられたとか、そういったよろしくないものばかり。

そんな事で泣くタイプにも思えなかったけど。

美音先輩は詩奈ちゃんの言うところの呪いが身体的特徴を持って現れていたから。

明るく振舞っているように見えても、猫耳や尻尾の自分に、密かに傷ついていたのかもしれない。

そんな風に思い、慌てて駆け寄って抱き起こすと。

「あ、潤ちゃん。お買い物？　いつもご苦労さまですよ〜」

涙目のまま、笑顔すら浮かべてそんな事を言う。

「……一体何があつたんですか？ まさか付属の生徒にっ」

既に煮え立つ怒りの抑えられない私。

しかし、そんな私に対して、落ち着け、とばかりに肩を叩く美音先輩。

そして、しなやかな動きですつくと立ち上がると、何かを自慢するみたいに胸を逸らして見せて。

「そう、そのまさかにゃ！ ついさっきまでここに付属の生徒が来てなのになつ。」

でもって、お話して自己紹介して、歓迎会で会おうって約束したのにな！」

興奮して、そう撒くしたてる美音先輩。

とりあえずは、予想していたような悪いことじゃなかったのはよかったけど。

正直、そう言う美音先輩の言葉が信じられなかった。

今いる渡り廊下は、既に本校の領域なのだ。

加えて、美音先輩が日向ぼっこに使っているお気に入りの場所でもある。

下手すれば歓迎会の時以上に、常人には厳しい環境のはずなのに。

「凄いなあ。あんな普通の会話したの初めてになあ。」

いつもは、化け猫とかコスプレとか言っていていじめられるのに……凄いなあ

すごいを二回繰り返して。またスイッチが入ってしまったのか、泣き出してしまう美音先輩。

「……………美音先輩。泣かないでください」

どうしたらいいか、分からないじゃないですか。

正直、先輩が泣くなんて場面を見たのはさっきのを入れて生涯二回目なわけで。

とりあえずぎゅっとして、ただおろおろとろたえることしかできない私がいたけれど。

美音先輩が泣く理由は、分からないでもなかった。

何故ならこの本校は。

そんな普通で当たり前前禁のことが禁止されてしまった子たちが集まる場所なのだから……………。

(第30話につづく)

30、美音先輩と私の好敵手同士な予感

「それにしても、そんな状態でよく会話が成り立ちましたね」

「ふにゃ……ぐすつ。それは、だって、向こうから話しかけてきてくれたから」

なんでも、声をかけてきた付属の生徒は。

大胆不敵にも自分は本校にお邪魔してもいいかと聞きにきたらしい。

この渡り廊下には道を塞ぐものが何も無いから、ここなら平気なのかもしれないと、

地図を見て思ったのだとか。

「それで、その、異世の境界にも全然気付いてなくて、ワタシがすぐ傍まで近付いても、

ちよつと驚いてたけど逃げる素振りはまったくなくて……」

あるいは、気付かないふりをして、美音先輩に気を遣い我慢をしていたのかもしれないけれど。

この子はもしかしたら、本校の【生徒】になれる才能があるのかもしれない。

そう思って、とりあえずは歓迎会に出席することを勧めたのだと言っ。

夢見る乙女のように語る美音先輩。

これは完全に参ってしまっているなど、そう思った。

それは刷り込みのようなものだ。
私たちにとつてみれば、嫌悪せず隣にいてくれる人を見つけるこ
とでさえ奇跡なのだから。

「それで……自己紹介したんですよね？　なんて言うんですか、
その人は？」

本当は、一番聞きたいのはその事。
でもって、それを聞く瞬間まで、私は美音先輩の出会いに対する
祝福の気持ちしかなかったわけだけど。

「クオンジ・ギンヤってゆってたにやあ。言葉じょうずだったけ
ど、日本の人かにはやあ？」
ワタシ、あんな綺麗な男の子初めて見たにや。銀色の髪も」

言われたとたん、両手の力が抜けた。
地面に投げ出されるような形になった美音先輩は、慌てつつも何
とか体勢を整えていたけれど。

「……吟也？　吟也ですってえ！　ちょっと、美音先輩っ、どう
して引き止めておいてくれないんですかあーっ！」

気付けば私は、そんな美音先輩をがくがく揺さぶり、表も裏もな
い素の自分で叫んでいて。

「にやはつ、お、落ち着くにゃあ！　って、潤ちゃんあの子と知り合いにゃか？」

「はい。幼馴染みです。……後追加で、生まれてこの方の片思いでもあります。」

というより、美音先輩にはその話、したこと、ありましたよねえっ！」

「にやつ、し、尻尾は駄目にゃあっ、じゃなくてっ、話に聞いてたのと全然イメージが違ったんにゃもの。てつきり、もっとやんちゃさんだとばかり」

美音先輩にとってはとばっちりの、理不尽な怒りだというのは分かっている。

でも、上がりきったテンションは止められそうもなかった。

思えば、この時からすでに、好きのライバル同士として宣戦布告していたのかもしれない。

「……ちなみに、美音先輩の第一印象は？」

「うーん。星の王子様、かにゃあ？」

素面で何の臆面のなく言っただけのあたり、たいしたものだと言わざるをえないが。

人によって違う印象なのは、結構新鮮だったりする。

ちなみに、私が再会したときに思った印象は、言うなれば若いマフィアのボスだ。

だけど、マフィアになる気なんて全くなくて、臆病でいつも逃げ回ってて。

気付けばこの世の正義を貫いているような、そんな感じ。

家もアンティークな感じで凄く大きいし、

両親が何の仕事をしていたのかはつきりと分からなかったという、付加情報にも基づいていたけれど。

そこまで考えて、そんな益体もないことを考えている暇などないことを思い出す。

「それで、美音先輩？ 吟也はまだ去ったばかりなんですね」

「う、うん。まだそんな遠くには行っていないと思うけど……」

再び我に返ったかのような私の問いかけに、

付属へと続く渡り廊下を見やりながら言葉を返す美音先輩。

このまままっすぐ駆け出していたのならば。きっとすぐに会えるのに。

だけど、私はそんなお互いを隔てる壁を笑い飛ばした。

「分かりました。吟也は実家通いですから、入り口で待つことにします」

それはストーカーじゃにやいかなあという美音先輩の捨て台詞を華麗に流し、

私は踵を返し走り出す。

その時ばかりは、意気揚々、といった感じだったけれど。

タイミングが悪かったのかなんなのか、その日は会えなかったことをここに記しておく。

買い物ついでに家まで行けばよかったんだけどさすがにそれはねえ？ 勇気ないし……。

(第31話につづく)

3 1、篠月姉妹と私のうらやまけしからんウワサ（前書き）

だんだん更新ペースが落ちていく。

その代わりに、文章量が増えていけばいいのですけど……

31、篠月姉妹と私のつらやまけしからんウワサ

そして、あれよあれよと言う間に日が変わって、歓迎会の日。

参加するわけじゃないからそれほどテンションが上がるわけでもなかったけど。

ある意味普通をこれでもかと満喫できる、平時の授業を滞りなく終わらせた後、

参加……あるいは見学の意思のある子たちが、とりあえず生徒会室に集まっていた。

料理を作ること、運搬でお役御免の私は、十人いる選ばれしものというか、

ある意味罰ゲーム扱いされている、いいのか悪いのか良く分からない面子の、

歓迎会についてのやり取りを眺めていた。

どうやら十人なのは、一人一階で割り当てるかららしい。

もちろんみんな顔見知り以上の子たちだけだ。

なんと八階と九階は美化委員会の委員長と副委員長だった。

しのつき・まゆ
篠月梨夏ちゃんと篠月真雪ちゃん。

仲のいい双子姉妹である。

副委員長以上は出ないと言っていたのにとんだ騙りだよって文句を言わずにはいられなくて。

思わず私はそんな二人に突っかかってゆく。

「……梨夏ちゃんと真雪ちゃんはいいな。二人で参加できて」「あによ潤姉。それって嫌味？ 誰が好き好んで野郎どもが苦しんでるのを見たがるってのよ」

「あはは。私たちは二人そろつてもまだ半人前ですからね。同じ委員長クラスとしては、それじゃあ駄目なんでしょうけど」

ほぼ同時……いや、おっとりなお姉ちゃんの梨夏ちゃんがワントンポ遅れて、

私の思うところとは反した言葉を返してくる。

曲法の影響なのか、百パーセント天然ものなのか。

燃えるようなオレンジの髪の毛の二人は、そのポリウームのある髪を下ろせばほくろの位置すら一緒に、なかなか見分けがつかない。

故に梨夏ちゃんは髪の毛を二つにくくり、真雪ちゃんは一つにくることで違いを示してくれている。

まあ、私から見ればその名前と逆の雰囲気とか性格を持つ彼女たちの差異なんて、

それこそ火を見るより明らかなんだけど。

そんな彼女たちは、学年で言えば一個下。

だけど、小学校高学年の頃に曲法の力に目覚めたとする彼女たちは、【生徒】としては先輩になる。

それなのに姉さん扱いされるのはいいのやら悪いのやら。

いや、こんな性格に裏表のある自分によくしてくれている子たちにそう言われるのは、

決して悪い気分じゃないけどね。

「それは逆。二人は力を抑えるのがうまいからここにいるんだし……それに、もしかしたら今回はあなたたちのところまでやってくる人、いるかもしれないよ」

やってくるかもしれない人。

この展開で私の脳裏に浮かんだのは吟也であることは、もはや承知の事実なのだろうか。

ほとんど反射的のそう答えると、二人は何やら思い出したみたい
に顔を見合わせて。

「やっぱり本当だったんですか？ あの、その、潤姉さんの彼氏
さんが今回の歓迎会に参加するっていうのは」

「あれでしょ。逆光源氏計画ってやつ。小さい頃から自分の曲法
に慣れさせて、毒を持って毒を制す、みたいなの？」

今度は真雪ちゃんが梨夏ちゃんの台詞をかぶせ気味に、そんな事
を言ってくる始末。

「な……一体誰がそんな」

妄想するのも憚られるうらやまけしからんことをっ！

表面的にはどうであれ、現実にはありえないだろうことに内心で
激しく悶えていると、

そこは双子。ここぞという場面でぴたりと息があった。

「真希先輩からだよ」です」

その瞬間、私の目の色が変わったのが分かったんだろう。

びくりとなる二人を脇目に、そんな嬉しい……じゃなかった、はた迷惑なほらを吹聴して回っている当の本人を探し当てる。

というか探すまでもなく、真希先輩は会長席からにやつく笑顔で私のことをしてやったりとばかりに見返していた。

どこからともなく引つ張ってきたモニターを設えてある、本来ならば主のいないはずのデスクに頬杖なんぞついて、むしろこちらを手招きしている。

「……ただの幼馴染みだから。分かっているとは思っけど」

「は、はいっ」

上等だ。私はその誘いに乗るためにと、二人のそう言い残してデスクへと詰め寄るのだった……。

(第32話につづく)

32、真希先輩と私の予想ははたして

私は真希先輩の誘いに乗るためにと、篠月姉妹を残してデスクへと詰め寄る。

すると、もちつと言い方はないんですか、

万が一吟也の耳に届いちゃったりなんかしたらどう責任とってくれるんですか、

とか様々な文句が私の口から誤変換されてついて出るよりも早く、真希先輩は口を開いた。

「ほうら、潤ちゃん。そんな怖い顔しないで。これを見て御覧なさい」

なんだか気持ち悪いくらいのテンションの高さ。

私は、降って沸いた捌け口の無い怒りのようなものを持って余しつつも、

言われたままに真希先輩の指し示すモニターの画面を覗き込んだ。

「ぎ、ぎぎぎ吟也っ！」

そして、思わず生徒会室じゅうに響くくらいの大声をあげてしまった。

モニターが映し出すもの。

それは、トイ先生が顧問をしている【付属救援隊】なる部活の部室だろうか。

そこには、大勢の……おそらくは付属の男子だろう人達がひしめいているのが分かる。

だけど、それはほとんど私の目には入っていなかった。

問題というか今まさに私が声高に言いたいののは、

触れよとばかりにどアップの吟也の横顔がそこにあることだった。僅かに後方から撮っているのが、うなじまで映りこんで大変にグッドである。

「な、何これ……なんで」

「ああ。これね。生放送なの。」

でもって、映ってるのは歓迎会が始まるのを待ち遠しく思ってる子たちね。

そこで堂々と撮影してても気付かれないくらい小型のカメラで撮ってるのよ。

でも、さすが優秀なクルーは違うわねえ？ 今必要としている絵を、

しっかりとこっちに伝えてくれているわ」

動揺する私を余所に。

そう言う真希先輩の声色が、何か別のものを含んで変化したような気がした。

だけど正常な精神状態でない私には、それを言及する余裕などその時にはなくて。

「ふうん？ この子が噂の吟也くんなんだあ。潤ちゃんがぞっこんなのは分からもないよね。」

あれだほら、アイドル俳優って感じ？ 新任の気弱な先生役とかやってそうな」

だけどそれは。

続く、どこか熱ぼつたい物言いにかき消される。

「最初は言い趣味してるなあとは思ってたけど。」

これは確かに苦痛に涙を零す絵を是非とも見てみたいところね？」

「な、何言つて！ そんなひどいことっ」

見たいわけが無いじゃないと叫ぼうとして。

今度こそ私は、冷たく、それでいて意地悪な顔になった真希先輩の言葉に遮られる。

「もう十分もすれば始まるわよ。潤ちゃんあなた、ここでこうして見学してるだけでも、

今言った通りになるかもしれないってこと、分かってるんでしょ

？」

「で、でも……」

真希先輩の言う言葉は、純然たる事実だった。

表向きには、慢性的に不足している【生徒】を少しでも増やすためと言うのが理由だけだ。

本当はいつか私達【生徒】が真っ当に生きられるその架け橋として。

そんな一方的な理由で、毎年歓迎会は開催される。私にとってそれはもう四年目になるわけだけど。

私たちの前に現れたのは、私たちを救ってくれる英雄なんかじゃなく。

目を背けずにはいられない、見てはいけない、そんな光景だった。

たったの一人も、私たちを受け入れてくれる人は現れなかった。

悲しい現実。

だからこそ夢想してしまうんだ。

私といっても平気に見える吟也。

さらに、美音先輩とお話しても平気ならば、

私たちの前に立ちほだかる障害なんてものもしいんじゃないかって。

そんな奇跡みたいなことを。

「でももストもないのよ。あなたがここにいれば、もっと苦しめることになるんだから。」

たとえばどう転ぼうともね」

「……っ」

言われて、私は理解する。

吟也がその障害を乗り越えられるかどうかは問題じゃないのだ。本校に入ることを焚き付けた私がそこにいたら。

わがままで頑固な吟也はきつと無茶をするだろう。

辛くても苦しくても我慢しちゃうかもしれない。

だけど、思い出すのは、吟也の男の子としてのプライドを、

気付かないままに傷つけた幼い頃のこと。

「それでもやっぱり、見届けなきゃいけない責任が、私にはあると思うんです」

「……そう。頑固なんだから。どうなっても知らないわよ」

結局は折れない私に、しょうがないわね、とばかりに呆れ声を返す真希先輩。

事実、私たちはまだ、知らなかった。

これから目の前で起こるその光景が。

真希先輩とも、私の夢想とも大きくかけ離れていたことを……。

(第33話につづく)

33、由宇ちゃんと私の妄想パラダイス

それからきつきり十分後。各々が配置につき、歓迎会が始まった。号砲とともに、まるで年末の駅伝みたいなノリで、歓迎会の参加者たる付属の生徒のみなさんが、我らが校舎へと殺到する。

それは、惚れ惚れするほどにしなやかな走りを見せてくる吟也も一緒だ。

どこか走れることに慣れている感じ。

基本的に運動ができるイメージはなかったから、ちょっと驚きと
いっつか新鮮な感覚だった。

何より、すぐ隣にいるという臨場感がたまらない。

いつもならばこの生徒会室にある校舎棟の向かい合わせに建つ、
寮棟から窓越しに見学するところなんだけど。

【生徒会放送室】から拝借してきたモニターの方が見やすいとい
うことだ、

私は真希先輩とともに生徒会室に残っていた。

どちらにしろここに長居していると歓迎会に参加する子たちに影
響を与えかねないので、

期限つきではあったけれど。

「しっかし、これは……惚れたわね」

ふいに、ぼそつと……しかし確信めいた物言いの真希先輩の弦きが耳に入ってくる。

「な、何を今更っ」

そんな分かりきったことをと叫ぼうとして、少し言葉のニュアンスが違うことに気付いた。

「せ、先輩の嘘つきっ」

トイ先生のような渋めのダンディズムが好きだと言っていたのは嘘だったのかと。

そのまま胸倉を掴んで詰め寄ろうかという勢いの私をどつどつとなだめる真希先輩。

「違うわよ。私じゃないって。このカメラクルーの娘のことよ」「……娘？」

それじゃあもしかして、これを撮ってるのって由宇ちゃんなんだろうか。

今、付属にいる女の子って言ったら彼女くらいしか思いつかないし。

「そう、お察しの通り由宇よ。まあ、由宇本人にはこのカメラのことまだ言っていないから、

素で吟也クンのことばかり目で追ってるってことなんだけどね」

実に面白そうに、そんな事を言う真希先輩。

なんでも、由宇ちゃんには内緒で襟元のところにカメラをとっつけているらしい。

本人にも黙っているのはひどくなくなっと思ってたけど。

それより何より自分本位な私は、素で由宇ちゃんが吟也のことはかり目で追っていると言う点が気になってしまった。

自身の【生徒】としての力を抑え、男装してスパイのごとき任務についている由宇ちゃん。

そんな不安で一杯の由宇ちゃんの、たまたま隣の席に座っていたのが吟也で。

由宇ちゃんが女の子だなんて当然知らない吟也は、仲のいい男友達として接してくる。

いつしか二人は気のおけない関係になって。

そこに芽生える由宇ちゃんのほのかな恋心……………。

「ちよっと、潤ちゃんってば。顔怖いわよ。まあ、冗談じゃないかもしれないけど」

なんて妄想にふけっていると、はっと我に戻る、そんな真希先輩の言葉。

そして、それを如実に表すみたいに、そのタイミングでなんと吟也がこちらに……

正確には由宇ちゃんらしき人物の方へと顔を向けてくる。

それは、先ほどまでの余裕の笑みすら浮かべていた横顔とは全く違うもの。

何かを決意した時のような、真剣でかっこいい顔だった。

そのまま何か言っているようだったけど、音声が届かないのか何を言っているのか分からない。

その顔に惚けていた私は再びはっとなり、真希先輩に懇願する。

「先輩、何言ってるか分かりませんっ」

「……え、ええ。ちょっと待ってなさい」

同じように我に返った風の真希先輩は、モニターについてるポタンやら何やらを弄り始める。

するとすぐに、ノイズ音とともに向こうの声がこちらに届いてきた。

『なあ、若穂。男子トイレってどこにあるか知らないか？』

「……」

「……」

そして、最初に聞こえてきたのは。

あまりにあまりな吟也の真剣極まりない声。

二人して理解が追いつかずに固まっている。
しかし誰よりも早くその硬直を破ったのはモニターの向こうの由
宇ちゃんだった。

『え？ えっと、確か地下にあったはずだけど……』

『そつか。悪い、ちょっと行ってくる。やばそうなんだっ』

戸惑いながらも素直に答える由宇ちゃんをよそに。

吟也はさもないことを聞いたとばかりに無駄なさわやかさすら残
して一人上階へと向かう列を離れてしまう。

そして、その場には。

呆然として見送る由宇ちゃんと私たちが残されて……。

(第34話につづく)

34、カチユと私がリンクする感情

その場には。

呆然として見送る由宇ちゃんと私たちが残されて。

『ど、どごしよう。まさか、ついていくのも……』

深く深く悩んだ挙句、結局は諦めたのか上階へと足を向ける由宇ちゃん。

当然、由宇ちゃんが追いかけないのだから、それを見ている私たちも吟也の後を追いかけることはできないわけで。

目の前に広がるのは、毎度の……見ていてあまり趣味がいいとは言えない光景。

スタートこそ意気揚々と駆け出していた付属の生徒たちだったけれど。

一階上がるたびに、彼らにかかる負荷は増していく。

彼らの呼吸を奪い、不快感を増長させ、拒絶するものが。

もちろん、普段からそんな仕様になっているわけではない。

それでも、下階のほうは、付属の皆さんを歓迎するために、本校を覆う異世を抑えているくらいだ。

付属の生徒の中には、歓迎会が今年初体験じゃない先輩方もいて。

歓迎会なるものの本質を理解した上で参加している人もいるみたいだったけど。

その人たちですらもう顔は真っ青で、今にも倒れてしまいそうに見える。

二階でこれならば、今年も最上階まで来られる人はいないかもしれない。

なんだか、意味のない……彼らを傷つけるだけの仕打ちを。しかも趣味悪く高みの見物をしているように見えて。

その場にいる由宇ちゃんには悪いけど、早くもここから立ち去りたい、

そんな我が侷な気分に戻られた時。

「……潤ちゃんっ」

胸元でじたばたと暴れる、くすぐったい感覚。

それより何より、滅多に呼ばれることのない、カチユのそんな呼び声。

いつもの眠たげな様子は全然なくて。

どこか焦っている風にも聞こえて。

「……すみません真希先輩。歓迎会までには戻ります」

それは、今行なわれている歓迎会ではなく。

それが終わった後の、本校の面子だけのささやかなお食事会のこと

とで。

「え、あ、うん」

真希先輩は、それに生返事で頷いている。

まだ、吟也シヨックから抜け出せないでいるらしい。

私はそんな真希先輩に少し懐かしいような感覚に陥りつつも、軽く会釈をして、生徒会室を出ていく。

「カチユ、どうかした？」

私は、一応周りに人がいないことを確認しつつ、胸ポケットからカチユ専用の寝袋……

巾着を取り出し、口のところを緩めてそう問いかける。

すると、そこからシルクめいた髪がぶあさつと広がり、顔だけ出したカチユがこっちを見上げてきた。

その澄んだ青い瞳には、珍しく眠気の気配もなく。

「助けを呼んでるっす。こんなこと、今までなかったのに……」

相変わらずの、顔に似合わぬ下っ端言葉。

しかし、そこにはいつもののんびんだらりとした様子もなく、戸惑いが多分に含まれている。

「助け？ 一体誰が？」

まるでその声を聞いたみたいに、そわそわと落ち着きのないカチユ。

ならばせめて私は冷静にならなければと、できることをしようとそう問いかけた。

「カチユとおんなじ、つくもんなかまっす」

つくもん。それは、私が初めてカチユを具現させてしまった時に、カチユが自分の事を称した言葉だ。

カチユが言うには、カチユは魔物ではなく、つくもんと呼ばれる……簡潔に言ってしまうえば、

「愛着のあるものに宿った精霊とか妖怪とか、そういうファンタジーな存在らしい、

というのは眠い眠い言う中、なんとか聞き出した情報なわけだけど。」

「仲間？ カチユってば、お友達いたんだ」

「もちろんっすよ。ボスの元を集まった大切な仲間たちっす。

それが今、そのうちの一人の……助けを呼ぶ声が……はうふうっ、だめっす、やっぱり眠いい……」

ボス、そう言えば前にもそんな事を言っていたような気がする、

気になる言葉。

「ただどそれに言及するよりも早く、珍しくもきりっとしていた臉がふにやっとな落ちた。」

「涙すら浮かべてあくびをし、必死に眠気を払おうとしている。」

「助けを呼ぶ声が、聞こえたのね？」

「問う私に、がくがくと首を回しながらも頷くカチユ。」

「その様に、やっぱり何かの病気なんじゃないかと心配になってきたけど。」

「そんなカチユの言葉は、私の行動させるに、十分な意味を持っていただろう……。」

(第35話につづく)

35、クリップの娘と私の慌テンパリ

助けを呼ぶ声。

それはすなわち、今こうしてカチュの声が私に届いているのと同じ現象が起こってるってことなんだろう。

カチュが生きているお人形さんとして今ここにいるのは、私の【生徒】としての力によるものとらんでいる。

私の曲法は、【物質命題】と呼ばれるもので。

無機物に対して下した命令を、無機物自身が、私の考えうる範囲で叶え、

その身を変容させ、行動してくれるというものだ。

本来は、魔物たちと戦うための武器のリーチを変えたり、強度を変えたり、

はたまたいろんな属性を付加するというものだったんだけど。

吟也からもらった大切な宝物であるカチュは、お話できたらきつと楽しいんだろうな、っていう乙女な願いを受け入れてくれたのだと私は思っていて。

そんなカチュにお友達がいたというのもなんて言うか不思議な感覚ではあったけれど。

助けを請うているのだと言うなら、それを聞き入れない手はなかった。

私はすつと目を閉じ、意識を集中させる。
曲法の発動。

今の状況を考えれば、曲法の発動なんてとんでもないことだし、
まずはその子の居場所を聞くべきだったんだろうけど。

何だかんだ言って私もテンパっていたのかもしれない。

ぐん、と私の生み出した藍色の異世が、一気に広まっていくのが
分かって。

「落ち着きたまえ。我が妹弟子とその宿主よ。

助けを呼ぶ子のところには、我らが愛すべき先生が既に向かつて
いる。何も問題はないさ」

不意に頭の上から聞こえてきたのは、そんな角ばった………だけで
甘い女の子の声。

「にゅむむう。ん？ それなら安心っすけどー………なんでそんな
なところにいるっすか、

ディアこうせいんはっつ」

「それは………聞いてはならないのだよ」

「そうっすかー。たいへんっすねえ………」

「え？ ええっ？」

気のおけない、カチュともう一人の少女？ のやり取り。

疑問符を付けざるをえなかったのは。

一瞬だけ見えたような気がした、派手派手でキンキラキンな髪と
服装をした女の子が、

その小さすぎる手に、おざなりに作られた歓迎会用の看板を持たされたまま礫にされているように見えたからだ。

……いや、ごめん。自分でも何言ってるかよく分からなくなってきたよ。

一旦能力を解除して、もう一度目をこすってよくよく見てみれば、そこにはマジックでようこそ、本校へ！ と殴り書きされた看板しかない。

いやいや、よく見るとその看板を支えているのは、間違いなく使用用途を間違えているカラフルなクリップだった。

その時思い出したのは、カチユが『もの（ホッチキス）』に見えるというキクちゃんの言葉で。

まさか、あのクリップがさっきの女の子で、カチユのお友達なのだろうか。

どうやら、助けを求めていた子とは違うようだったけど……。

「ところでカチユの宿主……確か潤君と聞いたかな。

ここで一つ貴女に問いかけたいことがあるのだが」

「え、えと、ちょっと待って！」

その姿は見えないのに、どこからともなく聞こえてくるのは、ちよっぴり震えた、だけど渋かわいい声。

やはり、彼女たちとコミュニケーションを取るには私の能力が関係しているらしい。

だから慌てて能力を発動しようとしたんだけど。

「ちょっとちょっと、なんでこんなところで異世広げてるわけ！
今がどういふ状況か分かってるの！」

いきなりバターンと扉が開け放たれて。
クリップごと吹っ飛ぶ看板。

鬼のような形相で現れる真希先輩の姿。

それにより気付かされたのは、今は歓迎会の最中で。

私のような力の有り余った危険人物が能力発動なんてとんでもない、ということ……。……。

(第36話につづく)

36、棗ちゃんと私の夏までの心配事

鬼のような形相で現れる真希先輩の姿。

それにより気付かされたのは、今は歓迎会の最中で。

私のような力の有り余った危険人物が能力発動なんてとんでもない、ということだ。

階下まで吹き抜けて繋がっている螺旋階段の遥か下のほうから、阿鼻叫喚と言つにはまだ少し足りないかもしれないけれど、あまりよろしくない声が聞こえてくる。

それはどう見繕っても自分のせいだろう。
ぶるぶると、拳を握る真希先輩。

このままここにいるのは、ちょっとまずいどころじゃなくて。

「う、うめんなさいーっ！」

私はあわ食って力を抑え、落ちた看板を慌てて直しそこから退散していた。

「後でおぼえてなさいよーっ！」

「ま、待ちたまえ。何故わざわざもどっ……」

そんな真希先輩の怒り心頭の言葉に紛れて。

なんだか泣きそうな声が聞こえてきていたのにも、気付くことは

なく……。

しゃにむに走って走って。

はっと我に返った時には、いつの間にやら寮棟のほうまで逃げ込んでいた。

ここまでくれば一安心だろう。

鉄をも砕く真希先輩の拳ももちろん脅威ではあるが。

それによる異世の余波は、階下にいる付属の生徒たちにとって、阿鼻叫喚どころじゃないだろうってことを、よくよく分かっていたからだ。

下手すれば冗談でなく死人が出る。

まあ、真希先輩としても、本気で拳を繰り出してくるつもりじゃあなかったんだろうけど……たぶん。

それからと言うものの、さっきのこととか色々聞こうとしても、

カチユは言語化できない寝言を返してくるばかりだった。

言葉通り安心しきって眠っているのを見ると、

カチユの憂いは解消されたようだからまあいいんだけど。

それでも、気にならないことがないわけじゃない。

なんだか私のよく分からないフレーズがカチユとそのディアって名前のお友達との会話にあったし、何よりあの場に残してきたのも心配だった。

「でもまあ、今は戻れないし……」

少なくとも歓迎会が終わるまでは 顔を出すべきじゃないだろう。気にかかることはあつたけど今は仕方がない。

私はそう自己完結し……その足を寮棟にある一室へと向けることにした。

そこは、付属の校舎と繋がるもう一つの渡り廊下のある八階。

私やキクちゃんみたいに、相部屋で過ごすことが、様々な理由があつてできない子たちが過ごす場所だ。

その中の一つに、この春先からずっと、眠り続けたままの棗ちゃん
の部屋がある。

曲法の暴走か、あるいは他に理由があるのか。

棗ちゃん自身の能力が、魔物を生み出す虹泉そのもの力と似通つて
いるところもあつて、

今までの偽者……スケープゴートでない、本物の魔物を生み出した張本人かもしれないと、
上から特に目をつけられている一人だ。

ちなみに、本物かそうでないかを判断するのは簡単だ。

虹泉を破壊し、卒業させられても外界に居座り続ける魔物たち。彼らがもしいなくなるようなことがあれば、破壊した虹泉は本物
だったということになる。

もっとも、今の今までいくらか虹泉を壊そうとも魔物が完全にいな

くなることはなかったわけだから、本当にその本物とやらがいるのかどうかも怪しいもんだけど。

実の所、夏になっても彼女が眠ったままであるならば。

怪しきものは罰せよじゃないけれど、強制的に卒業させられてしまつという話もあがっていて。

棗ちゃんの動向は、今私が、突然出現した新たな虹泉以上に気になっっていることでもあった。

「棗ちゃん、失礼するよ……?」

私は、棗ちゃんの部屋までやってくると、軽くノック。

返事がないだろう事は半ば予想できてはいたけど。

マナーとして一拍置いてから私はその扉を開け放って……。

(第37話につづく)

37、棗ちゃんと私のオーバーテクノロジーな異世

棗ちゃんの返事がないだろう事は半ば予想できてはいたけど、
マナーとしてノックをして、一拍置いてから部屋の扉を開け放つ。

普段ならば同郷の馴染み友達だというキクちゃんや、
棗ちゃんと同じ副会長の命ちゃんと一緒に様子を見に来ていたわけだけど。

そう言えば一人でここに来るのって（正確にはカチユがいるから一人じゃないけど）初めてだったなって、今更ながら思い出して。

「相変わらず……凄い異世」

広がるのは、ここに来て毎度の抜けるような空と薰りたつような色とりどりの庭園。

扉を開ければそこは別世界だった。

感嘆の呟きが未だに出てしまつくらい、寮の一室とは思えない場所。

何がおかしいって、まずはその広さだ。

一体、どこの御殿のお庭だろうかと言つくらいの広さ。

下手すれば、本校の敷地に匹敵するんじゃないってくらい。

だけど、実際はそうじゃないだろう。

これが、異世の本域。
本来、現れた魔物たちと戦うための領域だ。

今現在、本校を覆うように展開されているものが生徒みんなの世界であるなら、

ここは棗ちゃんのプライベートスペースとでも言うべきだろうか。

ただ、どちらも基本、魔物に抗う一般人を拒絶し、【生徒】の力持つものには、

その潜在能力を高める効果がある。

曲法と共に生まれ、私たち【生徒】がその力に目覚めた時から、密接に関わってきているもの。

それが何故あるのかって考えると、正直あまりよく分かってないわけだけど。

本校を覆うそれが、真希先輩の異世を中心に、みんなのものが少しずつ交じり合っていてできているのに対して。

ここは棗ちゃん専用の異世だった。

故にこの世界は棗ちゃんの心象風景なのだろうというのが科学班の弁。

それが、こんな広い世界に取って代わる意味になるかどうかは、やっぱり良く分からなかったけれど。

私は現在進行で、現実的に、足下の草葉を踏みしめ、背の高い植樹帯の左右を囲まれた道を歩いていた。

左右とも、植樹帯の向こうは多種多様な庭園が広がっている。

どうやら、その植樹帯に囲まれた区画ごとに、それぞれコンセプト

トがあるらしい。

あまりお花に詳しくない私にとって見れば、自然を使った迷路にようにしか見えなかったけど。

「……出た」

ふいに、がさがさと、植樹帯の隙間から飛び出してくるのは。その丸々のお腹にビニールの羽根を生やし、危険色を配置させたぬいぐるみ。

某有名映画のキャラ……スズメバチか何かだと思ったけれど。いつちよ前にスピード型の先端のついた槍みたいなものを持ったフェルトのもこもこは、そのボタンでつくられた瞳でじっと私のほうを見つめてくる。

カチュのことを棚に上げて、本来動くはずのないぬいぐるみが動いていて、尚且つ飛んでいる様に思わず身構える私。

それは……それこそが棗ちゃんの【生徒】としての能力【幻想吹魂】だった。今思えば、私の力とかなり似通っているといってもいいかもしれない。

その力は、見ての通り、もの……棗ちゃんの場合手持ちのぬいぐるみに限るけど、それに意思を持たせ操る力だ。

そう、ただ動かし命令させるのではなく、彼らは彼らの思考を元
に行動する。

今も、眠ったままの棗ちゃんを、守るように彼らはこの異世を巡
回している。

棗ちゃんを害するような輩が現れようものならば、
彼らはその手に持つ以外に物騒な得物を使うことを躊躇わないの
だろう。

まあ、実際使っている場面を見たことがないから。
ほんところどころはどうか分からないけど……。

(第38話につづく)

38、キクちゃんと私のばりばりシェイクハンド（前書き）

タイトルはひらめきのみで構成されております。

あまりお話と関係ないこともなきにしもあらずですよ。

38、キクちゃんと私のばりばりシェイクハンド

もこもこのぬいぐるみたちが、その物騒な得物たちを實際使っている場面を見たことがないから、
ほんとのところはどうか分からないんだけど。

「じく、じくろつさま」

そんなフラグを立ててしまったのがまずかったのか。
ぎこちなく挨拶をし、そのままどこかへ飛んでいくのを待っていただけなのに。

「……………！」

スズメバチのぬいぐるみは、
さも不審者と突然ばったり会っちゃったみたいな反応をしたかと思ったら、
その槍を天高く突き上げた。

するとどうだろう。いきなり世界に鳴り響く、ファンファーレめいた音。

「な、何……………？」

私は非常にいやな予感を抑えきれないままに拳動不審に辺りを見回している。

そのファンファーレの音が止むとともに聞こえてきたのは、さりさりと独特の響きの連なり。

不意に空見上げてみれば、そこにいるのは危険色目立つぬいぐるみたちの大群で。

今まさに彼らは、こちらに迫ってくるどころだった。

「な、何でっ!」

キクちゃんや命ちゃんと来たときはこんなこと一度もなかったのに!

もしかして私は棗ちゃんに害する敵だと認識されているのでせうか?

私としてはう結構大事な同胞というか、友達の友達は友達だよなって気でいたんだけど……。

ぬいぐるみさん達の持つその鋭利な刃は、間違いなくこちらに向けられていて。

私はひどく悲しい気分陥りつつも、そのまま踵を返して逃げ出す。

「……!」

案の定、そんな私を逃す気はないのか、隊列まで組んで追いかけ

てくるぬいぐるみさんたち。

これは、一旦部屋の外に出たほうがいいのかもしれない。

できれば自分の力を使うようなことにならなければいいなと願いつつ、元来た道を辿っただけ……。。

「ううっ……」

そんな私を遮るように、道を塞ぐのは天使と悪魔のぬいぐるみの混成部隊だった。

天使は弓矢を、悪魔は鎌なんか手に持って。

統制の取れたその姿は、惚れ惚れするくらい隙がない。

それで見た目もこもこ愛いやつなわけだから、変な冷や汗も余計に倍増ってなわけで。

これは、相手を傷つけないとか言ってる場合じゃないのかもしれない。

やっぱり、一人で来るべきじゃなかったなあって、今更ながら後悔していたその時。

「潤、こっちです！」

ふいに、植樹帯の向こうから聞こえてくるキクちゃんの声。

そこから伸びてくる小さな手のひら。

まさに、地獄に仏と言うのは今使つのにふさわしいのだろうか。私はそんな感涙にむせびつつ、その手を取る。

すると、思っていたよりも強い力でぐいと引つ張られて。

「え、ちよつとま……」

私のそんな声を遮るように、耳に入るのは。

ばりばりとこすれる植樹帯の葉と私のよわ肌。

さっきまでの感涙が台無しの仕打ち。

私が文句を言うよりも早く、私はそのまま下方に引つ張られる。

「うぶっ?」

それは、比較的背の高い花園のその奥で。

「静かにっ。息も気配も止めてくださいっ」

んな無茶な、と言う突っ込みすら叶わず。

いい香りのする花々の中、いい感じで密着するようにしてしゃがみ込んだキクちゃんは、

そのまま【生徒】としての能力を発動した。

【完全秘匿】と呼ぶらしいそれは、黒色の靄となって私たちを包み込んでいく。

その力は、簡単に言えば相手の認識を外す能力だ。

姿が見えなくなるのはもちろん、そこにいたと言う記憶すら消してしまいうらしい。

案の定、しばらくは聞こえていたはずのビニールの羽音群も。

しばらくするとどこかへ行ってしまっ……。

(第39話)

39、キクちゃんと私の甘い甘い毒

キクちゃんのおかげさまで。

しばらくは聞こえていたはずのビニールの羽音群も、しばらくするとどこかへ行ってしまうて。

「歓迎会の見学に行ってるのではなかったのですか？」

「あ、う、うん。ちょっと暇ができて」

呆れたようなキクちゃんのそんな言葉は、とりあえずの危機は去ったという合図。

真希先輩に怒られ追い出されるようにしてやって来たということ、

後ではれるにしてもあつてないようなプライドで誤魔化している

と、
キクちゃんはそれに気付いたわけじゃないだろうけど、さらに深いため息をついて、言葉を続けた。

「まったく。目を離せば何をしでかすか分かりませんね、潤は。一体何をしたんです？」

棗の眷族たちはあんな何の意味もなく殺気立つようなものたちではないはずなのに」

「い、いや。そんな事言われても、なにもしてないって」

私の表裏のギャップをちゃんと把握してくれているせいか、

私の口からも比較的内心通りの言葉がついて出てくる。

だが、それは質問の答えになってないどころか反論してるようにも聞こえたんだろう。

いつもにも増してキクちゃんはむっとした顔をしてみせて。

「潤、あなたつい最近、能力を使ったでしょう？」

「う……」

言葉詰まるのは凶星。

キクちゃんはそれにやはりか、と確信して呟いて。

「棗と潤の力は近いですからね。きっと何らかの影響を与えたんでしょう。」

それなら、このまま屋敷に向かいますけど、よろしいですか？

「う、うん。なんかいろいろとごめんね」

屋敷。それこそが、この創られた世界で棗ちゃんの眠る場所だ。

この天然の迷路の、終着点だといってもいい。

確か棗ちゃんのぬいぐるみって百体以上いるって話だし、

こうなってしまうとお見舞いに行くならキクちゃんの手を借りる以外にないだろう。

そう言う迷惑的なものも含めて、私はただひたすら頭を下げている……。

「なんですか、あれは……」

「いや、私のほうを見て言われても」

そのまま警戒を続けるぬいぐるみたちに見つかることなく屋敷へと繋がる広場まで出てきたのはよかつたんだけど。

広場には、それこそ広場を埋め尽くすほどの大きさのぬいぐるみが惰眠を貪っていた。

何の動物だろう？ 茶色の毛並みのこんもりとしたお腹に、腕や足の部分だけが黒い。

熊、あるいはたぬきだろうか？

ともかくにも棗ちゃんのお屋敷を覆わんばかりの大きさのそれは、

なんとというか番人と言うか、ラスボスめいた存在感があった。

「前言撤回します。彼は棗のお気に入りの子の一人ですね。確か名前は『どんちゃん』だったかと。……まあ、あれほど大きくはなかったですけど」

その威容に圧倒され見上げることしか出来ない中で、キクちゃんは思い出した見たいにそんな事を言う。

「なんであんな大きく？」

「それは……私にも分かりません」

答えは出ないんだろうなって、半ば承知の問いかけ。

キクちゃんはそれに、律儀にも深く深く考え込んだ後、ふるふる
と首を振る。

「とりあえず、このままスルーかな」

私たちは棗ちゃんのお見舞いに来たわけであって彼に用事がある
わけじゃない。

幸いなことに寝てたみたいだったから、私はそう呟くと、抜き足
差し足で歩きだしたのだった……。

(第40話につづく)

40、キクちゃんと私、姉貴分「あまやかし」(前書き)

遅ればせながらあけましておめでとついでいますー。
相変わらずお話に季節感ないですが。

40、キクちゃんと私、姉貴分「あまやかし

大きな大きなぬいぐるみ。

幸いなことに寝てたみたいだったから、私たちは抜き足差し足で歩きだした。

気配を消すキクちゃんの闇のヴェールは、もちろんかぶったままで。

返事のないままに歩き出した私だったけれど、そこはもう何年も相棒をやってるキクちゃん。

対魔物においてもこれは私たち『風紀委員』の基本だった。

キクちゃんの力でこっそり敵に近づき、私の力で撃破する。

いつも真希先輩に大雑把すぎるとお小言を受ける、

これといって武術の心得のない私にとってみれば、これ以上ない相棒と言えよう。

今も、当たり前のようにヴェールを維持して、私の後についてきてくれる。

その、なんだかとても頼もしい背後がむず痒くて。

半ば無意識のままに頬を緩ませていたのがいけなかったのか。

それとも他に別の意味があったのか。

大きな大きな、どんちゃんと呼ばれるぬいぐるみさん。

そんな彼の横をすり抜けようと、最も接近したその瞬間。

「……………」

「……！」

豪快に寝返りを打っていた彼が、唐突に目を覚ました。その黒く大きな瞳は、しばし上下左右を彷徨った後、確実に私たちのほうを見据えていて。

一気に高まる、その場の緊張。背後のキクちゃんから、信じられない、といった焦りが伝わってくる。

それは私も同じだった。ここまで早く、ヴェールに包まれた私たちの存在に気付かれたのは、初めてのことだったからだ。その気付かれたのだって、足音を立てたり声をあげたりした私のミスから来るものであって、今はまだそんなへまはしていない。

ならば彼は一体どうしてこちらの存在に気付けたのか。その答えは、つまるところ私の胸ポケットの中にあった。

「うーん？ りおん……こうせー……ぶふっ」

ちょっと、よりによってこのタイミングで寝言っ？ 私は自分の悲鳴を飲み込み、ポケットを手のひらで抑える。

くぐもったカチユの声が聞こえてきた頃には時既に遅く。完全に目が覚めこちらを認識した巨大なぬいぐるみが、起き上がろうとしているのが分かって。

後ろでより一層焦るキクちゃんの気配。
うるたえていたのは、私も同じだった。

いよいよ気付かれてしまったことはもちろんのことだけど、
それ以上に戸惑っていたのは、カチユの発した言葉についてだっ
た。

よりもよつての寝言のタイミング、何度も聞いた私は、その法
則に気付いてしまった。

カチユの寝言は偶然なんかじゃない。

それは寝言というよりはむしろ、金縛りの夢を見て起きようと思
っても起きられない時のような、

眠気に抗った末のものなんだろうと私は考えている。

分かりやすく言えば、カチユが寝言を言うのは起きたい時で、
起きなきゃいけない理由がある時なのだろう。

そして、つい最近分かったことだけど。

カチユが寝言を……起きたいという意味を示すのは、大抵がカチ
ユのお友達絡みだった。

カチユはそのお友達……つくもんさんたちのことを、『こうせい
いん』と呼ぶ。

となると、『リオン』というのが、今度のお友達の名前なんだろ
う。

私がうるたえたのはそこだった。

何故なら、状況を鑑みるに、目の前の大きすぎるぬいぐるみが、

『リオン』という結論に至ってしまったからだ。

そこで普通なら、目の前の大きな大きなぬいぐるみはキクちゃん曰く、

『どんちゃん』なる名前であり、『リオン』とは関係ないだろうってなるわけだけど。

私は知っている。

彼女たちには、二つの名前があることを。

それは、元々の彼女たちの名前と、持ち主につけられた名前だ。例えば力チユ。こうして話せるようになる前は、当然その名前を知らなかったから、

私は勝手に彼女に名前をつけていた。

『レシィ』と。

どういったコンセプトでそう名づけるに至ったかは恥ずかしいから力チユにも秘密にしてるけど。

それがきくと、目のぬいぐるみさんにも当てはまるんじゃないだろうか。

そんな風に思ったせいなのか。

見上げるほどに大きな彼が、その見かけの割に短めの両足で大地を踏みしめる頃には。

最初にあつた恐れみたいなものもどっかにいっちゃって……。

(第41話につづく)

41、どんちゃんと私の名を持つ人つける人

「キクちゃん、能力解除宜しく」

「え？ あ、はい」

私は振り向き、口に出してそう言う。

それに戸惑っていたキクちゃんだったけど。

私が声高に喋ったことで自分の能力が意味を成しえなくなったことに気付いたらしい。

そして、私にこの状況を打破する策があると思っただろう。

頷いてすぐ、闇のヴェールが晴れ、改めてお互いが対面することになって。

「どうおおおーんっ……！」

いきなり現れた私たちに、それでも彼は驚いたんだろう。

なんとも独特な声をあげて、その丸太のようなフェルトの腕を振り上げる。

「っ！」

背後で立ち昇るのは、キクちゃんの異世。

身を隠す以外に戦う術を持たないキクちゃんなりの、それは防衛本能だったのかもしれない。

あるいは、私もお目にかかったことのない、戦うための力を持っているのかもしれない。

基本的に私の思考は憶測推測の決め付けで、実際のところはどうなのか分からなかったけれど。

私はそんな二人よりも早く、口を開いていた。

「君の名前は、リオンであってる？」

友達の友達は友達。

カチユとも棗ちゃんとも友達でありたい私にとってみれば、私たちが争う意味はないよねって、強い気持ちでいた。

すると案の定、ぴたりと止まるその大きな腕。

「どうんっ、どうんっ！」

だけど、そこからの行動が私の予想とは違っていた。まさしく、違っつてぶんぶん首を振り、どんとそのメタボなお腹を叩いて何やらアピールしている。

「あ、あれ？ 違っ？」

「……私の話、聞いてなかったんですか。それとも若年性痴呆ですか？」

「この子はどんちゃんだっつて、さっき言ったはずですが」「で、でも、だっつて……」

元々の名前とつけられた名前があること。

カチユと話せるようになった時、その事を話した際のキクちゃんの生暖かい顔と言葉。

確か、見た目に反して物凄い乙女なんですね、とかなんとか。

それは、キクちゃんが私の本性に気付いたその瞬間でもあるけど。今それを説明したらまた同じ態度を取られそうなので、恥ずかしくて何も言えない私。

なんと説明したものと口をもごもごさせていると、

お腹を叩くスピードを速めて、何やら必死に訴えようとするぬいぐるみさん。

「ほら、潤が名前を間違えるから怒ってしまったではないですか」「そうなの？ えと、その……ごめんなさい」

確かにその仕草は、キクちゃんの言う通りにも見えなくもない。私個人としては、そのメタボなお腹をアピールしているだけのようにも見えただけど、

ここは無難に謝しておく。

するとどうだろう。

もしかしたら、言葉が通じてないって思っちゃったのかもしれない。

どんちゃんは、何だか悲しげに一言鳴いて、疲れたのかそのまま座り込んでしまった。

それがなんだか、あなたたちじゃ話にならんって言っているようにも見えて。

かといって、私たちがここにいるのを、邪険にしてる風もなく。

どうしようかと、キクちゃんに伺うと、キクちゃんは息を一つ吐いて、言った。

「あなたとは毎日会っているから知っていると思いますが、私たちは棗のお見舞いに来ました。

屋敷の中に入れてもらいたいのですが、よろしいですか？」

心なしが硬い、キクちゃんの言葉。

たぶんきつと、それまでは動くこともなかった知り合いのぬいぐるみさんに話しかけている自分に戸惑っているんだらう。

あるいは、恥ずかしがっているのかもしれない。

それは、私とは違って似合いに似合う乙女な行動。

私が、ようこそこっちの世界へとばかりに、してやったりな気分になって頬を緩ませていると、

軽く脇腹をつつかれる。

それは照れ隠し半分、後に続けの合図で。

「同じく、お見舞いに来た潤です。ここ、通してもらってもいい

？」

「どうーん」

すると、返ってきたのはおそらくは肯定の言葉。

私には、敵意もないけど興味もない、みたいな感じに見えたけれど。

最初の寝言以降、カチユは特に問題がないらしく爆睡中で。

私は、目の前の彼がカチユのお友達の『リオン』であろうとなかろうと、

さしあたって何かできることはなさそうだな、と判断した。

少なくとも、生徒会室の前で見た彼女と比べたら、のんびりと平和そうに見えたからだ。

それが、判断違いであることに気付くのに、それほど時間はかからなかったけれど……。

(第42話につづく)

42、棗ちゃんと私の荒唐無稽な世界

それから。

門番さんの許可を得て、私たちは棗ちゃんの眠るお屋敷の中へと入っていった。

キクちゃんや命ちゃんと違って毎日来ていたわけじゃなかったけれど、

そこはやっぱり、何度足を運んでも不思議な世界だった。

庭の広さですら、到底信じられないのに。

その中にさらに中世ヨーロッパ風の、豪華な内装のお屋敷があるのだ。

異世を開かなければ、八畳程度の寮の一室に。

私自身も、もう大分前に魔物と戦った時、自分の異世を全力で展開してことがあったけど。

こうやって改めて考えてみると、ありえないというか物凄い力だよねってつくづく思う。

だってそれは、文字通り別の世界を作ってしまうものだからだ。そして、それぞれ差はあれど、【生徒】たちならばみんながそれを扱える。

こうやって自分だけの世界を作ることもし、みんなで力を合わせれば、

例えばそれまでなかったはずの本校校舎とその寮棟を、一夜にして作り上げることだってできるのだから。

【生徒】でない普通の人たちから見れば、あまりに荒唐無稽で非常識だろう。

人は自分と違うものを恐れ拒絶しようとする。
どこかで聞いたその言葉を、地でいつているのが私たちだ。

故に拒絶された者同士の結束は固い。

うっん、そんな堅苦しい言葉で表現するのは何だか嫌かな。
とにかく仲良しなんだよって主張したい。

たとえそれが傷の舐め合いだって言われようとも、変にギスギスするよりは何倍もマシだって。

だけど。あまりにお互いの繋がりが強すぎるからこそ、生まれてくる弊害もある。

一人で眠り続けるには広すぎるお屋敷。

キクちゃんは、脇目も振らずその一室を目指す。

そこは、女の子らしい暖色系に統一された、豪華な天蓋つきのベツドのある部屋。

気品のある内装とあいまって、その部屋中を埋め尽くす、種類大小様々、

色とりどりの意思あるぬいぐるみたちに囲まれて、棗ちゃんは眠っていた。

掛け布団から覗くのは、どちらかと言えばアウトドア派な小麦色の肌。

短いボブの、ひまわり色の髪。

そう、棗ちゃんはインドア派なキクちゃんとは対照的な、お外で駆け回るのが大好きなイメージのある元気っ娘だった。

でも、必ずしもそのイメージが彼女の全てじゃないんだろう。まさしく、眠り姫を見るかのような今が、それを如実に表しているような気がして。

「……」

そんな棗ちゃんを、キクちゃんはじっと見つめている。それに合わせて、ほとんど一斉に視線を返してくるぬいぐるみさんたち。

お互いの間にあるのは、何だかあまりいいとは言えない緊張感のようなもの。

大きくなってしまったどんちゃんのことといい、いつもはこんなことなかったはずなんだけど、今日は一体なんなんだろう？

私がそんな、いつもと違う理由について考えていると。キクちゃんはそのまま棗ちゃんの傍まで近付き、眠ったままの棗ちゃんを甲斐甲斐しく世話をする。

そこにある緊張感みたいなのは相変わらずだったけれど。ぬいぐるみさんたちはそんなキクちゃんを見ているだけだった。

私もそこではつと我に返り、それを手伝って。

「……棗ちゃんが起きない原因って何なんだろうね」

身体を拭いて着替えをして、その澁刺そうな髪を、ゆっくりゆっくりと梳いているキクちゃん。

棗ちゃんから視線を外さない、俯き加減のその表情は、ぶっちやけて言えば私の好きな表情じゃなかった。

……ああ、うん。

それはキクちゃんが私のことを見てくれないから嫉妬してるとかそういうんじゃないかとさ、

なんていうか正確に表現するのは難しいんだけど、今にも泣きそうで苦しそうっていうか、まるで棗ちゃんがこうなつたのは自分のせいで責めてるような……そんな風に見えたんだ。

そんなキクちゃんを見てるのがなんとも我慢ならなくて。

私は割って入るみたいに、そう呟いていて……。

(第43話につづく)

43、棗ちゃんと私のお約束未遂

「……これはあくまで想像ですけど」

不躰な私の問いかけ。

別に、はつきりした答えを期待したわけじゃなかった。

分からないなら分からないで、荒唐無稽な『目が覚めない理由』をでっちあげて、

そんなわけないだろうって、キクちゃんの鋭い突っ込みが来るのを期待していたんだけど。

たぶん、私が考えている以上に、キクちゃん自身もその事について考えてたんだろう。

長い沈黙の後に、そんな前置きをした上で、キクちゃんは語りだす。

「棗は、『デリシアス・ウェイ』の……演習場に現れた虹泉の秘密を知ってしまったんじゃないでしょうか。例えば、その創造主の正体。だから、こうして口がきけないように、眠らされてしまったとは考えられませんか？」

それは、私の考えていた荒唐無稽な理由、その一つだった。

「それは私も考えてはいたけど……根拠はあるの？」

第一、棗ちゃんの目が覚めなくなったのは、虹泉が発見されるよ

りもずっと前なのだ。

まあ、棗ちゃんが今回の虹泉の創造主自体を見つけた、というなら話は別なのだろうけど。

「根拠があるわけじゃないんですけど……そう考えるのが一番しっくり来るような気がするんです。だから、一刻も早く眠りから覚まさせてあげる必要があるんです。誰よりも棗自身のために」

纏めるようなキクちゃんのそんな言葉には、何に置いてもといたゆるぎない意思のようなものが感じられた。

それは、ひどく危ういもので。

その危うさが実体化し、キクちゃんを傷つけてしまうようなことだけは避けたいと強く思った。

それはきつと、棗ちゃん自身だって望んでいないことのはずだから。

「……眠り姫を起こす手段って言えば、王子様のキスだよね」

私は、せめてキクちゃんが一人で背負い込み、そのことばかりを考え込まないように。

そんな風にとぼけてみせる。

というよりは、半分くらいは本気だったかもしれない。

私が棗ちゃんの立場で、もし私の王子様にそんなことされようものなら、

逆に幸せな意味で二度と帰ってこられなくなるんじゃないだろうか
と妄想すらし始める始末で。

「潤のメルヘン脳に棗を巻き込まないでください。ただでさえ足を踏み入れかけているというのに……」

やれやれ、と言わんばかりに辺りを見回し、ため息をつくキクちゃん。

言い得て妙な言葉に、それなりにダメージを受けた私だったけど。まだ負けん、とばかりに私は言葉を返す。

「むしろ、どこの馬の骨に奪われるくらいなら自分がつて感じ？」

「ばっ……そ、そんなこと、考えるわけ……ないでしょうに」

それは、一度くらいは考えたことがあるぞって宣言しているにも等しい。

そんなキクちゃんの動揺ぶりです。

同姓とはいえそこまで想われている棗ちゃんがちょっと羨ましいな、

とか思っちゃってる自分も、女の子ばかりのこの環境に感化されてるのかなってしみじみ自覚させられて。

それからさらに悪ノリがエスカレートして、

起きるかもしれないから目覚めのキスを試してみようじゃないかと提言しそつになったその瞬間だ。

なんとともタイミング悪く、部屋に鳴り響く【生徒】御用達の携帯兼通信機。

それは、魔物の出現を知らせる警告アラーム……ではなく、
歓迎会の終了時間に予めセットしておいたただのアラーム音で……。

（第44話につづく）

44、命ちゃんと私の既視感なヨカン

ふいに部屋に鳴り響く【生徒】御用達の携帯兼通信機。

それは、魔物の出現を知らせる警告アラーム……ではなく。

歓迎会の終了時間に予めセットしておいたただのアラーム音だった。

「……そろそろ本来の歓迎会が始まる時間ね」

今年は果たして、一人くらいは合格者がいるのだろうか。

当然その一人に王子様……じゃなかった、吟也が浮かぶ一方で、私としては無理に合格することもないよね、とも思っていた。

吟也の本校に入るっていう強い意思を無碍にするわけじゃないけれど。

もし合格するようなことがあれば、まともで普通な生活は二度と返ってこない。

それこそ、深海の底で呼吸を我慢しながら生きるような辛い日々が続くのだ。

「冗談でなく、トイ先生と言う先駆者の今の姿が、それを如実に表している。

トイ先生は今でこそ好々爺然とした振る舞いをしているけれど、実際はそんな見た目が信じられないくらい若い先生なのだ。

たとえそれを吟也が望んでいるとしても、やっぱり私人としては今のままでいてくれたほうがよかったりするわけだけど。

そんな事を考えつつも、棗ちゃんにまたの挨拶をして部屋を出ようとして。

そんな私についてくるものの、何だか不思議そうにしているキクちゃんがそこにいた。

「キクちゃん？　どうかした？」

「いえ。命さん、結局お見舞いに来なかったなって、そう思っただけです」

「約束してたの？」

「そう言うわけでもないんですけどね……」

今度は、どこか拍子抜けした様子のキクちゃん。

言われてみれば確かに妙ではあった。

今の今まで本校校舎は歓迎会中で、命ちゃん自身も立ち入り禁止のはずだから……。

「そう言えば……暇じゃないってそういえば言ってたよ。えっと

……あ、そうだ。ごみ捨て係の日だ」

「成る程。せつかく授業のない日だというのに、ご愁傷様ですね」

嫌だとか面倒臭いとかそういった不真面目っぽいことは一切顔に出さない真面目な命ちゃんだったけれど。

珍しくぶすくれていたから比較的すぐに思い出せた。

ごみ捨て係は、元は他の委員と同じ扱いだっただけで、同じ人だけでやるのもなんなので、

交代交代みんなでやるう、ということになった、【生徒】のもう

一つの仕事だ。

大人の事情といふかなんというか、我が本校の土地の地下には、その敷地をすべて覆うほどのごみ処理施設が広がっている。

それは、紅葉台の街のみならず近隣市外のごみを処理するものだ。国はその土地を本校に提供する代わりに、パイプラインで運ばれてくるそのごみの処理をすべて本校に任せている。

まあ、今となつては【生徒】以外には入れない場所になつちやつてるし、

それも仕方のないことかもしれないけれど。

「ご愁傷様つて。そんなに面倒な仕事かな」

確かにちょっと臭うけど、係のやることといえば、

パイプラインで集められたごみがベルトコンベアで運ばれていくのを眺めているくらいだ。

一度興味を惹かれて奥まで行つた際に見た、

雪だるま式に大きくなつていくごみやら何やらの塊が轟音立てる焼却炉に消えてゆく様は、

ちよつと楽しいとさえ思つたくらいで。

「それは潤の心臓に剛毛が生え揃つてるからそう思つんですよ」
「……」

さりげなくも何もなく、思い切り貶されているような気はしなく

もなかったけれど。

命ちゃんが来なかった原因が分かったのか、

憂いの去った様子で歩き出すキクちゃんに私は反論の言葉を返す暇もなく。

行きと同じ手順でどんちゃんたちのいる庭を抜け、棗ちゃんの部屋を出ると。

目前に見えるはだいぶ陽の傾いた空と、静けさを湛える……渡り廊下を挟んだ本校校舎。

その色の深くなり始めた陽光に照らされ黄昏ている、命ちゃんの姿。

「あら。何をしているんですかね、あんなところで」

「……」

何だか、とつてもイヤな予感がした。

イヤな予感って言っても、純粹に悪いものっていうより、私が一方的に困る感じのイヤな予感だ。

それは、間違えようもない既視感。

瞬間に思い出したのは、二階と八階で場所こそ違えど、

魂を抜かれたような状態で立ち尽くしていた美音先輩のことで……。

「ああ、会ったんだ。私たちはついに。トイ先生以降空席のままだった【生徒会長】の席に座るに相応しい人物にね」

生徒会長が空席であること。

その理由は、真希先輩独特の解釈で聞かされていて、正直理解していなかった部分は確かにあった。

真希先輩が言うには、『生徒会長は、主人公ポジションの人物じゃないと駄目』、らしい。

最低限理解できたのは、生徒の中で一番強い人物に資格があるということだ。

それなら真希先輩でいいんじゃないのかなって思ったんだけど。

『私は謎多き妖艶なる美女ポジション』だから駄目、とのことだ。

そんな真希先輩の自己評価はともかくとして。

命ちゃんが見つけたと言い切ったならば、その人物はきっと主人公ポジションにいるのだろう。

私は、半ば自分で自分にとどめを刺すかのような感覚で、言葉を返すことにする。

「それで？ それはその、どこの誰？」

「ああ、一字一句憶えている。紅恩寺吟也、と名乗っていた」

「……」

やっぱり、という意味合いの絶句。

「吟也？ それって……っ」

当然キクちゃんは私の事情を知っている。

故に私のほうを見やりつつそう言ったのだろうが、後が続かなかった。

たぶん私が思うに、キクちゃんが引くぐらいの衝撃的な顔を私がしてたからなんだろうけど。

「そう、本校の生徒ではない。紛れもない付属の生徒だ。

ただ、失礼も甚だしいことに、最初は彼が男だと分からなかったんだ。

付属の制服を着ていなかったせいもあるだろうが、私は生まれてこの方あそこまで美しい男を目にしたことはなかったからな」

まるで、美音先輩の時の再現フィルムのごとき、陶醉した様子の命ちゃんの姿。

普段からしゅっとして男らしい命ちゃんのその様は、あるいは美音先輩以上に衝撃的で。

思っていたことがそのまま現実に具現してしまったかのように、完全無欠に私が困る展開が広がる予兆をひしひしと感じていた。

美音先輩や由宇ちゃんだけでも厄介だっていうのにこれ以上増えたら……

想像できるからやなんだよね。そんな光景が。

だって私は知っている。

吟也が女の子大好きなのを。

来るもの拒まず精神なのを。

思い出せば小さい頃、吟也にちょっかいをかけていたのはその半分が嫉妬だったんだと思う。

だって吟也ってば、目を離すとすぐに周りに女の子がいたんだもん。

だけど私は、その間に割って入ることはあっても独り占めしようとか、

そういう感情はいこれっぽっちも起きなかった。

何故なら私は、吟也がそうしなくちゃいけない理由を知っていたからだ。

それは、吟也と私が共有する数少ない秘密。

その優位性だけで、幼い私は結構余裕でいられたんだけど……。

(第46話につづく)

46、命ちゃんと私のたいへん偏った情報

吟也と私が共有する数少ない秘密。

その優位性だけで、幼い私は結構余裕でいられたんだけど……。

今はあんまり余裕がないみたいだった。

長い間、それこそ喧嘩別れで離れたせいもあるだろうけれど。

目前の命ちゃんも含めて、美音先輩も由宇ちゃんも、

吟也にお似合いの素敵な女の子だったことを、身に染みて知っていたせいかもしれない。

「命さん、まさか見た目だけで生徒会長になれるとでも？」

と。私がちよつと思考の深みにはまっていたところで。

少々険のある感じの、キクちゃんの声が耳に届いてきた。

そつだぞ、キクちゃんの言うとおりだつ。

吟也を見た目だけで判断しているうちはまだまだトーシローだぞつ。

なんてキクちゃんの思惑とは真逆であろうことを内心で突っ込んでいると。

珍しくもそこで破顔してみせる命ちゃん。

その威力ときたら勢い込んでいた私やキクちゃんを押し返すほどで。

「まさか。勿論その資質ありでの進言だよ。時間にして五分といったところかな。」

これくらいの距離での会話に、彼は微塵も不快感を示さなかったんだ。

むしろ向こうから詰め寄ってきて焦ったよ。それに……私の手に触れてくれた。

魔物を殺し、人を遠ざけるこの手に

「……っ」

これはなんとつらやま……じゃなく、

私の心をかき乱そうとわざと言ってるんじゃないかなかってくらいに、砂を吐きそつな甘い言葉。

全く関係のない相手ならばついに命ちゃんにも春が来たのね素敵っ、

なんてはしゃげたのかもしれないけれど。

今私の心にあるのは、何だかむずむずする焦りで。

「だが、一番の決め手は、私が女であることを、何の前情報もなしに当ててみせたことだろうな。」

当てたというか、ごく自然に私を女性として扱ってくれた。

そこに、みんなを引っ張っていく資質のようなものを見たんだ。

それこそ、戦う隊の長として、相応しいと思えるものをね」

「……ふむ。私の知っている偏った情報以上に曲者のようですね。あなたにそこまで言わせるとは」

偏った情報というのはもしかしなくても私にとっての吟也のイメージなんだろうけど。

手厳しいキクちゃんから言わせれば吟也は曲者らしい。
美音先輩にしても命ちゃんにしてもキクちゃんにしても、
吟也のイメージがみんな違うのはやっぱりちよっとおかしくて。
だけど自分の知らない間にそんな素敵っぽい出会いをしちゃって
るのに何だか我慢ならなくて。

「それで、吟也はどこ？ どこで会ったの？ どこで何したのっ
！」

今度こそ吟也分（吟也に会って嬉しいっていう生きるための活力）
を補給しなければと、

再び勢い込んでそう聞くと。

「それは……ああ、うん。すまない。二人だけの秘密なんだ。い
くら潤でも教えられないな」

あつさり私の優位性をひっくり返しかねない、そんな言葉が返っ
てくる。

実はその時、お互いの会話は微妙にかみ合っていなかったわけだ
けど。

それは、普段表に出ない感情を露にさせるには十分な力を持って
いて。

「そ、そんなの、そんなのだめえ〜っ！」
「な、え、ちよっ？」

命ちゃんからしてみれば思いも寄らない私の行動だったんだろう。
詰め寄り首根っこを掴んでがくがく揺さぶるその行動に、ただ狼
狽していて。

「なんとという理不尽」

呆れたようにそう呟くキクちゃん言葉がダイレクトに心に響い
て。

「……………あっ」

私がそんな自分勝手な錯乱から脱したのは。

続く何かに息をのむかのような、キクちゃんの様子にだった
……………。

(第47話につづく)

47、真希先輩と私に向けられる金剛石

何かに、ひどく怯えている感じのキクちゃん。

そんなキクちゃんにどうかしたのって聞くよりも早く。

その答えはキクちゃんの向けるその視線の先からやってきた。

「あのまま逃げも隠れもせずに戻ってきたのはほめてあげるけど……どうやらあまり反省はしていないようねえ、潤？」

そこにいたのは、金剛石も砕くと言われるその拳を握り締めた真希先輩。

随分おかんむりらしく、その拳からは異世が洩れ出ている。

「え、えっと、その……どうかしましたか、真希先輩？」

私は条件反射で命ちゃんを掴んでいた手を離し、慌てて向き直ると、恐る恐るそう聞いてみる。

「どうかした、ですって？ あなた、まさか歓迎会でしかしたことを忘れたわけじゃわけじゃないでしょうねえ？」

すると返ってきたのは、正直に言えば憶えていたそのことだった。歓迎会の最中に自分の異世を展開してしまったこと、どうやらまだお怒りらしい。

「あ、それは……深いわけがあつて……」

何だかよくは分からなかつたけど、カチユのお友達がピンチっぽかつたし、

やむを得ない事情があつたのだと説明できればよかつたんだけど。生憎のところカチユのその姿も声も、私以外は認識できないというご都合主義がそれを阻んでいて。

どうしても煮え切らない苦しい言い訳みたいな言葉しか出てこなくて。

「へえ。そうなんだ。実はね、今回の歓迎会、誰かさんのその深いわけのせで例年に比べて病院送りになつた男どもが四割り増しになつたしまつただけけど、それでも仕方のないといえるほどのものなんでしょうね？」

「うっ……」

畳み掛けるように返つてきたのは、予想を遥かに上回る衝撃的事実。

「それはもう、地獄絵図のごとき惨事だつたわ。トラウマになつたつて由宇も嘆いてたし。」

まあ、死人が出なかつたことだけがせめてもの救いかもしれないけどね」

今更ながら、もつと冷静に物事を考えて行動すべきだつたと後悔してもしきれなかつた。

地獄絵図。異世に慣れない付属の子達にしてみれば、意を決して

海の中に潜ったかと思ったら、いきなり海の底に放り出されたような衝撃だったはずだ。

そこで、吟也は大丈夫だったのだろうかと考えてしまつあたり、自分の勝手さが如実に浮き彫りにされるようですますへこんで。

「で？　なんであんなことしたの」

私のテンションがただ下がりになったのが分かつたんだろう。それに合わせて、少しトーンを下げてそう聞いてくる真希先輩。

「その、友達が……カチュって言うんですけど、困ってたから、助けたくて……」

曖昧に濁すことはできないと、そう思った。だから私は事実を述べる。

「いっそのことカチュのことを紹介する勢いで。」

「ふうん。そか。嘘はついてないみたいね。……まあ、いいわ。ちゃんとした理由があるなら、」

男どもの治療代を潤ちゃんのお給金から天引き&罰ゲームだけで許してあげる」

「許すもなにもまつたく慈悲も容赦もないように聞こえますが」

正直に言ったのが良かったのか。

いつもの脱力した感じに戻った真希先輩は、なぜかそれ以上突っ

込もうとはせず、

だけと思わずキクちゃんが突っ込むほどに現実の厳しさを突きつけるような言葉を返してくる。

でもまあ、お給金って言ったって仕事の報酬とか、

テレビの出演料とかが勝手に入ってくるだけであまり感知していないのが正直なところだった。

いつだったか金額を確認したとき、見たこともない金額が表示されていて見なかったことにしてたしね。

どちらかというと不安なのはもう一つのほうだろう。

真希先輩の口から聞くと余計に危機感を煽られたけど……。

(第48話につづく)

48、命ちゃんと私の意外な一面二面

「あ、そつだ。お見舞いは……」

行ったほうがいいよなって口にしかけて。

そんなことそもそもできないことを思い出されて口を嚙む。

「何よ、潤ちゃんつてば。トドメでも刺しに行く気？」

「ややっ、まさかっ」

結構冗談ごとじゃなかったんだけど、あまりにも軽く真希先輩が言うものだから、

思わず出た失言も曖昧になって。

「そう言えば合格者っていたんですか。別にどうでもいいんですけど」

そこで、正しくも今一番語るべきことを口にしたのはキクちゃんだった。

「あー、いつもより厳しかったからね。五階に上がった子が一人もいなかったって話だけど……」

「あ、あの、吟也は、吟也は大丈夫だったんでしょか？」

合格者はいなかった。

それならばと、私は真希先輩の言葉にかぶせる感じてそう聞いた。

「ああ、やはり紅恩寺は潤の知り合いか。歓迎会に参加してたのか？

その最中にやってきてたからってつきり違うのかと思っていたが」

すると、何だか少し得意げに答えてくれたのは命ちゃんだった。それに少しもやっとしたけれど。

その時思い出したのは、トイレに行くと言っていた吟也の姿だった。

歓迎会が始まってすぐ、一人地下に降りていってしまった吟也。となると、そのまま歓迎会に戻らずに、さらに地下に降りて命ちゃんと会ったということになるわけだ。

ごみ捨て場に何か用事があったのかな？

しかも、歓迎会そっちのけにするくらいなのかが。

たぶん、その辺りのことが命ちゃんの言う秘密とやらに繋がってくるのだろう。

こうなってくると是が非でも知りたくなってきたけど。

これ以上はお口チャックのポーズをする命ちゃんに、

私は深くは聞けず恨みがましい目で見ることしかできなかった。

それはきつと、自分に置き換えて考えちゃったからなんだろう。

自分と命ちゃんを置き換えて。秘密にしていたことを話してしまっ
って。

約束も守れない女だなんて思われたら……正直死ぬるからだ。

「へえ。命ちゃんも会ったんだ。潤ちゃんがぞっこんラブの彼に」と、そこで何やら感心したように呟いたのは真希先輩だった。

どことなく妖艶な、心まで届いてきそうなそれ。

真希先輩が興味を持ってしまった。

その時のぞくぞくする感覚は、いつのもイヤな予感とは少しばかり毛色が違っていたようにも思えたけれど。

「そ、そんな本当のことをみんなの前でっ」

「ここで否定しないあたりは賞賛に値すべきなんでしょうかね」

その本当のことをまだ知らなかったのは命ちゃんくらいだったけれど。

恥ずかしいものは恥ずかしい。

慌てて否定……なんかできないから正直な言葉が口からこぼれたら。

呆れ以上に感心してる風の、キクちゃんの呟きが耳をくすぐって。

「潤ちゃんにそこまで言わせる男かあ。前々から興味はあったんだけど、」

「こりゃあ会ってみる価値はありそうよねえ」

「それは是非に、ですね。先輩の異世に耐えられるようならいよいよもって生徒会長の道が開ける」

しみじみとそう言う真希先輩、自分のことのように誇らしげな命ちゃん。

うつむ、命ちゃんにこんな一面があったとは意外だった。

人のことは言えないんだろうけど。

「命ちゃんまでそんなこと言うんだ。美音も似たようなこと言うてたけど……」
実はさ、トイ先生にも言われたのよ。何だか面白いやつがいるって」

話の流れからして、その面白いやつっていうのも吟也のことなのだろう。

「……トイ先生は、何と？」

トイ先生は、いわば吟也の目指す夢の先駆者だ。

私としては複雑な所ではあったけど、それでも先生の評価を知りたかったのは確かで……。

(第49話につづく)

49、キクちゃんと私の生まれ始めた軌轢

トイ先生は、いわば吟也の目指す夢の先駆者だ。

私としては複雑な所ではあったけど、それでも先生の評価を知りたかった。

「歓迎会が行なわれている時間、一時間くらいだったかしらね。生徒会室に行くでもなく、かといって他のもののように異世にやられて苦しむでもなく、

何もせずけろりとした様子でスタート地点に帰ってきたんですって」

「……それは」

本当にトイ先生クラスというか、私が言うのもなんだけど、普通じゃなかった。

思えば自分の時も美音先輩の時も命ちゃんの時も、

吟也なら、なんて期待もあって深くは考えていなかったけれど。

普通の人になんて毒である……拒絶すべき存在である私たちに対し、吟也はあまりに自然体だった。

我慢してるのかもなんてレベルじゃない。

もしそれで我慢しているのなら、世紀の大俳優も大詐欺師も夢じゃないんだろう。

「ふふ。本当にこの世にそんな男がいるのだな、先輩の言う主人^{ヒト}

公と呼べるものが」

そんな事を考えていた私に対して、どこまでも素直にそんな言葉を返す命ちゃん。

それは、甘すぎるくらいに甘い願望だ。

そしてそれこそが吟也の夢であり、私とした約束でもある。

私自身だって、そうだったらどんなにいいかって思わない日などない一方で、

異常に引き込んでしまうことに嘆いてもいて。

そんな甘い言葉を、完膚なきまでに打ち砕こうとするのは、キクちゃんだった。

223

「そんな都合のいいことが、本当に起こるって思ってますか？
もっと冷静に考えてみてください」

「……」

浮かれてふわふわしていた空気を、一瞬にして醒ます、低い低いトーン。

私には、そんなキクちゃんが何かの感情を極力押し殺しているようにも見えたけれど。

「あまりにも都合がよすぎませんか？

創造主が誰かも分からない虹泉が出現したこのタイミングで現れ

た人物。

その人がもし、異世に留まることのできる……【生徒】の資格のある人物であるのならば。

そんな楽観的な考えよりもまず、今件の諸悪の根源であるかどうかをまず疑ってみるべきじゃないんですか？」

「それは少し、極論すぎやしないか？」

すかさずついて出る命ちゃんの反論。

確かに、キクちゃんの言う事は最悪なほうの極論だ。

でも、極論であるのは命ちゃんのほうも同じだった。

だから、どちらの意見にもすぐに頷けないし否定もできない。

私は、そこまで考えてはつとなる。

どうして私はこんなにも冷静でいられるのだろうか。

だって、よりもよって吟也が疑われてるんだよ？

それもさんざん吟也のことを話してきたキクちゃんに。

普通だったら。あるいはそれがキクちゃんじゃなかったら、

そんなわけないじゃないって猛然と突っかかっていたかもしれない。
い。

だけどそうならなかったのは、そう言うキクちゃんが一度も私と目を合わせてくれなかったからなんだろう。

その言葉を発しながら、必死に隠そうとしている感情が、
悲しみのようなものに思えたからなのかもしれない。

「ちよつとちよつと、みんなして盛り上がってるところ悪いんだけどさ、

その答えを得るための対策、とつくの間にとっちゃってるんだけどね?」

下手すれば一触即発の気配。

しかしそれを吹き飛ばし、皆の視線を一気に集めたのは真希先輩だった。

「対策って?」

「ああ、うん。最初はまさか潤ちゃんの想い人だとは初めは知らなかったし、

できれば黙ってようと思ってたんだけどね。由宇ちゃんが今回付属に出向してるのって、

紅恩寺クンの監視も目的だったりするんだよね」

初めから吟也が疑われていた。

それは、思いもよらない大きな衝撃。

あまりに大きすぎて心が追いつかない。

私が何も言えない中、それでも真希先輩は言葉を続ける。

「きっかけはね、春の入学願書よ。男であるのにも関わらず本校に入学しようとしたから、

気に留めていたの。由宇ちゃんに監視させようと思ったのは、新しい虹泉が現れてからだけどね」 「それでは、先輩も紅恩寺が今件の首謀者である?」

思わず命ちゃんがそう聞くように。

何だか真希先輩はキクちゃんよりの意見を持っているように思えたけれど。

「だから言ってるでしょ。それをこれから確かめるんだって。

とりあえず、明日会ってみるわ。トイー先生にはそう伝えてあるから」

故にここでやりあっても全くの無駄な労力であると、そう言いたいのだろう。

「それよりも、歓迎会よ。歓迎する新生はいないけど、せつかく料理も作ったんだし」

手を叩き先導するような形で、しびしび見えない拳を下ろした命ちゃんとキクちゃんを連れ立って行ってしまっただけ。

一人呆けたまま残された私。

それに気付いた真希先輩は、すぐに戻ってきて。

「自分を信じなさい、潤。これからの結果が、どう転ぼうともね」

至極まじめな口調での、そんなアドバイス。

私は、吟也じゃないところにそのアドバイスの真意があるような気がして……。

(第50話にじゅう)

50、真希先輩と私のドキドキ罰ゲーム？

それから、身内だけの歓迎会は。

言葉交わすより早くキクちゃんときくしゃくしてしまったせいか、ほとんど憶えていなかった。

料理の味すら覚えてなかったのは、食べ慣れた自分の料理だったせいもあったんだろうけど。

それよりも、相部屋のキクちゃんと今のままお休みするなんてやだなあ、なんて思っていて。

そんな私のわがままを汲んでくれたのかどうかは分からない。歓迎会の後で、部屋に帰ろうとした私を呼び止めたのは真希先輩だった。

どうやら約束の、罰ゲームをしなくちゃいけないらしい。

真希先輩部屋にでも呼ばれるのかとドキマギしていたけれど。

指定された場所は、寮どころか学園の外だった。

いや、厳密に言えば学園の敷地内ではある。

ただ、春とはいえ未だ冬の名残吹きすさぶ森の中だ。

その全てが紅葉する樹。

その種類はわからないけど、秋になれば世界は紅葉の赤が支配する。

それこそが、紅葉台と言われる所以。

そんな紅葉の木々を縫った山道の終わりに、真夜中の罰ゲームを執行すると言っ演習場がある。

罰ゲームの内容は至極単純というか、罰ゲームという呼び方がふさわしくない、

いわば【生徒】としての任務だった。

今日一日、突如現れた虹泉の監視。

いつもは科学班の先輩たちがやってくれていたのだが、

ちょうどいいので現役の【生徒】にもその実物を生で見てもらおうということになったらしい。

真希先輩が、初めからこの仕事を私に罰ゲームとして与えるつもりだったのか、

気を使ってくれた結果なのか、本当のところははっきりしていないけど。

お互い何だか変に意識してしまっていて、何も語らずとも重い雰囲気になってしまった部屋から離れることができたのは、結果的に見ればよかったんじゃないのかなって思う。

キクちゃんの気持ち云々以前に、吟也がすべての元凶扱いされている今に、

私の心はそれをすぐに受け入れるだけの余裕がなかったから。

そして、そんな事を考えながら、演習場へと入ったことを示す仕切りの金網（演習中はここを境に戦闘用の異世が展開される）を潜り抜けようとした時。

「おお、潤君か。わざわざ時間外にすまないね」
「……っ、トイー先生。詩奈ちゃんも。こんばんは」

おそらく、そこで待つてくれていたのだろう。
私の声をかけてきたのは、トイー先生だった。

紅葉台高校の本校ができてから、私の知る限りではほぼ唯一つて
いてもいい男の人でありながら【生徒】の仕事をまっとうした人
物。

正しくも真希先輩の言う英雄であり、今は仙人とも呼ばれ、【生
徒】ならば知らぬものがないだろう雲上の人。

本人は、そう言われても付属の教師なのだからそりゃ知ってるだ
ろうって謙遜するんだろうけど。

そんなトイー先生に隠れるようにしてそこにいる詩奈ちゃん。

終始柔和な笑顔のトイー先生に対して、視線を向けるだけで怯え
たように、顔を隠そうとする。

それは、何だかあべこべな光景。

昨日の件で、どうやら詩奈ちゃんは私のことをおっかないやつだ
と認識してしまったらしい。

私としては、詩奈ちゃんみたいになちゅちゃくて可愛い子を怖がら
せるようなことをするつもりじゃなかったんだけど。

下手に付属の男子に避けられるより、地味にへこんでいる私がそ
こにいた。

それは、ついさっき、言葉のやり取りもないままにキクちゃんと

おくじやくじてしまったせいもあったんだらうけど……。

(第51話にっづく)

51、トイ先生と私の『妖の人』講座

「こんばんは、潤君。……ふむ、そうか。詩奈とは顔を合わせていたのだっとな。」

ほれ、そんなところで恥ずかしがってないで挨拶しなさい」

「……こ、こんばんわ」

おそろおそろ、けど言われた通りに頭を下げる詩奈ちゃん。

それに倣ってもう一度頭を下げつつも、二人のまるで家族みたいな距離の近さに、私はちよつと驚いて。

「あの、トイ先生は、詩奈ちゃんと知り合いですか？」

「……ああ、姪っ子じゃよ。潤さんから見れば孫と爺のように見えるかもしれないがね」

私の不躰な問いに、思っていなかったといえは嘘になるそんな言葉で、

からから、という言葉が似合う笑みをこぼすトイ先生。

思わずその笑顔につられそうになり、それが失礼なことに気付いて。

私は随分とおかしな顔をしていたのだろう。

びくっとなって完全に隠れてしまう詩奈ちゃん。

それに、トイ先生は一層楽しげに笑ってみせて。

「もしかしたら潤君は聞いているかもしれないが、この子に付き

合ってあげてほしいんじや。

わしが行ければいいんじやが、老体にはちときついし、あいにく用事があったのう」

優しく撫でるように、そのしわだらけで大きな手を詩奈ちゃんの頭の上に置くトイ先生。

「付き合っつて言うと、この先にですか？」

この先にあるもの。新しく現れた虹泉。

今までのものとは違い、人を襲う魔物を吐き出すこともなく、この紅葉台山の中心に、堂々と建つもの。

それは何故、そこにあるのか。

一体何の目的でそこにいるのか。

それを自分の目で見て調べる。詩奈ちゃんとともに。

それだけの意味が凝縮されてしまった、足りない私の言葉。

「そ、そうじゃ。実際に目で見た【生徒】の意見も聞きたいと思っつての」

それに答えてくれたのは、トイ先生ではなく詩奈ちゃん本人だった。

「私は構いませんけど……」

おそらく、トイ先生は虹泉が現れてから日常的にここに来ていたのだろう。

詩奈ちゃんを含めた、科学班の先輩たちとともに。

それが、なにやら用事があったから、その代わりに私がすることになった。

そのことについては、詩奈ちゃんと仲良くなるきっかけにもなるだろうし別によかったんだけど。

思わず口ごもったのは、こんな時間にあるトイー先生の用事のことだった。

いくら今のところ害のない虹泉だとはいえ、一度魔物が現れれば、これから向かう演習場は危険極まりない場所へと様変わりする。

魔物に抗うすべのある私はともかくとして、
まだ正式な【生徒】ではない詩奈ちゃんを案じてしかるべきで。

それを置いてまでの用事とはいったいなんなのか。
気になってしまふのはどうしようもないことで。

トイー先生は、私が言い淀んでいるその意味を、察したのだろう。
私の心内の疑問に答えてくれるみたいに、その用事について話してくれた。

「どうしても今日中に詳しく調べなければならんことがあるのじやよ。妖の人と呼ばれる存在についてなんじゃがな」

「妖の人……」

それは、昨日の会議でも話題に上った、昔からいたという魔物の呼び名。

今みたいに、活発に人前に出て人を襲うようになる前の、物語と伝承の中にしかないはずのもの。

「調べていくうちにの、それが魔物とただ単純に同一なものではなく、

【生徒】と呼ばれるものたちに曲法という力を植えつけた張本人ではないか、

と言うことに現実味が帯びてきたんじゃよ」

「……なんで、わざわざそんなことを」

私は、そんなトイー先生の言葉を疑おうとは思わなかった。

私たちの体内にある、曲法という力の始まりとは何か。

それについての明確な答えなどなかったから、疑いようがなかったといってもいいかもしれない。

だからこそその疑問。

何故わざわざ自分たちが不利になるような真似をしてきたのか。

トイー先生はそれに重々しく頷き、それに答えてくれた……。

(第52話につづく)

52、詩奈ちゃんと私が仲良くなるために

「自分たちに反発しうる存在に、抗う術を持たせることで、楽しんでる。

あるいは、その負の感情が、彼らのそもそも生きる糧である。

……ふざけた話だが、それが一般的な見解だ。

まあ、そもそも古い伝承から起こった話であるから、真実がどうであるかはまったくもってあてにならないがね」

なんでも、魔物と妖の人を結びつけ考えるようになったのは、

この紅葉台に伝わるもの、昔々の四方山話を間に受け……もとい、参考にしたものらしい。

途中から誰よりもトイー先生が馬鹿馬鹿しくなったらしく、肩なんぞすくめて話をまとめるトイー先生。

確かに、今私たちがこうして【生徒】として生きなければならなくなつたその理由が、

そんな遊び半分だつて言われれば腹が立つのを超えて呆れたいくらいだけど。

それが、可愛い孫娘……じゃなかった、姪っ子をおいてでも優先すべきことなのかと言われると、

首を傾げざるをえなかった。

確かに、私たちの力の始まりを解明することだつて、必要なことだとは思うけど……。

「そんな妖の人が、その名の通り人に紛れ込み、人の変わらぬ生活をしているとしたら、なんとする？」

トイ先生のその言葉は、昨日の会議で詩奈ちゃんが言っていたものと同じで。

「妖の人ならば……我らの作る異世など気にも留めぬだろう。その力そのものを作った祖ならば、拒絶するはずもない。故にこのままにしておくのはいささか危険を覚えている、妖の人が妖の人であると証明できるものを、一刻も早く探さねばならんのじゃ」

トイ先生は何かを思い出すみたいに、明らかに誰かを名指しにしているように思えて。

「そ、そんなわけでもないじは忙しいのじゃ。護衛として代わりについてきてもらえると助かる。もつとも、そんな必要はないと思うがの」

そこで、顔を出し口を開いたのは、それまで会話に加わることなかった詩奈ちゃんだった。

私ははっと我に返る。
そんな詩菜ちゃんが、私がそれ以上の事を考えないように、気を使ってくれているってことに気付いたからだ。

それは、トイ先生だけでなく詩菜ちゃんも、その誰かの正体を知っているってことで。

私がそれを知ること、あるいは私にとって不都合なことが起こ

るってことを、
知ってるってことで。

「……ええ、元々そのつもりで来たんだし」

私は詩奈ちゃんをじっと見つめて、頷いたのだった。

二人して隠そうとしていることを、なんとしても聞き出してやる
うと心内で思いながら。

それから、詩菜ちゃんと二人きりの夜道。

鬱蒼と茂る森を両脇に固め支えるのは満天の空。

私が星に詳しければ、春の星についての小粋なトークもできたん
だらうけど。

「夜道で足下暗いし、手つないでもいい？」

代わりに私が口にしたのは、トイ先生が去ってからすっかり警
戒心の強い猫のようになってしまった、詩菜ちゃん懐柔作戦のその
一だった。

詩菜ちゃんが危ないから、ではなく。

純粹に私がそうしたいからのお願ひ。

それは、あるいはキクちゃんのような、あまのじゃくのシンデレさんじゃなければうまく行くはずだろうと私は目論んでいて。

「わたしは、べつに構わぬが」

返ってきたのは、期待通りのお答え。

私は詩奈ちゃんの気持ちが変わらないうちに、赤ちゃんみたいにちっちゃな手を掴む。

「そう言えば今気付いたんだけど。詩奈ちゃんのその喋り方、トイ先生の真似してるの？」

「む。その、はつきりそう言われると素直には肯定しがたいものじゃが……おぬし、その、何だか雰囲気が変わらないか？」

そしてそのまま、間髪おかずに仲良しになるための一手を打とうとした私に対して、

返ってきた詩奈ちゃん言葉は、思ってみればもつともな事だった。

「えと、こつちが素かな。普段は人がたくさんいたりして緊張しちゃって、

うまく思ってることが口から出てくれないんだよね。昼間もなんか怖がらせちゃって……ごめん」

厳密に言えば、内なるコス……じゃなかった、ちっちゃくてかわいいものを見たときに、

反応する乙女な力が心を露わにするわけなんだけど。

馬鹿正直にそう言うとお怒りになる人もいたりするので、半分だけ真実を隠しつつ、頭を下げる。

そしてそれは。

詩奈ちゃんと仲良くなるために最初に解決しなければならない本題でもあったんだ……。

(第53話に続く)

53、カチユと私のちょっと卑怯なものさし（前書き）

更新ペースが落ちてきている分、少しずつ分量を多くしていきたいです。

53、カチユと私のちょっと卑怯なものさし

昨日の会議の時、何かに気付き、じっと私のことを見据えてきた詩奈ちゃん。

それは、見方を変えれば睨み付けている、と言ってもよかった。そのせいで、つられてぎくしゃくしてしまっただけだ。

「わ、わたしは別に怖がってなど……」

「あ、うん。それならそれでいいんだ。でも、詩奈ちゃん気付いてたんでしょ？ カチユのことに」

詩奈ちゃんがどうして私のことを注視していたのか、その事に私は予測がついていたから。

「え？ ええと……」

故に私がそう聞くと、言っている意味が分からないといった風の詩奈ちゃん。

それは、カチユのことを知らない人ならば当然の反応で。

私はすかさず胸ポケットに手を伸ばし、そこからカチユ専用の寝袋……お手製の巾着を取り出した。私から見れば、ちょうど爆眠中のカチユが頭だけ出している状態なわけだけだ。

「巾着……の中にあるホッチキスかの？ ふむ、確かに力を感じるの。」

おぬし……潤さまの対魔物の得物かえ？」

科学班に所属しているから卒業した……曲法の力を失っているのかと最初は思っていたけど。

詩奈ちゃんにそれは当てはまらない。

おそらく詩奈ちゃんは特別なのだろう。

トーイ先生の姪っ子と言うことで才能を買われ、

【生徒】になれる年齢より早く現場に慣れさせようとしているのだろうと私は勝手に自己完結していたんだけど。

「ううん。そう言うんじゃないんだ。なんて言えばいいのかな、可愛くて大切な、友達なんだよ」

そんな詩奈ちゃんも、キクちゃんと同じくカチュウのことが見えな
いみたいだった。

もしかしたら最初に会ったとき、その気配だけは感じていたのか
もしれないけれど。

カチュウがカチュウに見えない子達の大半は、そう言う私に一步引い
てしまう。

引かないで受け入れてくれる子なら、こんな私でも受け入れてく
れるんじゃないかって、

ちょっと卑怯な物差しとして扱われていると知ったら、カチュウは
怒るだろうか？

いつもいつも眠い眠い言っている彼女なら、怒ってる暇があった
らそのぶん寝たいって、

言い出すんだろうけど。

「……そうか。確かに、潤さまが大切にしていることはよく分かるぞ。」

そのものも、しあわせじゃて」

「そう思ってくれてれば嬉しいんだけど……」

やっぱり詩奈ちゃんは、私が思った通りの子だった。

そう言って笑ってくれるのが嬉しい。

私が浮かれた笑みを浮かべていると、何やら少し考え込んで立ち止まりかける詩奈ちゃん。

どうしたのと顔を向けると、詩奈ちゃんは何やら納得したみたい
に頷いて見せて。

「そんなおぬしならば、この先に未だ在り続ける虹泉の意味も分かるじゃろう。」

是非意見を聞かせてほしいものじゃ」

まるで先導するみたいに、私の手を引っ張って駆け出していく詩奈ちゃん。

気付けば、何だか距離が近くなったような、そんな感覚。

私はその事実にも、更に嬉しくなつて。

聞かなくちゃいけないはずの事も、その時ばかりはどこかへいっ
ちやつてた。

それはもしかしたら、辛いかもしれない現実にも。

意図しないままに目を背けようとしていたのかもしれなくて。

「ついたぞ、今日も煌々と光っておるわ」

もれなく辿り着いた、演習場の最奥。紅葉台山の頂上。

そこには、何だか自慢するみたいに詩奈ちゃんが言うように、昼間映像で見た虹泉があった。

本来ならば演習用の電灯をつけなければ闇に包まれる場所。

その明かりがないのにもかかわらず、それは確かに私の目にはつきりと映っていて。

「……」

手を伸ばせば届きそうなところまで近付き、私は言葉失い立ち尽くす。

画面を通してものを見ると、実際に目で見るのでは大違いと
いうのはまさにこのことか。

そこにある虹泉は、私が思っていた以上に随分と大きく見えた。
それはもう、一棟の建造物といってもいいかもしれない。

格調高い宮殿、その一角にある四阿つきの祭壇。

元は白塗りであろうそれは、虹色に明滅し、山の頂の闇を照らし
ている。

光源は、四阿の中央にある水溜り。

それが、虹泉と呼べる一番の特徴。

まるで心臓の鼓動のように規則的にうねっていて。

生きていくようで、圧倒される。

みだりに触れてはならないような、恐れ多い感覚すらあって……。

(第54話につづく)

54、詩奈ちゃんと私のこっそりな秘密

「潤さまなら、この虹泉が壊されずにここにある理由が分かると思うがの」

繰り返しの、詩奈ちゃんの言葉。

そう言われて私は思い出す。今まで見てきた虹泉の、その顛末を。

人を襲い、食らおうとする魔物たちを次々生み出そうとするそれ。私たちは、それを目にしたらすぐに破壊してきた。

ただ、危険だからと。人間にとって害になるからと。

もしかしたらそれは、間違いだったのかもしれない。なんて思わされるものが、目の前のそれにはあって。

「……今まで私たちがしてきたことって、正しかったのかな」

思わず漏れ出た、そんな呟き。

詩奈ちゃんはそれに僅かに頷いて見せて。

「破壊しなければ蹂躪され続けたらうことは間違いない。正しくないとはわたしは思わぬ。」

むしろわたしは、これが今までのものとは別のものと考えておる

よ。……たとえば、そうじゃな」

触れそうなほどに近づき、四阿の柱……そのてっぺんを指し示す。

「ここに精緻な細工があるじゃろ。よくよく見てみれば手彫りのよじでの。

というより、この虹泉そのものが手作りのようじゃな。見ていると何より、その作り手の愛情が伝わってくる」

まるで目利きの鑑定士みたいに、どこか陶醉した様子でそういう詩奈ちゃん。

「手作りって、そんな。虹泉を作っちゃったってこと？」

逆に今までの虹泉はどうやって作ったのかってことにもなるんだろうけど。

今までのものは、それぞれの創造主の異世が具現化したものといってもよかった。

ある意味、もともと存在していない幻のようなもので。

「そういつておる。つまり、ここにあるのはその存在からして別ものということじゃな」

「それじゃあ、これって虹泉じゃないんじゃないの？」

魔物一匹出てこないのを知ってから薄々思っていたことではあったんだけど。

そんな根本から覆しかねない考えに、詩奈ちゃんも賛成らしい。どこか満足げに頷いてみせて。

「正確に言えば逆じゃな。ここにあるのが虹泉と呼ばれるもので、

今まで見てきたものは、そう呼べぬ偽者だったとわたしは考えておる」

これこそが真実とばかりににやりと笑みを浮かべる。
それには当然根拠があるんだろう。

私がそう聞くと、詩奈ちゃんは何だか楽しげにそれを説明してくれた。

「そもそも、虹泉と呼ばれるようになった由来はなんなのか。それも、この地に伝わる昔話からきておる。

何でも、虹泉というのは、妖の人の持ち物で、一瞬にして遠くの場所へ移動するものだったらしい。かの赤鬼が青鬼のわなに掛かったときに、助かったのもこれのおかげだと言われている」

そうやって言われてみると、確かに虹泉トラスルゲートという名前には相応しいような気がした。

ソースが御伽噺なのが、完全に鵜呑みにする訳にもいかず微妙ではあったけど。

「あれ？　じゃあどうして昼間はみんなに新たな虹泉が出たって説明を？」

別ものだって説明したほうがよかったんじゃない……」

まあ、今まで魔物が出なかったからってまったく危険がないとは言えないが。

今まさに詩奈ちゃんが口にしたことを、会議の時に言えばよかつたんじゃないのかなってちょっと疑問に思ったわけなんだけど。

「何、それは簡単なことじゃよ。ここにこれがあることを皆に知ってもらえば、

しかもインパクトのある間違っただけで広まれば、これを作ったものも耳にも入りやすくなるかと思っただけ。

さすれば、気になって見に来るかもしれないじゃろう？」

だからわたしはここで待っておるのじゃ。じいじの言う妖の人に会ってみたくての」

今度は秘密をこっそり打ち明けるみたいに。

だけど可愛い笑顔でそんなことを言う詩奈ちゃん。

そしてそれは、私がさっきから聞きたくて保留していたことでもあつて。

「詩奈ちゃんも……その人が誰か、知ってるの？」

気付けば私はそう聞いていた。

真剣極まりない、そんな雰囲気だ。

「……確証はない。聞いて答えてくれれば話は早いんじゃないか。ただ、じいじによれば人に紛れて過ごす彼らは、妖の人同士がお互いを認識する、

共通の名字を持つらしい。今じいじが調べているのはそれじゃな

その言葉通りに。決め付けるのはよくないと、詩奈ちゃんはい

私を知りたかったのはそんなことじゃなかったのに。

私はそのことでそれ以上は聞こうとは思わなくなった。

それは、確証はないって逃げ道に、ただ逃れていただけなのかもしれないけれど。

「……会って、詩奈ちゃんはどうするの？」

かわりに聞いたのはそのこと。

もう一つの、どうしても聞きたかったこと。

「そうじゃのう。こんなわたしでも受け入れてくれる気のいいやつならば、友達になりたいのう」

しばらくして返ってきたのは、【生徒】としての、人に受け入れられない孤独感を如実に表す、

そんな言葉だった。

つれなくて、泣きたくなるような、願いだった。

「詩奈ちゃんひどい。そんな、私っていう友だちの存在を忘れたような言い方して」

「え？ あっ……」

そんなこと言っていないなんて有無は言わせない。

私はわがままなのだ。わがままの勢いのままに、私は詩奈ちゃんを抱きしめる。

詩奈ちゃんは、そんな一方的なスキンシップに、抵抗しなかった。あわあわ言いながら俯く様子がやっぱり可愛くて。

やはり私はそっちのケもあるのかもしれない。

なんとはなしにそう自分を改めて見つめなおし、更に強く抱きしめようとして。

「む、むぐうっ……」

圧迫されて、くぐもった力チユの声。どうやら目を覚ましたらしい。

何かあったのかと、私は至福の時間に泣く泣く別れを告げ、再び胸ポケットから巾着を取り出すのだった……。

(第55話につづく)

55、詩奈ちゃんと私の虹泉探検

カチュ自身、長い長い薄黄色の巻き毛。

ぶんぶん頭を振ってそれから逃れると、巾着から身を乗り出し、じいっとある一点を見つめていた。

つられてそちらに視線を向ける私。

そこには、未だ明滅を続ける虹泉があつて。

「べる……こうせーっ……」

カチュはその瞬間、間違いなくそれに向かってそう言った。

それが、虹泉の名前であるかのように。

それは、朝の会議の映像を見たときに口にした言葉と同じもので、目の前の虹泉は、もしかしてカチュのお友達なのだろうか。

問いかけようとした私だったが、それは言葉にならなかった。

突然離れ、虹泉を見据える私を不思議そうに見ていた詩奈ちゃんのことでもあったけれど。

しばらくじいっと見つめ続けていたカチュが、これといって問題はないと判断したのか、

そのまま穴倉へと引っ込んでしまったからだ。

ならばどうしてわざわざ起きて名前を呼んだのか。

それは、私に伝えるためだったんだろう。

カチユとお話ができるようになって。

そんなカチユが周りから見ればどんな風に見えるのかを知ってからは、

より気をつけるようになったけど。

もしカチユが教えてくれなければ。

詩奈ちゃんの話聞いていなければ。

虹泉の一つとして破壊してしまった可能性もあるのだから。

私は、そんな最悪の結末に身震いしつつも、口を開く。

「……ねえ、詩奈ちゃん。この虹泉もたくさん愛されていたのなら、やっぱり名前あるのかな」

トラベルゲートだからベル。きっとカチユのお友達の人。

となると、ベルを作ったかもしれない妖の人と、カチユは知り合
いの可能性が高くて。

たぶん、その時私は全てに繋がる答えを見出していたんだと思う。

だけど今、等号のその先の答えをはっきり書き出そうとはしな
かった。

その全てが想像上のものってこともあったけれど。

何もしなくてもいずれ答えを突きつけられるってことを、

その時の私は気付いていたからなのかもしれない。

「名前か。どうじゃろうのう。それこそ創造主本人に聞いて見ぬとな。」

ただ、名前はどうか分からぬが、これが虹泉と呼ばれる、その証明はできるぞ。

ついでにじいじが言っていた、曲法の起源が妖の人である、というこもな」

詩奈ちゃんにとってみれば不意といってもいい私の問いかけ。

だけど詩奈ちゃんはそのことで思い出したことがあったらしい。

得意げにそう言った後、丁寧に靴を脱ぎ、祭壇へと続く階段に登っていつてしまう。

私はそんな詩奈ちゃんに倣うようにして、慌ててその後を追いかけて。

「どうしても気になって調べてみたんじやがの。」

この下には、異世と変わらぬ空間が広がっておるのじゃ」

七色に光る泉のところまでやってきた詩奈ちゃんは、

そう言った後、おもむろにその泉へと手を差し入れた。

途端、七色に染まり見えなくなる詩奈ちゃんの手。

再び手をあげれば、その色どころか水滴すらついていない詩奈ちゃんの手がそこにあって。

その時私が思い出したのは、棗ちゃんの部屋にあった異世とその入り口だった。

なるほど、それらはとてもよく似ている。
詩奈ちゃんの言うことも、あながち間違っていないんじゃないかって思えるくらいには。

「中に入ってみるかえ？」

「え？ いいのかな……」

「心配せずとも、もう何度か入ったことがある、平気じゃ」

この先に異世が広がっているのならば、

それは誰かの家勝手に勝手にお邪魔するに等しい行為に思えたけど。
詩奈ちゃんはあまり気にしていないようだった。

「分かった。詩奈ちゃんがそう言うなら」

興味がないと言えば当然嘘になるだろう。

「そうか、ならばしばし待っておれ。縄梯子を持ってくる」

勢い込んで頷くと、そう言って踵返そうとするので慌てて引き止める。

「縄梯子？ 何に使うの？」

「うむ。泉の向こうにある異世は結構な深さがあったの。」

そういった道具がなければ戻ってくるのに苦労するんじゃないよ」

「それってフック付きのロープとかでもいけそう？」

「ああ、別に構わぬが……っ、そうか。お主の能力か」

息をのむ詩奈ちゃんに指し示すは、さっきまでなかったはずのフックつきロープ。

フックと言うより鍵爪と表現したほうがいいかもしれないそれは、私の能力、【物質命題】によってさっきまで髪留めであったもの

を変化させたものだった。

「流石、風紀の長といったところか。能力の発動に全く気付けなかったぞ」

「いやいや、むしろ大変なのは、これを維持することなんだけどね」

元の『モノ』があつて、何かをイメージし作り出すだけならば。

異世のこともあるし、実はそれほど面倒なことでもないのだ。

だが、それはまやかしにも近く、長時間変わったままではいられない。

例外は、カチユだけで。

そんな、感心と謙遜の応酬の中、私たちは連れ立って泉をくぐっていったのだった……。

(第56話にじづく)

56、詩奈ちゃんと私に迫り来るなないろ

初めは虹色の光に掴み所がなくて結構おっかなびっくりだったけど。

ロープがとぐる巻く、終着地点。

そこは、暗闇ばかりの世界だった。

だけど、まじまじ見てみれば上も下も何もかも闇一色、というわけでもなかった。

天井にある七色の光に照らされているおかげか、ほんのわずかばかり、

地面と壁と、天井の境が認識できる。

たとえるなら、前も後ろも、終わりの見えないトンネルの中、といった感じだろうか。

「この先に何かあるのか。終わりが知れぬ故に確証はないが……もう一つ別の出口があるのではないかと考えておる。伝承にもそうあるし、名の意味も繋がるしの」「そっか。じゃあ、せっかく来たんだし確かめてみる？」

この闇の向こうに別の出口があるならば。

その先がどこに繋がるのか、興味がないといったら嘘になるだろう。

「うむ。実はそのために潤さまを呼んだのもあったのじゃ。……その、流石に一人では怖くての」

そんな伺いに返ってきたのは、そんな見た目相応なお言葉。いつもは一人で来てたのかなって、疑問に思った私だったけど。

それでは早速とばかりに、一步踏み出したその時。

世界が震えた。

それはたとえて言うなら、巨大な寒天のように。

その中にいる私たちにも、もれなくそれは伝わってきて。

「……っ」

畳み掛けるように晒されるは、何者かの強い視線だ。

一つだけのようにも数多あるようにも感じられるそれ。

慌てて辺りを見回すが、その出所は分からない。

分からないのに、間違いなく感じる、見られているという感覚。

私はそれを、そこに何かがあるというよりも、

この世界そのものの気配ではないか、と言う気がしていた。

何故なら眠いのを起きてまで、カチユがこの虹泉に対して名前を呼んだからだ。

ただ、こんな時に限って、肝心のカチユは爆睡していた。

そつと巾着の口を開けてみれば、鼻先になんとも可愛らしい鼻ちようちんが浮かんでいる。

そんなカチユの様子を見るに、何か危機的なものが迫っていると

いう感覚は、

正直あまりしなかったわけだけど。

それは、視線を感じて間もなくの、耳に入ってきた轟音により考えを改めざるをえなくなる。

「……詩奈ちゃん、これは？」

「いや、わたしにもとんと見当がつかぬ。こんなことになったのは初めて故……」

思わず息をのみ、手を取り合って前方の闇を見据える私たち。

その音をたとえるならなんだろう？

敢えてあげるなら、夜のトンネル。

車で通るぶんには差し支えないけど、歩いてみて初めて分かる反響する音の凄さ。

一度車が背後から来ようものなら、一体どんな怪物が背後から迫ってくるのだろうか、

といった音がする。

今私たちが感じているものは、それに似たものだった。

いや、むしろそれよりもずっと無慈悲で圧倒的な気配にも思えて。

「詩奈ちゃんっ、しっかり掴まって！」

「う、うむっ」

その正体が露わになった時、私はそう叫んでいた。

迫り来るのは怒涛の水。

七色の光を内包するそれは、天井に届きそうなほどの高さがあっ

て。

瞬きをした瞬間に目の前にあるくらいの速さを誇っていて。

私がフックつきロープを掴み取り、力を込めたのとほぼ同時に、それは私たちを飲み込んでいった……ように見えたんだけど。

「……っ！」

その水に濡れる感触も、酸素を奪われ息のできなくなる感覚も、訪れることはなかった。

かわりにあるのは、上下左右の分からなくなるような酩酊感。そして、悲鳴を上げるよりも早く思うのは懐かしさだった。

そう、私はその独特の酩酊感をよく知っている。

それは、人の異世に入り込んだ時に感じるものだ。

だが、その懐かしさは。

私を形成する心（記憶って言ったほうがいいのかもしれない）のうちの多くを占めているものだった。

それはもう、泣きたくなるくらいに。

「ああ……」

故に私は……深く深くため息をついた。

たぶんそれは、いよいよ確実になってきた不都合かもしれない真実を。

それ以上考えたくなかったからなのかもしれない……。。

すっかり更けてしまった真つ暗闇の中、気付けば私たちは虹泉の脇に投げ出されていた。

慌てて振り返れば、さっきまでであったことなど気のせいであったかのような、

薄ぼんやりと虹色に輝く、変わらぬ様子の虹泉の姿がそこにある。

「……ふむ。今まで何も反応もなかったというのにの。

やはりあの闇の向こうには何かあると見るべきか」

そこでうつむと唸り、考え込む詩奈ちゃん。

うかつに手を出せないのは、何より相手が受身だからなのだろう。

こっちから刺激しなければ何もしてこない虹泉。

何だか、勝手に入り込んで調べようとした自分たちが悪者に見えるてくる始末で。

「となると、この虹泉がここにいる意味はなんなんじゃろうのう」

結局思い至るのはそこだった。

それこそ意思疎通ができようものなら、是非聞いてみたいこともある。

期待して胸ポケットを覗いてみれば。

おそらくはその意思疎通ができるであろうカチュは、いつもにも増して爆睡していた。

全力で寝ている感じ。何か寝溜めておきたいことがあるのかなってちょっと思ってた。

それが正しかったことなど、当然知る由もなくて。

「……まあ、結局のところ現状維持、じゃな。実は近くに監視小屋を作っておつての。」

後はそちらで様子を見よう」

同じく眠そうな詩奈ちゃん言葉とともに案内されたのは、山の頂上を囲み茂る森の一角にある、

テントだった。

そこには、録画のできるカメラまで備えつけられていて。

おこたとみかんが大いに眠気を助長させていて。

何だかやけに疲れた私たちが眠りこけてしまったのもそりゃ仕方ないことで。

不幸中の幸いなのは。

結局一晩経つても、その虹泉に、全くもって変わる様子がなかったことだろう……。

(第57話につづく)

57、キクちゃんと私の辟易するわがまま

そうして次の日。

ある意味朝帰りな気分では、こっそり音を立てぬようと、寮の自室に戻ってきて。

ひとしきり身だしなみを整えると、そのまま踵返すみたいに部屋を出ようとして。

「たった今帰ってきたと思ったら、またどこかへお出かけですか？」

おそらく、私が洗面所から出てくるのを見計らっていたんだろう。せつかく起こさないようにと気配を消していたつもりだったんだけど、

さすがのキクちゃんには通用しなかったらしい。

その問いかけは、どこか私を責めるような成分が含まれている。何より困るのは、キクちゃんは分かかってて敢えてそう聞いているところだろう。

あの時のキクちゃんの矛先は私にではなく命ちゃんにあって、直接言い合いになったわけじゃなかったけれど。

そこはキクちゃんと私。

どこか変なところで通じ合っている。

私はそれに居心地の悪さとキクちゃんの気遣いを感じながら、言

葉を返した。

「どこって……決まってるよ。今日も吟也に会いにゆくの」

登校のタイミングを計つての待ち伏せ。

まさにストーカーの所業であると、キクちゃんからしてみれば、
そう見えるのかもしれない。

だけどこれは、既に昨日の時点で決めていたことだった。

とにかく、吟也に会って、話さなくちゃいけないことがたくさん
あるのだ。

美音先輩との一幕。

歓迎会の時の不可解な行動。

その結果命ちゃんと遭遇したこと、その顛末。

潜入捜査をしている由宇ちゃんとの関係も気になる。

そして何より、一番聞かなくちゃいけないこと。

それこそがきつと今、キクちゃんが昨日までなかった私に対して
の懸念と心配の種なんだろう。

キクちゃんは、それを証明するみたいに。俯き加減でどこか迷い、
躊躇いながら……言葉を紡いだ。

「言わせてもらえればやめることをお勧めします。

思えば潤の『彼』に対する依存と執着は異常です。

妖の人というものは、人の心を掌握し、操ることで人の中に溶け
込むといえます。

これ以上のめり込めば、いざという時に刃を向けられなくなる」

ひと思いに吐き出すみたいに、だけど感情のこもらない無機質な台詞。

それは確実に、私の心を深く抉ってゆく。

「何度でも言います。タイミングがよすぎると思いませんでしたか？」

突然の虹泉に、異世の影響を受けない男子生徒。

歓迎会に本腰入れて参加するわけでもなく、次々とこちらの主力を取り込み、懐柔している」

続くキクちゃんの言葉。

私に深刻なダメージを与え続けているのは、その可能性に私がいつだって見て見ぬふりの知らんぷりをしていたからなんだろうけど。

私が瞠目したのは、一貫して蚊帳の外に敢えて立っていた風だったキクちゃんの、

だけど何もかも把握しているみたいなの、そんな雰囲気だった。

「……あるいは、今起きている事態は、もっと前から仕組まれていたのかもしれないね。

潤が後生大事に胸に抱えているホッチキスこそが全ての始まりだったのかも」

何も答えない私に。キクちゃんは痺れを切らしたみたいにそんな事を言う。

それは、私の妄言（自分としてはそんなつもりはないけれど）に生暖かい目で付き合ってくれていたいつものキクちゃんとは、到底思えないものだった。

今も、胸ポケットでぬくもりを与え続けてくれているカチュウのことを、本気で否定している。

今までの冗談のような雰囲気はそこにはなくて。

だけど不思議と、怒りが沸いてきたりはしなかった。

それは、キクちゃんの言葉が正しいのかもしれないって思っちゃってる部分も少なからずあったからなんだろうけど。

それより何より、言ったキクちゃん自身が。

罪悪感にまみれ苦しんでいるように見えたからなんだろう。

一見すると表情を消しているようにも見えるけど、キクちゃんフリークの私は誤魔化せなかった。

「……ごめんね、キクちゃん。たとえ全てがキクちゃんの言う通りだとしても止められないの。」

吟也が好きなこと……自分を信じることを否定してしまったら、それはもう私じゃないから」

だからこそ、キクちゃんが気に病むことは何もないと。

これから起こる全ての結果を受け入れるつもりなのだ、覚悟しているという意味で、私は笑った。

「既に、手遅れというわけですか……？」

苦しそうに、やっとこ吐き出すみたいに、キクちゃんは言う。

「かもね。……それじゃごめん。もう行くよ」

苦しげなキクちゃんと、どうしようもない自分に。

私は苦笑し、謝って。

くるりと背中を向ける。

吟也が、人間の住む世界をどうにかしようとしている悪い妖の人の末裔で。

その妖しげな力で私の心を掌握し操り、仲間を引き入れようとしているのならば。

止めるのはまさに今、なのだろう。

私はそれを決して口にする事はなかったけれど。

その時もキクちゃんが私を強制的に止めようとしていたなら、抵抗するつもりは全くなかった。

事実、私の背中は、いつでも飛び込んでおいで、とばかりに無防備だっただろう。

でも結局。

キクちゃんはそんな私を止めることはなく。

どこか心配になるような、重いため息をついていたのが印象的で……。

58、付属のみんなと私の二度目のあいたい

私は、罪悪感にも似たいたたまれなさに苛まれつつも。

抗えぬ気持ちを押さえ切れずに、今日も今日とて朝早く、寮を抜け出そうとする。

すると。

引っ込み思案な子たちの多いこの寮において、滅多に使われることのない正面玄関口に、二人の人影があった。

どうやらそこで待ち伏せしていたらしい。

そこにいたのは、どこか落ち着かない様子の命ちゃん、朝からテンション上々の美音先輩だった。

「二人ともこんなところで……どうかした？」

「ん〜。そろそろ由宇っちの様子、見に行こうかと思ってたのじゃ」

私に分かりきっていることをわざわざ聞くと。

美音先輩はわざと誤魔化すみたいにそんな言葉を返してくる。

「私は、周りがどう言おうと、もう一度会って確かめたい。

彼が本当に生徒会長になりうる人物なのか、果たしてそうでないのかを」

「命っちずるいじゃあ。ひとりで誤魔化してるワタシが馬鹿じゃにゃいの」

「そうか……すまない、先輩」

逆に場の流れなど意に介さず、馬鹿正直な言葉を返してくる命ちゃん。

それにぶんむくれる美音先輩に、意味がよく分かっていないままに首を傾げ、頭を下げる命ちゃん。 どうにもかみ合わない二人。それでも二人はうまくやっているのだから、人間関係って不思議だなあって勝手に思ったりして。

「……それじゃあ二人とも、吟也に会いに行くってことだよな」

私も含めた、この三人で。

私がそう問いかけると、命ちゃんは黙って頷き、

美音先輩は由宇ちゃんが心配だからって一言添えながらもそれに頷く。

一見すると一人で行くのは恥ずかしいから、みんなで勇気を出して大好きな人の所に行こうとしているだけなのかもしれない。私個人の主観としてはそのままの間違ってはいないんだけど。一般的に意味するところは大きく異なる。

【生徒】の中でも対魔物の戦闘において優秀で強いものから選抜される委員長の座。

更にその上をいく、【生徒】の顔でもある、副会長。

そんな委員長二人と、副会長が同時に本校の、異世の外に出るなんて、

ここ最近私自身も記憶にない。

その目的が魔物退治であるならば、それはもうほとんど非常事態

に等しい。

紅葉台の町みんなが避難しなくちゃいけないレベルだろう。何も知らない付属の子たちが見れば、そう思われたっておかしくない。

もしかしたら力を押さえ、外出用のフードをかぶっても、パニックになる恐れもあった。

まあ、それはあくまで恐れであって、なるべく騒ぎにはならないようにはするつもりだけど。

でもそれは、私としては色々と好都合だった。

私の知らない間に美音先輩や命ちゃんに会って仲良しになって。いったい誰が本命なのよ！……って、まあそんなこと聞けるわけないんだけど。

それこそ命ちゃんが言うように、ただ純粹に【生徒】としての才能が吟也にあるのか、

そうでないのかをはっきりさせるためには、二人にいてもらったほうが良いと思っていたからだ。

「早めに行かないと、付属の校舎に入るわけにいかないし」

おかげさまで二度ほど会う機会があったのに会えなかったと、

自分だけが分かる意味のない皮肉をもらしつつ、私たちは連れ立って寮を出る。

それは正直なところ、今までで最も緊張する外出だった。

真希先輩やキクちゃんに少なからず脅されて諭されていたせいもあつたんだろう。

認める認めないはともかく、確かに吟也には『すべての原因の根

幹である』と思わせる何かがあったのは確かだったから。

付属の生徒のための通学の道。

つい先日、足を運んだばかりの、本校と付属を遮る、隔たりの始まりがある場所。

前に来たときよりも若干遅かったようで、その場所には既に多くの付属の生徒たちがいた。

「お、おいあれっ、本校の【生徒】じゃねえか？」

「な、何でこんなところにつ」

「どっかで魔物でも出たのか……？」

初めは、緩やかな畏れ。

それまで一定の行動を取っていた彼らは。

私たちに気付くや否や、ぱっと動きを止め、次々とざわめき騒ぎ出す。

むしろ興味本位の野次馬根性で近づこうとするものもいるくらいだから、

さすが付属の男子ってちょっと思ってた……。

(第59話につづく)

59、吟也と私の軽妙な奇跡、その振る舞い

私たちに気付くや否や、ぱっと動きを止め、次々とぞわめき騒ぎ出す付属のみなさん。

むしろ興味本位の野次馬根性で近づこうとするものもいるくらいだから、

さすが付属の男子ってちょっと思つて。

「うにゃ。このままだとまずいにゃ」

その一時の興味がどんな結果を招くのか、まさか知らないわけじゃないんだらう。

知っていてやっているのならばなんと愛すべきお馬鹿さんたちだらうかと、

私は一つ笑みをこぼし、美音先輩の言葉に従う形で、外出用のフードつきコートを脱ぐ。

それに命ちゃんも美音先輩も続いて。

とたん、その場の空気がまさに一変した。

別に異世を展開したわけじゃなかったから、変わったのは彼らの空気だったんだらう。

「うお、委員長だ！ 副会長もいるぞっ！」

「ひいっ！ なんの嫌がらせだよっ！」

「に、にげるおっ！」

自分を守り正当化するための叫び。

平気なわけがないその一言一言が、確実に私たちの心を削ってゆく。

こうなることが分かかっていて姿を晒したわけだから、
覚悟していたぶんダメージは少なかったかもしれないけれど。

それでも、昔はできたはずの言われたら言い返す、やられたらやり返す、

といった人間らしい行動が、今の私にはできなかったから。

一言一言浴びせられるたびに人でない何かに変わってしまったているような錯覚に陥り、

ただただ立ち尽くすことしか私にはできなかったけど。

「どうしてっ……」

問いかけても答えの出ない眩きを漏らし、一歩踏み出したのは命
ちゃんだった。

比較的外に出ることが多く、慣れてきていた私と違って、

あまり外に出る機会の無い彼女にしてみれば、それはかなりの衝
撃だったのだろう。

その怒りを含んだその眩きに、私も美音先輩も驚いて顔を上げる。
見れば、命ちゃんはやっぱり怒っていた。

自分は何もしていないのに。

何かしようとする思っていないのに。

どうして拒絶するのかと。

【生徒】になつてからもう何度も何度も繰り返しただろう言葉を胸に、さらに一歩踏み出す。

人としての、当たり前前のコミュニケーションを取ろうとする。

だけど結果は言わずもがな、だった。

蜘蛛の子を散らすようにとはこれまた言い得て妙で。

命ちゃんを中心に人の輪押し出されるように広がり、後退し、恐れを伝播させる。

これまでのんびりと歩いていたはずの付属の生徒たちは。

一斉に安全な場所……付属の校舎のほうへと逃げ出してゆく。

それが悔しくて、とても悲しくて。

さらに追いかけてよとするとする命ちゃん。

見ていられなかった。

私はこれ以上傷口を広げないようにと、命ちゃんを止めようとして……。

「あつ……」

その重い雰囲気不散らすような、驚き、呆けたような咳きを漏らしたのは誰だっただろう？

そんな事も考えられないくらいに、三人そろってある一点を見据え、立ち尽くしていた。

付属の生徒の、緑色の群集が開けたその向こう。
同じく、緑色の制服に身を包んだ吟也と由宇ちゃんの姿がそこに
あった。

二人も、私たちを目に留め、同じように硬直しているように見え
て。

刹那の膠着。

でも私にとってみればとんでもなく長い時間。

それを破ったのは、吟也に寄り添うように（ここ重要）していた
由宇ちゃんだった。

その声までは届かなかったけど、どうやら委員長クラスが三人揃
い踏みなのに驚いているらしい。

そのうちの一人は由宇ちゃんにとってみれば相方であり直属の上
司なわけで。

今私たちがここにこうしているのは勝手に、独断な行動であつた
わけだから、
当然由宇ちゃんにしてみれば寝耳に水だったんだろう。
ちょっとかわいそうになつてくるくらいに、何だか慌てていて。

「……っ」

その時の由宇ちゃんが何を言ったのかははっきりと分からなかつ
たけれど。

それを聞いていた吟也の雰囲気、みるみるうちに変わってゆく。

どうやら、私たちの事を見て逃げるように避けている他の生徒た

ちに、今更気付いたらしい。

今の今まで気付かなかったことすら凄いいことなのだとわかっていないのは、

きつと吟也ばかりなんだろうけど。

しばらく辺りをせわしなく見回していた吟也は、何を思ったのか急に私たちへと視線をロックオン。他の有象無象とは明らかに違うリアクションに、別の意味で私たちが固まっていると。

あるうことが吟也のほうからこっちへ近づいてきた。

ほとんど走り出しそうな勢いで。

「おはよう、潤ちゃん。それと美音先輩と塩生さんも。みんなそろってどうかした？」

まさかこの僕に会いに来てくれた、とか？」

一瞬だけ、怒られるのかなと思ったけど。

それはどうやら気のせいだったらしい。

やけにテンションの高い、笑顔の挨拶が返ってくる。

しかも、妙に軽い感じ。

……いや、元々こんなものだったかな。

先日久しぶりに再開した時はこっちもテンパってて気づかなかったけど、

吟也の方も緊張していたのかもしれない。

そんな様子が嫌みなく似合うところも憎らしいやら愛おしいやらで……。

（第60話にっしゅん）

60、由宇ちゃんと私の白い自己紹介

私としては、最初に名前を呼んでもらったことで、いつの間にもやら知り合い以上の雰囲気のある美音先輩や命ちゃんに対して優位性というかおおらかな気持ちでいられたから、それだけでも良かったわけだけども。

「え？ 吟也、知り合い？」

由宇ちゃんはそんな吟也を見て目を丸くし、私たちを見て、バツの悪そうな顔をしていた。

その様子を見るに、由宇ちゃんは吟也と私たちの関係について聞いてなかったんだろう。

むしろ、三人も揃いに揃ってなんの用だ、といった、どちらかという面倒臭い奴らにあっちまっただけで感覚も受け取れる。

基本真面目な娘だから、実際はそんなわけはないんだろうけれど。そんな由宇ちゃんは、吟也がいろいろの意味合いで最重要人物であることを、知っているはずだった。

だから男装までして吟也の側にいるという羨ましい体験をしているわけだが。

いつの間にやら知り合い以上だったと言う現状にショックを受けているのが手に取るように分かってしまう。

まあ、それは私自身もそう思っていたからなんだろうけど。

「……おはよう、吟也。そのまさかよ。ちょっといくつか聞きたいことがあったから」

今は、そのあたりの説明も後回しにして。

お決まりの挨拶と早速の本題。

「おはよう」

「おはよくにゃー。吟也くん。……を、そっちの人は、吟也くんのコレかにゃ？」

それにすぐさま続く命ちゃんは、緊張してるのかいつもより数少なくなぐぺこりと頭を下げて。

美音先輩は、それこそ格好の獲物を見つけたかのような怪しい笑顔で、何故かサムズアップ。

こちらは男の子のフリをしている……しかも初対面同士を装っている由宇ちゃんをからかう気満々だった。

まあ、それも、先輩なりの緊張を和らげる手段だったんだろうけど。

「な、な何言って！……どうも、クラスメートの若穂由宇です」

思わず詰め寄って胸ぐらでも掴み上げそうなそんな勢いの由宇ちゃん。

あれはもしかしなくてもばればれなんじゃなからうかとちょっと思っ。

だって、そうやって照れるさまは同性でもぐっとくるくらい可愛いんだもの。

「ただどそれも一瞬で、我に返ったかのように慥然とした言葉を締める由宇ちゃん。」

「三水潤よ。……えーと、よろしく」

「どうも、私は塩生命だ」

「あ……は、はいっ。よ、よろしくですっ」

かといってせつかくの潜入捜査を台無しにするわけにもいかない。反射的に私と命ちゃんが頭を下げると、なんだか随分と恐縮していた。

「同学年なのに何故そこまでして下手に出る必要があるのかと内心へこむ私。」

「見ると、命ちゃんも似たような感じで困っていた。」

「直属の上司？ とはいえ美音先輩に関してはむしろフランクなところを見ているから余計にそう思えて。」

ふと気がつき目をやると、さっきまでなんだか怒っていた風の吟也が楽しげに微笑んでいるのが分かって。

「それに私が一にも二にも安堵していると、そんな穏やかな雰囲気のまま吟也は口を開く。」

「それで？ 何か僕の用事があるんでしょ？ っていうか、三人は知り合いだったんだね」

「今更ながら、横のつながりに驚いている吟也。」

「まあ、言われてみればそんなことを話す機会なんてなかったわけだから、」

吟也が世間の狭さを感じるのも仕方ないんだろう。

「ええ、ちよつと縁があつてね。生徒達の中でも特に仲良くさせてもらつてるわ」

魔物を倒すための力に優れ、お互い切磋琢磨して果てにはお互い委員長の座につくことになった。

きっかけと言えばそのあたりだろうけど。

そのあたりの詳しいことは、口からついて出ることにはなかった。たぶん、無意識に避けていたところもあつたんだろうけど。

「それより吟也……あなた付属救援隊に入ったんですって？」

「うん、美音先輩に歓迎会のこと教えてもらったからさ」

ちよつと不自然に話題を変えたかな、と思つたけど。

吟也は気にした風もなく、美音先輩に視線を向けつつそう答える。つられて私も美音先輩のほうを伺つと、さっきまで笑顔だった美音先輩は本気で不満そうな顔をしていた。

「せつかく教えたのにやゝ、これで出張中の副委員長の埋め合わせできると思つたのに、」

吟也くん生徒会室に来ないんだもの」

出張中の副委員長のところでびくりと反応する由宇ちゃん。

そう言う正直な反応をするから美音先輩がおもしろがつて由宇ちゃんで遊ぶのだとは、

それを楽しんでいる極悪な一人としては何も言えないわけだけど

.....。

(第61話にじゅうく)

61、吟也と私の惑わせるいろんなもの

「せっかく教えたのにやゝ、これで出張中の副委員長の埋め合わせできると思っただのに、

吟也くん生徒会室に来ないんだもの」

出張中の副委員長のところでびくりと反応する由宇ちゃん。

そう言う正直な反応をするから美音先輩がおもしろがって由宇ちゃんを遊ぶのだとは、

それを楽しんでいる極悪な一人としては何も言えないわけだけど。

そんなお遊びの一方で、美音先輩はいきなり本題に入った。

歓迎会の折に、生徒会室へたどり着く力がありながらそれをしなかった本当の理由。

行き先は分かっていたけど。

それを吟也の口から聞いてみたかったのは確かだ。

「いや、それは……どっちにしる無理だったんじゃないですかね。僕、本校のこととか生徒のこととか全然知らなかったし、運良く無事だったのも潤ちゃんのおかげだし」

「私のおかげ？ ……それってどういうこと？」

そんな美音先輩の問いに対し返ってきたのは予想だにしていなかった、そんな言葉だった。

「あ、うん。僕さ、本校に広がってる異世ってやつ？」

あんまり影響みたいなんだよね。それって、潤ちゃんが近くにいてくれたおかげだって聞いて……」

思わず勢い込んで聞き返せば、すかさず返ってきたのは、うれし
いんだけど今は複雑なそんな言葉で。

「誰にそれを？」

「ああ、この話は若穂から聞いたんだけど」

畳みかけるみたいにさらに問い質すと、今度は申し訳なさそうに
そんなことを言う吟也。

「え？ あ……え？ その、すいませんっ」

するといっそう恐縮した様子で、何故か謝ってる由宇ちゃん。

「……」

二人して何なのさ。一体私ってばどんな子に思われてるんだろう？

眼力とかあるとはよく言われるけれど。

その時思い出したのは、オレのものはオレのもの、

お前のものはオレのものを地で言っていた幼少のみぎりの頃の記
憶だった。

吟也と離れ離れになったのはその頃だったから、

今もそうなんだろうって思われてもおおかしくなくて。

「……そ、そう。そうだったら私も嬉しいことだけど。

やっぱり言うだけあって、吟也にはもともと才能あったんじゃない

いかしらね。

「じゃなきゃ、もっと世界に【生徒】が溢れていてもいいはずだもの」

それにへこんでる自分をひた隠しにしつつ、私は心底そうだったら嬉しいけど、

それって自分が巻き込んだことになるんだろうなって思いつつも、もっともらしい言葉でまとめる。

なるべくおっかない自分にならないように気をつけながら。

そんな私に、由宇ちゃんも気付いたらしい。

まだどこか引けてる部分はあつたけれど、納得したように頷いている。

「はは、そうだったらいけど」

「……」

それに、ごくごく純粹に、嬉しげに同意するから、私は返って分からなくなる。

信じる心のその周りに、それを見えなくするいろんなものがくっついて……私を惑わせる。

「紅恩寺は自分を知らなすぎだ。君なら、生徒会長にだってなれるはず」

そこで、すぐに言葉を返せなくなった私の代わりに吟也の言葉に答えたのは命ちゃんだった。

それは、吟也の言っていることが真実であると仮定しての、命ち

やんの望み。

おとぎ話に出てくるような、みんなを救う、無敵のヒーロー。それは、吟也が私に語ってくれた夢であり、その瞬間私にとっても夢になったもので。

嫉妬は、適度ならば乱雑していた心を落ち着かせる効果があるらしい。

私ははっと我に返り、そう言えばと再び口を開く。

「そう、それよ私が一番聞きたかったのは。吟也、あなた生徒会長になること約束したんですって？　そうならそれで、私に一言あってもいいでしょう？」

やっぱり私は大きくなって変わってないのかもしれない。そう思える独善的な言葉。

「え？　せ、生徒会長っ？」

それに吟也よりも早く反応したのは由宇ちゃんだった。

どうやら歓迎会での命ちゃんとの秘密のやりとりを由宇ちゃんも聞かされていなかったらしい。

ひどく驚いた様子で、吟也を見上げている。

「ちよ、ちよっと待って！　何か話が大きくなってない？　いや、確かにそんな約束はしたけど……」　「ひどいじゃあ。あたしの約束は守ってくれなきゃかったのに命ちゃんとだにゃんて」

「そ、それはっ」

でもって、そこにかぶせてくる、何だか誤解を招きそうな美音先輩のセリフ。

吟也は、なんて言うか可哀想なくらい困っていた。

そう言えば、こつこつとちかを選ぶ、

みたいなシチュエーションが吟也は特に苦手だったなあって、思い出して……。

（第62話につづく）

62、吟也と私の納得と理解はべつだから

「ごしゅじん、もてもてやわあ」

「さすがたいちよー、罪なお人、であります」

まさに、その瞬間だった。

舌足らずな、二人の少女の声。

それに、胸元で深い眠りについていたカチュユが反応し、身じろぎする。

もしかして、吟也の近くにも、カチュユのお友達がいるのだろうか？

いや、考えなくちゃいけないのはそこじゃない。

それは確かに、吟也のいる方から聞こえたんだ。

その声が由宇ちゃんのものではないのは間違いない。

はっとなつて見回すも、そこに声の主は見あたらなかった。だけ。

『ごしゅじん』や『たいちよー』。

その呼び声が吟也に対してのものならば。

カチュユの言う『ボス』が、吟也と言うことになるわけ。

カチュユは、私の能力によって生まれたわけではなく。

初めから吟也によってつくられたものということになって。

ますます、キクちゃんの言うことが信憑性を帯びてきたような、そんな気さえしていたけど。

由宇ちゃんはもちろん、吟也も一見するとその声が聞こえていない感じだった。

そこで生まれるは、吟也にが諸悪の根元ではないかもしれない別の可能性。

吟也がその声の主のことを知らないのならば、何もかも知らないのならば。

何者かに濡れ衣を着せられているのかもしれない。

私は、藁にもすがる思いで、そんなことを考えていて。

「紅恩寺、喋るなよ……二人だけの秘密だからな」

深く考え込んでいた私にとって見れば、随分と意味深に聞こえなくもない命ちゃんの言葉。

一瞬混乱したけれど、どうやらそれは、誤解かどうかも怪しいところだが、

それを解こうとしている吟也に対しての口止めらしい。

吟也と命ちゃんの、共通の秘密。

命ちゃんは頑なで、決して口を割ろうとはしなかった。

今この状況で考えれば、命ちゃんも怪しまれる事態になりかねなかったけれど。

私としては、その秘密の内容自体は、大したことじゃないと思っ
ていた。

そう信じたかったっていうのも大きいけど、私には秘密を共有し
たがる命ちゃんの気持ちがちょっと理解できたからだ。

今までそんなことにとんと縁がなかったから。

どんな些細なことでも、普通の女の子っぽいことをしてみたいっ
て、

思うのは仕方ないことじゃないかって。

だけど、理解と納得は別だ。

命ちゃんが口を割らないのならば、当然矛先は吟也に向くわけで。

「……吟也っ！ この私に隠し事なんかしていいと思ってるの
！」

自分でもびっくりするくらい、悔しがってる声が出た。

「わあっ？ 潤ちゃんが昔に戻ったーっ！」

いきなり理不尽な怒り方をする私に、ガキ大将だった頃の私のこ
とを、吟也は思い出したらしい。

折檻食らう前にとっと逃げたほうがいい……なんて気配があり
ありと伺えたけど。

それでも昔のように逃げることはせず、なにやら感慨深げに考え
込んだ後、

吟也はそれに答えてくれた。

「べ、べつに潤ちゃんが言うような隠し事なんてないって。

塩生さんとは、この子を探してた時に会っただけだよ」

「……この子？」

吟也はがそう呼ぶ、第三者。

それは、吟也が背中に背負っていた赤い竹刀袋の中にあつた。

一瞬、さすまたかと思つたが、よく見ると違つ。

Y字の部分が両側についているそれは、スパナだつた。

身の丈二メートルを超えるようなものが、あるとすればの話だが。

と。いよいよなまぐさになつてきたカチュが、口を開きもせずにと。
ただ身じろぎしてきた。

それは言葉のない合図。

つまるところさつき聞こえた声の主の一つは、そのスパナなのだらう。

だとすると、もう一人は……さりげなく吟也を見やり、私は当たりをつける。

とにかく目立つのは、その白銀色の髪の上に乗っかるサングラスだつた。

(あれ、ちょっと待って……)

さつきまで、吟也は彼女たちに気づいていないかもしれないと、
そう思っていたけど。

『この子を探していた』。

その言葉は、彼女たちの声が聞こえて存在を関知していなければ出ないはず。

ものを大事にする吟也だから、ものをひとのように呼んでもおかしくないって納得するよりは。

聞こえていて、しかしそれを私たちに知られぬように空とぼけていたと考える方が自然な気がした。

「……そう。嘘は言っていないみたいね。吟也、やっぱり変わってないわ。

そうやって、自分の持ち物に、まるで家族みたいに接してるとこ」

それでも私は……そう呟いていた。

心うちとは真逆の、嘘八百を。

私はここに来て、外に出たその言葉を信じたかった。

約束のためにカチュを預かった時。

大事なものと離ればなれになる、吟也の神妙な顔が、確かに焼き付いていたから。

「うん。『もの』は大切にしなさいって、よく親父とかにも言われたしね。

……そう言えばさ、それで思い出したっていうか、ちょっと聞きたいことあるんだけどさ、

僕が引越す時、【生徒】になってここに帰ってくるって約束のときの人質って、

潤ちゃん今持ってる？」

まるで私の考えていたことを見透かされたかのような、とってつけたような吟也の言葉。

「何よ藪から棒に。しかも人質って、物凄く人聞き悪いわね。」

……まあ、言いたいことは分かるっていうか、一応持つてるけど、それがどうかしたの？」

人質。たぶん吟也は、冗談めかして言ってるつもりなんだろう。

私が、カチユのことを認識していることを、知っているのか。

その言葉からは判断できなかった……。

(第63話につづく)

63、カチユと私の面と向かわなくちゃいけないこと

人質。たぶん吟也は、冗談めかして言ってるつもりなんだろう。私が、カチユのことを認識していることを、知っているのか。その言葉からは判断できなかった。

「あ、うん。まだ約束はこれから叶えるところ、だけどさ。こうして戻ってきたわけだし、返してもらおうかなって思ったんだけど……いいかな？」

「……それは嫌」

それはもう、ほとんど反射的だった。

きっぱりはつきり、否定の言葉。

思えばそれは、吟也に対して初めての反抗で。

「イヤよ。だって……人質だもの。返しちゃったら、約束果たさなくてもって、

思つかもしれないでしょ。わがままな暴君の相手なんかしないですむって、そう思つかもしれないでしょう？」

私は言い訳するみたいに発した言葉に対する理由を与える。

その理由は、真正正銘の本音だった。

今更カチユと別れたくない。

うっん。カチユを返すことで私は要済みになってしまっのが嫌だ

ったんだ。

今、返してしまったら、そんな風に吟也を信じられなくなりそう
で怖かったんだ。

「や、そんな事しないって」

「でも！ 私は不安なの。吟也が……っ」

私の知っている吟也とは、取って代わって別物になってしまっ
うな気がして。

その先は、聞かなければならなかったはずの言葉。

だけど、私の唇はかさかさになって痛くて。

それ以上の言葉をついてくれない。

「あのさ、だったら……」

何か、この私のわやくちやになっている心を解きほぐすいい方法
があるのだろうか？

あるいは、とどめを刺すような言葉が。吟也は、笑顔のまま改め
て口を開こうとして……。

その瞬間それを遮るように鳴り響いたのは、始業前のチャイムだ
った。

「あつ、予鈴鳴ったにや。二人の邪魔にならないように、あたし
たちはもう行くにや」

「それもそうか。よし、紅恩寺、また会おう」

そのタイミングが良かったのか悪かったのか。
離し立ててくる美音先輩と命の言葉は、私の心を一時でも現実に戻すには十分の威力を持っていて。

「ちよ、ちよつと？ な、何言ってるのよ！ って、もう行かないきゃつ。」

えっと、そのっ……それじゃっ！」

気づけば私は、吟也から逃げるように駆け出していた。

結局肝心なことは聞けなかったけれど。

今回の件に吟也が、大きく関わっているかもしれない。
どこかその事に、確信めいたものを覚えながら……。

カチユのことを返して欲しいと、そう言われた時。
とつさに拒絶したのは、色々認めたくなかったからなんだと思う。
吟也が、カチユのことを知っていて、私に預けたかもしれないってことを。

カチユは、本校の内情を知るためのスパイで。
私はただ利用されていただけなのかもしれない。

……そんな風に考えてしまう自分が嫌だったんだと思う。

でも、その答えも今日中には出るだろう。

私たちの独断行動を知っていた上で怒るでもなく、真希先輩が改めて宣言したからだ。

「直接会って話すわ。一応、トイ先生のお使いってことで生徒会室に呼ぶつもりよ。」

果たして、馬鹿正直にやってくるか、やってきた上でこちらの問いにちゃんと答えてくれるか、楽しみね？」

それは、一度自分たちの敵と認識されれば、直接手を下す。そう言った意味合いも孕んでいて。

信じるというてはばからない私にとってみれば、それを止めることなどできるはずもなく。だとするなら、私のできることは何か。

それは、カチユとの対話だろう。

私はもう気付っちゃってる。

さつき、吟也と話していたとき、珍しくカチユが起きていたことを。

起きていた上で、隠れるように息を潜めていたことを。

それに、何か意味があるのは間違いないだろう。

ここは腰を据えて聞き出す必要がある。

私はそう気合いを入れて寮の自室へと戻ったんだけど……。

(第64話「くじり」)

64、キクちゃんと私の久方なスキンシップ

ここは腰を据えてカチユと対話する必要がある。

私はそう気合いを入れて寮の自室へと戻ったんだけど。

「……………き、キクちゃんっ!?!」

入った瞬間、目の前に広がる光景に愕然とする。

点呼の後、真希先輩のお説教を受ける形になった私より先に、部屋へと戻っていたキクちゃん。

機嫌が悪そうなのは相変わらずで。

むすつとして口数が少なかったのもそのせいだと思ってたんだけど……………。

私は名前を呼び、急いで近付く。

意識は失っていなかったらしく、それに応えるようにキクちゃん
が起き上がろうとする。

「あ、あんまり無理に動いちゃだめだよ！ あ、頭とか打つてない……………?」

「平気……………です。いつもの貧血ですから」

とつさに私が支えると、それでもよるよると起き上がり、

明らかに無理してる口調で虚勢を張りつつ、自分のベッドへと腰掛ける。

「いつもって、最近はずいぶん元気だったじゃない」
「……」

確かに、【生徒】としてこの紅葉台へやってきて、しばらくは新しい環境に慣れなかったのか、よくキクちゃんは体調を崩していた。

同郷で一緒にやってきた棗ちゃんの方がむしろ元気一杯で、棗ちゃんがああして倒れた時は随分と驚いたものだけ。

私の問いに、キクちゃんは黙ったままだった。むしろ、その余裕すらないのかもしれない。

ここ最近はずいぶん元気だったのにどうして？
考えたら……すぐに答えが出た。
私のせい、なんだろう。

吟也への懸想。それに対する、もしもの憂い。
私はキクちゃんが心配してくれているのを分かっているが、自分の欲を押し通そうとしていた。

それは、すごく自分勝手に思えて。

「待ってて。今保健室に連れて行くから！」
「え……あつ」

もしかしたら、自室で大人しく寝ていた方が、キクちゃんにとっ

てはよかったのかもしれない。

だけど、かなりテンパっていた私は、僅かばかりの抵抗を見せるキクちゃんを背負い、

保健室（医務室）へとダッシュした。

「強引ですね……」

「ごめん。でもここへ来たばかりの頃を思い出してさ」

ぼそりと、首のうちをくすぐるキクちゃんという言葉。

確かにこんなことくらいで罪滅ぼしになるとは思っていなかったけど。

私はそれではつきりと思い出していた。

ここに来たばかりの頃。

キクちゃんには、明らかに異質な世界と、

その世界の住人になってしまったことへの恐怖、緊張感があったようだった。

今ほど元気に毒を吐くこともなく、戸惑い、怯え、そのストレスのせいか良く倒れていた。

比較的体格に恵まれていた私は、そんなキクちゃんを背負うことで初めて自分の価値を知ったような気さえしていた。

自分は無駄じゃないんだって思えることが嬉しくて。

むしろ嬉々としておんぶしていたと思う。

それをキクちゃんは、すぐく恥ずかshがっいて。

ここ最近ご無沙汰だったのは、そのせいだったのかな、なんて思

ってただけだ。

「全く、恥ずかしい……」

「そう思うなら……倒れなきゃいいんだよ」

顔を隠すことで、背中からダイレクトに聞こえるキクちゃんの言葉。

私はそれに、笑顔でそんな事を言ってみせて。

「我が侂極まりないですね」

本当は、私がこっぴどいだけ。

キクちゃんは欲望に忠実な私を理解した上で、そんなことをぼそりと呟く。

「わがまま上等。合法的にキクちゃんとスキンシップできるんだもん」

返す言葉が本気だから、自分でもたちが悪いよなってちょっと思う。

それにキクちゃんは、やれやれとばかりに深いため息をついてみせて。

「でも、本当に我が侂なのは……私、なのかもしれない……」

弱々しく、かすれた呟き。

そのかわりに、僅かばかり肩にかかる力が強くなって。

「……ごめんなさい」

「……っ」

意識が途切れ、再び眠りにつこうとするその瞬間。

ぎりぎり聞こえるか聞こえないかの声で放たれたのは、謝罪の言葉。

それが、背負い運んでいることへなのか。

私には判断がつかなかった。

それは……一時でも穏やかな眠りについたキクちゃんの邪魔をしなくなかったというのもあったけれど。

それから、私は、キクちゃんを医務の先生に任せ、訓練と言う名の授業を受けて。

あつと言う間にお昼休み。

昼食をいただくより先に、キクちゃんのいる保健室に寄ると。

未だ熟睡中のキクちゃんの代わりに私の話し相手兼お昼の友になつてくれたのは、

付属でスパイ活動中？ のはずの由宇ちゃんだった。

まあ、保健副委員長である彼女ならば、そこにおいてもおかしくは

なかつたんだけど……。

(第65話にじづく)

65、由宇ちゃんと私の挑戦する微笑

「……ええと、確か由宇ちゃんは真希先輩に言われて吟也にくっついてたんだよね？」

所変わって、本校内にあるカフェテリア。

お昼のクラブサンドに手をつけるより早く、私は由宇ちゃんにそんな事を聞いていた。

それは、とつても親しげに吟也の名を呼ぶ由宇ちゃんのことになって仕方がなかったのが半分で。

もう半分は、吟也が今件の首謀者かそうでないのか、少しでも早く見極めたかったからなただけだ。

「い、いえ。確かにそうなんですけど。吟也と知り合ったのは偶然です。」

たまたまクラスが一緒に、隣の席で……それで自己紹介したときに、

監視対象だつて知ったんですけど……す、すみません」

のろけ自慢かこのやろー。つといった雰囲気から出てたんだろっ。

そのせいでひどく恐縮した様子の由宇ちゃんを見て、ようやく我に返る私。

こんなさもない嫉妬ばかりしていると一番に嫌われるぞ、なんて自分に言い聞かせながら。

「由宇ちゃんは……監視しててどう思った？」

何しろ彼女は吟也の一番近くにいたわけだから。何か気付いたことがあったかもしれない。

故にそう聞くと、由宇ちゃんはそれに一つ頷いて。

「そうですね。これは僕の予測ですけど、吟也は僕の正体、

少なくとも女であることには気付いてたんじゃないかと思います。だけど、その事を言及することはありませんでした。

何も言わずに、僕のことを友達として扱ってくれたんです。

……男友達、と言う感じではなかったですけどね」

思い出に浸り慈しむように、由宇ちゃんは私の聞きたかったこととは少しずれた答えを返してくる。

「後、いくら【生徒】としての力を抑えられるといっても、

僕が【生徒】であることにはわりはなくて……たぶん、無意識には感づかれてたんでしょうね。

他の級友たちは、みんな僕の事を避けるんです。さり気なく自然に、いないみたいに」

そんな自分語りをするさまは、吟也の魅力にやられてしまった美音先輩や命ちゃんを彷彿とさせる姿で。

やっぱりそうかと半ばもう諦めモードでいると、さらに由宇ちゃんは言葉を続けた。

「だけど吟也は違いました。何だかんだいって、いつも一緒にい

てくれて……」

「そんな吟也が今、疑われているの。由宇ちゃんは、それについてどう思う？」

このままだと、延々のろけ話を聞かされ続けるかもしれない。

そんな恐怖に駆られた私は、続きそうな言葉を遮るように、聞きたかった本題の方へと無理矢理軌道修正する。

すると、由宇ちゃんはそれに対して深く深く考え込んで。

「確かに、吟也は歓迎会でも一人、元気でした。級友達がもがき苦しんで倒れ行く中、

彼だけがその負荷に気付きもせず平然としていたんです。

その時は凄いつていうより怖いって思ったりもしたんですけど……」

由宇ちゃんはそこで一呼吸置き、理性の灯った力強い瞳で私を見上げる。

「例え吟也がそうだとしても、大丈夫なんじゃないかなって思います。

吟也なら僕たちが本当に悲しいとか辛いとか思うようなことは絶対にしないはずですから」

幼馴染みの潤さんならば、僕よりもその事をよく分かっているでしょう？

そう言わんばかりの、由宇ちゃんの言葉。

それは、何と云うか目からウロコが落ちるような、そんな言葉だった。

今まで私はずっと、吟也じゃなければいいとか、そんなことばかり考えていた。

けどそうなんだ。

たえ吟也が今回の虹泉を生み出した……あるいは妖の人だったとしたって、

よくよく考えてみれば大丈夫なのだ。

吟也は女の子が大好きだから。

私のようなものでも見捨てない。

例えその力がなくなっても助けてくれる。

私はそれを確信していた。

何故なら私は知っているから。

冗談ではなく、吟也がそのために生きていることを。

その誓いを耳にした私なのに。

由宇ちゃんのように意志を曲げることなく信じていることができなくなりそうだった自分がちょっと情けなくて。

「……そっか。うん。その通りだよ。大事なことを忘れてたよ。ありがとう、由宇ちゃん。その事を思い出させてくれて」

「い、いえ。感謝されるようなことでもないと思いますけど」

お互いちょっと照れながら共有する想いを悟り、笑いあって。

「それにしても羨ましいな。私も吟也との学園生活楽しみたいよ」

「それは……譲りませんよ。それは僕だけの特権ですから」

「おほ。言うじゃない。ライバル宣言ね」

意外でもなんでもなかったけど、ここまではっきり意思表示されると、心地よかった。

今度は違うタイプの、見定め、挑戦するみたいな笑みでお互いを認識しあっていて。

「ライバルと書いて友と呼ぶ。……そんな由宇ちゃんに一つアドバイスよ。」

抜け駆け禁止とかそういうんじゃないで、うかつに早まって答えを求めようとしないこと。

……逃げられたくなければね」

実際私は、まんまと一度逃げられてしまった。

まあ、別にあの時は告白しようとか思ってたわけじゃなかったんだけど。

女の子大好きな吟也は、一番大切な人を失ってから、誰か一人を選ぶ、ということをしなくなった。誰か一人を選べばほかの子が悲しむ。

だからみんなを分け隔てなく愛する。

といってもこれは、私が勝手に想像する吟也なんだけど。

結構私としては、根拠のない自信があったりする。

「なるほど、勉強になります。ですが、今の所友達で通ってますし、現状を変える気はないですけどね。しかし何と言いますか、はい。とつてもいい意味で鬼の風紀委員長のイメージが変わりましたよ」「その二つ名だけでどう思われてたのかよく分かったけど……」

…それはそれでよかったよ

「吟也への想い。」

共有することで、それはお互いの絆に変わる。

それは、凄いことなんじゃないかって、しみじみ思っていて。

それと同時に思うのは、おそろしさだった。

ここまでの気持ちだが、万が一つくりもののウソだとしたら。

私は……私たちはどうなってしまうのかと。

(第66話につづく)

66、美音先輩と私のてっぺんへのダッシュ

それから、お昼休みが終わり、午後の授業。

予定通りことが進んでいれば、今頃は吟也がトイー先生のお使い
というところで、

生徒会室へと向かっているはずだった。

今は歓迎会の時よりも濃い、私たち【生徒】以外には猛毒にも等
しい、この異世の中を。

普通に考えれば心配しなきゃいけないところなんだけど。

私は既に異世を……私たちから生まれ出でる拒絶の空気をまるで
気にかける様子もなかった吟也のことを何度も見てきたから、あま
りそういう感覚もなくて。

(それでも様子、見に行ったほうがいいかな……)

真希先輩には手を出すな、とは言われているけど。

吟也のことだから約束事をすっかり忘れて、

どこぞの女の子についていってしまふ可能性を否定できない自分
がいるから困りもので。

(ん〜、ただで何か忘れてるような……)

あれからキクちゃんは何とか体調がよくなって、そのまま保健室

で寝てるし、

キクちゃんの緊急事態でおざなりになっていたカチユと対話しようという案も、

分かっててやってるのか、頑として起きようとしなないカチユのせいで膠着状態だし。

確か、カチユと関係していることで、他に気になくちやいけないことがあった気がしたんだけど。

結局それを思い出すことができなくて。

そんな私を我に返らせたのは、私を当てる先生の声でもなく、終業を告げるチャイムの音でもなく。カチユのいる胸ポケットの反対側のポケットに備え付けられていた、

緊急連絡用の連絡機の、そのアラームだった。

通常、魔物が出現した場合、それは教室じゅうに鳴り響くくらいの大音量の合唱をする。

だけど今回は、音なしの赤い点滅。

しかも同じ教室で光っているのは私だけみたいだった。

（長のみの召集……あるいは、私だけ？）

どちらにしろ、何か起こったのは確かなようだった。

今、まさに吟也が本校に来ているだろうこの時に。

それは、やっぱりどこか仕組みられているようにも思えて。

「風紀委員長、三水潤。出勤します」

思ったよりも冷静なまま、私は手をあげ立ち上がりそう言つと、先生の許可を得てすぐさま教室から飛び出す。

すると、ほとんど同じタイミングで、命ちゃんが隣のクラスから飛び出してきた。

私たちは無言で頷き合い、集合場所である会議室へと向かう。そこには対応中なのか、そうでないのか真希先輩の姿はなく、代わりにいたのは、心なしか焦っているようにも見えるトイー先生と、美音先輩だった。

「ついに魔物が？」

「ああ、例の山の頂上にある虹泉から、魔物が数体出現した。ちようど詩奈は監視に出ているな。連絡は彼女からあった。一刻も早い救助を」

命ちゃんが問いかけ、返ってきたのは、ちよつと信じられないトイー先生の言葉。

あの綺麗な虹泉が、魔物を生み出すなんてって思ったけど。私はトイー先生が全てを言い終えるよりも早く駆け出していた。

私たちと一緒にいれる以上、【生徒】の素質はあるだろう詩奈ちゃん。

だけど心配だったから。

私はみんなを置き去りにする勢いで。

校舎を出て、裏庭に回り、山の頂上にある演習場を目指しつつ、異世を展開。

そのまま片耳のイヤリングを外し、利き手で強く握りこむ。

「我が力よ、アジールの元に顕現せよ！ 【物質命題】っ！」

詩奈ちゃんと奇しくも同じ場所へ向かった時に使っていたものは、

比べものにならないくらい力を込めて繰り出す、私の曲法。それは、私の異世を食らい、イヤリングを肥大させる。

その変化は、瞬きするほどの一瞬。

気づけば私の手には、アメジストの光沢が眩しい、一本の戟が握られていた。

持ち手も刃も大仰なくらい派手で、大きな槍に付随する武器。

私の想像によって生まれたそれは、驚くほどに軽い。

だがその威力は、大地をも砕く。

ご都合主義……じゃなく、使い勝手が本当にいいのは、それが私の長年愛用している得物だからだ。

それを担ぎながらの、それでも少しのスピードも落ちることのないダッシュ。

風を切り飛ぶが如くのそれは、やっぱり異世のおかげだ。

異世は、防御を含めた、私の身体能力を上げてくれていて。

「っにゃっ！」

そんな私に軽々追いつき、追い抜かんとするのは美音先輩だった。低い体勢を取り、四つ足で疾駆するその様は、大型の猫科を思わせる。

それはまさに、【月使獣化】と呼ばれる美音先輩の曲法の具現、
といつべきで……。

(第67話に続く)

67、命ちゃんと私の、都合のいい考え

「いたにやつ！」

そして、目的地に辿りついたのはそれからすぐだった。美音先輩が指し示すその先には、三体の魔物。今回の虹泉における初めての魔物だ。

魔物は通常、虹泉を発動した創造主のイメージするもの、と言っ
か、

その人を躪したものが生まれるという。
事実、目の前にいたのは、今まで見たこともないやつらばかりだ
った。

全身が闇色の……埴輪のような魔物。
ゴム鞠に様な身体には不釣り合いなほどの翼を持つもの。
そして、四本足で立ち、たてがみを持つ（私には黒い犬に見えた）
もの。

それぞれが全く別種のような形態をとっていたけど、私はそれを
同種のものだと判断した。

それは、言うまでもなく三体がおそろいの闇色だからだ。

まるで目の前の光景を静止画にして、彼らのいるところだけを切
り取って、

更にそこに墨汁を垂らしこんだような……そんな闇色。

あまりに深く、だけど何故か懐かしさを憶えて。

「先手必勝にや！」

勢い込んだ美音先輩がそう叫ぶのと。

「待つてください！」

自分でも信じられないくらい大きな声が重なる。

「うにやっ？」

転びそうになりながらも、律儀に止まってくれる美音先輩。

「な、何で止めるのにやっ」

だけど、すぐに訝しげに私を見てくる。

それは、ほとんど無意識の、とっさに出たものだったけど。

その理由がないわけじゃなかった。

私はそれに答えるように頷いて。

「少し様子を見ましょう。敵意はどうか分かりませんが、少なくとも彼らはこちらに襲い掛かる気はないようですから」

今までの魔物たちとの最大の違い。私はそれを口にする。

かつての魔物たちは、生まれるや否や人間に襲い掛かってきていた。

抵抗する術を持たない一般人にとってみれば、出会うことだけで命を脅かす脅威だった。

故に、危険度を表したレベルを設け、それに応じて避難してもら

っていたわけだけど。

目の前の魔物たちは、じっと息を殺すみたいに、虹泉の側から動こうとしなかった。

まるで、その虹泉を守るためだけに存在しているかのように。

それを考えると、危険度は低そうではあった。

何より数が少ないから、余計にそう思える。

一体一体の大きさもそれほどじゃないし、それこそ、私の戟の雑ぎで滅せられそうな、

そんな気がしていて。

「言われてみればちよつと変にや。魔物が襲ってこないなんて」

いつの間にか、鋭利な刃のごとき爪を下ろしていた美音先輩は、戸惑ったようにそう呟く。

美音先輩はちよつとなんて言ってるけど、これは大きな違いだ。

コミュニケーションもままならず、こちらの命を奪うためだけにひたすら行動しているようにも見えた今までの魔物たち。

だから、こちらとしてもしょうがないと言いついてやられる前にやっつけてやるつ、

という意識だったのだ。

ところが目の前の魔物たちには、今のところそんな素振りは全くなかった。

むしろ、もしかしたら彼らと意思疎通ができるのではないかという気分にさせられるほどで。

人間に紛れ、人間に取り入り、その心を掌握しようとして
いる。

あなたはもう、その術中にはまってしまっているかもしれない。
その瞬間、不意に思い出される、そのようなキクちゃんの言葉。

私はそれで、はっとなった。

彼らを滅したくない。私たちにそう思わせることがそもそも狙
いなのだろうか。

それは確かに、うまいやり方だとは思う。

事実、今私には、敵意も何もない彼らを本当に滅すべきなのか
という疑問が浮かんでいて……。

「迂闊に刺激するのは危険かもしれないな。彼らがあゝの虹泉を守
っているなら、

こちらが動くことで彼らも活動を始める可能性はある」

「うにゃ。命ちゃん、いつのまに」

「一応これでも副会長なのだからな、置いていかれるわけにはい
かないよ」

気付けばそこにいた命ちゃん。

美音先輩がその存在の薄さをからかうが、命ちゃんは命ちゃん
でそれに気付かないのか、

少しずれた言葉を返している。

ただ、命ちゃんの一言は、最もな言葉だったと思った。

これは罠なのかもしれない。

こつちが迂闊に近づくことで、彼らに動く理由を与えてしまつかもしれない。

どうも自分に都合のいいように考えがちになっているような気がしてならなかったけれど……。

(第68話につづく)

68、詩奈ちゃんと私を覆つあからさまな闇

「にや？ そう言えばトイーせんせは？」

「私たちが異世を開く展開になればどうあつても邪魔になると言われてな、

今は演習場の入り口に待機しているよ」

そんな二人のそんなやり取りで。

私はそもそもどうしてトイー先生が焦っていたのかを思い出して。

「あ、そうだ。詩奈ちゃんなら魔物が現れた瞬間とか見てるかも。

……先輩と命ちゃんは、ここで彼らを見張っていてください」

この虹泉を監視し、記録するための、詩奈ちゃん専用のミニベースキャンプ。

トイー先生の反応を見るに、彼女はあのまま帰らずにいるのだから。

魔物が生まれた瞬間を見て、何か分かれば儲けもの……

そんなことをかいつまんで二人の説明し、私は一人、森に隠れたその場所へと走って。

「……詩奈ちゃん。いる？」

テント入り口の前での呼びかけ。しかしそれに反応はない。

沸騰する嫌な予感。

私は慌ててドア代わりの幕を引き上げて。

「……っ！」

その瞬間、もやのような黒い塊が、そこから噴出してきた。

それは、虹泉を守るものたちと、同じ色合いをしている。

ほとんど無意識のままに、倒れ込むようにして伏せると。

それはやっと開放された、とばかりに空に舞い上がり、そのまま消えてゆく。

私はそれを見送る暇もなしに、テントの中へと飛び込む。

真っ先に目に入るのは、据えられたこたつ……その机に突っ伏すようにしている詩奈ちゃんの姿。

「詩奈ちゃんっ！」

何だかこんな場面ばかりに出くわしている、なんて思いつつもすぐさま駆け寄り、呼びかける。

相変わらず恐怖にも似た嫌な予感はそのにわだかまっていたけれど。

「ん……んあ？ なんじゃ、そうぞうしい」

どうやら詩奈ちゃんは眠っていただけらしい。

実際のところは診てもらわないと分からないけれど、とりあえず私は一安心して息を吐いて。

「はっ、そ、そうじゃ。映像は、カメラはどうなってるっ」

ひどく焦った声をあえる詩奈ちゃん。

そのまま私に構わずになにやらデッキを操作する。

すると、こたつに入った状態で見られる場所に備え付けてあったテレビ画面に映し出されたのは、

まだ魔物たちの現れる前の虹泉の映像で。

「……」

変わらない映像を無言で見つめる。

しばらくすると、虹泉に変化が訪れた。

建造物と呼んでもおかしくないそれが、小刻みに震え始めたではないか。

「何これ、地震？」

「……いや。虹泉自身が震えておるのじゃ。理由は分からぬが」

言われてみると、確かにそんな気がしなくもない。

私としては、そこから動きたいのに何かに押さえつけられて動けない、って感じに見えたけれど。

普通に考えれば、それは今まさに魔物を生み出そうとしているその瞬間なのだろうが……。

それは、何とか計ったかのようなタイミングだった。

本当にいいところで終る野球中継のごとく、いきなり画面が真っ暗になる。

それは、よく見れば蠢く闇だった。
それからずっと、画面は真っ暗闇の映像だけを映していて……。

「やはり。映ってはおらぬか。この後、虹泉はどうなったのじゃ？」

「え？ あ、うん。真っ黒の魔物が三体いたよ。襲ってくる気配はなかったけど……」

そう、ちょうど目の前の闇色と同じ色だった」

何かを深く考え込みながらそう聞く詩奈ちゃんに、私は思ったまま見たままを口にする。

「そこまでして見せたくない何かがあったとでもいうのか？
いや、しかし。それはあまりにもあからさますぎる……」

まるで、怪しんでくれと言わんばかりに。
ようは、そう言いたいんだろう。

聞けば、詩奈ちゃん自身も、画面が塗りつぶされるのとはほぼ同時に、あの闇に襲われたらしい。

そうなると、確かにそれはあからさますぎるほどにあからさまで。

「一つ、潤さまにお聞きしたい。この場所、観測用のカメラの位置、誰か他のものに教えたか？」
「えっと、場所なら今さっき命ちゃんと美音先輩に教えたけど……」

静かに放たれた詩奈ちゃん言葉。

すなわち、私を含めた仲間うちのみんなが疑われているいうことで。

その瞬間、どくんと鼓動が大きく波打つ感覚。
それは妄想めいた可能性。

胸元にいるカチユが、吟也のスパイで。

そこで寝ているふりをしながら全てを見て、伝えていたとしたら。

「仲間内にわたしを襲ったものがあるかもしれん。

自らが虹泉の創造主であると、暴かれぬようにと」

「……でも、そう思わせることが本当の狙いかもしれないよ？」

それは、いつもの私の妄想のはずなのに。

ほとんど無意識に詩奈ちゃん言葉を否定している私がついて。

「ほう。して、その根拠は？」

実に興味深そうに見上げてくる詩奈ちゃんに。

「……なんとなく。勘かな」

結局私は、本当のことを言うことはできなかったのだった。

それがじわじわと自分の首を締めているのだと、大いに自覚しながら……。

(第69話につづく)

69、キクちゃんと私を前に霞みゆく異世

結局その後。

相手の意図が読めない以上、やはり現状維持し、魔物たちと虹泉を監視し続けることで落ち着いた。

交代で24時間、虹泉を監視し、何か動きがあったら【生徒】全員の連絡機を知らせる。

すぐ駆けつけられるように待機する、ということになって。

トイ先生はそれで納得してくれたけど、【生徒】の長である真希先輩にもその旨を伝え、

意見を仰ぐべきだろうということ。

私たちは演習場から校舎に戻り、生徒会室へと向かったわけなんだけど。

その時、本校の校舎は二つの出来事でちょっとした騒ぎになっていた。

一つは、真希先輩の突然のご乱心。

そしてもう一つは、棗ちゃんの突然の快復である。

当然、そんな事が起きている事などその時知る由もなかった私たちは。

とりあえずの見張りに美音先輩が残り、一応検査するという詩奈ちゃんとトイ先生と別れ、

そのまま本校校舎へと戻ってきていたんだけど。

「あれ？ キクちゃん病み上がりなのに、あんな走って……」

さつきまで寝巻きだったのにいつの間にか着替えているキクちゃん。

なんとというかキクちゃんらしからぬスピードで、校舎棟から寮棟へと駆けてゆくのが見えた。

「ま、まさか」

それに、何か感じるころがあったんだろう。

もともと白めの顔を更に白くし、命ちゃんも突然走り出す。

「ち、ちよつと、どうしたのっ？」

「喜久が向かっているのはおそらく棗の部屋だ。何かあったんだ！」

そう言う命ちゃんは、既に泣きそうだった。

言われてみればキクちゃんも、はつきりとは見えなかったけど悲しそうな顔をしていたような気がして。

何とか置いていかれないように辿り着いたのは、棗ちゃんの部屋。異世の庭園、お屋敷へと繋がっている場所。

「異世が解けかけている……？」

だけど、その異空間へと続くドアは、霞むような明滅を始めていた。

異世が解かれる、その兆候。

それが一体何を表すのか。

どうも命ちゃんが悪い方にはかり考えてしまっているらしい。

冷静になって考えれば、棗ちゃんが目覚め、

自らの意思で異世を解除したって考えるのが普通なんだろうけど。

最近なのに何だか久しぶりな気もしなくもない華やかな庭園。

しかし今は、一歩踏み出せば遭遇したはずの動くぬいぐるみたちの姿が一つもなかった。

その閑散とした様子に、どちらかと言えば楽観的だった私も、不安に苛まれて。

「そこをどきなさいっ」

「どんっ!」

その瞬間、言葉が通じあっているかはともかく、言い争っている二つの声が聞こえてくる。

一つは苛立ち、焦りを隠せない様子のキクちゃん。

そしてもう一人は、ぬいぐるみのだんちゃんだ。

以前までの姿は見る影もなく、ちょうどお屋敷の入り口を塞ぐくらいに大きさになっていて。

どうやらキクちゃんは、どんちゃんに通せんぼさせられているらしい。

二人ともごくごく真面目なんだろうけど。

おそらくは持ち主の棗ちゃんよりもふもふのぬいぐるみが似合うだろうキクちゃんとどんちゃんのやり取りは、何だかメルヘンチックなものに思えて。

そこでどんちゃんが意思持って、元気に通せんぼをしているのならば。

命ちゃんが危惧するような最悪な事態ではないのだろうと判断し、私は二人の間に割り込むようにして声をかける。

「……どうしたの、キクちゃん？ そんなに慌てて」

すると、ばばっと同じタイミングでこちらを振り向く二人。息があつてるなあ、なんてちょっと思つて。

「キクちゃんは棗ちゃんと仲良しでいつもお見舞いに来てたでしょ？

だからどんちゃん、そんな意地悪しなくても……」

「……っ」

「ど、どうーん……」

何だかあわあわしているキクちゃん。

そんなキクちゃんより先に私の言葉に反応したのはどんちゃんだった。

分かったよ、とでも言いたげに、転がるようにしてその場所から移動して。

「あ、ありがとうございます。その、棗が目を覚ましたみたいで、急いでとんできたんですけど……」

「目を覚ましただって？ そ、それは喜ばしいが、どうして急に今までそんな兆候まったくなかったのに。

驚きの声を上げる命ちゃんに、キクちゃんは一つ頷いて見せて。

「分かりません。分からないからこそここに来たんです。その確認をするために」

発せられたのは、心底分からなくて途方に暮れているような、そんな言葉だった。

私からみれば棗ちゃんが目を覚ましたんだから、むつかしいことはこの次じゃないのかなって思っちゃうわけなんだけど。

「力を失ったわけではなさそうだが……本当に分からないのか？ どうせ見てたんだろう？」

君は既に棗が目を覚ましたことを知っているんだからな」

命ちゃんやキクちゃんにしてみれば、はいそうですか、とはいかないらしい。

二人のやり取りで思い出したのは、棗ちゃんも演習場の虹泉同様、監視されていた、ということ……。

(第70話につづく)

70、キクちゃんと私が悶えてしまう涙

虹泉の創造主と同じような症状、周りに動くぬいぐるみさんたちがたくさんいる状態で眠りについていた棗ちゃん。

同じよう、ではなく同じではないかと疑われるのは悔しいけど当然の流れで。

見ていた、というのはきつと生徒会放送室（またの名を司令室、とも言う）のことだろう。

生徒会室や大会議室を除いた、残りの本校十階を占める場所に、本校全体を監視し、管理するための部屋がある。

詩奈ちゃんの使っていた機材もきつとそのものだったんだろうと、一人話題から逸れかけた時。

「一人、この部屋に無断で侵入したものがいたようです。

映像を見た限りでは、侵入しただけのように……いえ、何かを喋っているようには見えましたが、

たったそれだけです。たったそれだけで、ここにいた多くの意思あるぬいぐるみたちが消えて……

棗が目を覚ましたのはその侵入者が去った後でした」

まるで言いたくなかったことを無理やりにも全部吐き出すみたいに、キクちゃんは畳み掛ける。

そして、じつと私の方を見てきた。

侵入者の名前など、言わなくても分かるでしょう？　と言わんば

かりに。

「ですので、こんな所で話していてもしょうがありません。とにかく棗に話を聞いてみましょう」

今、このタイミングでキクちゃんが名言を避ける人物なんて一人しかいないんだろう。

吟也がここに来た。

それは、一体どんな理由で？

偶然この異世に気付き、眠ったまま起きない棗ちゃんを憂い、起こしてあげた。

真っ先に浮かんだその理由が、これでもかっつてくらい自分に都合がいいものだったから、
ちよつと落ち込む。

でもきつと吟也がここに来たのはそれだけじゃないんだろう。
思い起こせばこの場所でも、カチユが何かを訴えていたからだ。
そんな事を考え、私の気分が下降気味なのが手に取るように分かったんだろう。

見てられぬとばかりに視線を逸らしたキクちゃんは、そのまま屋敷の中へと入ってゆく。

私は少し強めに背中を叩かれて。
命ちゃんとともにその後が続いて。

まさに、その瞬間だった。

今までそこにあつた世界が、刹那にして変貌を遂げたのは。

「っ！」

「異世が解けるぞっ」

息をのむのと、世界が暗転するのはほぼ同時。

次いで身体が軽くなるような、夢で高いところから落ちるような、そんな感覚に襲われて。

気付けば私たちは、広い庭園付きのお屋敷から、私たちの部屋とつくりは同じの、

寮の一室でおしくらまんじゅう状態になっていた。

何故なら数百を超えるぬいぐるみたちに囲まれているだけじゃなく、

部屋の半分を取りそうなどんちゃんが、そこにいたからだ。

それは、棗ちゃんが異世を解除した、ということだ。

「うわ。み、みんないたんだ。ごめんっ、勝手に異世解いちゃって」

満員電車の混雑のごとき状況を味わっている私たちに向かってかかるは、快活で元気なそんな声。

それは、ほんとに久しぶりに聞く、棗ちゃんの声で。

「棗っ！」

勢い良く飛び出したのは、命ちゃんだった。

「う、うわ。ちょ、ちょっと何っ？」

がっしと男らしく抱きしめる命ちゃんに、状況が掴めないのか、棗ちゃんはただただ戸惑っていて。そこですぐに覚える違和感。それは、どんちゃんのお腹に半ば埋もれたまま動こうとしないキクちゃんに対してだった。

一向に目を覚まさない棗ちゃんを特に心配していたのは命ちゃんとキクちゃんです。

ここは命ちゃんと競うように飛びつき、快復を喜ぶ場面のはずなのに。

「……キクちゃん、先越されちゃったよ？ いかなくていいの？」

「私にはそんなの、らしくないです」

「いいじゃんらしくなくて。命ちゃんあの姿だって十分貴重だと思うけど」

思わずついて出た言葉。

キクちゃんはどうも歯切れが悪かった。

棗ちゃんが目を覚ましたことが嬉しくないわけじゃないだろうに、一体何を恥ずかしかっているのだろうか。

一体何を遠慮して……あるいは棗ちゃんに対して負い目を感じているんだろう、なんて思っ

「委細承知。……この私めがお手伝いしませう」

「え？ な、何を、ひゃんっ！」

こつちが悶えてしまいそうなキクちゃんの悲鳴。
しかし私はそれを涙をのんでスルーし、キクちゃんを抱きしめる。
というか、抱え込んでそのままお姫様抱っこのような要領で棗ちゃんたちのところへ駆け寄ったかと思うと、現実に戻っても派手派手ピンクなベッドへとダイブした。

これぞ元ガキ大将の面目躍如。
私の腕を離れ、ごろごろ転がったキクちゃんは、見事に棗ちゃんの傍までやってきて。

「相変わらず無茶するねえ、潤姉ちゃんも。ほら、喜久、立てる？」

命ちゃんの呪縛から解放された棗ちゃん。
何も変わらない元気な笑顔でキクちゃんの手を引く。

「ご、ごめんなさ……ひっく、ぐす……」
「え？ ちよつとなんなのさ喜久まで。どこか打った？」

すると、とたんに泣き出すキクちゃん。
おろおろとうろたえる棗ちゃんがそこにいたけど。
衝撃は私の方が強かったかもしれない。

「潤、泣かしたな」
「ええっ、わ、私なのっ？ ご、ごめんキクちゃん、泣かないで」

でないと、こつちまで泣きたくなくなってくるから。
それがただの嬉し涙だったのなら、きつとそんな風にはならなか

ったはずで。

結局の所、命ちゃんの言う通りだったんだろう。

その時、私がキクちゃんの涙腺を緩めるきっかけを与えてしまったのは、

確かなようだったから……。

(第71話につづく)

71、棗ちゃんと私の初めてまみえる本性

その後、泣いてなどいないと大見得を切るキクちゃんを宥めるのにしばらく時間がかかって。

それから、泣いてしまった自分を恥じるみたいにだんまりを続けるキクちゃんがいて。

それに苦笑しつつも話の口火を切ったのは私自身だった。

「えと、棗ちゃん、身体の調子はどう？」

「うんっ。特にこれといって悪い部分は……ああでも、何だか身体が重いような」

「それはそうだろう。お前は何ヶ月も、眠ったままだったのだからな」

「ええっ、ウソ。そうなんですか？ そりやなんでまた」

信じられない、という顔をして驚く棗ちゃん。

しかし、驚いたのはむしろこっちのほうだった。

「まさか、何も覚えてないの？」

「そ、そんなっ。どうして……」

あっけらかんとした様子の棗ちゃんに、見てるほうが申し訳なくなってくるようなキクちゃんの自失。

それを見かね、代わりに言葉が続けたのは命ちゃんだった。

「棗。君は、急に倒れて……そのまま眠りについたんだ。原因は分からない。」

ただ、自分の異世を展開した上でのことを考えると、君は誰かに、そのような曲法を受けた可能性はある」

そして、今までであったことを棗ちゃんに説明してゆく。

眠りにつき、無防備な自分を守るために作り出した庭園とお屋敷。そこに住む、意思あるぬいぐるみたち。

彼らに守られ、このままずっと眠ったままなのかと思っていた矢先に、

唐突に棗ちゃんは目を覚ました。

吟也が、この夢の地に足を踏み入れることによって。

私は、そんな命ちゃんの説明を聞きながら……一つ思い出したことがあった。

棗ちゃんを襲った力は、詩奈ちゃんを受けたのと同じじゃないのかと。

問題は、何故今になってわざわざ起こしたのかってことだけだ。

「庭園にお屋敷、動くぬいぐるみ……うっん。言われてみれば夢で見たような気がする。」

ちよっと待って、今思い出すから」

どうやら棗ちゃんは、夢だと認識しているようだけど。

眠っていた頃の全ての記憶を忘れてしまったわけではないらしい。

そのまま倒れるんじゃないかって勢いで、棗ちゃんは首をひねって考え込んで。

「あ、そうそう。夢でボクは、病気がちのお姫様だったんだよ。重い病でずっと寝込んで、もうどうにもならないって時に隣国の騎士……いや、あれは侍だったな。その侍に、我が『殿』ならばその病を治せるって言われて……」

指折り数えながら夢の話をする棗ちゃん。

突っ込みどころ満載なのは夢だから仕方ないとして。

私はその『殿』と言う呼び名が妙に気になっていた。

カチユの言う『ボス』。いつか聞いた『先生』、『隊長』、『主人』。

人を慕い、敬うために使う言葉たち。

それらが一つに繋がって、何か生まれそうな、そんな気が私にはしていて。

「そうしたら、ほんとにその殿が来たんだよ。だけど、何だか分かんないうちに殿と侍が……」

うっん、あれはどんちゃんだったかな。とにかく戦って、それに勝ったのは殿で、

そのままボクの部屋にやってきて……」

最初はノリノリで喋っていた棗ちゃん。

だけど話が確信に迫ったところで、急にもじもじしました。

心なしか顔も赤い。

ま、まさかっ。もしかしてこれは眠り姫を起こすための、もっともベタでセオリーな展開を享受したというのかっ。

ま、まったくもってうらやましいっ！
っていつかずるい、ずるいよ！

「え、えーと、その。はっきりとは覚えてないんだけどね。
何か恥ずかしい目にあつた気がして……それで起こされた感じな
んだけど」

私があまりに鬼の形相をしていたから、棗ちゃんはなんとなく察
したのでろっ。

直言を避け、それでも熱に浮かされたみたいにそんな事を言う。

「……どうだった？」

「へ？」

「どんな味だった？ 感触は？」

思わず凄む私。

棗ちゃんは、一瞬何を言ってるんだ、という顔をした後、一層顔
を赤くして。

「違う、違うって。潤姉ちゃんの勘違いだつて！」

「何が違うって言うのよっ、だったら話してみなさいよっ！」

「うわあ、潤姉ちゃんが壊れたあつ！」

棗ちゃんにとってみれば、初めて見えるまみだろう私の本性。
見てはいけないものを見てしまった。
そんな風におののき、逃げ惑う棗ちゃん。

どうやらほんとに、すっかり元気らしい。

お約束の嫉妬に、自分自身で呆れながらも、内心ではそんなことを思っていて……。

(第72話につづく)

72、棗ちゃんと私の敬称談義

「喜久。もう一度問うが、紅恩寺は確かにここに来たのか？」

「疑うならご自分で映像を確認なさってはいかがでしょう」

ある意味話題逸らしのおふざけの面もあつたんだけど。

そんな事はお構いなしに、前日からどうも雰囲気の芳しくない命ちゃんとキクちゃんのやり取り。

それを、私に捕まった（抱きしめているという役得中）棗ちゃん
は、心配げな様子で見ている。

「いや、別に疑ってるわけじゃないさ。ただ、理由が知りたかつたのさ。」

議長に呼ばれている彼が、何故ここにやってきたのか……どうして棗を助けてくれたのか」

命ちゃんはキクちゃんのきつい言葉をかわし、いなすように苦笑を浮かべ、そう問いかける。

「そんなの、そんなの。私が知りたいくらいです」

「……っ」

そして、議題は結局最初に戻ってしまふ。

命ちゃんもそうだけど、特にキクちゃんは助けた理由について拘っているように見えた。

その答えを求めるかのように、じつと栗ちゃんのことを見つめている。

それに栗ちゃんは、一見すると申し訳なさそうな笑みを浮かべているだけだった。

おそらく、そんなキクちゃんに対して、一瞬強張ったのに気付けたのは私だけだっただろう。

それは一体何を意味しているのか。

もしかして何も知らない、覚えていないと言つことに偽りがある？

私はそれを問い質すべきか否かを迷つて。

「理由なんて単純だよ。助けたいから助けたんだ。それ以外の理由を求めるなら……」

真希先輩に聞くのが一番手っ取り早いんじゃない？

口からついて出たのは、そんな言葉だった。

今日、吟也は真希先輩に呼ばれている。

先輩自身が正か邪か……あるいは紅葉台にとって益になるか損になるかを見極めようとしている。

吟也は知る由もないだろうけど。

呼びかけに答えなければ吟也きつと自由を奪われるだろう。

仮に、紅葉台学園にとって脅威となりうるならば、本校最強の【生徒】が相手をする。

でも私は。

そうやっていつもいつも良いこと悪いこと関係なく考えちゃう一方で。

結局のところ、最終的には吟也のことを信じていた。そんな自分に揺るぎない自信があった。

それは、由宇ちゃんとの会話の中で、思い出したことで。だからこそその楽観的な私の言葉。

大方、吟也はたまたま棗ちゃんの異世に迷い込み、眼を覚まさない彼女をどこまでも純粋な好意で助けた、といったところだろうか。

あるいはどんちゃんたちが、吟也に助けを求めたのかもしれない。何か企みを持ってここにやってきたと考えるよりは。

ぬいぐるみたちの言葉を理解し助けにやってきたって考えるほうが私にはよっぽどしっくりきた。

「お気楽すぎて張り合う気もなくなりますね」

「まあ、ここでうだうだしているよりは余程生産的か」

キクちゃんも命ちゃんも、共に苦笑。

そこに、心なしか私に対する呆れというか諦めのようなものが含まれているのは間違いなくて。

「うーんと、いまいち話についていけないんですけど、ようは『殿』が今まさに真希先輩に会ってるってこと？」

私がそれにむっとなるよりも早く。

隙について私の腕から逃れた棗ちゃんは、小首を傾げてそんな事

を言った。

「どうやら、その夢での呼び名がお気に入りらしい。

「殿じゃなくて吟也だよ」

強いて言うならカチユのボス。

いかにも似合わなそうなのがイイよね、なんて考えていると。

棗ちゃんは吟也の名前を反芻するみたいに呟いて。

「よし、それじゃあ会いに行こう」

だめだなんて傲慢甚だしい台詞が口に出せるはずもなく。

結局私たちは四人そろって生徒会室へ向かうことにしたのだった

……。

73、名神先輩と私に訪れる嵐の前の赤鬼

棗ちゃんの部屋から生徒会室までは、八階にある渡り廊下を渡ってすぐだった。

どこかの城を彷彿とさせる、広く湾曲した階段を昇りきれば、やがて生徒会室が見えてくる。

本校校舎十階。

生徒会室と放送室と会議室。

三つ合わせて作戦指令本部、なんて呼ばれる場所。

ここ最近は出勤もなくて、本当にただの生徒会室と会議室と放送室になってしまっんじゃないかな、なんて思っていたりしてたけど。

それらの入り口に続く階段終わりの広間。

そこには、歓迎会の時に用意した、ようこそその看板が散乱していた。

「何かあったか？」

命ちゃんの呟きに答えられるものはいなかった。

それは、生徒会室へと続く、観音開きの大きな扉の向こうから不穏な気配が漂っていたせいもあったんだろうけど。

そんな中、私は別のことを考えていた。

それは今の今まで失念していたことだ。

何かを忘れているようになって引っかかったこと。
クリップがない。

その大きめの看板を支えておくには少し無理のあったはずのもの
が。

私には当然心当たりがある。

そこにいたのはカチユのお友達だ。

吟也がここに来て、カチユたちの言う『ボス』ならば。

きつとクリップの彼女に気付いて連れて行ったのだらうというこ
とは容易に想像できて。

(今更だけど、みんな女の子じゃん……)

どうしてそんな単純なことに気付かなかったんだろう。

カチユも、ここにいたクリップの子も、昨日吟也に会った時に聞
こえてきたがやも。

みんな吟也の大好きな女の子たちだ。

吟也が歓迎会を放り出し、地下へ行ったことも、

カチユのことを返して欲しいと言ってきたことも、

生徒会室へ呼ばれたのにも関わらず、棗ちゃんの部屋へ訪れたこ
とも。

みんな彼女たちを探すためだとしたら？

ただそれだけだったとしたら？

それは、吟也が何かを企み、いろいろな場所へ足を運んでいると
言うより、

よほどしっくりくるような気がしていた。

それに、もしかすると吟也は知らないのかもしれない。

私が、カチユの姿を見出し、その声を聞くことができるというこ
とを。

それを考えれば、急に吟也がカチユを返してほしいと、

まだ約束が半ばであるのにも関わらずそう言ってきたことにも辻
褻が合う気がした。

吟也はきつと心配だったんだろう。

私がこんなにもカチユを大事にしてるってこと、話してもないし、
知りようもないんだから。

「何にやけてるんですか、急に。怖いからやめてください」

「なんだかしばらく見ないうちに潤姉ちゃん変わったよね」

「いいえ。これが素です。今までは猫かぶっていただけですから」

「そ、そうなんだ」

キクちゃんの呆れた呟きと、ひきつった棗ちゃんの笑み。

そこでようやく私は我に返って。

「えっと……あ、失礼します。三水潤他三名入りますよ？」

私は手遅れながらも誤魔化しつつ扉をノック。

だが反応はない。

怒りのようなそうでないような、とにかく鬱屈した空気……

真希先輩の気配はあるのに返事がないと言っことはどういっこと

か。

時間的に見て、何事もなかったのならば吟也はもういないはず。私たちは首を傾げながらも扉を開け放って。すぐ視界に入ったのは、

部屋の中心に据えられたデスクに突っ伏す真希先輩の姿だった。

案の定吟也の姿はない。

それはちよっぴり残念だったけど、つまるところ吟也はシロで、何事もなかったのかな、なんて思っていたけど。

「……フフフ」

「……っ」

寝ているのかわかって、起こそうと近付いてぎよっとなった。

真希先輩は笑っている。

小刻みに震えながら、それはもう不気味に。

これはあれだ、堪忍袋の緒が切れる瞬間と言うか、大噴火の前触れというか……。

「名神議長………?」

そんな、いつ爆発してもおかしくない状況に一石を投じたの命ぢやんだった。

さすが、勇気あるなあ、なんて思っていたのも束の間、真希先輩はその呼び声に反応し、
ゆっくりと顔をあげる。

「ひいつ」

「栗ちゃんが悲鳴あげるのも必然だっただろう。」

「そこには鬼がいた。顔を真っ赤にして怒りに打ち震えるその様は、まさに赤鬼と呼ぶにふさわしくて……。」

(第74話につづく)

74、名神先輩と私と生徒会室の乱

「フフフツツ。……いい度胸じゃない。

この私にこれほどの屈辱を与えるとは、一生から末代まで後悔させてやるわぁっ！」

そう叫んだとたん、うがーっと暴れだす真希先輩。

デスクの資料は花吹雪のように舞い、ありとあらゆる家具はへこみ、ひび割れて。

四人がかりで止めなければ、冗談抜きで生徒会室がなくなっていただろう。

それが後に、生徒会室の乱と呼ばれるようになったかどうかはともかくとして。

小一時間ほどもみ合いへし合い、赤鬼と化したのが怒りではなく（まあ、怒りも少なからずあったのかもしれないけど）、羞恥のせいでということ、根気よくこうなった事の次第を聞くうちに理解できた。

かなり混乱していて先輩もこんな風に取り乱すことがあるんだなあ后感心すらしたほどだったけど。

要約するところだ。

棗ちゃんの部屋に寄ったせいかわ遅刻してきた吟也は、

ノックすると同時に何故か脚立を貸してほしいと言ってきたらしい。

予想外の問いかけに、反射的に「どうぞ」と返事したのはいいものの、

それきり吟也は部屋に入ってくる気配すらなくて。

痺れを切らして先輩自ら扉を開けたところ、吟也に襲われたらしい。

襲われたというのは、恥ずかし気に言い澱んでいるのを見るに、敵対し殺意があったという意味ではもちろんなく。

もうお嫁に行けないとか、初めてだったのとか、いかにもな台詞を口走っていたけど。

私が予想するに真相はただの事故だろう。

吟也が脚立を欲しがったのは、きつとクリップの子を助けるためだったに違いない。

となると脚立を置くのは扉の前になるわけで。

勢いよく開けば何かしらハプニングが起こってもおかしくない。

結局、どんなハプニングだったのかはもうお約束と言うかマンネリ言っか、

頑として口を割らなかつたけれど。

「それで、結局どうなったのだ？ 紅恩寺の評価は」

「評価も何もろくに話もしてないわよ。全力でぶっ飛ばしちゃったし」

「ひ、ひどい」

力のこもった真希先輩の一撃と言えば、町一帯に避難勧告が出される上級の魔物でも木っ端微塵になる威力を持っているのだ。

棗ちゃんが眉を寄せてそう呟くのももつともなわけだが。

「だ、だつて……」

仕方ないじゃないとばかりに泣きそうになる真希先輩。

まず見られないだろうしおらしいその態度に、なんていうかぐつとくる。

というか、本当に吟也は何をしたんだろつ？

ある意味ここまで真希先輩を変えてしまつとは。

少し羨ましいと思つてしまつ時点で、私も相当やられてるんだろつけど。

「全力……まあそれはともかく、つまり力を介して殴つたと？」

命ちゃんの問いにくくく頷く真希先輩。

改めて考えてみると、ちょっと心配になってきた。

今ここにはいない吟也。

下手すれば鼻歌三丁でひでぶ、なんてことになりかねないのでは、と。

「た、ただいま戻りましたっ」

と。そこにノックとともにやってきたのは、息も絶え絶えの由宇ちゃんだった。

「随分と辛そうだな、どうかしたのか？」

「あ、はい。吟也を入り口で寝かしておくのもなんだつたので、寮のほうへ運んだんですけど」

「そ、それつてもしかして、背負ったりとか？」

「え、いいえ。肩を貸したくらいですけど」

それでも、なんとという素敵体験……じゃなかった、ナイスタイミング。

「様子は？ 大丈夫そう？」

「はい。もしかしたら青あざくらいはできてるかもしれませんが、もつ目を覚ましてますし、大丈夫ですよ」

まるで自分の手柄のような口ぶりに聞こえるのは、たぶん私の耳の利きが悪いせいなんだろうけど。

そんな由宇ちゃんは、生徒会室に呼ばれた吟也の後をこっそりつけていたらしい。

だが、八階付近で急に進路を変えたので見失って、色々探し回っていたそう。

しばらくして生徒会室へ向かえば、そこにはどうもひと悶着あった後の吟也の姿があつて。

そんな吟也を起こした由宇ちゃんは、一緒になって付属の校舎のほうへと戻ったのだという。

「名神議長の一撃に耐えうるとは、やはり生徒会長としての素質
ありか」

そうして事の次第を知り、命ちゃんが感心してそう呟いたから。

「生徒会長……いいじゃない。こうなったら私の奴隷として、一生こき使ってやるわ！」

再びスイッチの入った真希先輩が、さも良い事を思いついたと言わんばかりにそう宣言するに至って。

（吟也。なんていうか、ごめん……）

もはや吟也は私たちから、本校から逃げられない。

その原因の一端が自分であることを強く自覚しながら。

私は内心で謝罪の言葉を述べていて……。

（第75話につづく）

75、名神先輩と私の敢えての密談

そんなこんなで、うまくまとまったように思えたけれど。

結局は毎度おなじみの、現状に変化なしの仕切り直しなわけで。

とりあえずは、現れた魔物を交代交代で監視することになって。

改めて私が呼び出されたのは、その監視の任務を終えて、しばらくしてのことだった。

「吟也を本校へ入れる……？」

そして、真希先輩の待っていた生徒会室で、私にだけと口にしたのは。

ほとんど決定事項に近かったにも関わらず、驚かすにはいられない、そんな言葉だった。

「そう。彼は異世の力に耐えうる数少ない男子だから。

本校の【生徒】として働いてくれれば、付属の生徒たちへの刺激にもなるし」

「それじゃあ……虹泉の件は？」

「男子の【生徒】は貴重だからね。今のところ、被害も出ていないことだし、

もしあれが彼の創り出したものだとしても、不問にするって上は

……先生たちはおっしゃったわ」

「……」

何だか急に結論を出すんだなあと、私はちよつと思つた。それを、私一人だけに伝える意味もないような気がして、その事を問うと。

「だって潤。彼と幼馴染みなんでしょう？ 明日は付属お休みだし、

あなたに迎えにいつてもらうのが一番だと思つて」

「それは……別に構わないですけど」

やっぱり私にだけ言う必要はない気がする。

いくらテンパっていたとはいえ、みんながいた時に言えばよかったのにと、

私が不服とは言わずともしつくりきていないのを、真希先輩も分かつたんだろう。

先輩は一つ息を吐いて天を見上げて。

「潤はさ、彼が虹泉の創造主だなんて、あまりに都合良すぎると思わない？」

「……そうですね」

それは、今考えられているものとは、逆の考え方。

そう言う風にも取れるのかと頷いていると、真希先輩はさらに言葉が続ける。

「だけど、彼は全く自分を隠そうとしていないでしょ？ いえ、もしかしたら彼は何も知らないのかもしれない。

そんな、虹泉があることも、普通の人たちを拒絶する力を私たち

が持っていることも」

確かに言われてみれば、初めて会った時だって、全く平気そうにしていたのは、

知らなかったからこそに見えなくもない。

となると、どうして吟也はそれに気付かなかった……曲法の影響を受けなかったことなただけだ。

「それは、知らないなんて問題じゃない。ありえないことだと思っただけ、

彼の転校前にいた場所を知ってピンと来たの。彼はやっぱり、かつてこの地にいた妖の人……

あるいはその末裔じゃないのかって」

魔物が現れたことで、結果この地を追われるようになくなった妖の人。

その行き先は西方。吟也は確かにここから西……神戸の町に引越したんだけだ。

私はそれをただの偶然というか、今まであまり気にしていなかった。

だけど、今は私自身も、詩奈ちゃんたちの話を聞くことで、吟也が妖の人かもしれないと思う部分があつて。

「これはあくまで私の推測なんだけど、もし彼がそんな自分の出生すら知らないとしたら、

これ以上のスケープゴートはいないんじゃないかしら」

「それはっ……」

もしそうだとしたら、吟也が何も知らないことをいいことに、
利用し陥れ、自身のやったことを押し付けようとしている人がい
るってことで。

「潤にだけこの考えを話し、任せたのはあなたが彼のことを一番
裏切らないだろうって、

そう思ったからよ。そして他の皆にはこう宣言する。

『虹泉の創造主が分かる装置により、彼を検索する』ってね。

……うまく行けば本当の創造主が、これで炙り出されてくれるは
「ず

あくまでもそれは可能性で、確実なものではないみたいだったけ
ど。

そう言う真希先輩は、何だか自信に満ち溢れているように見えて。
生まれるのは一つの懸念。

「妖の人は、人に紛れ、人心を支配する。先輩がそう思い、考え
ていることすら、

つくられて操られているものだったとしたら……」

「もしそうだったら、本校は終わりね。この町は再び妖の人に支
配されるでしょう」

私が重い空気を背負い、吐き出すようにそう言えば。

返ってきたのは随分とあっけらかんとしたそんな言葉で。

「て言うか、そんな事潤ちゃんが誰よりも一番覚悟してるんでし
よ」

「……っ」

無粋なことを言いなさんな、とばかりに笑顔を見せる真希先輩。
朝、キクちゃんに宣言したのは何だったのかと、私はただただ自分
に呆れていて。

結局のところ。

真希先輩も、吟也の魅力に囚われてしまったものの一人だったんだ
らう。

一体どれくらいライバルが増えれば気がすむのか。

私は思考が行ったり来たりしつつも自分を信じることを再確認し
て。

きっと再現なく増えていくんだろうなって、半ば諦観を持ちつつ。
真希先輩とともに曖昧な笑みを浮かべるのだった……。

(第76話につづく)

76、カチユと私と眠れる森のただの女

そうして、その日の夜。

キクちゃんが魔物を監視する任務に出ており、寮の自室には私とカチユだけが残されて。

私は改めてカチユとの対話の機会を持つことにした。

一応言い訳をしてもらえれば、キクちゃんがない時を狙ったのは、

キクちゃんに聞かれたくないとか、そう言う理由じゃない。

むしろ会話に参加してもらえるならば是非に、といったところなのだが、

カチユの声もその姿も見えないんじゃないかと。

カチユとのちょっとした会話や挨拶ですら何やら気を遣われてるから、

どうにもやりづらいつてことはあつたかもしれないけれど。

「さて、問題はどうかやって起こすか、なんだよね」

最近はずっと眠りの深いカチユ……いつもならごはんの匂いにつられて目を覚ますのだけど、

朝昼と、すでに二食も抜いているのにも関わらず、起きる気配は全くなかった。

寮の食堂から拝借したごはんと、お人形さんたちの使う食器。

話しかけても、基本的に帰ってくるのは寝息だけで。

傍から見れば確かにひかれて心配される光景に見えなくもない。

自分でも、このお人形遊びセットは不似合いなことを十分承知していたから、余計にそう思えて。

「あんまり過激な起こし方はできないしなあ……」

とにかく視覚的にまずい。

というか、寝床……カチュユ用の寝袋から出されて、肌寒そうに丸まっている姿などにかく可愛すぎる。

特に、その滑らかでつややかな薄黄色の髪など惚れ惚れする綺麗さで。

「おーい。起きてよ、カチュユ。話したいことがあるんだよ」

人差し指の腹を使って、二の腕辺りを上げたり下げたり。

普通、寝ている時に肩を持ち上げられれば目を覚ましそうなものだけど、

カチュユには全く効いていないようだった。

そんな事をしているうちに、やっぱりちょっと心配になってくる。不眠症の逆というものがあるのかどうかは分からないけれど、

もしかしてカチュユは起きたくても起きられないのではないかと。

何か、カチュユの目覚めを妨げるような力が働いているんじゃないのかと。

もしそんなものがあるとすれば何だろう？

眠れる森の美女ってどんな話だったっけ？

ええと、白雪姫は寝てるわけじゃないんだっけか……。

行き着くのは、魔女の魔法。呪い。
となると起こすための手段は……。

不意に目に留まる、ぷっくりとした桜色の、小さな小さな唇。

おお、なんと柔らかそうなのでしょ。

知らず知らずのうち、とか言いつつ半ば確信犯的に顔と顔を近づけて行って……。

「……とあつ、きんきゅーかいひつ」

いざ触れよと、勢い込んだその瞬間。

カチュにしてはそれなりに焦った声でごろごろと転がってゆく。

「カチュ……あなたもしかして寝たふりしてたの？」

だが、そもそも大きさが違うのだ。

転がってきたところを、そのまま拾い上げ、目の高さまで持ってきてそう問いかける。

この期に及んでもまだ寝たふりをしようとしていたけど、

今の拘束された状態で、先程と同じことをされたら回避のしようのないことに気付いたのだろう。

へふうと、なんとも力の抜ける息を吐いて、カチュは私を見上げてきた。

久しぶりに見る、カチュの瞳の輝き。

何も言わずにじっと見つめていると、やがてカチュは根負けしたのか、おずおずと口を開いた。

「えと、その。ひとつ言い訳を」

「うん。何？」

「だから、その。カチユにはどうしようもなく眠い理由がありません、

べつにずっと寝たふりをしていただけじゃないですよ。

潤ちゃんと話そうと思って、機会を伺っていたらつい……」

これまた久しぶりに聞く見た目にそぐわない下っ端口調。

あれだ、いわゆるギャップ萌えてやつだらうか。

「その、眠い理由ってのは？」

私はそんな事を考えつつも、カチユを机に降ろし、まずは手近な話題から問いかけてみる。

「カチユは、ボスの記憶を預かってるっす。ボスの記憶はカチユには大きすぎて……」

だから眠くなるっす」

「ちよっと待って。一つ一つ聞いてもいいかしら？」

ずつと気にはなっていたけど、そのボスって言うのは吟也のこと？」

寝言ではない、その呼び名。

最終確認の意味を込めてそう聞くと、カチユはこくりと頷いて。

「そうっす。カチユはボスによってつくられた、つくもんの一人なんすよ」

発せられたその言葉は、薄々感じていたとはいえ、
自分の力によって彼女が生まれたという勘違いを正すもので……。

(第77話につづく)

77、カチユと私でぎゃふんと言わせよう

カチユのその言葉は。

薄々感づいていたとはいえ、自分の力によって彼女が生まれたという勘違いを正すものだった。

「それじゃあ……それじゃあ、吟也は分かっていて私にあなたを預けたってこと？」

「そうっすね。だから人質なのです。カチユとしてはこんなによくしてもらって、

そんな言い方をするのもどうかって思うっすけど」

比喻ではなく、人質は人質だった。

となると、浮かんでくる一つの疑問。

何故、吟也はホツチキスではなく、カチユを返して欲しいと言わなかったのか。

何故、カチユのことを黙っていたのか、ということだった。

私がそれを問おうとすると。

カチユはそれを見越していたんだろう。

私が何か言う前に口を開く。

「だけど今、ボスはカチユのことを覚えていません。

カチユを作り出したボスであると言うことも、自分が何者なのかも。

それでもボスがカチユを求めたのは、他のこうせいいんの方たちに頼まれたからなのです」

不意に聞こえてきたいくつもの声。

主の居所の分らない声。

たぶんそれがきつと、カチュの言うこうせいいん、つくもんさんたちのことなんだろう。

でも、聞けば聞くほど謎は増える一方だった。

今まで溜めてきたものを、今ここで使い切るかのようなカチュの饒舌っぷりに置いていかれそうな私がそこにいる。

「ええと……つまり、吟也が記憶を失っているっていうのは、カチュがその記憶を持つてるからってこと？」

それでもなんとかそう聞くと、こくこく肯定の意を示すカチュ。

「それじゃあ、そもそも何故吟也は記憶を失ってるの？」

そこで私は、今一番の疑問を口にする。

するとカチュはうんうんと唸り考え込んで。

「実を言うと、記憶を預かってくれて、急におっしゃられたので、

根本的な原因はカチュにも分からないんです。だけど、推測はできません。

ボスの力はとっても強いんです。それこそ、カチュたちに力を分散していなければ魔物以上の脅威として、人間さんたちに目をつけられてしまうんですよ」

つまり……記憶そのものが、吟也の人ではないもの、妖の人としての力の源なのだろう。

過ぎた力を持たないように。

そのことについて言えば、それは納得できる答えだったけれど。

「でも、今になってどうしてその記憶を取り戻そうとしているの？」

結局はそこに行き着くわけで。

私がそう問いかけると、カチユはそれに頷き答えようとして、ぐらりとふらつく。

どうやらまた眠気が襲ってきたらしい。

それでも倒れこむのを何とかこらえ、カチユは足を伸ばした状態で座り込む。

そして、生あくびとともに、焦点のぶれ始めた瞳をくわっと見開き、言葉を続けた。

「……簡単に言えば、力が必要に……なったんすよ。あの魔物が次々と現れる現象……」

カチユたちは人間を滅ぼそうとする七つの災厄、そのうちのひとつだと認識してますが……」

ボスには、あの力を滅する使命があるんす。だからボスは……何も知らないままにカチユたちを探してっ……」

うわ言にも似た、カチユの不安定な呟き。

そろそろ限界のようだった。

頭をぐわんぐわんさせながら、必死に言葉を紡ごうとしている。

「分かった。もう分かったよ。私はカチュユを、吟也に返せばいいんでしょう？」

これ以上は見られてはダメで。

私はカチュユが一番伝えたかっただろって口にする。

するとカチュユはどこか嬉しそうなの……あるいは何か秘密の企みがあるみたいな笑みを浮かべて。

「返す、というのは少し語弊があるかも……しれないです。

カチュユは……カチュユは、必ず潤ちゃんのところに戻ってくるっすよ。

だから……お願い。今話したこと……カチュユと潤ちゃんがお話できること、

ボスには秘密にしてっ……」

まるで今わの際みたいな台詞。

私は少しでもそんな事を考えようとする自分を首振って否定して、いよいよ眠りの世界へ入り込もうとするカチュユを手のひらで支え、何故を目で問う。

するとカチュユは、大きく息を吸い込んで。

「ボスの……思い通りにはさせないです。使命に殉ずるなんて誰も望んでないからっ……」

「……っ」

予感があった。その使命が、一体どんなものなのかと。

だから吟也は話さなかった……知らなかったのだ。

誰かを犠牲にしてなしえる使命が、その誰かを想う人を傷つける

ということを、

本能で分かっていたから。

それは許されざること。

だからカチュは必死に抗う。

だからこうして、私に話をしてくれたんだろう。

「カチュはつれないボスの鼻をあかしたいんす。潤ちゃんには一枚噛んでもらいたいのです」

渾身の笑顔で、渾身の願い。

「そう言うことなら、喜んで」

私は力強く頷いて見せて。

カチュとがっちり握手をしたのだった。

それは、両腕と人差し指という、随分と不恰好なものだったけど。

何を考え、進めばいいのか。

どっちつかずだった自分の進むべき道を明確に示してくれるものでもあって……。

(第78話につづく)

78、カチユと私、駆けるのはいとしいひとのもと

そうして、次の日の朝。

運命の、とも呼べる一日が始まる。

私はそれから完全熟睡モードに入ってしまったカチユを連れ、吟也の家へと向かっていた。

その時の私は、数日前ではありえないくらい晴れやかだったと思う。

ずっと眠ったままだったカチユ。

それを無理して（あるいはそのために寝溜めていたのかもしれないけど）私に話してくれた言葉。

吟也の自分勝手な企み……その鼻を空かすための二人の秘密。

その時、私が思い出したのは紅葉台の伝承……御伽噺。

わらう赤鬼のお話だった。

思えば私は、子供ながらに、その御伽噺に対する疑問がいくつかあった。

こういったお話は普通、鬼や魔物を退治する人間が主役であるはずなのに、どうして違うのかと。

その頃は、世界のすべてが勧善懲悪で回っているわけではないなごと、当然理解できなくて。

そんな時私たちは、決まって言われたものだった。

主役は私たちなのだ。

魔物を、妖の人を追いやり、平和をもたらすものたちこそが、私たち【生徒】なのだ。

それは、ここに集められてから、あるいはここに住む子供たちが、よくよく聞かされた言葉だ。

今の今までは口々に考えもせずそれを疑うことはなかったけれど。

それは間違いじゃないかなって今思う。

吟也が、その赤鬼と呼ばれる妖の人だったとしたら。

私たちの知るわらう赤鬼の物語は、嘘ばかりじゃないかって。

何故なら私はよく知っていたからだ。

小さい頃、吟也がその度口にしていた夢が、

それこそ本家の……有名なほうの赤鬼の話に出てくる青鬼のような、

自己犠牲も厭わない、嘘つきの英雄だったということ。

そんなことをさせない。

鼻をあかしてやるんだってカチユの言葉が。

私のその考えに、もはや確信めたものを与えていて……。

私は駆ける。

一分のズレもなく、愛しい人の元へと。

きつと勝るとも劣らない想いを持つ、私の相棒を送り届けるために。

その様は、穏やかに流れ行く紅葉台の町に、さながら一石を投じたかのごとき波紋を広げる。

夏でも変わらぬフードは【生徒】の証。

人間ではないものの、異端の証。

変わらぬ生活をしていた人々が、何事かと、何かあったのかと私を避ける。

冷静に考えればそれは当たり前のことで、

何かあったのかって思うのは仕方ないことだったんだろうけど。私はそれを態度に出さなくても、口に出さなくても、きつといても傷ついていた。

他の子もきつとそう。

だから私たちは、本当にどうしようもないときにしか外に出なかつたんだけど。

今は違う。

私は今、そんな私たちを受け入れてくれる人の元へと向かっているのだから。

そんな事を考えているうちに……辿り着いたのは自宅前。

お客さんでも来ているのか、世間話をしているお母さんの声が聞こえてくる。

相手の声もどこかで聞いたことがあるな、なんて思いつつも私は自宅前を通りすぎ、

その隣にある大きくて年季の入った、それこそ何かが出てもおかしくなさそうな洋館を見上げた。

それこそが、吟也の暮らす家だ。

玄関に辿り着くまでに色を添えるのは、手入れの行き届いた庭園。そこだけやけに生活感があって、今まさに手入れの最中、と言った感じで。

お屋敷にお庭はつきものはずなのに。

ちよつと違和感。

その感覚は、いくら手先が器用だとは言え、陽の下に出てせつせと庭の手入れをする吟也のイメージがまったく浮かばなかったせいもあるんだろうけど。

私はそんな事を考え、でも似合わなくもないかな、なんてほくそ笑みつつ。

玄関のチャームを押したのだった……。

(第79話につづく)

79、カチユと私と女心はなんとやら

「は、はい」

インターフォンから聞こえてくるのは、急な訪問者に焦りつつも待たせるわけにはいかない、といった様子の吟也の声。

「……こんにちは。吟也、少し時間ある？」

「あ、潤ちゃん。ちょうどよかった。今、潤ちゃんに会いにしようと思ってたところなんだ。ちょっと待ってて」

柄にもなく緊張しつつそう言うと、正直嬉しくないと言えば嘘になるそんな言葉の後、

ものの数秒な感覚で、吟也がひょっこり顔を出した。

相変わらずの目のくらむような銀系の髪、その美貌と笑顔。

確かにここまでクオリティが高いと人間の男などどうでもよくなるかも、

なんてようでもないことを考えつつも、いろんな意味で直視に耐えられなかった私は、

反射的に俯いてしまう。

「そのフード前にも着けてたけど、暑そうだね。陽射しよけ？」

顔が見えないのが、吟也にとつても嫌だつたんだろう。

一度聞かれたような気もするそんな言葉。

確かに夏は暑くて仕方ないんだよねって苦笑しつつ、私は意を決して顔を上げる。

「一応私も【生徒】だから。外出のときは力を抑えるために、これを着てなくてはならないのよ」

でなきゃ、周りの人に迷惑をかけてしまつて。

このカツコは人々にとつての危険の証。

普通ならそれを知らない事すら驚きなんだけど。

「そつか、有名人だもんなあ。顔の一つも隠す必要があるってことか。」

ま、家なら不要でしょ。お茶出すから、あがつて」

本気が冗談か。

まるで、気にした風もなくそんな事を言つて笑つ吟也。

もう、そんなあり得ない吟也を何度も目の当たりにしていたけど。

やっぱりまだ慣れない。

嬉しくつて泣きそうになる。

「ありがとう」

でもそれは、吟也にとつてみれば感動するほどのものでもない、それこそ当たり前前の事なのかもしれない。

「別に礼を言うほどのことじゃないでしょ」

なんとか平静を装ってそう言う私に。
吟也は大げさだなあとばかりに苦笑して。

「それじゃ、あがって」

何だか照れくさそうに、吟也はそのまま……確かリビングのある方へと歩いていってしまう。

「お、お邪魔します」

私は、置いていかれるわけがないのに、慌ててその後を追っていった。

辿り着いた、大きな大きなおしゃれな洋風のリビング。
そこに妙にマッチしている、これまた大きなおこたつきのテーブルが目に入って。

「あ……っ」

思わず驚愕の声を上げかけ、慌てて口を噤む。

おこた机の端っこ。

そこにちいさな座布団を敷いて、テレビを見ている、二人の小さな小さな女の子がいる。

二人とも、カチュと同じくらいサイズのだろうか。

袴姿のポニテな女の子と、カチュとお揃いの黒ポンチヨを着た、真っ赤な三つ編みの女の子。

カチュに負けなくらい、個性的で可愛い女の子たち。確かにそこに、生きて存在している。

「どしたの？ 座っていいよ」

「……っ！」

だけどその瞬間。

思ったより近くにいた吟也に声をかけられてはっとなつて。目を切った隙にこたつ机の状況は一変していた。

「あ、その……サングラスとパンチがテーブルの上にまつられてるのが気になつて」

小さな小さな座布団の上にあつたのは。

小さめのパンチと、音楽視聴機能付きのサングラス。

そう言えばそのサングラスは吟也が身につけていたものだと言更ながらに気づいて。

「ああ、言われてみれば」

そりゃそうだとばかりに、相づちを打つ吟也。

果たして吟也には彼女たちが見えているのかいないのか。

カチュとの約束でカチュたちが見えることを話すわけにはいかない私には、

そう言って吟也の様子を伺うことしかできなかったけれど。

「気になるならちょっと席を外してもら……じゃなく、何かすけど？」

それはあまりにあからさまな確信。

吟也はきつと彼女たちが見えている。

だって吟也はカチユの言うところのボスだから。

だから……再会した時、あのサングラスの彼女に私が触れようとしたのを止めたんだ。

となると、やっぱり吟也は私が彼女たちの事が見えることに気づいていないってことになるんだけど。

「……ふふっ、ううん。別に構わないわ。やっぱり相変わらずものを大事にしてるなって思ったただだから」

それはカチユとの秘密の約束。

その悪戯めいた感覚に私は思わず笑みをこぼし、知らないふりをする。

そして、吟也に促され、おこた机にはミスマッチなふかふかソファに勧められるがままに腰を落ち着けて。

「あ、そうそう。はい、昨日言ってた約束のもの、やっぱり返そうと思って」

女心はなんとやらの唐突さで、私は一番の使命……カチユの眠る寝袋を取り出し、そう切り出した。 相対に腰掛けてお茶を配って

いた吟也は、

みの虫みたいにもぞもぞと動いている力チユを不思議そうに、
あるいは何かに怖じ気づくかのように見つめている。

「あ、開けてもいい？」

「ええ」

もしかしたら、カチユのことを分からず物として扱ってたら、と
か思っちゃってるのかもしれない。 空気を読んで寝袋から頭を出
さずに丸まっている力チユを見ればそう考えてもおかしくないんだ
ろう。

私は笑いかみ殺しつつ頷いてみせる。

すると吟也は大げさなほどにおそるおそる袋の中を覗き込んで…
…。

(第80話につづく)

80、吟也と私と納得できない秋の空（前書き）

更新ペースが遅くなりそうです。一日1話をいつまで保てるか……。

80、吟也と私と納得できない秋の空

私が、笑いをかみ殺しつつ頷いてみせる中。

吟也は大げさなほどにおそるおそる袋の中を覗き込んで。

見てるこつちがどきどきするような、安堵の息をつく。

袋の中では、薄黄色のウェーブのかかった長い髪に巻かれて熟睡してる、カチユの姿が確かに見えた。

寝たふりか本気寝かは、判断がしづらいところで。

「知らんかった。熟睡しとるとつくもん反応ないんや」

「いらぬ心配だったでござりまする」

「……っ」

どこからともなく聞こえてくる二つの声。

言わずもがな、さっきの二人の女の子の声だろう。

やっぱり私が見えて聞こえているなどは露ほどにも思っていないようだった。

まあ、最初に見た時は分からなかったし、私自身も見える聞こえるのメカニズムはよく分かってないんだけど。

なんとなく、これもカチユの力だったのかなって、ちょっと思う。

「でもさ、潤ちゃん。まだ僕試験に受かってないし、約束も果たせてないよ？」

「なんで返してくれるの？」

と。そこで確かにもっともな吟也の問いかけ。
昨日はあんなに嫌がってたんだから、吟也にしてみれば秋の空だ
なんて言われても納得できないかもしれない。

私は改めて弁解……説明するために頷いて。

「今日はどちらかと言うと、そのためにここへ来たの。」

突然なんだけど、特例で吟也を本校に編入させることが決まって
……その連絡を、私が頼まれたのよ」

今となつては、そっちの方がおまけだったけれど。

「な、なんで急に？ 僕、試験受けてないんだよ？」

どちらにせよ急な話だろう。

私は再度頷き、言葉を続ける。

「ええ、最初に聞かされたときは、私も驚いたわ。何でも議長が
そう決めたらしいんだけど……」 「議長？」

「ええ、生徒会議長の名神真希先輩。今、トップの生徒会長が空
席だから、

仮のトップを務めている人、なんだけど……」

私はそこで言葉を止め、あえての怒ったような顔を試みせる。

「だけど……？」

案の定、身を竦ませる吟也。

思い当たる節があるのか、そうでないのか。どちらにせよ小動物のように震える吟也が眼福であることに間違いはないわけだけど。

「吟也、あなた真希先輩に何か恨まれるようなことしたでしょう？」

あの能天気が服着て歩いてるような先輩が、あそこまで怒ってるの、初めて見たもの」

「怒ってた？ ど、どんな風に？」

吟也が見やるに、身に覚えがなさそうなほづが公算は高そうだったけど。

それでもいやな予感がしたんだろう。

おそろおそろそう聞き返す吟也に。

「どうって……生徒会長にして、死んでもこき使ってやるわ！
って叫んでたわ」

一句違わずつくりごとなく、そのままの言葉を述べてあげる。

「し、死んだらこき使えないと思うけど……」

まるで、今私が言ってるみたいになっちゃったけど。至極真面目にそんな事を聞いてくるから。

「ああ、うち、一応科学班もいるからね。改造人間のサンプル、欲しいって言ってたから、たぶんそれじゃない？」

嗜虐心をつつかれどうにも止まらぬ私は、悪乗りしてそんな嘘く

さい言葉まで発してしまった。

まあ、あながちなにもかも嘘ってわけじゃないんだけどね。

「……」

私の悪乗りにも、本気で悩む吟也。

これはうまくいけば真希先輩と何があったのか聞けるかも、なんて野暮な私は思っていて。

「あー、なんとなく思い出してきたぞ。僕、殴られたんだ。たぶん、きつと、その人に」

「殴られた、ね。よくそれで無事だったわね？」

まさか本気じゃなかったらどうけど。

確かにその話は真希先輩から聞いていた。

だが、問題はそこじゃない。

私が聞きたいのは殴られるに至った経緯なのだ。

まあ、だいたい予想はついてるんだけどね。

「無事、かなあ？ だって、そのまま気を失って、その場に置き去りにされたんだよ？」

若穂が助けてくれたから良かったけど……おかげで先生に頼まれてたおつかい、できなかつたし」

おつかいがままならなかったのは、寄り道したからじゃないのとはさすがに言えず。

「無事じゃない。真希先輩って言えば得物を使わない【生徒】として最強の戦士なのよ。」

私、彼女の拳の一撃で、魔物がこっぴみじんになったの、見たことあるもの」

助長して、代わりにそんな事を言ってみる。

すると、殴られたという仕打ちにさすがにムツとしていた吟也が、あっさり氷付いた。

私はそんな吟也に耐えられず、とうとう笑みをこぼして。

「どうせ事故なんですよ。吟也が女の子を襲ったり、相手の意志なんてお構いなしに、

とかできるわけないものね」

「あ、もしかしたらディアちゃんを助けたときの子やないか、ごしゅじん」

「確かにあれは、端から見れば不埒な輩に思われても仕方のない状況でござったな」

生徒会室の入り口での一幕。

私の問いかけに答えてくれたのは、カチユを見てくれていた二人の女の子だった。

ディアって確か、歓迎会の看板を支えていた子だったはず。

今は姿は見えないけど、やっぱり彼女を助けたのは吟也だったんだろう。

吟也が脚立を何に使うか話すか、あるいは真希先輩が扉を開ける時に注意を払っていれば起きなかった事故のはずで。

口ではどう言おうとも、やっぱり何事もなかったことにちょっと安堵する私がそこにいた。

もしかしたら事故とは言え、触れたりくっついたりなハプニングはあったのかもしれないけれど……。

(第81話につづく)

81、吟也と私と好みのアンケート

「いきなり言われたから驚いたけど、良かったじゃない。命ちゃんたちも吟也のことかってたみたいだったし」

あーでもないこーでもないと、必死に言葉を探している吟也がいたたまれなくて。

それはもう解決したよ、とばかりに私は話題を変える。

「約束叶えられちゃったのは何だか複雑だけど……うん、約束だもんね。」

これから一人前の【生徒】として、私が鍛えてあげるわ」

「う、うん。僕も急でまだちょっと信じられないけど、よろしく頼むよ。潤ちゃん」

私の言葉に便乗した形の吟也としては、紅葉台の【生徒】としてのお誘いに異議はないらしい。

流石に生徒会長と言う肩書きには戸惑っているようだったけど。

複雑、という言葉。

もちろんそこには色々な意味が含まれている。

吟也には、私たちのようにこの紅葉台学園に縛られる理由がない。何故なら私たちと違って、他の人にいるだけで迷惑をかける必要がないからだ。

そんな吟也を【生徒】として迎えると言うことは、彼の自由を奪ってしまうことを意味する。

逆に、本校には入り込むのが目的で、何かを企んでるって可能性の方がまだ楽な気がした。

私としてはもうそれはないだろうって思っているけど。

本校としてはそのつもりでここに私を遣わし、待ち構えているのだから。

「あ、そうだ。潤ちゃんに渡したいものあるんだ。ちょっと待ってて」

私が、そんな事を考えていると。

なにやら思い出したらしく、そう言って立ち上がり何かを持ってくる。

「……っ」

それは、武器だった。

魔物に立ち向かうための武器。

簡単に言い表すならば、刃が銅鐸のように大きく広がった大きめの槍。

戟と呼ばれるそれは。

細かな細工や刃の色こそ違えど、確かに私自身が愛用しているものと同じもので。

思わず、声をあげてしまう。

「え、どうして？ どうして吟也……私が愛用してる武器、持っているの？」

「うん、クラブの宿題でさ。潤ちゃん、アンケート書いてたでしょ？」

それを参考にして、真似て作ってみたんだ」

「あ……そういえばそうだったっけ？」

まるで心見透かされたみたいな感覚に思わず驚いちゃったけど。

確かに昔、トイ先生に言われてアンケートを書いたのを思い出した。

付属の生徒たちが、せっかく隣にいるのに何もできないじゃ忍びないと、

消耗品の作成、発注のためのアンケートを。

もっとも、本校の【生徒】たちは、それを普段ろくに会話もできない付属の生徒たちへの一方的なメッセージ（たとえば、好みのタイプとか）のごとき扱いだったし、

私自身は自分で魔物に対するための武器をつくることができたから、

あまり深くは考えず提出した記憶がある。

そう言えば、好みのタイプなんて書いたっけ。

なんか吟也っぽい人物像をそのまま書いた気がしなくもない。

あれ？ それって事はつまり、私の吟也への想いはバレバレってこと？

「ほんとはこの後、先生に出来ばえを見てもらうつもりだったから、

実はちゃんと使えるかどうかわからないんだけど……ま、お守り代わりにもつてて。

あ、お守りにしたってでかすぎて邪魔かな、コレ？」

無邪気に笑う吟也。

素敵だけど、私の心うちを知った上で言ってるのかどうかは微妙だった。

ただ、アンケートはそれこそ【生徒】の数だけある。

少なくとも、吟也は、私を選んでくれたのだと自惚れてもいいのかな？

そう思うとついつい感極まって。

私はぶんぶんと首を振り、奪いとるかのような勢いで、それを手に取り抱きしめる。

「潤ちゃん？ カバーはつけてるけどそれってうすい皮のだからあんまり力入れると痛いよ？」

思ってた以上の反応だったんだろう。

戸惑っている様子の吟也がにくらしくいとおしい。

吟也は、自分がどれだけ嬉しいことをしてくれたのかわかってな
いに違いない。

一人でやつくその顔を見られたくなくて。
私は背中を向けるような体勢になりつつも。

「……ありがとう、一生の宝物にするから」

言わなくちゃいけないことを口にした。

「あ、うん。どういたしまして。そう言われると、僕も作った甲斐があるよ」

なんだか、照れているようにも聞こえる吟也の声。

それが伝播し、なんとも恥ずかしいこと口にしちゃったなって思うと二の句も告げなくて。

しばらくの間。

気まずいようなそつでないような、沈黙が訪れる。

「あのさ、吟也、私……」

それを破ったのは私自身だった。

「……ん？」

吟也の相槌を受け、私は軽く息を吸いこむ。

そして、自分自身でも何を言うつもりなのか分からないままに言葉紡ぎかけた……その時。

ジリリリンッ！

どこからともなく、けたたましいベルの音が鳴り響いた。

どこから、じゃない。聞き慣れたそれは、当然私から発せられたものだ。

はっとなつて身につけている連絡機を取り出す。
緊急連絡を知らせるそれは、赤く明滅している。ただの呼び出し
じゃない。

魔物出現の合図だ。

もっとも、既に数体現れていたのだから、何か動きがあったのだ
ろうけど……。

(第82話につづく)

82、真希先輩と私としろくろつける冷やかし

「じゅ、じゅめんっ吟也、ちょっと電話出てくるっ」

私はそう言い残すと、返事より早く玄関の方まで走る。

「はい、こちら風紀長、三水ですが」

「どうも」。こちら議長名神。おじゃまだったかしらあ？

その通りだよ、とは言えない。

いくら態度が軽くてもこれは緊急連絡なのだから。

「ふ、ふざけないでくださいっ、なにかあったんでしょっつ？」

「わ、わ、そんな怒らなくても。さては凶星ね？」

まあ、その当たりは平和になったらじっくり聞かせてもらっつとして……重要参考人の様子は？

何かおかしな動きは？

思わず声量の上がる私を、宥め賺すような真希先輩の言葉。

いつの間にか入っている本題に、どうにも調子を狂わされたけど。

「いえ、特には」

「曲法の反応は？」

「ええと……ないと思います」

カチユのお友達たちはそもそも最初からいたし、言われて気づいたんだけど、

たとえば棗ちゃんの力によって生まれたどんちゃん違って、彼女達には明確な曲法の力はほとんど感じられなかった。

まあ、だからこそ、カチユとはいつでもどこでも一緒にいられて、誰にも気づかれなかったんだらうけど。

それはまさしく、作り物ではない、息づくものとしての証のようにも思えて。

そんな彼女たちを生み出したのが吟也であるのならば。

それこそ人の領分などつくに越えた存在なのではないかと改めて実感させられて。

「となると、紅恩寺クンはシロなのかしらね？ たった今、あの虹泉のある地点から、

魔物が大量発生したんだけど」

「えっ？ そんな、どうして？」

何故、このタイミングで？

今更、こちらから刺激する理由もないだらうし、一体どういふことなんだらう？

「原因は不明ね。不可解なのはこちらに襲いかかってくる気配がない事かしら。」

まるで、防衛戦でもするみたいに虹泉を囲んでる……」

結局いまだ膠着状態。

だからこそ、こつやって話してられるんだらうけど。

「ただ、数が数だけにこのまま傍観つてわけにもいかないわね。そんなわけで、潤にも現場に向かってもらいたいのよ」

も、つてことは真希先輩のを含めた総出なんだろう。

建て前でも任務中の私ですら呼び戻すくらいなのだからよっぽどの数なのかもしれない。

そんな、いきなりたくさん増えるのもおかしな話ではあるけれど。

「わかりました。直ちに向かいます。……それじゃあ吟也の呼び出しは後日でよろしいですか？」

「そういうことになるわね、残念だけど。白黒関係なく今懐に入るメリットはないだろうし」

「了解しました」

本当に残念そうにそう言う真希先輩に、やっぱりこれはライバルが増えたと見るべきか、

なんて思いつつも了承の意を示し私は通信を切る。

そして、すぐさまリビングへと戻ると、なんとなくニュアンスが伝わったのか、

心配げにしている吟也に向かって言った。

「ごめん。本部……生徒会室からの緊急の呼び出しで、私戻らなきゃ」

「もしかして、魔物が出たの？」

出たというか、もう出てただけで、見た感じ吟也はそれすら知らないようだった。

これで惚けてたなんていったら、吟也の見方を変えなきゃいけないだろう。

私は、少し考え吟也にありのままを話すことにする。

「……外界の話ではあるんだけど、紅葉台山のてっぺん辺りに、魔物が増え始めてるのよ。

今のところ、内界に入ってくる気配はないらしいんだけど、これ以上増えるようなら、

避難勧告が出される可能性はあるわね」

それは、今あったばかりの内容そのままだ。

吟也が張本人とまでは言わずともその事に関わっているのならば、何かしら反応があるはず。

あるならそれを逃さぬとばかりにじっと吟也を見つめていると。それを聞いた吟也は、不安そうな顔をいつそう深めて。

「それ、僕も行ってもいい？」

そんな事を言ってきた。

まだ【生徒】でもないのに、何の臆面もなく。

それはすなわち、その場へ向かう私……私達のことを心配したが故の言葉なんだろう。

吟也ならそんな行動に出てもおかしくないって思っているても、動揺する。

何せ、魔物との戦いに赴く私たちに対して心配してくれる人なんてほとんどいなかったから。

「な、何言ってるのよ。ダメに決まってるでしょ。」

いくら本校への編入が認められたって言ったって、まだ正式な手続きもしてないし、

何より基礎も知らない吟也が今現場に出たって、足手まといどころか、吟也が危険な目に……

ひいては他の子たちを危険に晒してしまうことだってあるかもしれないでしょう?」

まるで言い訳するみたいに私はまくし立てる。

面倒事を背負い込むのは私たちだけでいい。

テンパっていても、こういう言い方をすれば吟也は折れるだろうって瞬時に計算できるところに、

自分自身で嫌気がさして。

「……少なくとも一ヶ月は、対魔物の戦闘やルール、曲法について勉強しなきゃ」

それでも私は、至極まっとうな言葉で締める。

そこには、その正論を否定できる力があるなら話してほしいっていう打算もあったけれど……。

(第83話につづく)

83、吟也と私のちゃっかりアピール

「……そっか」

吟也は、私の言葉に肩を落とし、それじゃあ仕方ないかとしぶしぶの納得の意を示す。

と言っか、顔は全開で不満そうだった。

その姿に、昔の頑固でわがままだった吟也をちょっと思い出して。

「ごめんね。ほんとはこの後、そのことについてみっちりレクチャーしていくつもりだったんだけど……帰還命令出ちゃったし、今日のところは付属の荷物まとめておいてくれる？」

「あ、そうか。本校に行けるってことは、付属辞めないといけな
いのか……」

まだ数日とは言え、名残惜しさはあつたんだろう。

しみじみとそう言う吟也に、やっぱりちよつと罪悪感めいたものはあつたけど。

「それから明日かどうかは分からないけど、また連絡するから。そしたら直接本校に来てほしいの。吟也に、曲法の才能があるかどうか、検査するって言ってたから」

本当は、今現れている虹泉の主かどうかを調べたりするんだけど。なんだかそれも今更な気がして口には出さない。

「……まあ、異世にずっといても平気、真希先輩の拳を受けても平気なら、

きつと何らかの力があるんだろうけど。もし前線に出られるタイプの曲法だったら、私の委員に入るのよ」

とりあえずは、私のために私の言いたいことだけはちゃっかり言っておくことにする。

他の子には負けてられないからね。

「え？ うん、うん。でも、生徒会長がなんとかって塩生さん言うてなかったけ？」

それに、美音先輩もそんな事言ってたような気が……」

だからこそ今私の意志を示したんじゃないのって、再度念を押そうとする私。

するとそのタイミングで再び響く、連絡機のアラーム音。

「あーもうっ！ 分かってるわよっ……と、とにかく、【生徒】

になったら入るのは私の委員よ、

分かったわね！ それじゃ、また明日っ！ 待ってるから！」

「うん、うん、また明日」

どうせいたずら半分我真希先輩の催促だろう。

私は通信を受けるより早くどさくさにまぎれて有無を言わせぬジヤイアニズムを發揮し、

挨拶もそこそこに家を飛び出す。

それは、嫌だって言われないうちについていう打算もあったんだろ

うけど……。

そのまま勢い余って吟也の家を出て。
私は駆け出しながら電話に出る。

「はいっ。こちら三水潤ですっ！」
「……………」

真希先輩だと思い込んでいた私は、結構乱暴めに出たんだけど。
どうやら相手はそれにちよつと腰が引けてしまったらしい。
おののき、息をのむような気配がそこにある。

「おほん……………ええと、どちら様？」

私は気を取り直し、丁寧にそう言つと。聞こえてきたのは潜める
ような詩奈ちゃんの声だった。

「潤さまか？ わたしじゃ。詩奈じゃ。いま、例の紅葉台山の頂
上におるのじゃが……………」

虹泉がもう一つ増えよつた

「……………え？ それってどういふこと？」

「言葉のままじゃよ。わたしたちが今まで監視していたものとはべつのものが新たに現れたのじゃ。いや、もしかしたら今までずっと隠れていただけで、最初からそこにいたのかもしれぬが……」

真希先輩の連絡には、そのような話はなかった。

つまり、詩奈ちゃんは誰に知らせるよりも早く、私に知らせてきたってことなんだろう。

そこまで聞いて私は、はっとなる。

気付かされたのは、詩奈ちゃんの今の状況だ。

「詩奈ちゃん。もしかして今、魔物たちに囲まれてるんじゃない……」

「どうやらそのようじゃな。人ではないものの多くの気配がそこかしこにある。」

いや、そんな事はどうでもよいのじゃ。

問題は今まで隠れていたものが、何故今になって現れたのか、なんじゃよ」

どこか言葉を選ぶような、詩奈ちゃんの眩き。

ただその時私は、その問題よりも、自分のことなんてどうだっていいと思っているフシのある詩奈ちゃんが心配で、思わず駆け出すスピードを速めていて。

「考えうる理由は一つ。元々あった無害な虹泉に、すべての罪を擦り付けるつもりなんじゃろう。」

今その企みにわたしが気付いた時点でツメが甘いとしか……っ」

そこまで言ったところで、不自然な会話の停止。

息をのむ声。微かに聞こえるのは、風音とともに開け放たれたテナントのはためきか。

「やはり来たか。じゃがもう遅い。今更私の口封じなど意味を…
…ぐっ」

くぐもった声。乱れる回線。

暴風が集音される中、おそらくは詩奈ちゃんの倒れ伏す音。

「詩奈ちゃん！ どうしたのっ？」

既に間に合わないと分かっているでも、叫ぶ私。
その返事の得られぬはずの叫びに、しかし律儀に答えるものがあった。

「ごめんなさい……潤。もう、この力を、衝動を止められそうにないのっ。」

せつかく棗が、抑えていてくれたのに……」

熱に浮かされたような、頼りなく、泣きそうな声。

荒い息とともに、辛さを吐き出そうとするような声。

それは、初めて耳にするキクちゃんの声だ。

「キク、ちゃん……？」

私はショックだった。虹泉の創造主がどうこうよりも、
そのことでずつとキクちゃんが苦しんでいたという事実には、
たっ今気付かされたことに。

自分が情けなかった。こんなに長い間一緒にいて、全く気付けな

かったなんて。

「デリシアス・ウェイは、自らが滅ぼされるのを恐れています。だから……ごめんなさい。」

私は潤の大切な人をつ……」

ぶつりと、慟哭であり懺悔である告白がこと切れる。何者かに、強制的に排除されたみたいに。

そしてそのまま、連絡機は強い風音だけを拾っていて……。

「キクちゃん……」

何もかも分かったわけじゃなかったけれど、キクちゃんは助けを求めている。

取り返しのつかない何かが起こる前に、止めて欲しいって訴えていることだけは、はつきりと分かったから。

「待ってて、今行くからっ！」

私はしゃにむに駆け出していた。

その背中を、巨大な恐怖と絶望でできた何かに追いかけられながら^ら。

それを、必死に振り払うように。

（第84話にじつづく）

84、棗ちゃんと私と語られる急転直下

周りを省みずに異世を展開し、息つくヒマもなくなるとどり着いたのは紅葉台山の頂上、演習場の入り口。

そこに来て分かる、思ったた以上の事態の深刻さ。

魔物たちは既に、演習場を覆うように円を作って広がっているらしかった。

遠巻きに陣どっているテレビ局のクルーが、その状況を戦々恐々としながら伝えている。

そのカメラが捉えているのは、動かぬまま、虹泉……山の頂上を守るみたいにならずりと並ぶ闇色の形種類様々な魔物たちと、それに相対して、様子を伺っている【生徒】たちだった。

どうやらここにいるのは、生徒会執行部らしい。せわしなく動き回っている真希先輩に命ちゃん、そして病み上がりのはずなのにもう元気である棗ちゃんの姿がある。

「潤姉ちゃんっ」

と、私の存在に気付いた棗ちゃんが、血相を変えて駆け寄ってきた。

「大変なんだっ、土島……詩奈さんと喜久が、魔物たちに囲まれてっ」

そして、焦った様子でそう言われ、ついさっきまで、詩奈ちゃんとキクちゃんが、

虹泉を監視する当番だったことに気付かされる。

「棗ちゃんは、キクちゃんのこと知ってたんだよね？」

「……っ」

焦り増す棗ちゃんとは対象的に、静かに問いかける私。

それに、棗ちゃんは私の意図するところを感じ取っただらしい。

息をのみ、はっとなって私を見つめ、ばつが悪そうな顔をする。何かを恐れ、怯えた様子を見せる。

「ごめんなさい。ボクのせいなんです。虹泉の、デリシアス・ウェイの力を二人で分け合えば、

周りに迷惑かけなくてもすむって……ボクが持ち掛けたんです」
「……」

棗ちゃんが、どこでそんな話を聞いたのかは分からない。

だが、結果的に棗ちゃんが何かしらの手段でその力を貰い受け、長い眠りにつくことで、

キクちゃんの負担が減り、魔物が生まれなかったのは確かなんだろう。

正直、一次しのぎだとはいえ気持ちは分からなくもなかった。

私たちは、ひとたび虹泉の主だと判断されれば、【生徒】としてのすべてを奪われてしまう。

その力も、生活も、記憶も。

私たちが【生徒】を卒業するということは、つまるところ死にも等しいからだ。

「『との』がボクの異世に現れた時、夢心地な半面、来るべき時が来たなって思ってた。

それと同時に気付いたんです。彼が、ボクたちの身に巢食うデリシアス・ウェイを滅するためにやってきたんだって。

たぶん、デリシアス・ウェイもそれに気づいたんだと思います。

だから今、こんなことに……」

そう言えば棗ちゃんが目を覚ました時、キクちゃんも棗ちゃん自身も、

その喜びよりも他の事に気を取られていた節があったことを思い出す。

今まで黙っていたこと、隠していたこと。

二人の苦しみにも気付かずにのうのうとしていた自分には、当然責める権利など存在しなかった。

だが、世間は、上はそう言う判断はしないだろう。

無難に卒業だけですむかどうか。

私は二人の行く末を案じ、解決策も浮かばず、沈み込むことしかできなかつたけれど。

「デリシアス・ウェイには、意思があります。ボクは眠ることでその傀儡から逃れたけど……」

「キクちゃんは、操られているかもしれない？」

今起きている事態は、キクちゃんの本意じゃない。

だとするなら、止めなくちゃいけない。

本当に、取り返しがつかなくなる前に。

「なら……力を貸してほしいの。あの魔物の向こうにいる詩奈ちゃんときくちゃんを助けられないといけないから」

「は、はい。ボクにできることならっ」

今は何にもおいてやらなくちゃいけないことがある。

決意を秘めた私の言葉に、棗ちゃんは何度も噛み締めるように頷いて……。

気付けば私は、空の住人となっていた。

太陽は昇りきり、空気は澄み渡り、風も心地良い。

背中には、セロファン製の羽を間断なく振るわせる二匹のハチのぬいぐるみさん。

これが、何の憂いもない遊覧飛行ならば、まさしく最高の日和だったのだが。

眼下に広がる、緑茂く森を侵食し、埋め尽くすような闇色の斑が

その気分を台無しにする。

それは、無数の魔物の群れだ。

まるでどんよりとした黒雲が広がっているかのようなその様は、一瞬私の感覚を狂わせる。

上下が逆転してしまったかのような、そんな気分になる。

私は遅いくる酩酊感を首を振って払い、目的地を見据える。

台風のように、そこだけぽっかりと魔物のいない虹泉のある場所。

そこには、一見すると誰の気配もなかった。

詩奈ちゃんは虹泉が二つあると言っていたけど、遠目からはそれははっきりと分からなくて。

私は視線を外し、もう一つの目的地、森と魔物たちに紛れた詩奈ちゃんのいるテントを見据えた。

どちらに向かうか、なんて考えるまでもなかったから……。

(第85話につづく)

85、詩奈ちゃんと私と繰り返す闇霞

「森の切れ目の辺りに降りてもらえる？ ある程度近づいたら戻ってもらっていいから」

私は、背中の中を八手さんたちを通じて棗ちゃんにそうお願いする。返事の代わりに、下方に掛かる負荷。みるみるうちに森が近づいてきて。

「……っ！」

それも織り込み済みではあったけど。

私の存在に気付いた闇色の魔物たちが、一斉にこちらを向く。

「ここでいいわ、降ろしてっ」

叫びとともに、私から離れていく八手さんたち。

闇の魔物たちの目は、一時そちらを向いたけれど。

「あなたたちの相手はこっちよ！」

自分の存在を誇示するみたいに、私は抑えていた異世を展開。

その手には吟也からもらった宝物を携え、大気を、大地を震わせ
て……テントの前へと降り立つ。

魔物に囲まれている詩奈ちゃんのテント。
半ば崩れかけ倒れかけている。

さて、どう周りの魔物たちをあしらいつつながら中にいる詩奈ちゃんを救出すべきか。

これで向こうがしかけてくるならば、今まで停滞していたこの状況を变えてしまった……

戦いの引き金を引いてしまうことになるんだろう。

何もしなければ何も起こらなかったかもしれないのに。

そのことに対する責任は取るつもりだった。

もつとも、真希先輩の許可も得ずに独断で行動している時点で、そんなこととつくの間覚悟済みではあったが。

「……………」

しかし、テントを囲む無数の魔物たちは、一様にこちらに注目するも、襲ってくる気配はなかった。

その時脳裏によぎったのは、キクちゃんとデリシアス・ウェイとの戦い。

キクちゃんは今も、デリシアス・ウェイに、その意思を乗っ取られまいと戦っている、ということ。

そう考えると、この状況にも辻褄が合う気がして。

私は魔物たちを油断なく見据えながら、テントの扉代わりの幕を開け放つ。

「……………」

とたん、そこから飛び出してくる闇の霧。

二度目のそれを見て、最初は驚いたけど、すぐにピンと来た。

それは姿、あるいは気配を隠すためのキクちゃんの力だ。

なるほど、周りの魔物たちと同じ色をしている。

私はそれが完全に抜け出るのを待った後、そのままテントの中に入っただけ……。……。

まず目に入ったのは、むちゃむちゃに壊されたカメラなどの機材だった。

証拠隠滅か。八つ当たりか。

きつとそれはデリシアス・ウェイの意思であり、

キクちゃん自身の鬱屈したものの現れなのだろうけど。

大々的に壊されていたのはそれだけだった。

被害を免れたこたつ机……こたつ布団に埋まる形で、詩奈ちゃんが眠っている。

「詩奈ちゃんっ」

二度目である、その光景に安堵しつつ私は声をかける。

大丈夫、まだキクちゃんは取り返しのつかないその前で留まってくれている。

一方の詩奈ちゃんは、目覚めはしないものうむむ、と反応し寝返りを打っていた。

私はそれに苦笑しつつも、彼女を背負い、この場を出ようとして……。

「……っ！」

その瞬間、外の空気ががらりと変わった気がした。言葉なき魔物たちであるのにも関わらず、落ち着かず騒然としているのが手に取るように分かるのだ。

「詩奈ちゃん、ちょっと起きられる？」

どうやら、私以外の一石による変化が、魔物たちの間であつたらしい。

このままでは危険かもしれないと、私は詩奈ちゃんの肩をゆすり起こそうとする。

「……っ、ま、待てっ、今更隠し通せるものではないぞっ！」

「わっ」

すると、こっちがびっくりするくらいの大声で、目を覚まし起き上がる詩奈ちゃん。

しばらく状況が飲み込めず、目をしばたかせていたが、その瞳で私のことを捉えると、

勢い込んで叫んだ。

「潤さま、彼女を、喜久さまを止めるのじゃ！」

「うん。わかってる。一緒に来て！」

その時、私は詩奈ちゃんの止めるといふ言葉の意味を、本当の意味で理解してはいなかった。

とにかく時間がなくて、おかしな胸騒ぎがあつて。
ろくに考えもずに連れ立ってテントの外に出たわけだけど……。

(第86話につづく)

86、キクちゃんと私とあふれ出す異世の咆哮

テントを出てすぐ。

目に入ったのは魔物たちの群れ。

彼らの誰もが一樣に空を見上げている。

私も詩奈ちゃんも、その統制の取れた行動に、思わずつられるように空を見上げて……。

「……………あぁ」

そこにいたのは、それこそため息をつくほどに美しいプリズムの粉時く、

七色の翼を生やした……………吟也の姿だった。

その虹の翼を優雅に羽ばたかせ、こちらに向かって降りてくるのが分かる。

いや、おそらく吟也が向かっているのは虹泉のほうだろう。

その紅い瞳は一点を見据えているようで、こちらを映してはくれない。

私はそんな吟也がから目を離せまいまま、深く息を吐いた。

……………今までのことは、何もかも嘘だったの？

違う、そうじゃない。

分ならず屋の吟也が、私の忠告やお小言なんて聞いてくれないことくらい百も承知だ。

自分もついていっていいかと聞いてきた吟也。

それを禁じた私。

それに吟也が大人しく従う人物なら、きっと私はこんなにも惹かれてなかった。

たぶん吟也には、私のいらぬ心配を押しつけてまでやらなくちゃいけないことがあったんだろう。

それは、よくよく考えてみれば分かることだった。

魔物を生み出す装置として、破壊される運命にある虹泉。

ものだと認識されている虹泉。

それが本物かどうかなんて、破壊する側には関係ない。

でもきつと、吟也にとってみればそうじゃないんだ。

もしそこにあるものがカチュのような魂の宿ったものであるならば。

命の危機に瀕したピンチの女の子がそこにいるのならば。

吟也は何より早くそこへ向かうだろう。

だって吟也が失う痛みを、何もできなかった悔しさを誰よりも知っているから。

(そう言えば……なんで気付かなかったんだろ……)

魂が軋むような本気の涙。

まだ出会ったばかりの幼い幼い頃。

吟也のその涙をぼうと見ていた私は、あまりに今更なことを思い出し、詩奈ちゃんを見る。

吟也が失った大切な人。

吟也のたったひとりの妹。

名前だけがそこにあつて、生まれてこなかった女の子。

そう、たしか『しいな』って言ったっけ。

偶然に決まっただけ。

今この状況になんら関係ないはずのことなのに。

何だか私は妙にそれが気になつていて……。

「……っ」

私には聞こえないほどの小さな、詩奈ちゃんの呟き。

呼び声にも聞こえたそれ。

私が詩奈ちゃんを思わず凝視していると、しかし詩奈ちゃんは気を取り直すように……いや、

一層焦った様子で声をあげた。

「まずいぞ。早く止めねばっ！」

そしてそのまま、私どころか魔物たちすらも歯牙にかけず、駆け出す詩奈ちゃん。

私も、慌ててその後を追って……。

テントから虹泉まではすぐ側だったはずなのに、随分と長く感じた。

それは、周囲を圧迫するだけど何もしてくる様子のない、魔物たちのせいもあったんだろうけど。

「……あぁっ」

やがて辿り着いた紅葉台山の頂上。

森の切れ間の、虹泉があるはずの場所。

聞こえてきたのは、絶望に膝を折る詩奈ちゃんの声。

私も慌ててその横に並んで。

「キクちゃんっ!」

知らず知らずのうちに出了のは、悲鳴に近い声。

いつの間にか、そこにあったはずの虹泉がなくなっていることに気が付かず、

私はキクちゃんに駆け寄っていた。

「キクちゃん、大丈夫？ どうして、こんなっ……」

キクちゃんは全身が血だらけだった。

髪も頬も、その小さな手も。

真っ赤な色に染め、その血溜まりの中、立ち尽くしている。
私の呼びかけにも、反応を示さない。
その瞳はうつろで、意思は感じられず、私を映そうともしなかつた。

一体何があったの？ 吟也はどこ？

私は目の前の光景に眩暈を覚える。

ふやけ始めた視界の中、キクちゃんに触れようとして。

バチイッ！

「……っ！」

だが、それすらも叶わなかった。
キクちゃんの恐ろしいまでの質量を誇る異世が、それを拒絶していたからだ。

「……どうして」

何もできず何も聞けず。

呆然とするしかない私。

そんな私に向かってではないだろうけど。

不意に聞こえてきたのは、低い低い、そんな眩きだった。

明らかにキクちゃんであってキクちゃんでない、そんな声。

もしかしてデリシアス・ウェイに乗っ取られているのだろうか？

私はしっかと彼女を見据え、次の言葉を待つ。

「何故、避けもしない？ 私を殺しにきたわけではないのか……？」

なぜっ、抵抗しないっ。なぜっ、助けなどと口にする……っ！」

ぎりりと、歯も折れよとばかりの怒り。

その中には理解不能なものに対する疑問と戸惑いと……そして恐怖が渦巻いている。

と。そこで初めてキクちゃんは私の姿を視界に入れる。

とたん、取り戻したように見えた目の光。

様々な感情が浮かんでは消え、私を見つめ、自分の手のひらを見つめる。

血に染まった自分を見回す。

するとその身体は小刻みに震えだし……耐え切れなくなって。

「ご……ごめ、ごめんなさいっ！ わたし……殺しちゃった！

潤の大切な人なのに、大好きな人なのに……わたしが、わたしのせいで……あああああぁあっ！」

ついには爆発する、キクちゃんの慟哭とともに。

「っ……はっ」

それは、ギリギリまで我慢し、押さえ込まれていた異世の咆哮だ。

私は、絶望の淵へと沈むキクちゃんに、何も応えてやれないままに、吹き飛ばされる。

私がその時出来たことと言えば。

同じく吹き飛ばされる詩奈ちゃんの姿と。

闇色の異世を際限なく生み出し、

それを纏って天に向かって翔びゆくキクちゃんの姿を確認することのみで……。

(第87話につづく)

87、詩奈ちゃんと私と始まってしまった諸刃

私を失っていたことに気付いたのは、目が覚めてからだ。どうやら、私はキクちゃんの力の暴発に圧されるようにして木々に叩きつけられたらしい。

背中痛みよりも、その瞬間発せられたキクちゃんの言葉が痛い。痛いのは、ぎしぎしと軋む心だった。

それはきつと、デリシアス・ウェイではなく。

キクちゃんの言葉を、後悔と謝罪の嘆きを、そのまま受け入れられない自分の勝手さ故だったんだろ。

逆に、それを鵜呑みにしていたのならば、私は壊れていたに違いない。

キクちゃんの都合の悪い言葉を信じようとしなかったのは、もはや本能に近かった。

自分を保つためには、何もかも投げ出して逃げるのが一番だったんだろ。

それが何よりもかっこ悪くて情けないことだと分かっていたから。私はふらふらと起き上がる。

「探さなきゃ……」

キクちゃんを。あるいは吟也を。

同じように吹き飛ばされた詩奈ちゃんを。

幸いにも、しなくてはいけないことはたくさんある。
その行動が、自身に破滅を導くかもしれないって分かっている、
足は止まらなかった。

「……っ」

果たして、私はどのくらい気絶していたのだろうか。
それほど長い時間ではなかったはずだけど、既に状況は一変して
いた。

怒号に雄叫び、悲鳴に断末魔。

既に魔物と【生徒】たちの戦いは始まってしまったらしい。
私たちにとってみれば、ただの害でしかない、結局は何の意味も
なさない、

自分で自分を食らいあうような、戦いが。

そんな事を考えていると、数体の魔物たちが私の存在に気付いた。
樹木にうつろな目鼻がついた魔物が二体。

そしてもう一体は、犬の顔を持つ獣人。

その手には黒光りする剣が握られている。

最初に見たものとは全く違う、むき出しの敵意、殺意。

それが、キクちゃんのものであると知ってしまった私は、とっさに動けない。

その隙について、樹木の魔物の枝が伸び、私を捕らえた。

「……っ」

初めは左足、次いでもう一体が繰り出す腕先の枝が、私の右肩を捕まえる。

私はまたしても、森の木々に叩きつけられる格好になって。

その縛めを縫うようにやってきたのは獣人の魔物。

私が我に返ったのは、その黒い刃が光り、いよいよ自分の命すら危うくなってきたその瞬間で。

「【物質命題】っ！」

いつの間にか宝物をなくしてしまったことに気付いたのと、そう叫ぶのはほぼ同時。

私の目の前には、宝物とは色違いの戟。

犬の獣人の刃を受ける形で、それを前に突き出して……曲法の力込め、なぎ払う。

その、私の倍はあろうかという戟を。

異世を纏うことで、あらゆるものを変化させる私の曲法。

変化……付加する力は、質量無視、殲滅強化。

それは、力込めた文言を口にせずとも可能な、私の一番得意な戦い方だった。

魔物と戦うときはできるだけ時間が掛からないように、一息で。たぶんそれが、私の心に楽で、合っていたんだと思う。

勝負は、刹那に決まっていた。

私の頼りない腕は、それに軋むことなく縛めを引きちぎり、やす

やすと目の魔物を両断……

叩き潰し、切り分けていく。

更に、それだけじゃ飽き足らず、周りの木々すらなぎ倒す。

気がつけば、環境破壊も甚だしいほどに、視界が広がって。

一斉にこちらを認識する、大小種類様々な無数の魔物たち。

「……いたっ」

だが、そんなことはもうお構いなしだった。

私の、通常より冴えている視界が捉えたのは、吟也からもらった
戟を持ち、

逃げ惑う詩奈ちゃんの姿。

あの時私が落としたのをわざわざ拾ってくれていたのか。

私は感謝の気持ちとともに、彼女を助けるためにそちらへ向かおうとして。

「……っ」

その行く手を阻むは、数十体は超える魔物たち。

大型のものや、空飛ぶものまで集まってきて、とたんに視界を塞がれる。

「どきなさいっ!」

私は叫び、再び戟を構える。それに対して返ってきたのは、詩奈

ちゃんの悲鳴だった。

私は慌てて、半ば強引にその群れを突破しようとする。

その先に僅かに見えるは、鷹の魔物に追い詰められる、詩奈ちゃんの姿。

今から武器を遠距離のものに変えて、果たして間に合うか。

そんな事を考えている間にも、闇色をしたグリズリーの爪が、ワイズの鎌が、

私を打ちのめさんと迫っかけていて。

捨てたのは自分だった。

私はすぐさま戟を消し、クロスボウを作り出す。

迫る刃や爪を、他人事のように脇に置き、ゆっくり照準を定めて。

「シード・スクイーズ【楔刻】っ！」

私の目前で、知らぬ少女の叫ぶ声と、大地割れるような衝撃があったのはその瞬間だった……。

(第88話につづく)

88、リオンさんと私とよくよく知ってること

「シールド・スクイーズ【楔刻】っ！」

私の目前で、少女の叫ぶ声と、大地割れるような衝撃があったのはその瞬間。

大地に穿たれるは、大木をゆうに超える鋼鉄の円柱。

今まさに一撃を加えようとしていた魔物たちも、周りに迫っていた魔物たちも、

一様に原型を留めぬほどに押し潰され、闇を撒き消えてゆく。

私のはつと顔をあげれば、詩奈ちゃんを襲おうとした魔物も同じ目にあっていた。

そのお互いの間に、ゆつくりと降り立つのは、袴姿の少女。

その白く美しい顔の半分を、般若の面で隠した……いや、もしかしたらそのものかもしれない、

明らかに人ではない気配を放つ存在。

何も知らなければ、それこそ上位の新手かとも思ったかもしれないけれど。

前髪が銀、それ以外は翠緑に染められた、独特の髪色とその服装には、見覚えがあった。

私たちが無事であることを確認し、しかし何も語らずにそこから立ち去ろうとする少女。

そのつれなさに、私は慌てて声をかける。

「待って！ あなたはカチユのお友達をつくもんさんでしょうっ
！」

「……む？ おお、なんだ。よくよく見れば潤どのではないか。
確かにそうだが、何故そのことを？」

駄目元のつもりで声をかけたんだけど。

思ったより気さくに言葉を返してくれてちよっとほっとする。

ただ、やっぱり私とその姿が見えていたことは知らなかったら
しい。

「ふふ。何故って、これで会うのは二度目だもの。いくら大きさが
違ったって、さすがに分かるわ」

それは、吟也の家へ行つた時だ。

まともに話す機会が今が初めてだっていうのが、何だかちよっと
不思議な感覚で。

「潤さま、そのものは……」

そこに、おそろおそろ、私の元へと駆け寄ってきている詩奈ちゃ
ん。

目の前の少女が、私たちとはまた異なる意味合いで、正しくは人
ではないことを、

彼女も感じ取っているのだろう。

私は、怯える彼女にありがとつを言って吟也からの宝物を受け取
った後、それに答える。

「詩奈ちゃんの会いたがっていた妖の人……でいいのかな？ 少なくとも敵じゃないから、安心して」 「ふむ。そこまでご存知か……あ、いや。自己紹介が遅れ申した。

とのに付き従うつくもんが一人、リオンと申す。此度は魔物退治のため、助太刀つかまつった」

リオン、と名乗った少女が驚いたのは、敵ではない、ということころだろう。

過去の話……伝承や御伽噺を信じるならば、今と同じように人々を助けに来た妖の人たちは、その見た目とかから魔物と同じものと判断されていたはずだからだ。

「ありがとう。リオンさん。そのついでってわけじゃないんだけど、吟也は……」

無事なのか、大丈夫なのか。

続く言葉は最悪を想像してしまっ言葉にならない。

それは、彼女が吟也の名を耳にしたとたん、顔を顰めつつ俯いたせいもあつただけ……。

「……っ、そうか。まだカチユどのが。今の今まで気付かぬとは……」

意を決して顔を上げ、何かを言おうとしてはっとなり、何やらぶつぶつ言っって考え込む。

それにカチユが関係しているようだったけど。

やがてどこか吹っ切れたように顔を上げ、リオンさんは再度口を開く。

「心配無用、でござるよ。とのはその、女性にだらしないというか、

節操のないところがござりまして、言わば人傷沙汰はいつものことなのです。

故に、たとえ刃でその胸を貫かれようとも、成仏するようなタマではござらぬ。

何故ならとのは、この世のどんな妖の人よりも、女性の味方でありますから」

「……それで死んじゃったら、傷つくのはその人だから？」

「流石、潤どの。とのはそのことをよく分かっているから」

例え自分が全面的に悪くて殺されるような目にあっても、その仕打ちが女性なら、吟也は死なない。

後悔して、苦しんで傷つくのは誰か分かっているから。

それは、とても穿ったたとえではあるけど、きっと吟也を表すには相応しい言葉なんだろう。

聞いていたら、吟也のもしものことを考え、おかしくなりそうだった自分が馬鹿らしく思えてくるから不思議で……。

89、リオンさんと私ときつとライバルがもう一人

リオンさんの言葉を聞いていたら。

吟也のもしものことを考え、おかしくなりそうだった自分が馬鹿らしくすら思えてきて。

「それじゃあ、吟也は……」

「死の淵からでも、必ずや舞い戻ってくることでしょう。今最も傷つき、悲しみに暮れる少女のその涙を止めるために」

それは、リオン自身が、自分に言い聞かせ信じようとしているかのような言葉だった。

その半分だけ覗く瞳が滲んでいるのは気のせいなんかじゃない。私もそれにつられるように視界が霞みかけて……でもそれを慌てて拭う。

「リオンめは、それまでのお役目を全うせねばなりません。しかしらば……」

きつと間違いなく、ライバルがもう一人。

私がそれを確信していると、再び慌しくなるその場。

円柱の攻撃に引かれるように集まってきた魔物たちと、他の【生徒】の気配。

「しからは、なつめどのにリオンが宜しくと言っていたとお伝えください。……ではご免っ！」

やってくる人物が誰であるのか。

私のように彼女たちの存在を認識し、受け入れてくれるものなど
そういないということを、

リオンさんは分かっていたのかもしれない。

リオンさんは一つ頭を下げると、円柱の雨を降らせながら上空へ
と消えてゆく。

そしてそのタイミングで、現れたのは命ちゃんと、当の棗ちゃん
だった。

「二人とも無事か？」

厳しい表情で駆け寄ってくる命ちゃん。

「うん。なんとかね」

「う、うむ」

深刻なまでに低い命ちゃんの問いかけに、こくこく頷く私たち。

「二人とも独断で行動しただろう。議長がまたかんかんだぞ」

自分はともかく詩奈ちゃんもそうだったのかと、振り向いて見や
れば、

おんなじ顔をしている詩奈ちゃんがそこにいて。

思わず一緒になって苦笑する。

それが命ちゃんにしてみれば面白くないんだろう。

流石の命ちゃんも少しむっとして。

「あまり心配させるな。特に潤。君が棗の力を使い先行したのは他の【生徒】たちも見ている。

魔物を刺激し、戦いのきっかけを作ったと思われてもおかしくないんだぞ」

話題を振られ、いつもの元気さもなりを潜め、俯く棗ちゃん。

それは、事実は別にあることを気付いた上での命ちゃんの心配の言葉なんだろう。

「ありがとう。心配してくれて。……でもごめん。私は、私が今回の責任を負えるのなら、それでいいと思うから」

同じ委員の長と副として。

ルームメイトの友達として。

キクちゃんの苦しみに気付けなかった自分に対する贖罪。

その責任を少しでも背負うことができたなら、どんなにいいかって、そう思う。

「だったら、ボクにだって責任はあります。責任を負う覚悟はできてますから」

すると、それまで俯いていた顔を上げ、強い意志のこもった瞳で、棗ちゃんが賛同し続く。

そんなわがままで自分勝手な私たちに。
命ちゃんは深い深いため息をついて。

「そうだな。みんなで責任を負うのはいい案かもしれない。だが今は、喜久を止めるのが先か」

結局は、呆れ果てた、仕方ないなあ、といった笑みを見せる命ちゃん。

そして、みんなが頷くと、何やら肝心なことを思い出したらしく、はっとなって更に言葉を続ける。

「そうだった。先程、この辺りでも規格外の力を感じたが、どうやら有象無象ではない、四体の魔物たちが現れたらしい。レベルで言えば、少なく見積もってAAクラス。一体で国家危機レベルの奴だ。」

それにより議長は、各【生徒】の一時撤退の命を下した。最終防衛線……

演習場の入り口まで戻り、全員で迎え撃つ、とのお達しだ」

どうやら、それがそもそも命ちゃんたちがここに来た理由らしい。

だが、それは間違った情報であると。

その一人を目の当たりにした私と詩奈ちゃんはすぐに気付いて……。

90、**棗ちゃんと私の見えなかった繋がり（前書き）**

だいぶ短めです。

90、棗ちゃんと私の見えなかった繋がり

「一時撤退云々はともかくとしても、彼女たちは魔物でもないし、敵でもない。」

わたしたちの助太刀に参った、妖の人たちじゃ」
ほんの僅かばかりの邂逅であったのにも拘らず。

詩奈ちゃんのその言葉は、私が続くまでも泣く真に迫っていた。

「妖の人？ 御伽噺の？ しかし、仮にそうだとしたって、魔物の仲間ではないのか？」

それこそ御伽噺の紅葉台に伝わる昔語りの通りであるならば、命ちゃんの言う通りであったが。

「それは、彼らの優しい嘘じゃ。自ら悪者役をかって出たにすぎぬ」

その御伽噺に誰よりも詳しく、研究していた詩奈ちゃんの言葉がこそが真実であると私は知っている。

きっとそう言う詩奈ちゃんよりも。

だが、今の今までの通説を覆すのは、命ちゃんにとって難しいことだろう。

納得していない様子の命ちゃん。

私はそこで思い立ち、棗ちゃんのほうを見る。

注目されて怯む彼女に、私は微笑み浮かべながら、言った。

「さつきね。その一人の会ったわ。リオンって子なんだけど、棗ちゃんによろしくって」

「ボクに……妖の人が？」

「うん。棗ちゃんは分からなかったかもしれないけど、ずっと側にいたんじゃないかな。」

見えなくても、話せなくても、眠ったままのあなたを守るために」

実際に、私はその現場を見たわけじゃない。

でも、カチユを通して彼女たちの存在に気付いていた私は、そのことを確信していた。

それに棗ちゃんはちょっと考え込んで。

「夢の中の、大きなどんちゃん……そっか。そうだよ。とのが助けてくれるって、

教えてくれた子だ……」

私とカチユに強いつながりがあったように。

棗ちゃんにも思い当たる節があったらしい。

見えなくても、ちゃんと繋がっている。

私はそれに嬉しい気持ちになりつつも、改めて命ちゃんに視線を向けた。

「命ちゃんも、棗ちゃんを守ってくれてた子って考えれば、信じられるでしょ」

妖の人どうこうではなく。私たちに敵対する理由などないのだと。気持ちを込めてそう言う。

今度は命ちゃんも考え込んでいた。そう言えばと、何かを思い出すみたいに。

「そうか。あれは気のせいじゃなかったんだな。それなら一人、会ったことがあるかもしれない。校舎地下でね」

独り言のように呟く命ちゃん。だけどそれで私もピンと来た。それは歓迎会の日。

吟也が、命ちゃんのいる地下、ごみ処理施設に向かった日。助けを求めているとカチュが声をあげたその瞬間。

きっとそれは、命ちゃんと吟也の秘密のことで。頑なに話そうとしなかった理由が、これでちよっと分かった気がして。

「彼女も今、ここにいるだろうか」

「ええ、きっと」

「そうか。……では、作戦を変更せねばならないな。妖の人たちと協力して魔物を迎え撃つ。」

そして……喜久を止めるんだ」

明確な方向性を持った、力強い命ちゃんという言葉。
当然、それに対しては。異論など出るはずもなく……。

(第91話につづく)

9 1、真希先輩と私と冗談より本気な台詞

そうして。

手近な魔物たちを二本の戟で蹴散らしつつ、

私と詩奈ちゃんが手始めに向かったのは真希先輩のいる本陣……
演習場入り口だった。

それは、まだ入学前である詩奈ちゃんを送り届ける意味合いもあつたんだけど。

「真希先輩っ！」

「潤、詩奈っ。あんたたちねえ、あとでお仕置きなんだからね！」

それは素直にうんとは言えない台詞だったけれど、そこに大きな安堵も含まれていたから。

それを大人しく受け入れなくちゃいけないよね、といった気持ちにはなっていて。

「重々承知しています。それより魔物の発生源を知りたいんです！
きっとそこにキクちゃんがいるはずだから！」

それより先にやるべきこと。

私がストレートにそう聞くと、真希先輩は小さく息を吐き、天を仰いだ。

「結果的に、当初の目論見は大外れってことね。……紅恩寺クンが首謀者なら、

全てが丸く収まったのに」

「そ、それは吟也にひどいですよ」

冗談より、本気成分のほうが強いきがする真希先輩の言葉。

だが、【生徒】を纏める長としては、そんな愚痴のひとつも言いたくなくても仕方がないんじゃないかなってちよつと思っ。

結局、守るものも害するものも同じだった、ということになってしまっのだから。

きつと、これで私たちの立場は、更に酷いものになるに違いない。

「今、保健委員が彼女の事を探しているわ。でも、彼女を見つけ……それから、どうする気？」

真希先輩の事だから、きつとその答えは自分の中にあるんだろう。つまり今聞いているのは、私自身の意思なわけ。

「まずは、キクちゃんを止めます。それでキクちゃんを卒業させようというのなら、

私も付き合おうかなって思ってます。命ちゃんも栞ちゃんもそれに賛同してくれました」

「あら。思っていた以上の答え。上を脅すってわけね。……いいじゃない。私も乗った」

実に楽しげな、お主もワルよのう、といった風の真希先輩の笑顔。私もつられて悪い笑顔を見せて。

「紅葉台山最高地点。保健委員たちはその付近にいるわ。どうやらあの子は、隠れる気はないみたい」

議長……作戦司令官専用の連絡機を見やり、静かに真希先輩は言う。

そこは、始まりの場所。

あの時私は、確かにキクちゃんが空を舞うのを見た。周りを囲まれている以上、逃げるのならば空しかない。

それでも戻ってきたということは、キクちゃんはきっと覚悟をしていたんだろう。

逆に言えば逃げ場のない場所へ虹泉を置いた時点で、気付くべきだったのだが。

「潤さますまぬ。わたしがでしゃばらねば、二度手間にならなかつたものを」

「なに言ってるの。そんなこと気にしなくていいの」
それまでじっと、私と真希先輩のやり取りを聞いていた詩奈ちゃん。

落ち込んでいる彼女に、大丈夫、問題ないと肩を叩く。

「しかし、ここから頂上へ戻るのは……」

億劫だろうと言いかけて。それを制したのは真希先輩だった。

「大丈夫。いつものいくわよ、特攻隊長さん？」

「……」

詩奈ちゃんの手前、抑えたけど。

げっ、なんて内心思ったりする私。

まあ、典型的な近接先陣型だっていうのは承知してるんだけどさ。どうにも荒っぽすぎるんだよね。そのいつものやつってさ。

私は無言のまま能力を発動。

地面や、周りの木々を糧に創り出したるは土台つきの大筒。

人間大砲といえは聞こえはいい……かどうかは分からないけど、ようは空気砲だ。

真希先輩の何が何でも殴り飛ばす……じゃなかった、吹き飛ばす力によってなされるもの。

当然、スポンジ玉の代わりに飛ばされるのは私だ。

打ち所が悪いと、吹っ飛んだ先で戦闘不能になりかねない危険な技。

この時ばかりは、丈夫な自分の身体を恨んだりするけど。

「いつもより、派手にいくわよ」

「……はいっ」

内心ではひいひい、と悲鳴。

「こういつ時に格好つくのは、内心が表に出ない自分の数少ない利点だとは思っけど……」。

(第92話にじづく)

92、真希先輩と私の合作人間大砲

「それじゃ、御武運を」

「潤さま、どうかご無事で！」

リアルに気分は特攻隊。

私は二人の言葉に顔を引きつらせつつ頷いて。

ドゴオオオッ！！

思っていた以上の轟音とともに。

私は再び空へと舞う。

目指すは、何度も参った紅葉台山のてっぺん。

そこには、天へと続く黒雲が渦巻いて……。。

背中に異世を集中することで衝撃を和らげ、かつ反発するばねの役割を生み出し、飛ぶ私。

それが最高地点まで到達したところで、今度はフードつきコートに能力を発動。

コートは風を吸い込み、みるみるうちに膨張し、やがてグライダー

―へと様変わりする。

そして、そんな中、私は眼下に広がる戦いを目の当たりにする。

上空からでもはっきりと分かるのは、煌々と輝く四色の光。

それは魔物でもなく、人でもなく。

煙る美しさを沸き立たせる、高潔な魂を持つ妖^{あやかし}。

翠緑の光。大木をも凌駕する、すべらかな光沢を放つ鋼の
戦場刀を掲げる武士^{もののふ}。

ただただ圧倒的な力で、魔物に鉄槌を下す。

玉虫色の光。大地からいでし、八首八頭の竜。

巨大な顎によって、大地ごと魔物どもを食い尽くす。

黒真珠の光。森の陰に潜みし、意志のある闇。

時をも切り裂く風が去れば、その跡に立つものはなく。

桜色の光。絢爛なる舞踊りし白仮面。

変幻なる鉄鉾が、艶やかに魔物を霞と化す。

それは、なんとも頼もしい、カチユのお友達をつくもんさんたち

だ。

彼女たちがいなければ学園は、町はどうなっていたらと思うと、ゾツとした。

(あれ……?)

そんな事を考えていて気付いたことが一つ。

その中にカチュの姿がない。

たとえ姿が変わったとて、カチュなら分かる自信が私にはあった。

そんなカチュがいないということは、カチュはきつと吟せのところにいるのだろう。

たぶん、カチュも見えないところで頑張ってる。

そう思うと、私もすっかりしなくちゃって、やる気も出ようというもので。

私は、いよいよ近づいてきた黒雲を見据える。
いや、それは雲ではないんだろう。

大地から伸び、上昇する闇色の異世。

天にぶつかり広がって、天地の楔と化している。

それは、キクちゃんの、デリシアス・ウェイそのもの。

それを守るようにして、近づけば近づくほどに濃い色をした魔物たちが、

その一ピースとなっていて……。

その根元に見えるは、美音先輩や由宇ちゃんをはじめとする保健委員の面子に混じって、

風紀委員の【生徒】たち。

副も長も職務放棄してるようなものだから、保健委員の一時預かりになってるんだろう。

正直気まずくて、どうしようかってちょっと迷って。

「潤ちゃんっ！ それ以上近づいたら駄目じゃっ！」

「……えっ？」

聞こえてきたのは、切羽詰った美音先輩の声。

それにびっくりして、はっとなって顔をあげた時にはもう遅かった。

私はグライダーをしまっ暇もなく。

そこにあるものが本物の竜巻であつたかのように。

渦を巻く黒い靄の中へと吸い込まれて……。

(第93話につづく)

93、キクちゃんと私に向けられてるサイン(前書き)

とっても短めです。これ以降二日おき更新になるかも。

93、キクちゃんと私に向けられてるサイン

気がつけばそこはまっくらな世界だった。

でも、その世界の感覚を私は知っていた。

たとえば、棗ちゃんの夢の世界。

たとえば、詩奈ちゃんとともに足を踏み入れた虹泉の中。

そして……キクちゃんと一緒になって隠れた、気配を消すための
キクちゃんの曲法の中。

452

そう、これは異世。

個々人の殻の中の世界。

その人の心象風景。

「そっか……キクちゃんのあの力って、ほんの一部だったんだ…

…」

キクちゃんの苦しみを伝えるサインはいくらでもあったのに。

気付かなかった自分にかなりへこむ。

特に最近になってからは。

キクちゃんと会話していてもキクちゃんのことには話題が及ぶことが少なくなってきた。

そう、私の心はカチユを、そして吟也ばかりを向いていたからだ。

「だから拗ねちゃったんだ……嫉妬してたんでしょっ？」

キクちゃんが聞いていたら、そんなわけないでしょうって怒られ
そんな台詞。

だからあえて私は口にする。

ここがキクちゃんの世界ならば、きっと聞こえているはずだから。

……と。

その言葉に応えてくれたのかそうでないのか。

闇色様々な世界の中、向かい風が吹き付けてきた。

その一部はつむじ風の刃となって私の頬を打つ。

乾いた音がして、血の吹き出る感覚。

「キクちゃん？ そっちにいるのね」

それは直感。

私は痛みの感じない頬を拭いもせず、向かい風に突っ込んでゆく。

「……………やっぱり」

案の定、それは正しかったらしい。

闇色一つとつても、こんなにも色が違うものかと感心するほどに。今までいた場所よりも濃い闇色が、目前に蟠っていた。

私は意を決し、闇の深いほうへと足を踏み入れる。

ザザシユウツ！

「……………くっ」

その瞬間だった。

幾重もの刃になます切りにされるような感覚。

こっちへ来るなど、キクちゃんの拒絶の意思。

私は踏みしめるべき足場でなく、足そのものを失い前のめりに倒れる。

オオオオオオツ……………。

闇の地に伏した私に、降りかかるは怨嗟の木霊。

それはキクちゃんの意味か、あるいはデリシアス・ウェイの意味か。

……うつん、そうじゃない。

ここに来て分かったこと。

たぶんそれは、どっちもキクちゃんなんだ。

そう思ったら、寝てる場合じゃなかった。

私は吟也の宝物を右足代わりにして無理やり立ち上がり、勢いつけて更に前進する。

近づけば近づくほど、濃密な闇。

それはやがて、人の形を作り出す。

サイドアップの小柄な少女の影を……。

(第94話につづく)

94、キクちゃんと私と悪ぶった虚勢の仮面

人の形を作り出す、サイドアップの小柄な少女の影。

キクちゃんであり、デリシラス・ウェイでもある、そんな存在。

私はこんな状況にも関わらず笑みをこぼし、更に近づく。

そこに襲い掛かるは、大気のハンマー。

両脇から叩かれ、何度も飛ぶ意識。

それには、鋭利な刃も仕込まれていて。

ここがキクちゃんの世界じゃなかったならば。

私はきつとミンチの細切れになっていたに違いない。

でもここは意思の世界。

キクちゃんの思い通りの世界。

故に私は死なない。

どんなに傷ついても、その歩みを止めなかった。

それは、拒絶しているように見えて、その実求めているその証。
だからうれしい。

痛みよりも笑みが出る。

そうして。

私は面と向かって対話できる、すぐ側まで近づくことができた。

そんな私を非難するように、一層強くなる闇の色。
相対しての、一瞬とも永遠ともつかぬ間。

予想に反して……あるいは期待通りだったのかもしれないけれど、それを破ったのはキクちゃんのほうだった。

「こんなところまで来るなんて。あなたはよっぽどあの偽善者が好きだったのね」

意識しての、別人みたいな低い低い言葉。

「偽善者？」

私は、その単語に理解が及ばず、そう聞き返す。

「そうよ。この私を救うなどのたまい、無抵抗のままあっけなく死んでいった男のことさ」

「だから偽善者？ 甘いわ。甘すぎるのよキクちゃん。
きつとその人はもう一度あなたの前に立ってこう言っわ。
また会えたのは運命だろうか、美しいお嬢さん、って」

「……世迷言を」

くくくと、以外に似合わないでもない忍び笑い。

私が首を傾げてみせると、いよいよ輪郭がはっきりとしてきたキクちゃんが言葉を続けた。

「まさかまだキクとやらの心が残っているとでも？ そんなもの、とうに食らい尽くしたわ」

今、そこにいるのはキクちゃんではない別人なのだと、言い張っている。

私はそれに、静かに首を振った。

そこに二つの意味を潜ませて。

「勘違いしているのはあなたよ。私の目の前のあなたに話しているの」

「……」

デリシアス・ウェイから、キクちゃんを取り戻しにきた。

きっと彼女は、そう思っていたはずだ。

そこで初めて見せる、闇色の戸惑い。

私は畳み掛けるように言葉をつなく。

「私はね。あなたに取引を……いえ、お願いをしに来たの。あなた、私のところに来ない？ 棗ちゃんにしたみたいに、ほんの一部とか生ぬるい感じじゃなくてさ」
「……っ」

更に深くなる動揺。

私はそれでいよいよ確信した。

今そこにいるのは、やっぱりキクちゃんなんだ。

もし、今言ったように別人格のデリシアス・ウェイがキクちゃん
の意識を乗っ取っているのならば。それは動揺する必要のない、
この状況を切り抜けるおいしい話だからだ。

「自分が何を言っているのか、分かっているのか？」
「もちろん。疑うなら武器も捨てるよ。抵抗はしない」

私は二本の戟を足元に置くと、更に一步近づく。
さあ、いらっしやいと。両手を広げ迎えるポーズ。

気がつけば。

触れよとばかりに近くにいるのに、暴力的な圧力も刃も消え去っ

ていて。

「……………この期に及んでそんな事が言えるなんて。潤は馬鹿です。大馬鹿ものです」

ポロリと落ちるは、自分を守る……………あるいは悪者にするための虚勢の仮面。

それは、涙となって闇の世界に浸透していく。

気付けばそこにいるのは、いつものキクちゃんです。

「何よ。そんな今更なこと、ようやく気付いたの?」

私は殆んど無意識のままに、キクちゃんを抱きしめていた。

闇の衣をはぎ、すっかり元に戻ったキクちゃんを……………。

95、キクちゃんと私ともったいぶる魔法

「潤は、デリシアス・ウェイが人々を滅するための数ある災厄の一つであることを知っていますか？」

「災厄？ それって……」

「増えすぎ、地球に害を及ぼすまでになった人間を間引きするために、

地球自身が送りつけた、いわば呪いです。

気付けば私の中にあつたこの力は、そのうちのひとつにすぎないんです」

キクちゃん自身がデリシアス・ウェイを認識し、受け入れたせいなのか。

どこか超然めいた響きを持つキクちゃんという言葉。

未だに変化のない闇の中、不意に振られた、おそらくはデリシアス・ウェイの知識であろうそれに、私は目をしばたかせる。

「……つまり、キクちゃんみたいな子が、他にもいるってこと？」
「はい。そして、私たちのような呪われた者たちの対抗策として、人間側から送られたのが、紅恩寺さんたち【ジャスポース】と呼ばれる機関のものです」

「え？ 吟也って妖の人じゃないの？」

「いえ、それは正しいと思います。だからこそ、私を滅ぼす刺客としてやってきたのだと思ったのですが……」

そこで、キクちゃんは自分がしてしまったことを改めて思い出したのかもしれない。

ぐっと、何かを堪えるように俯いて。

「いつか私を滅ぼすものがやってくると、私はずっと恐れていました。

やらなきゃやられるって、ずっと思っていたんです。

何もかも忘れて、なくなってしまうことが、死ぬことが怖かったです。

エゴの塊ですね。その果てに私は、無抵抗のあの人を手にかけてしまった……」

それは、キクちゃんが今までずっと溜め込んでいた秘密。

そして懺悔。

キクちゃんは、その話を私にすることがどういうことかって、よく分かってるはずだった。

そんな私でも許せるのかと、受け入れられるのかと、そう問うてきているのだ。

「さつきも言ったでしょ。吟也は女の子が傷つくことはしないの。必ず戻ってくるよ。仮にキクちゃんの言う刺客だったとしても、助けてくれるに決まってる」

私はそんなキクちゃんに対し、変わらぬ、大雑把さで身も蓋もない自信を覗かせる。

そこには、私もデリシアス・ウェイになればおいしいかもって打算も働いていた。

本当にキクちゃんの言う通り吟也が刺客なら、私のことずっと気にかけてくれるじゃんかって、

そう思ったからだ。

「後悔しても、知りませんよ？」

もしかしたら、そんな妄想がただ洩れだったのかもしれない。

どこか呆れた口調でため息をつくキクちゃん。

だがそれも、いつもの、そう、いつものいじわるっぽい雰囲気に変わって。

「棗の家は、代々その災厄を研究し続けてきた一族だそうで……人間を、破滅へと導く災厄たちを、真っ向から滅ぼそうとすればお互い共倒れに、

ひいては最悪の結末になると、独自の見解を示しました」

そんなこと、棗ちゃんは一言も言っていなかったけど。どうやらその共倒れじゃない方法に何かあるらしい。

もったいぶるキクちゃんを促すように見つめていると、珍しくその表情が照れたものになって。

「では、災厄を抑えるためにはどうするか。答えは、潤が言った通りです。

災厄を受け入れ、二つに分けること。それは繰り返し後を継ぐものに伝えられ、

やがて細かくなつた災厄は、人の中に溶けるのです」

「……ええと、つまりその方法は？」

あまりにもったいぶるから我慢できなくなつて。

勢い込んでそう聞くと。

「……………キスです。古くは呪いを解くための最後の魔法とも呼ばれ……………」

やけっぱちというか、キクちゃんもテンパってるのか。

吐き出すようにそう言った後、変な講釈を始める始末。

だから棗ちゃんは話さなかったのかと、思わず納得してしまう自分
分がそこについて……………。

96、キクちゃんと私と口にするなよいらんじと

なんともこの場にそぐわないような、そうでもないような、大胆？ なキクちゃんの言葉。

だから桑ちゃんは話さなかったのかと、ひどく納得する一方で。

「き、キスっ？ いやや、無理だっ！

あ、その、キクちゃんがいやだってわけじゃなくて、私初めては決めてるから……」

私自身も相当おかしくなっていたんだろう。

口にする必要のないいらんことまで口走って。

「ほほう。良い事を聞きました」

「え？ ちょ、ちよっとま……」

そんな妄想ぶっ潰してやる。

その瞬間のキクちゃんの瞳は、そんな風にキラキラしていて。

その後のことは、二人だけの秘密。

まあ、いやよいやよも好きのうちってことだけは、ここに述べておくけれど。

至福は一瞬。

場面が切り替わるのも、あっという間の出来事だった。

気付けば私たちは、抱き合ったまま紅葉台山のてっぺんに立っ
いて……。

慌てて離れる、私とキクちゃん。

だけど、その決定的な現場を目撃したものはいなかった。

何故なら、そこにいる誰もが、魔物ですらも天を仰いでいたから
だ。

思わずつられて、私も空を見上げて……。

「あ……」

呆けた声を上げたのは私かキクちゃんか。

そこには、虹色のプリズムを蒔く翼を生やし、空を舞う吟也がい
たんだ。

「やっぱりさっき見たの、気のせいじゃなかった……」
「……」

お互いの距離は遠く、その表情ははつきりと伺えない。
言葉を失ったキクちゃんが、震えているのが分かる。

それも仕方のないことなんだろう。

太陽を背にした虹色の翼。

気高き、触れてはならぬものとして畏れるのは。

翼を持たない私たちに定められたもののような、そんな気がした
からだ。

吟也は、紅葉台山の町全体が見えるだろう位置まで上昇を続けて
いた。

その圧倒的な存在感に惹かれて、首が痛くなるくらいに目で追っ
ていると。

やがて吟也は、ぴたりと中空で静止する。

そして……。

「……」
アルミクティ・グロウファイリア
【全言統制】っ！

それこそ、町じゅうに響くような、吟也の言の葉。

それは、文字通り世界を変えていく。

紅葉台を丸ごと包み込むような、巨大な異世だ。

それは……吟也の世界。

紅恩寺吟也の言霊が支配する、絶対領域。

見上げる私は、感覚的にそれが理解できて。

吟也はさらに言葉を続ける。

魔物に向かって。

『……この地、我ら妖魔守りし地なり！魔物たちよ！即刻退去を命じる！』

望むものは主らの故郷へと還す扉、開こう！望まぬのなら！この地にその存在、すでになきものと思え！』

その声は、あまりなく……この世界に息づくものに届いただろう。

そして、その言葉が終わるとともに、世界が鳴動して。

その中心に位置する紅葉台山のてっぺんに光の筋が走った。

それは、魔物があるべき場所へ還す、巨大な虹泉。

かつて、私が目にしたものと同じもの。

間近で見たときの荘厳さは、ひしひしと肌に伝わってきて。

やがて魔物たちは。

天の啓示に従うがごとく。吸い込まれるように、光のその向こうへと、還ってゆく……。

まるでそれが、当たり前のことであるかのように。

見上げる私たちも、何も言えず立ち尽くし、その光景を見ていて。世界は、その光に照らされて白一色に塗りつぶされる。

その瞬間に垣間見たものは。

ゆっくり、ゆっくりと落ちていく、吟也の姿で……。

（第97話につづく）

97、吟也と私と何度目だよブリックアウト

目が眩むほどの発光が晴れた時。

吟也の異世は、すでになかった。

山じゆうを、闇色に染めた魔物たちとともに。

それは、一方的な終焉。

突如として相手を失った私たちは、ついさっき起こったことが信じられないままに、

呆然と立ち尽くして。

(とにかく、吟也を……吟也に会わなきゃ……)

結構危険な形で、翼を失い落ちていった吟也。

それが異世でのことならば言葉通りにはいかないだろうけど。聞かなきゃいけないことはたくさんある。

私の言いつけを破って何故戦場に来たのか。

妖の人であること、魔物、あるいはデリシアス・ウェイを滅するものであることを、

何故黙って、一言だっけ口にしてくれなかったのか。

私はふらふらと、アテもなく吟世のことを探そうとして……。

「潤っ！」

ぐらりと、視界が傾いた。

背中から聞こえる、キクちゃんの焦った声。

そういえば、異世で結構な傷を負ったことに気付かされたのはその瞬間。

それは、精神にくるダメージ。

私は、キクちゃんに返事をするともままならず、そのまま意識を手放していった……。

「……あれ？」

一体、どれくらいの時が経ったのだろう。

気付けば私は、さっきまでいた場所とは全く違う場所にいた。

それは、キクちゃんの闇色の異世とは対象的な、真っ白な世界。

その世界が、夢幻であったのか、異世だったのか。今となっては分からない。

だけど、その白の世界に鮮やかに色をつける、一人の人物が私の真正面に存在していた。

「吟也……？」

とっさに口をついて出たのは、愛しい人の名前。

間違えようもないはずなのに疑問符がついて出たのは。

目の前にいる吟也の様相が私の知るものと異なっていたからだ。

「おお、潤ちゃんやっとながらついてくれたんか」

それは、真紅の……まるで赤い宝石の色合いを見せる、その髪の毛のせい。

だけど吟也は、私の疑問を払拭するかと思いきや、

どこかちよっとおかしな関西弁で一層私を混乱させる。

「なにその関西弁。それにその髪……染めたわけじゃないみたいだけど」

そのせいで、もっと他にいろいろ聞きたいことあったはずなのに、口をついて出たのはそんな言葉だった。

「ああ。中学の頃の癖やなこれは。三年はおるつもりがいろいろあつてな、

こんな中途半端になってしまったんよ。でもって、髪は……僕もしらんかったんやけど、

元々この色やつてん。所謂、妖の人の証うちゅーかね」

吟也は、私の不躰な問いにも嫌な顔一つせず、あっさりと妖の人であることを暴露する。

「なんで……妖の人だつてこと、話してくれなかったの？」

人に混じり、その正体を悟られぬようにと過ごしていたという妖の人。

紅葉台の過去……伝承では、魔物の出現でその本性が明らかになつて魔物と一緒にたにされてしまったから、と言うことは分かっていたけれど。

私が、そんなことくらいでひくような人物だつて思われてたのかなつて考えたら、

悲しくて仕方がなかったからだ。

「あー、その。実はな、自分が人間やないつて知つたの、僕もついさっきやねん。

なんでも、災厄に罹つたもんに違和感なく自然と近付けるように、

自分のこと忘れさせられてたみたいでな」

「……っ」

思い出すのは、そういえばそんな事を言っていた気もするカチユの言葉。

となると、カチユたちつくもんさんたちのことを話さなかったのも、

記憶がなかったせいなのだろう。

その事について聞こうかとも思ったが……カチユに口止めされていることも思い出し、

取り敢えずはだんまりを決め込む。

「でな、今こうしてお邪魔したんは、そのへんのこともひっくりめた、

災厄……デリシアス・ウェイのことなんやけど」

するど。

ここからが本題だともいいたげに。

軽い雰囲気だったものが、本題に入ったらしく真剣味を帯びた口調になって……。

(第98話につづく)

98、吟也と私とものごつつ勘違い

「でな、今こうしてお邪魔したんは、そのへんのこともひっくりめた、

災厄……デリシアス・ウェイのことなんやけど」

軽い雰囲気だったものが、本題に入ったらしく真剣味を帯びた口調になって。

思い出したのは、吟也がデリシアス・ウェイを滅ぼすための刺客だというキクちゃんの言葉。

そして、圧倒的も甚だしい力で、吟也が魔物を無に帰したと言う事実。

「それは……うん。私もお願ひしたいことがあったのよ。今その力は私のところにあるから。

滅ぼすのなら、私だけにしてくれないかしら？」

今、私が置かれている立場は、十分に分かっている。逃げるつもりなんて毛頭なかった。

それは、キクちゃんからデリシアス・ウェイの力を受け取った時には既に覚悟をしていたことだったけれど。

「ええと、その、なんていうか……ものごつつ勘違いされてません？」

「……え？」

あっけに取られたようにそう言う吟也に、覚悟もどこへやら、思わず力の抜ける私。

「そもそも僕、災厄を滅しにきたわけやないで？」

説明はしづらいんやけど、どちらかといえば受け入れるっちゅーか、仲良くするっちゅーか……」

そして、もごもごと言いよどむその言葉は、ついさっき聞いたばかりのもので。

ついさっきキクちゃんとしたやり取りを思い出し、かっとな熱くなる私のすべて。

たぶん、その吟也の髪に負けなくらい私の顔は赤くなっていただろう。

そんな私を見て、私が受け入れるその内容のことについて知っているのを、吟也も気付いたらしい。ぶんぶんと、慌てるように手を振って。

「そりゃそうだよな、こっ恥ずかしいんはよく分かる。

だからその、一応コトが済んだら、すべて忘れてもらうことになつとるから。

ついでに、妖の人だったことも、僕が紅葉台に来たことも。一石三鳥やな」

発せられたのは、聞き捨てのならない決定的な言葉。

「ちよつと待って、そんなの、そんなのってないよ！」

すべてを忘れる？ 吟也のことを？

紅葉台で過ごしたこの大切な思い出を？

っていうか、私がいやだって思ってるの、もしかして？

結構あからさまにアプローチしてきたつもりだったのにつ。

はつきりとケリをつけることを恐れていた自分を棚に上げて。

私はそんな吟也に信じられないって、怒りにも似た感情を抱いたけれど。

「だろつな。我ながらずっこいことしてるっちゅーのは理解してるつもりや。

でもな、そう言う罪悪感に苦しむのも僕だけやから。

潤ちゃんはすべてを忘れて、まっとうに生きてくれたらええ」

「……っ」

言িয়েて妙な何たる罪^{とひんがん}。

私は勢い余って、ふざけないでって詰め寄ろうとして。

気がつけば、二人の距離は絶妙になって。

「それじゃ、失礼して」

「な、なななっ、ちょ、ちよつとまっ……！」

私は、そんな理不尽な怒りを吐き出す間もなく、再び意識を失うこととなる。

その直前で起こった、私にとってこの世で最高の一瞬。

そう、それは刹那とも言える一瞬だ。

何故ならば、それはあまりに凶悪すぎて。

私の情弱な精神などでは、耐えられるはずのものではなかったからだ……。

(第99話につづく)

99、カチユと私と気づけのホツチキス

その日の目覚めは、何故だか知らないけれど最高の気分だった。

私は、鼻息荒く意気揚々と身体を起こして。

「知らない天井……でもないか」

目を覚ましたその場所は、保健室のベッドだった。

天井から目を下にやれば、そこには敷居のための白いカーテン。

はてさてなんでどうして、こんなところにいるのだろうか。

それまでに至った経緯を考えようとして。

「潤、目が覚めたんですか……?」

「ほつ。よかった。このままじゃボクのせいになるところだったじゃないかあ」

私の声を聞きつけたのか、カーテンを開けて入ってきたのはキクちゃんと棗ちゃんだった。

「あれ? 棗ちゃん、目が覚めたんだ? いつ……?」

紡ぎ出される自分の言葉に、おかしな違和感を覚えつつも。

私は、原因不明の病で眠ったままだった、という棗ちゃんに対する記憶に基づき、そんな事を言う。

「それは、潤が寮の玄関のところで倒れていたのが発見されてすぐよ」

「まったく、潤姉ちゃんってば間の悪い。おかげでボクがやったんじゃないかって疑われたじゃないか」

「……」

確かに、寮の玄関で突然倒れた、と言う記憶が私の中にある。だがそれが、余計に気持ち悪さを助長させた。何故だが、その記憶がよそ者に見えたのだ。

まるで、はたからそれを見ているかのように。

「こんにちわー。お見舞いに……って、三水さん起きてるじゃないですか」

そして、次に顔を出したのは由宇ちゃんだった。

私たちと同じ、【本校】の赤い制服。女子用の制服。

私はそれに、またしても違和感を覚え、由宇ちゃんを凝視する。

「わ、わっ、どうしました？ 僕変なコト言いましたか？」

とたん、歪む視界と、慌てふためく由宇ちゃん。

何か、忘れていたような気がする。

そう思いつつ、遅ればせながら気づいたのは、自身の頬にこぼれる涙。

それを心配そうに見つめる三人に。

私は誤魔化すような笑みを浮かべ涙を拭って。

「えっと、その、由宇ちゃんの持つてる巾着、なにか凄い見覚えがあつて……」

故に思わず凝視してしまったのだと弁解する。

そう、由宇ちゃんが手に持つ巾着は、確かに見覚えのあるものだった。

というか、私自身が自作したものだ。

巾着を覆うキルトの選別に随分と苦労した覚えがあつた。

「あ、やっぱりそうなんだ。ええとですね、これ、さっき外に出る用事があつたときに、」

三水さんの実家のお隣に住んでるって女性のかたが、届けてくれたんです。忘れ物だって」

忘れ物。

目の前にある巾着に与える名前として、やけにしつくり来る言葉。私はわざわざありがとうと頷き、その巾着を受け取って。

(あつたかい……?)

しかも、何だか動いている気がする。

私ははやる気持ちを抑えつつ、そっと巾着を開いて。

「ホツチキス? わざわざなんでまた」

「……っ!」

訝しげに呟いたのは棗ちゃんだっただろうか。

でも、その時の私は、そんな棗ちゃんに言葉が耳に入ってなかった。

何故なら、寝ぼけ眼をこすりながらこちらを見上げてくる小さな小さな少女に、

目を奪われ驚いていたからだ。

「うーみゆ。こりゃ完全にわすれてるっすねえ……」

(魔物? ううん、そんなわけは……っ)

力の抜けた、億劫そうな呟き。

どうやら私だけに聞こえているらしく、周りからの反応はない。

最初に思いついたことを、何故かすぐに否定している自分に気付

いて。

「んじゃ、気付けないっばっ」

のそのそと、私の手のひらに降り立つ小さな少女。

彼女はおもむろに跪き、その唇を、そっと私の手のひらに寄せて……。

(第100話につづく)

99、カチユと私と気づけのホツチキス（後書き）

計算してたわけでもないのですが、次話で完結となります。

100、私たちは、揃えて言っよ君の事を想ってるって

「んじゃ、気付けないっばっ」

のそのそと、私の手のひらに降り立つ小さな少女。

彼女はおもむろに跪き、その唇を、そっと私の手のひらに寄せて……。

ぱちん。

瞬間聞こえてきたのは、小気味よい軽い音。

「い、いったあゝっ、な、なにすんのよっ……………っ？」

それが、ホツチキスの刃が手のひらに落ちた音だと気付いた時。ものすごい痛みとともに襲ってきたのは、物凄い記憶の奔流だった。

それは、起き上がっていた上体を、思わず倒されるほどの衝撃。

「だ、大丈夫？ ごめんっ、もしかして僕、やつちゃった？」

「あ、う、ううん。自分でやったんだよ」

素直にも泣きそうな顔で謝ってくる由宇ちゃんに、慌てて大丈夫

と返す私。

突然の奇行に対し驚いている棗ちゃんやキクちゃんにも、愛想笑いを浮かべつつも、

私の頭はぐるぐると猛回転を始めていた。

すべてをなかったことにする、と吟也に言われて。
ええと、それから……き、きせずしておいしい思いをして……。

「潤？ 本当に大丈夫なんですか、何だかやけに顔が赤いんですけど……」

「あ、そうだ。キクちゃん！ デリシ阿斯・ウェイのことは？ どうなったの？」

自分がどれほど気を失っていたのかは分からないけれど。
キクちゃんが今回の【虹泉】の創造主であることは周知の事実で。

卒業の可能性も含めてキクちゃんに何らかの制裁があってもおかしくない。

それを自分が率先して止めるはずだったのに。
状況が掴めず、焦って唇を噛んでいると。

「デリシ阿斯・ウェイ？ なんてしたっけ、それ？」

返ってきたのは、本気で心配するキクちゃんの言葉だった。

「あ。ダメっすよ。そのへんのことには潤ちゃん以外、みんな忘れちゃってるっす。

もちろん、ボスのこともね」

そこにかぶせるように、カチユの言葉。

そこまできてようやく、私は今置かれている状況を理解した。

キクちゃんは、自分がデリシ阿斯・ウェイに憑かれていたことから、忘れてしまったのだろう。

その事についての苦しみや罪の意識を、なかったことにするために。

それは間違いなく、吟也の仕業であることに間違いはなくて。

「い、ごめん。なんか夢でさ、キクちゃんと話してて。勘違いしてるっぽい」

「相変わらずというかなんというか、そう言う夢見がちなところ、潤らしいといえはそうですけど」

我ながら苦しい言い訳だとは思ったけれど、空気を読むキクちゃんはそれで納得してくれたらしい。私はそれに苦笑し、再び起き上がる。

「ちょ、ちょっとトイレ」

そして、吟也も使い古したそんな言葉を発し、私は逃げるみたい
に保健室を出て……。

でもって建前上トイレに言った後、私は改めてカチュと対面した。

「……もしかなくても、吟也に一泡吹かしてやるって、この
こと？」

開口一番口にしたのは、分かれる間にカチュが口に使っていたそ
の事だった。

吟也の役目と正体。

キクちゃんの背負っていたもの、それに対する苦しみ。

それを、全部なかったことにして、一人で背負い込んで、立ち去
ってしまった吟也。

私もご多分にもれず、今の今まで何もかも忘れていた。

「そうっす。カチュは知ってもらいたいんすよ。ボスがみんなの
ために頑張ったってことを」

「そっか。それで私の記憶を元に戻してくれたんだね」

そう言うカチュの言葉には、悲しいわけでもないのに泣きそうな
成分が混じっている。

たぶん、それは悔しさなんだろう。

自分の大好きな人が頑張っているのに認められない、と言う事実
に対しての。

「うん。カチユはきつかけを与えただけっすよ。カチユに記憶消去の術は破れないっすから。」

破ったのは、潤ちゃん自身っす。……というより、記憶消去の術には、消せないものがあるんすよ」「……吟也を好きな気持ち？」

「さすが潤ちゃん。分かってるっすねえ」

即答する私に、満足げに破顔するカチユ。

それは、吟也が紅葉台に来てから一週間にも満たぬ間に生まれ、成長し大きくなったものだ。

鈍感のエリートの吟也には、きつと分からないだろう。

その想いが、どれだけ強いかを。

そしてそれはきつと、私だけじゃなくて。

目の前にいるカチユだって、おんなじ気持ちで。

「でもさ、それって他の子も思い出しちゃうってことだよな？」

吟也が気付かないだけで。

この短い間に、どれほどの子が彼のことを想うようになったらう。

それを考えると、その記憶消去の術も、とたんにしょぼいものに見える。

「そう。それなんすよ。これからしばらくしたら、ボスは何事もなかったかのようにここへやってくるはずっす。だから……」

「本当は知ってるんだけど、知らないふりをして迎えるってことね」

それこそが一泡を吹かす全貌であり、勝手に青鬼をしてる彼への意趣返し。

帰ってくるって。カチユにそう言われて、早くも浮かれている私がそこにいて。

「それじゃあ、あらためてこれからよろしくね、カチユ。よき友として、ライバルとして」

彼を愛する同志として。

ずっとずっと、私たちは一緒にいる。

「望むところ、っすよ。あふう、でも眠い」

結局は元々寝ぼすけさんだったらしいカチユを、いつもの定位置へ添えて。

私たちは、新たな一步を踏み出す。

私たちは、あなたを愛しています。

そう言える日がいつか来ることを、夢と見据えながら……。

(続く……かなあ)

100、私たちは、揃えて言うよ君の事を想ってるって（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございます。

『We love you』、これにて了です。

まあ、いつものごとくふわっと続きそうな感じですが。

今作は周知の通り、『銀色クリアデイズ』別視点であり、描写十分でなかった部分の補完作品と言う体で始まりましたが、元々はある大好きなお話だけと読んでてすごく悔しい部分があった、

自分だったらこうするのになあと思い立ったのが始まりでした。簡単に言えば魅力的なヒロインの無駄遣いが悲しかったんですね。

こんなにたくさんいい娘が出てくるのに、主人公には心に決めた人がいる、

って入りと展開にもものすごくへこんだ記憶があります。

うまくいつているかどうかは微妙ですが。

その結果生まれたのが吟也くんなわけです。

おそらく、この話の続く（予定は未定）は勿論、

『青空』系のお話などにも顔を出すと思われるので、その時はまたよろしく？ お願いいたします。

伊吹ノアでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6125p/>

We love you

2011年8月19日08時50分発行